

九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書 (12)

玉沢地区条里跡遺跡群

1999.3

大分県教育委員会

玉沢地区条里跡遺跡群

六反田地区

山伏田地区

二反田地区

序 文

大分自動車道建設に伴う発掘調査は、昭和58年から平成7年にかけて実施され、順次調査報告書を刊行してまいりました。今回の報告書はその第12集となります。

本書は、玉沢地区条里跡として周知されている遺跡のうち、六反田地区、山伏田地区、二反田地区の発掘調査の成果を収録いたしております。

調査では、大分市内では数少ない縄文時代晩期の一括資料や古墳時代の良好な遺構が多数発見されるなど大きな成果を得ることができ、大分平野の歴史の一端に触れることが出来ました。

本書が埋蔵文化財に対する一層の理解をいただくための資料として、さらには学術研究の一助として活用していただければ幸いと存じます。

最後になりましたが、調査に御協力いただいた関係各位に対して厚くお礼申し上げます。

平成11年3月31日

大分県教育委員会教育長
田中恒治

例 言

1. 本書は九州横断自動車道建設に伴う事前発掘調査のうち平成5年度から平成7年度にかけて調査した大分市下宗方地区に所在する玉沢地区条里跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、日本道路公団の委託を受けて大分県教育委員会が実施した。
3. 遺構・遺物の実測、浄書、写真撮影は各調査員及び県文化課職員が行った。
4. 本書の執筆と編集は江田豊が担当した。
5. 付論については、大分短期大学佐々木章助教授に依頼した。
6. 出土遺物ならびに図面・写真は、大分県教育庁文化課文化財資料室において保管している。

凡 例

1. 挿図中の方位は磁北である。
2. 挿図に使用した座標系は昭和43年建設省告示第3059号の規定による第Ⅱ座標系である。また図郭に表示してある座標値はキロメートル単位である。
3. 調査の際、玉沢地区条里跡（遺跡台帳番号322111）として周知されている範囲が広範囲に及ぶため、調査対象地については小字名を用いて六反田地区、山伏田地区、二反田地区とした。本書でもこの地区名で節を分けて報告している。

目次

第1章	はじめに	
1	調査に至る経過	1
2	調査団の構成	1
第2章	遺跡の立地と環境	2
第3章	調査の概要	5
1	調査区の設定	5
2	各地区の概要	5
第4章	各地区の報告	6
第1節	六反田地区	6
1	調査の概要	6
2	基本土層	6
3	各時代の遺構と遺物	8
第2節	山伏田地区	46
1	調査の概要	46
2	基本土層	46
3	各時代の遺構と遺物	47
4	包含層	51
第3節	二反田地区	56
1	調査の概要	56
2	基本土層	56
3	各時代の遺構と遺物	57
第4章	まとめ	96
1	玉沢地区の縄文晩期土器について	96
2	古墳時代の遺構について	98
付論	プラント・オパール分析結果から見た二反田地区の水田開発	105

挿図目次

第 1 図	大分平野の地形概略図	2
第 2 図	調査遺跡と周辺遺跡位置図	4
第 3 図	調査地点位置図	5
第 4 図	六反田地区位置図	6
第 5 図	六反田地区遺構配置図	7
第 6 図	六反田地区基本土層図	8
第 7 図	1・2号竪穴実測図	9
第 8 図	1号竪穴カマド実測図	9
第 9 図	1・2号竪穴出土遺物実測図	10
第 10 図	3号竪穴実測図	10
第 11 図	水門状ピット1実測図	12
第 12 図	水門状ピット2実測図	12
第 13 図	水門状ピット3実測図	12
第 14 図	水門状ピット4実測図	12
第 15 図	溝1～3実測図及び溝に伴う遺構位置図	13～14
第 16 図	水門状ピット5実測図	15
第 17 図	ピット集中部実測図	15
第 18 図	礫群1実測図	16
第 19 図	礫群2実測図	17
第 20 図	礫群3実測図	18
第 21 図	溝内ピット群実測図	19
第 22 図	溝内ピット1・2実測図	20
第 23 図	溝内ピット3実測図	20
第 24 図	溝4～13実測図	21～22
第 25 図	溝1・2出土遺物実測図	24
第 26 図	溝2出土遺物実測図	25
第 27 図	溝3出土遺物実測図(1)	26
第 28 図	溝3出土遺物実測図(2)	27
第 29 図	溝3出土遺物実測図(3)	28
第 30 図	溝3出土遺物実測図(4)	29
第 31 図	溝3出土遺物実測図(5)	30
第 32 図	礫群2出土遺物実測図	31
第 33 図	礫群3・溝内ピット群・溝内ピット3・4出土遺物実測図	32
第 34 図	その他の出土遺物実測図	33
第 35 図	土坑実測図(1)	38
第 36 図	土坑実測図(2)	39
第 37 図	土坑実測図(3)	40
第 38 図	土坑実測図(4)	41
第 39 図	土坑実測図(5)	42
第 40 図	六反田地区出土遺物実測図(1)	43
第 41 図	六反田地区出土遺物実測図(2)	44

第42図	六反田地区出土遺物実測図(3)	45
第43図	山伏田地区遺構及びグリッド配置図	46
第44図	山伏田地区基本土層図	46
第45図	溝1・2出土遺物実測図	47
第46図	溝1・2実測図	48
第47図	溝3実測図	50
第48図	溝4実測図	50
第49図	不整形大型土坑実測図	51
第50図	山伏田地区包含層遺物分布図	52
第51図	包含層出土土器実測図(1)	53
第52図	包含層出土土器実測図(2)	54
第53図	二反田地区グリッド配置図	56
第54図	二反田地区基本土層図	57
第55図	不整形大型土坑実測図	57
第56図	溝実測図	58
第57図	二反田地区包含層遺物分布図	58
第58図	包含層出土石器実測図(1)	59
第59図	包含層出土石器実測図(2)	60
第60図	包含層出土石器実測図(3)	61
第61図	包含層出土石器実測図(4)	62
第62図	包含層出土石器実測図(5)	63
第63図	包含層出土石器実測図(6)	64
第64図	包含層北半部出土土器実測図(1)	68
第65図	包含層北半部出土土器実測図(2)	69
第66図	包含層北半部出土土器実測図(3)	70
第67図	包含層北半部出土土器実測図(4)	71
第68図	包含層北半部出土土器実測図(5)	72
第69図	包含層北半部出土土器実測図(6)	73
第70図	包含層北半部出土土器実測図(7)	74
第71図	包含層北半部出土土器実測図(8)	75
第72図	包含層北半部出土土器実測図(9)	76
第73図	包含層北半部出土土器実測図(10)	77
第74図	包含層北半部出土土器実測図(11)	78
第75図	包含層北半部出土土器実測図(12)	79
第76図	包含層南半部出土土器実測図(1)	80
第77図	包含層南半部出土土器実測図(2)	81
第78図	包含層南半部出土土器実測図(3)	82
第79図	包含層南半部出土土器実測図(4)	83
第80図	包含層南半部出土土器実測図(5)	84
第81図	包含層南半部出土土器実測図(6)	85
第82図	包含層南半部出土土器実測図(7)	86
第83図	包含層南半部出土土器実測図(8)	87

第84図	包含層南半部出土土器実測図(9)	88
第85図	包含層南半部出土土器実測図(10)	89
第86図	二反田地区包含層北部・南部出土土器対比図(1)	99
第87図	二反田地区包含層北部・南部出土土器対比図(2)	100
第88図	二反田地区包含層北部・南部出土土器対比図(3)	101
第89図	二反田地区包含層北部・南部出土土器対比図(4)	102
第90図	二反田地区包含層北部・南部出土土器対比図(5)	103
第91図	二反田地区包含層北部・南部出土土器対比図(6)	104
第92図	プラント・オパール定量分析手順	107
第93図	プラント・オパール試料サンプリング地点及び採取地点土層図	107
第94図	各地点のプラント・オパール密度から推定した植物量	108

表目次

第1表	遺跡一覧表	4
第2表	六反田地区出土土器観察表(1)	33
第3表	六反田地区出土土器観察表(2)	34
第4表	六反田地区出土土器観察表(3)	35
第5表	六反田地区出土土器観察表(4)	36
第6表	土坑計測表	37
第7表	六反田地区出土石器観察表	43
第8表	山伏田地区出土土器観察表	55
第9表	二反田地区出土石器観察表(1)	64
第10表	二反田地区出土石器観察表(2)	65
第11表	二反田地区出土石器観察表(3)	66
第12表	石器と石材	66
第13表	土器分類表	67
第14表	二反田地区出土土器観察表(1)	90
第15表	二反田地区出土土器観察表(2)	91
第16表	二反田地区出土土器観察表(3)	92
第17表	二反田地区出土土器観察表(4)	93
第18表	二反田地区出土土器観察表(5)	94
第19表	二反田地区出土土器観察表(6)	95
第20表	植物体中の珪化機動細胞密度	107

写真図版

図版—1	六反田地区	図版—9	六反田地区出土遺物	図版—17	二反田地区出土遺物
図版—2	六反田地区	図版—10	六反田地区出土遺物	図版—18	二反田地区出土遺物
図版—3	六反田地区	図版—11	六反田地区出土遺物	図版—19	二反田地区出土遺物
図版—4	山伏田・二反田地区	図版—12	六反田地区出土遺物	図版—20	二反田地区出土遺物
図版—5	六反田地区出土遺物	図版—13	山伏田地区出土遺物	図版—21	二反田地区出土遺物
図版—6	六反田地区出土遺物	図版—14	二反田地区出土遺物	図版—22	二反田地区出土遺物
図版—7	六反田地区出土遺物	図版—15	二反田地区出土遺物		
図版—8	六反田地区出土遺物	図版—16	二反田地区出土遺物		

第1章 はじめに

1 調査に至る経過

九州横断自動車道は、昭和47年6月30日に計画決定された。その後、昭和48年10月19日に整備計画決定および施行命令が出された。大分県教育委員会では、日本道路公団の委託を受け、昭和49年5月から道路建設予定地の分布調査を開始して昭和54年でこの作業を終了した。

この結果大分県内全区間約103kmのうち、湯布院～別府間23.9kmについては3ヵ所、別府～大分間14.8kmは3ヵ所、大分～大分間7.9kmは9ヵ所の遺跡がそれぞれ確認された。

これらの遺跡は湯布院～別府間が昭和55年度から昭和60年度で、別府～大分間は昭和59年度から平成3年度で調査を終了した。

大分～大分間は平成4年度～平成7年度にかけて荏隈杉下遺跡・玉沢地区条里跡（六反田地区・山伏田地区・二反田地区）の発掘調査を実施した。今回所収しているのは、このうち玉沢地区条里跡（六反田地区・山伏田地区・二反田地区）の調査報告である。

2 調査団の構成

調査期間

平成6年1月～平成7年7月

調査体制

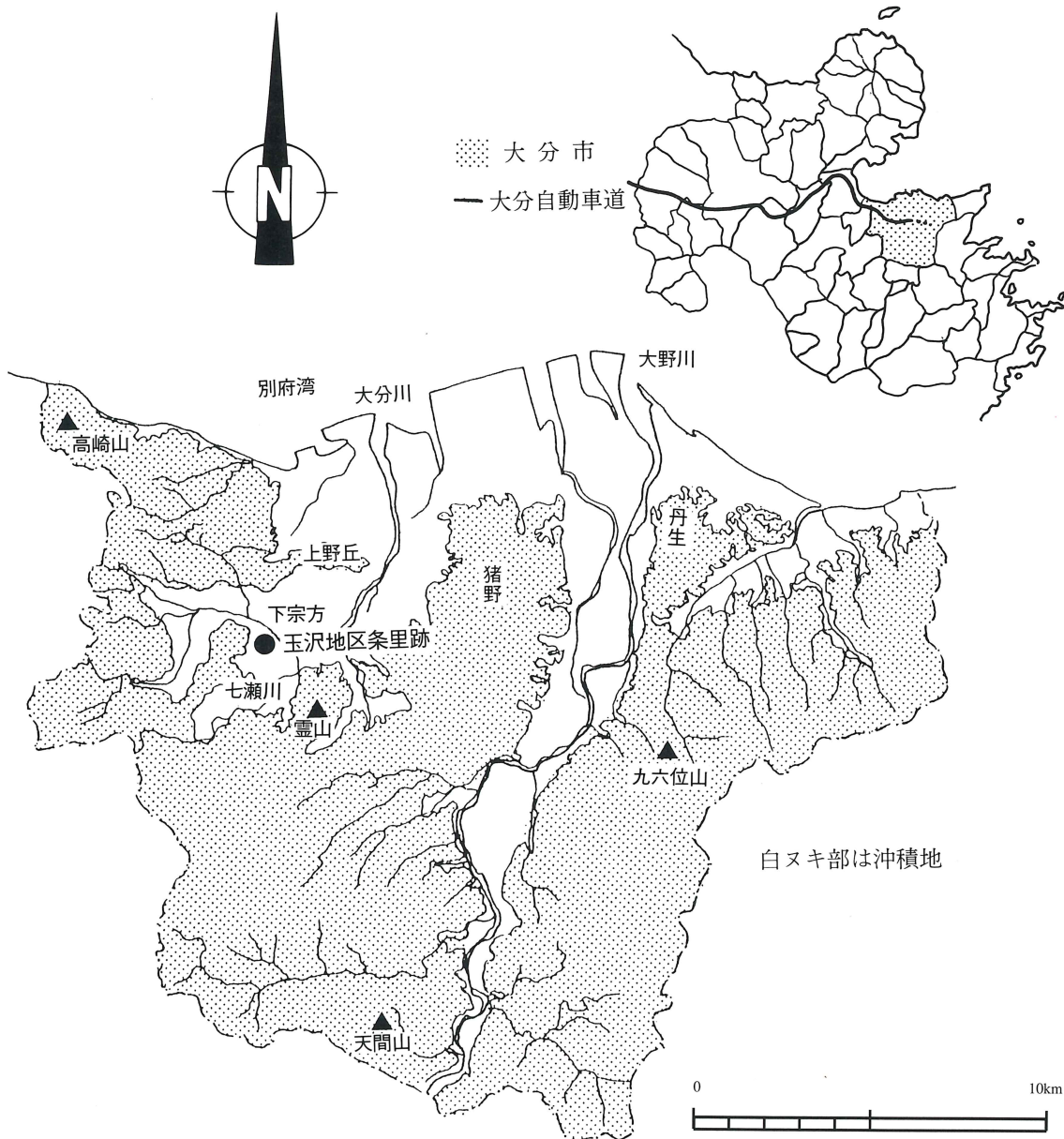
総括	大分県教育委員会教育長	宮本高志（平成5年度） 帯刀将人（平成6年度） 田中恒治（平成7年度） 末広利人
文化課長		
庶務	文化課課長補佐兼管理係長	姫野守正（平成5年度） 小野倉吉（平成6年度） 油布芳典（平成7年度）
	主査	竹中啓二（平成5年度）
	主事	小野高寛（平成6～7年度）
調査		
調査委員	別府大学教授 徳島文理大学教授	賀川光夫 石野博信
調査主任	文化課主幹兼埋蔵文化財第2係長	渋谷忠章
調査担当	文化課	西 哲弘
	主査	江田 豊
	主任	染矢和徳
	主事	志満紀郎（平成5～6年度）
	嘱託	原田靖久（平成6年度） 稲村博文（平成6年度） 吉田博嗣（平成7年度） 横山明代（平成7年度）

第2章 遺跡の立地と環境

地理的環境

大分平野は県のほぼ中央部に位置する。ここは西に大分川、東に大野川の2本の川が別府湾に注ぎ、その沖積作用によって東西約24km、南北約22kmの平野部が形成された。この中に平野部西端にある高崎山（標高628.4m）から東方の上野丘まで、さらに大野川下流域の両岸に洪積台地が広がる。

今回調査を行った玉沢地区条里跡遺跡群は、この大分平野の南西部を流れる大分川とその支流である七瀬川の合流点にある沖積地一帯に位置する。ここには下宗方を中心として北に上宗方、西に雄城、南に八幡田などの大字がある。この一帯は大分川や七瀬川を水源とする水田地帯が広がる地域であるが、反面この合流点周辺は過去に数度の水害を起こしている地域でもある。



第1図 大分平野の地形概略図

歴史的環境

旧石器時代・縄文時代・弥生時代

下宗方地区周辺で旧石器時代の遺跡はほとんど確認されていない。やや離れるが大分川を越えて北東の台地上に位置する庄ノ原遺跡ではナイフ型石器を中心とした包含層が確認されている。この周辺の縄文時代の遺跡として知られるのは、荏隈杉下遺跡、植田平石遺跡、植田市遺跡、雄城台遺跡などで、縄文晩期後葉の土器の出土例が報告されている。

弥生時代に入ると遺跡の数は増大してくる。代表的なものは、雄城台遺跡、北ノ後遺跡、賀来中学校遺跡、花園遺跡などがある。このうち雄城台遺跡では弥生時代後期の埋納ピットから巴型銅器が出土し全国的にも注目された。

古墳時代

古墳時代に入ると周辺地域では七瀬川流域の台地と大分平野の西側の台地に古墳が造営されるようになる。

七瀬川流域の台地には5世紀前半と考えられる前方後円墳の御陵古墳（消滅）、円墳の世利門古墳、下ヶ迫古墳（消滅）がある。また大分平野の西側の台地上には4世紀後半代と思われる蓬莱山古墳（前方後円墳）、田崎古墳群、ともに6世紀後半代と推定される家型石棺をもつ丑殿古墳、線刻による装飾を施した千代丸古墳などがある。

一方、この時代の集落遺跡は、4世紀代の住居跡が確認された玉沢地区条里跡田仲地地区、5世紀代の住居跡が確認された植田市遺跡、大分川を挟んで市内明礮と対峙する微高地上にある6世紀代を中心とした住居跡が確認された北ノ後遺跡、今回報告する六反田遺跡などがあげられる。特に北ノ後遺跡は現在のところ大分平野では最大級の集落遺跡で、60軒の住居跡が確認された。

古代以降

古代から中世においてこの地は植田郷（『和名抄』）や植田庄（『宇佐宮仮殿地判指図』その他）としてさまざまな文献にその名を記されている。ここはまず大神氏（植田氏）が入り、以降藤原頼長領や後白河天皇の後院領として開発が進められた。

また、本書の表題のように玉沢地区条里跡として周知されている地域でもあり、東西28町南北16町にわたって条里地割が整然と残っている。現在、急激に開発が進む大分市内では、ほとんどの地域で消滅してしまった条里地割を見ることのできる数少ない場所でもある。

その後は江戸時代に入り上宗方、市、桑本とともに白杵藩稲葉氏の飛地領となり、ほぼ現在の姿を形成するようになる。

参考文献

『大分県の地名』日本歴史地名体系 45 平凡社 1996

『大分市史』上下巻 大分市 1987



第2図 調査遺跡と周辺遺跡位置図 (国土地理院『大分』2万5千分の1地形図より転載)

第1表 遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	玉沢地区糸里跡	縄～歴	11	ガランジ遺跡	弥～古	21	高瀬横穴墓群	古墳	31	虎御前古墳	古墳	41	木ノ上古道石棺群	古墳
2	同上 六反田地区	古墳	12	馬姓遺跡	近世	22	小野鶴横穴遺跡	古墳	32	高米山横穴墓群	古墳	42	御陵古墳	古墳
3	同上 山伏田地区	縄晩～歴	13	北ノ後遺跡	弥～中	23	賀来中学校遺跡	弥生	33	漆間古墳	古墳	43	千人塚	古墳
4	同上 二反田地区	縄文	14	乙院屋敷遺跡	近世	24	椿ヶ丘横穴墓群	古墳	34	世利門古墳	古墳	44	浅草神社古墳群	古墳
5	深町遺跡	弥生	15	雄城台遺跡	縄晩～弥	25	大曾横穴墓群	古墳	35	大將軍古墳	古墳	45	岩崎横穴古墳群	古墳
6	植田平石遺跡	縄晩～歴	16	雄城台下横穴墓群	古墳	26	大曾2横穴墓群	古墳	36	稲荷古墳	古墳	46	口戸磨崖仏	県指定
7	桑本館跡	古墳	17	下田尻地区糸里跡	中世	27	大曾3横穴墓群	古墳	37	山伏古墳群	古墳	47	玉沢地区糸里跡 田仲地区	古墳
8	植田糸里跡H区	弥生	18	東山田横穴墓群	古墳	28	漆間横穴墓群	古墳	38	志土地横穴墓群	古墳			
9	植田糸里跡D区	中～近	19	高城山城跡	中世	29	六分塚古墳	古墳	39	木ノ上峠横穴墓群	古墳			
10	植田市遺跡	縄～近	20	高瀬石仏	国指定	30	下迫古墳	古墳	40	土肥横穴墓群	古墳			

第3章 調査の概要

1 調査区の設定

今回調査対象となった地点は、玉沢地区条里跡（遺跡台帳番号322111）として周知されている埋蔵文化財包蔵地の東端部分にあたる。予定路線内の試掘調査の結果、大字八万田は七瀬川と大分川の合流地点に近接していて氾濫原が広範囲に広がり、遺跡は確認されなかった。これに対して大字下宗方は、大分川の自然堤防に続く微高地が展開していて、ここで数カ所の遺構、遺物の集中部が確認された。分布範囲が南北300 mに及ぶため、字名によって北から六反田地区、山伏田地区、二反田地区の3カ所の地区名を設定した。1995年発行の調査概報では〇〇遺跡としたが、遺跡台帳番号の運用上今後は「玉沢地区条里跡〇〇地区」として取り扱うこととする。

2 各地区の概要

・六反田地区

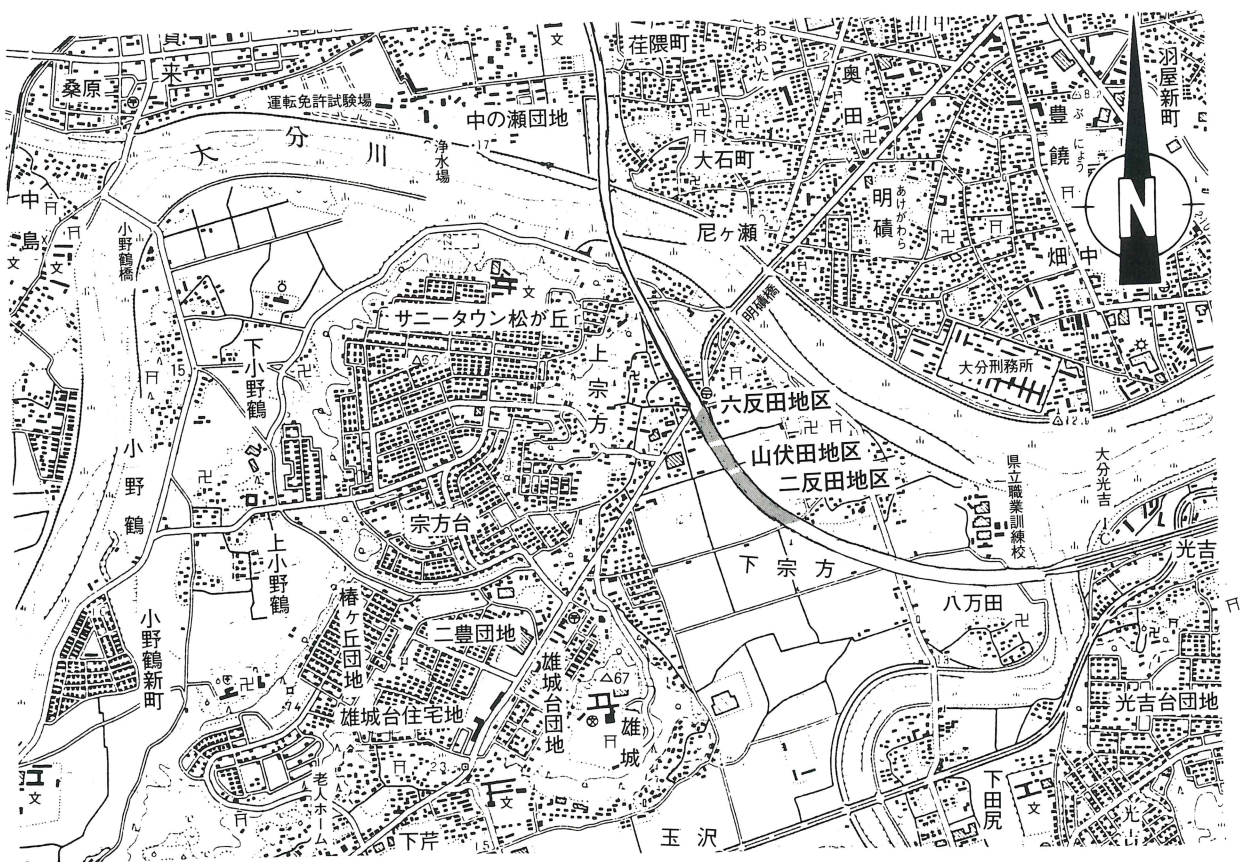
古墳時代後期の竪穴3基、同時期の溝3条、時期不明の溝9条、土坑24基、ピット約80基が検出された。このうち時期不明の溝は条里の地割とほぼ方向が同じであることから条里遺構に関わる可能性もある。

・山伏田地区

縄文晩期の包含層と弥生前期～中期初頭の溝2条、古墳時代の溝1条、時期不明の溝1条、大型土坑1基が検出された。

・二反田地区

縄文晩期の包含層がほぼ全面に広がる。それ以外に大型土坑1基、溝1条が検出された。



第3図 調査地点位置図（国土地理院『大分』2万5千分の1地形図より転載）

第4章 各地区の報告

第1節 六反田地区

1 調査の概要

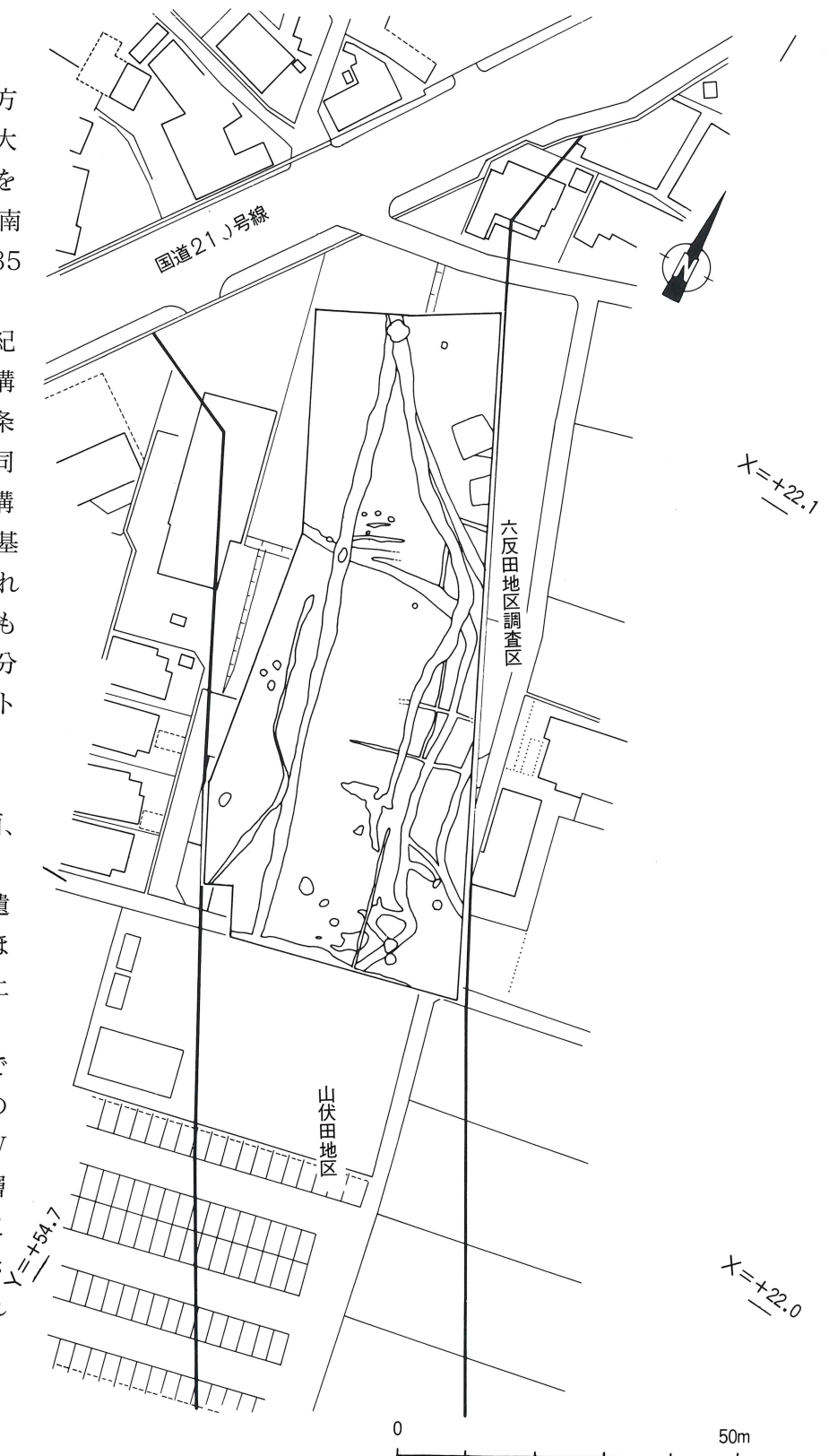
六反田地区は大分市大字下宗方字六反田に位置する。調査区は大字上宗方と大字下宗方の境界筋を走る国道210号線の南に接する南北約100m、東西約35mの約3500㎡を設定した。

調査では6世紀後半から7世紀にかけての竪穴3基、同時期の溝3条、時期の特定はできないが条里地割とほぼ同方向の溝9条、同じく時期不明で不定方向に走る溝が1条、6世紀後半代の土坑が1基、時期不明の土坑が20基検出された。またピット群は溝に関わるものと、竪穴周辺に広がるものに分けられる。全体で80数個のピットが検出されている。

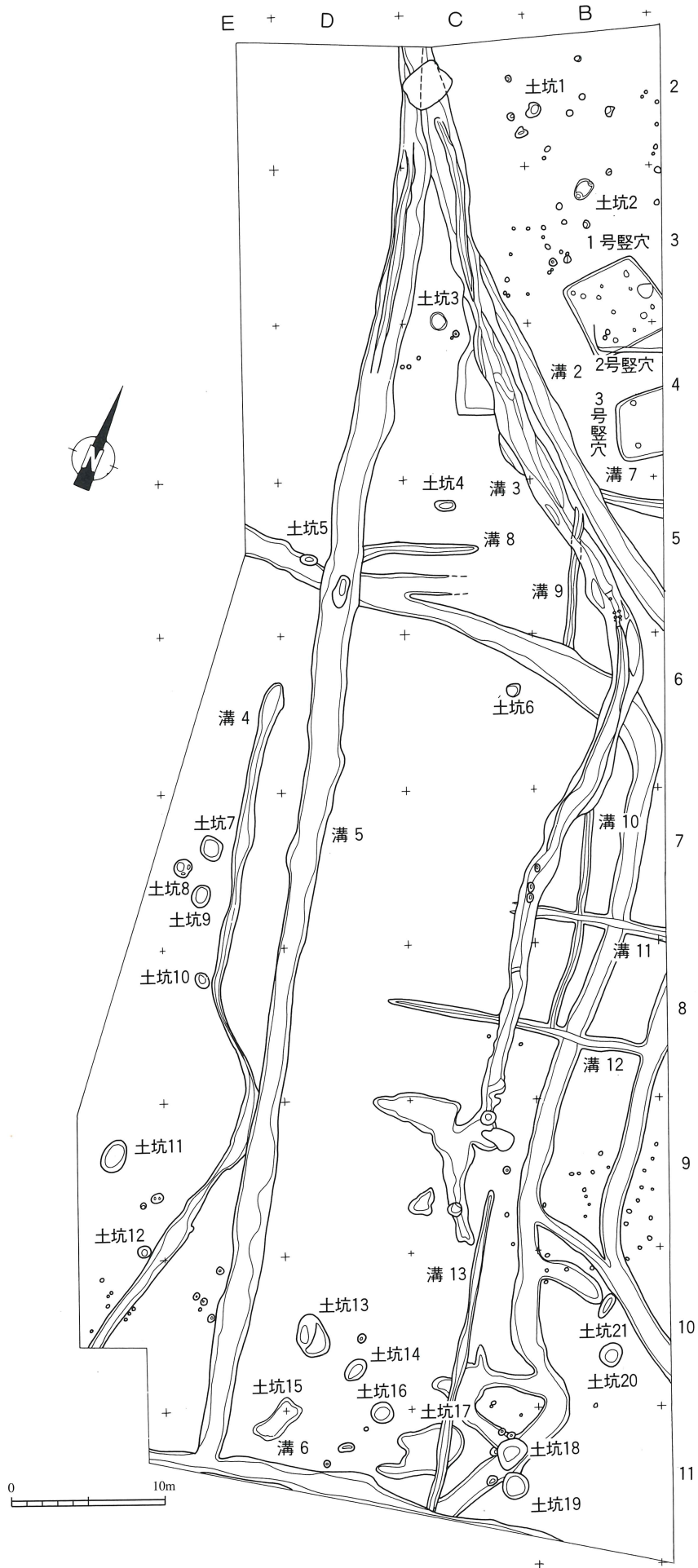
2 基本土層 (第6図)

I層は現表土、II層は旧耕作面、III層は上面にマンガンが広がる。IV層は中世から近世にかけての遺物が混じる層で、条里と方向がほぼ同じ溝はほとんどこの層が埋土となる。

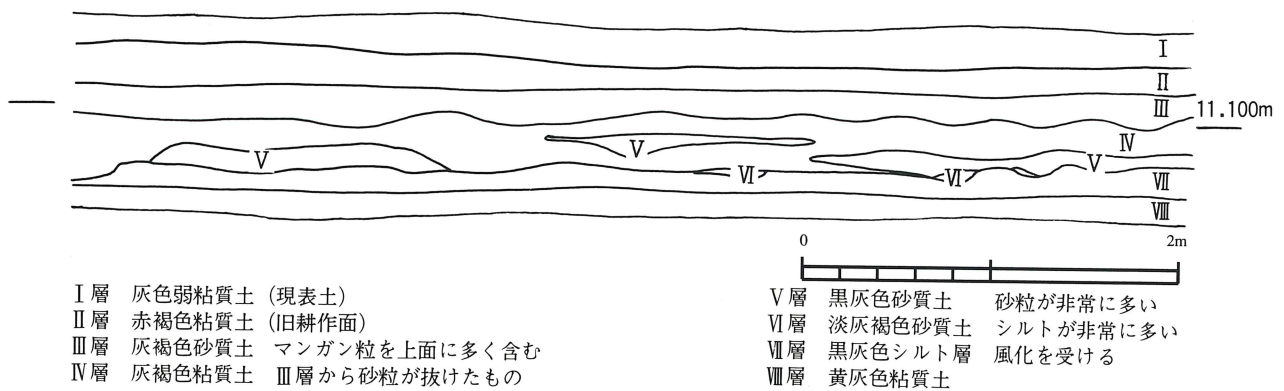
古墳時代の遺構検出面はVIII層でこの上面に風化を受けた黒色土のVII層が堆積している。さらに、IV層とVIII層の間には砂層であるVI層がブロック状に混じる。これはこの調査区上になんらかの水の動きがあったことを示すものと思われる。



第4図 六反田地区位置図



第5图 六反田地区遺構配置図



第6図 六反田地区基本土層図

3 各時代の遺構と遺物

古墳時代

1・2号竪穴 (第7図)

調査区東壁沿いのB-3~B-4グリッドで検出された。北東壁中央部にカマドを付設する。平面観はほぼ正方形を呈していて、平均して一辺4.8mの規模を有する。支柱穴は4本でその背後に補助的な柱穴がつく (P1~P4)。またこの竪穴の南部分に2号竪穴が切り合っているが、上面の削平が著しく検出時の遺構の深さはわずかに5cmを測る程度で、2号竪穴の全貌を伺い知る事はできない。但しプランや規模は1号竪穴とほぼ同じぐらいであると考えられる。支柱穴は不明である。1号竪穴の床面には焼土および炭化物が全面に薄く分布していた。出土遺物は大半が細片であり、なおかつ1号と2号の竪穴の切り合いラインが明瞭でなかったため、遺構ごとに遺物の取上げができなかった。

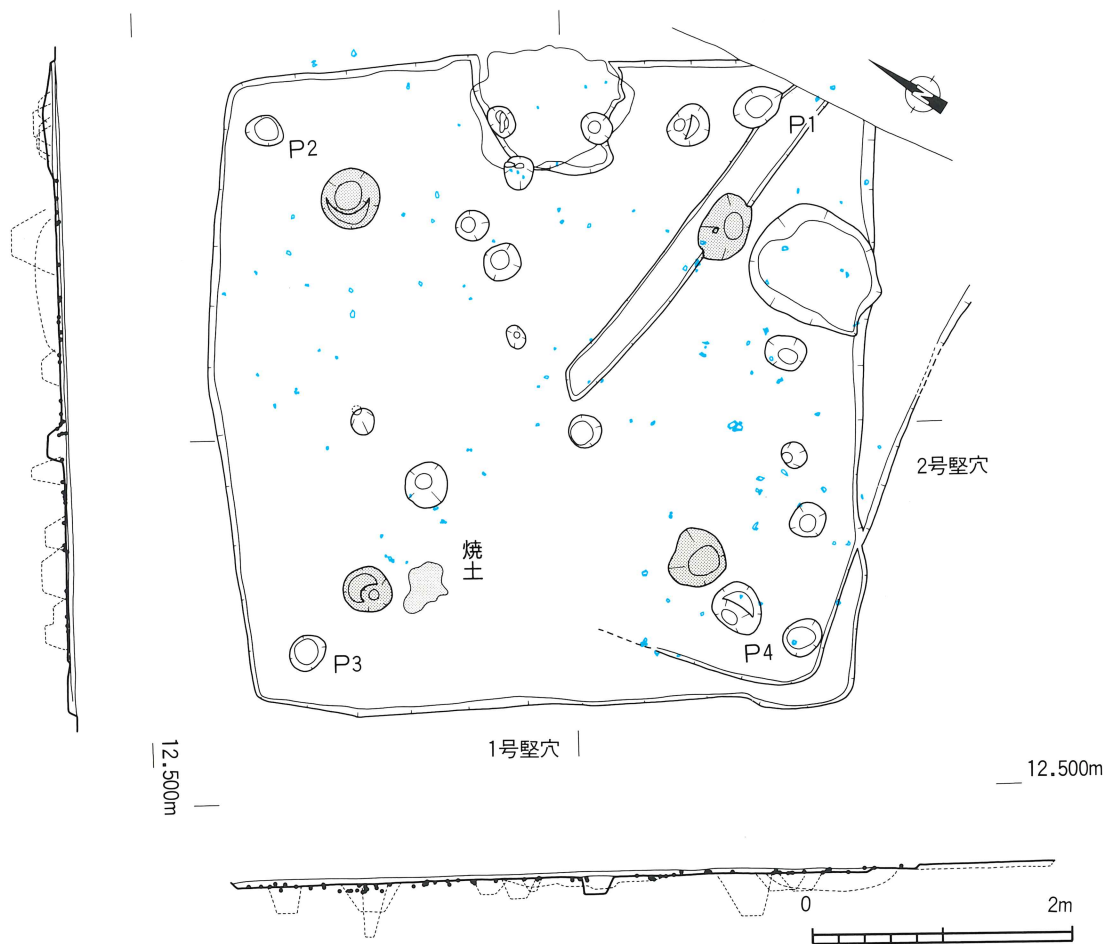
1号竪穴カマド (第8図)

遺構上面の削平が著しく上部構造は全く確認できない。袖石等は抜き取られている。下部構造は北東壁中央部に南北1.3m、東西1.0m、深さ5~6cmの浅い掘り込みが壁に寄り添うように掘られる。さらにこの掘り込み内に袖石用のピットが約55cmの間隔で2ヵ所掘られ、ここを焚口部分とする。またここから燃焼部に当たる部分に、40×50cmの範囲で焼土面が広がる。煙道部の痕跡はほとんど見ることはできない。土層断面ではII層が燃焼部形成時のもの、III層が袖部分を形成する際のものとして想定される。

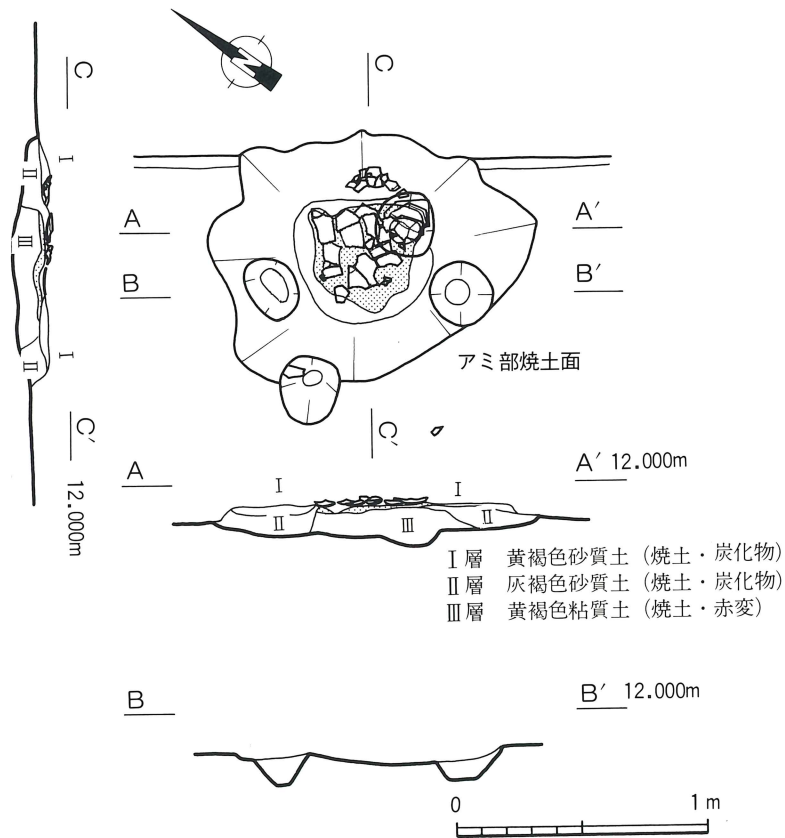
出土遺物 (第9図)

この竪穴から出土した遺物は、ほとんどが細片で図化が可能なものは第9図に示した4点だけであった。1・2はともに甕である。1は口縁部の外反が非常に弱い。2は底部で粘土帯を貼り付けた痕跡が認められる。3・4はともにカマド施設内から出土したものである。3は須恵器の坏身で口径12cm、受部径14.2cm、器高4cmを測る。底部外面は、回転ヘラケズリ、内面は不定方向ナデ、体部は回転ヨコナデである。また受部に一部重ね焼き痕が認められる。4は甕で、口縁部は短く外反し、球形に近い胴部を持つ。外面にはハケ目が施される。

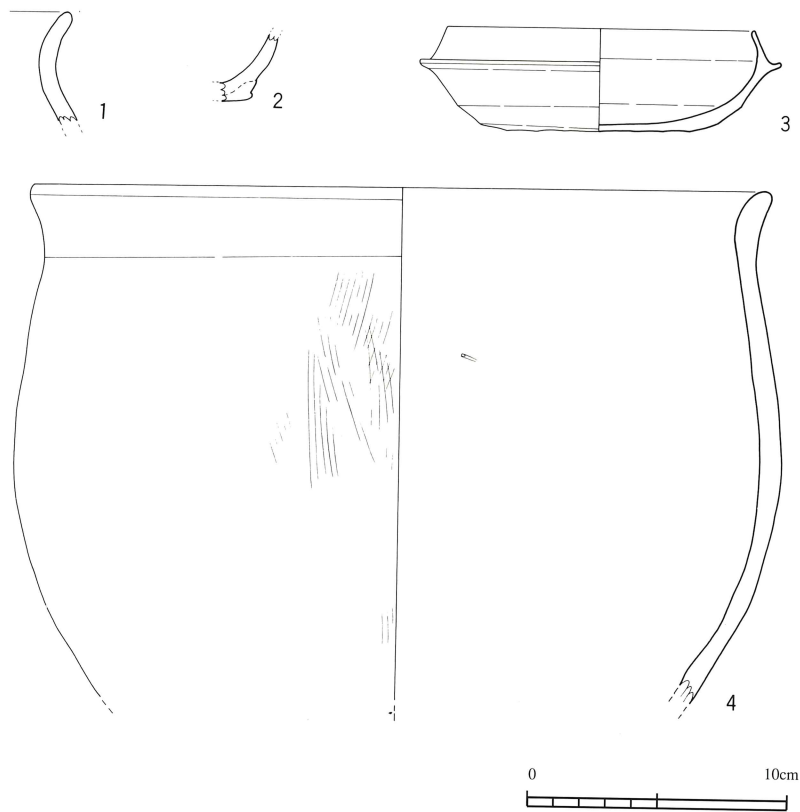
以上限られた遺物から時期の特定は非常に難しいが、3から6世紀後半代の竪穴と思われる。



第7図 1・2号竖穴実測図



第8図 1号竖穴カマド実測図



第9図 1・2号竪穴出土遺物実測図

3号竪穴 (第10図)

1・2号竪穴と同じB-4グリッド東壁沿いで検出された。遺構の主軸は1・2号竪穴とはややずれている。約3分の1が調査区域外にあり、カマド施設等は確認できなかったが、支柱穴は2本検出された。おそらく4本柱の竪穴と推定される。規模は南北3.8m、東西3m+ α を測る。深さは上部の削平が著しく5cm程度に過ぎない。また竪穴中央部を中心として焼土、炭化物の分布が見られる。遺物はほとんどが細片で図化できるものはなかった。



第10図 3号竪穴実測図

溝

今回調査で確認された古墳時代の溝は3条で、いずれの溝も基本的には北→南方向へ走る。溝1と溝2はB-10グリッドで小溝によってつながることから、同時期かあるいはあまりタイムスパンをあけずに構築されたものと推定される。これに対して溝3は溝1および溝2を切る形で構築されている。さらにこの溝に関わる遺構として、水門状の施設を設けていたと思われる対を成すピットが5カ所、火熱を受けた凝灰岩が集中して出土した礫群が3カ所、溝の内部に配列された小ピット群が1カ所、溝の基底部に遺物を伴うピットが3カ所確認された。

溝1 (第15図)

調査区西側E-5グリッドからほぼ真東に約30m、さらにそこからほぼ真南に約55m伸びる。溝の変換点付近を溝3に切られる。溝の断面は逆台形状を呈する。B-10グリッドでは南東方向に幅50cmの小溝が流れ溝2と連結する。その分岐点に水門状のピットがある。(水門状ピット1) C-11グリッドでは小規模な蛇行部分がありそこに三日月状に分流する小溝がつく。この小溝の南側取りつき部分に水門状のピットがある。(水門状ピット3) また、この手前に東方向に長さ5m、幅1mの小溝が分岐し、水門状のピットがつく。(水門状ピット2) 出土遺物は溝2・3に比べると非常に少ない。出土した須恵器から6世紀後半代の溝と推定される。

溝2 (第15図)

調査区北端C-2グリッドから南東方向へ約38m、一旦調査区外へ出て、B-8グリッドで調査区内に入りこみ緩いカーブを描きながら約25m伸び、再びB-11グリッド付近から調査区外へ出る。溝の断面は逆台形である。溝1の項でも触れたが溝1と小溝によって連結していて、溝2側の接合部にも水門状のピットがある。(水門状ピット4) また、B-9グリッドでは溝2を挟んでピット群が集中して検出された。(ピット集中部) このうち溝の東に分布するピット群は不規則ながら柵列と思われる一群がある。

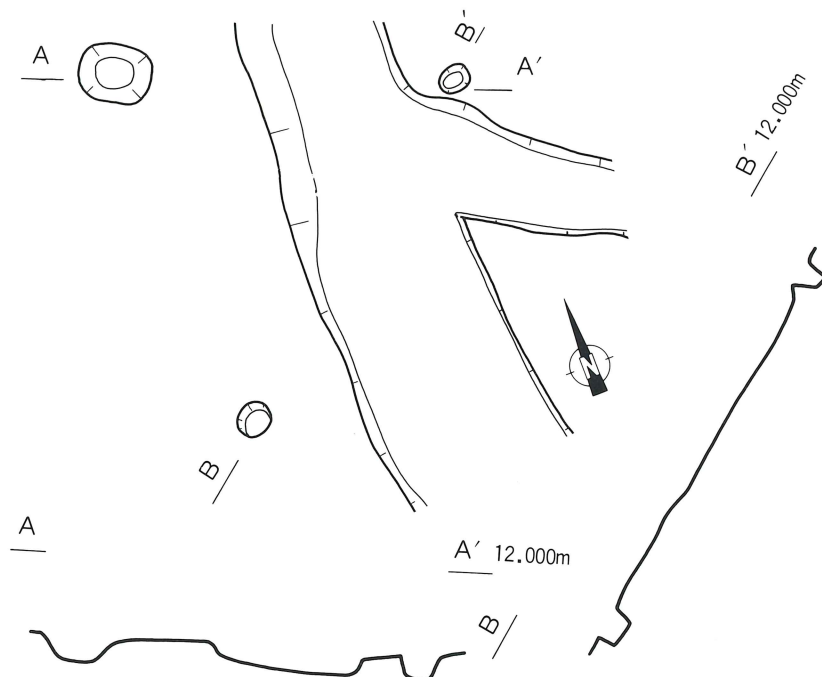
溝3 (第15図)

調査区北端C-2グリッドから発し南南東方向に約15m伸びそこで溝2と一部切り合いながらほぼ平行に約40m走る。その後B-6グリッドで北方向に向きを変え、約40mで終わる。溝の構造は溝1・2に比べると相対的に深く、念入りに構築している。特にB-4~B-7グリッドの間はその傾向が強く、急角度に壁が立ち上がりそこに酸化鉄が大量に付着していた。B-6~B-7グリッドにかけては2段掘り状の構造をもつ部分も一部観察された。土層観察では確認できなかったが、一部に掘り直しをしたことも考えられる。ただしこの部分の溝から出土した遺物の限りは、ほとんど溝2と時期差は無いものと思われる。溝はB-8グリッドに入り急激に浅くなり、最終部分は浅く不整形に広がる。この端部から手前約15mのところに水門状の施設(水門状ピット5)がある。

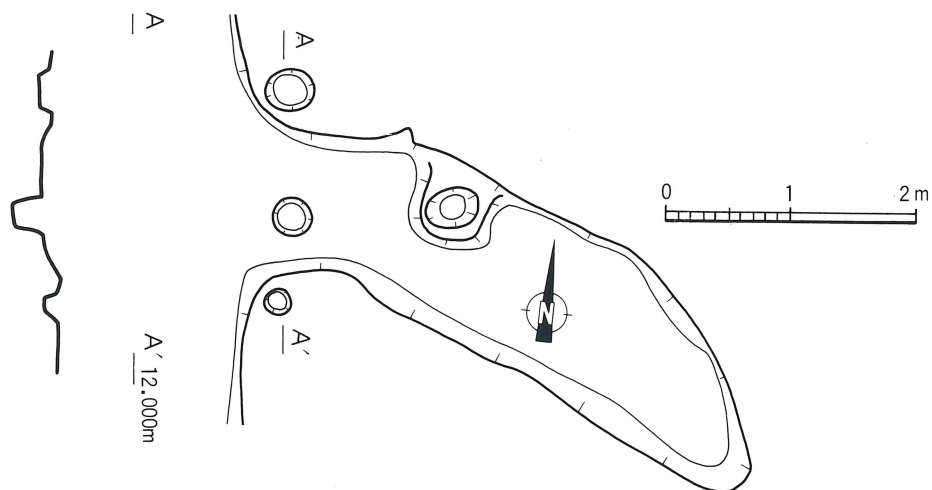
また、C-2、B-5、B-7グリッドでは、一部に火熱を受けた凝灰岩の40~50cm大の角礫を中心とした礫群が確認された。(礫群1、礫群2、礫群3) しかしこの礫群付近で火を用いた痕跡は認められず、他の場所で火熱が加えられた礫を意識的に投げこんだ様相を呈する。これとともに須恵器の坏、提瓶、平瓶、土師器の甕が出土している。さらにB-5グリッドの礫群から約2m離れた溝の基底部分で、3基ずつ小ピットが平行して2列検出された。(溝内ピット群) ここからも須恵器の坏が数点出土している。これ以外にも溝内の基底部分で3基のやや大きめのピットが検出されている。(溝内ピット1~3)

出土遺物 (第25図~第34図)

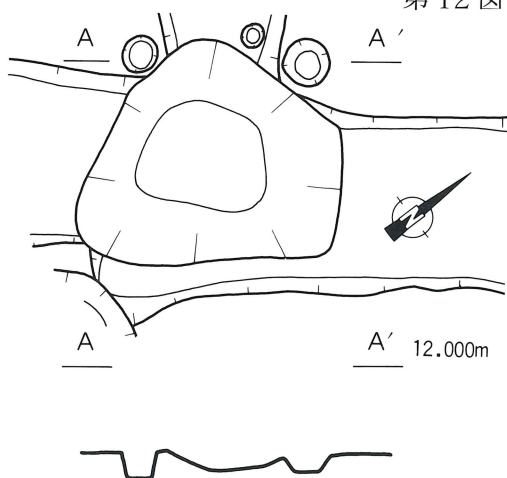
溝1から出土した遺物は第25図に示している。溝1~溝3の中で出土量は最も少なく、大半が細片で図化できるものはわずかに1点であった。1は、口径12.8cm、受部径15cm、器高4.1cmを測る。体部外面は回転ヘラケズリ、内面は不定方向ナデ、体部は回転ヨコナデである。



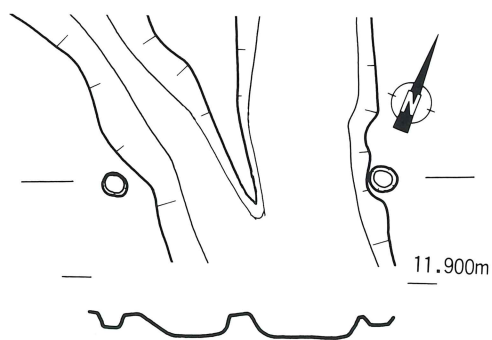
第11図 水門状ピット1実測図



第12図 水門状ピット2実測図



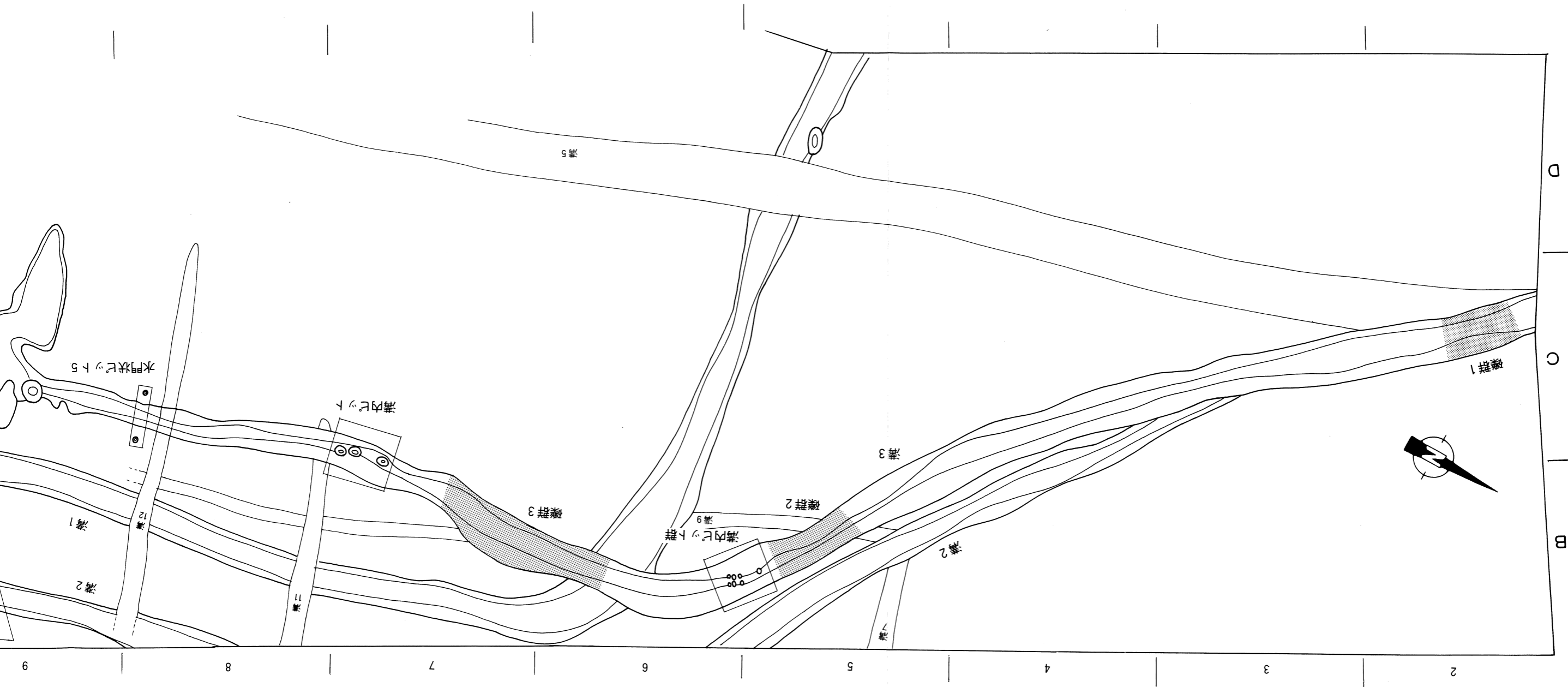
第13図 水門状ピット3実測図

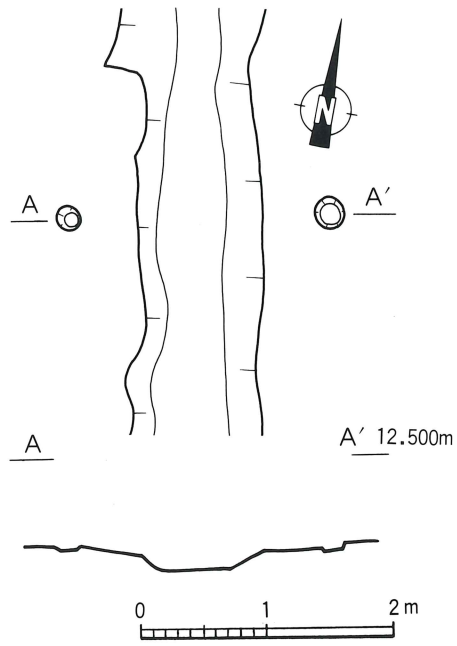


第14図 水門状ピット4実測図

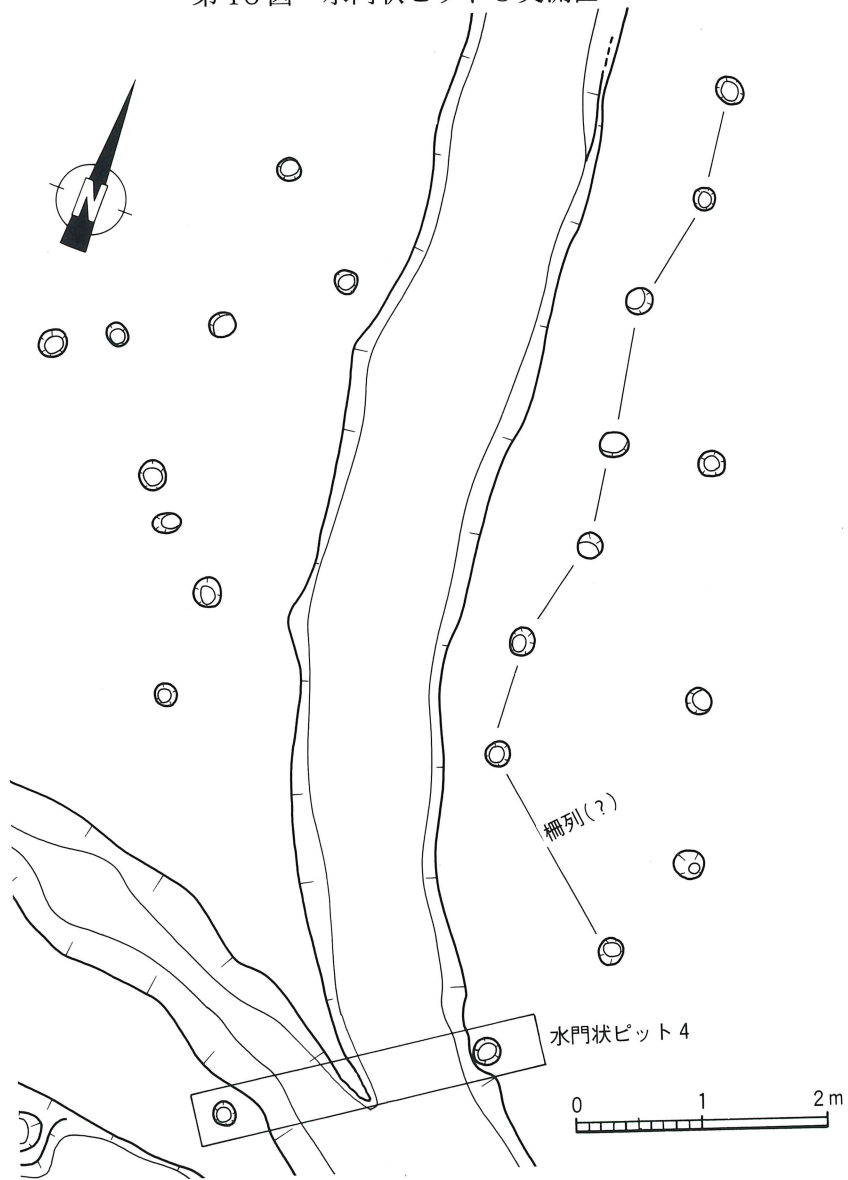


第15図 溝1～3美測図及び溝に伴う遺構位置図





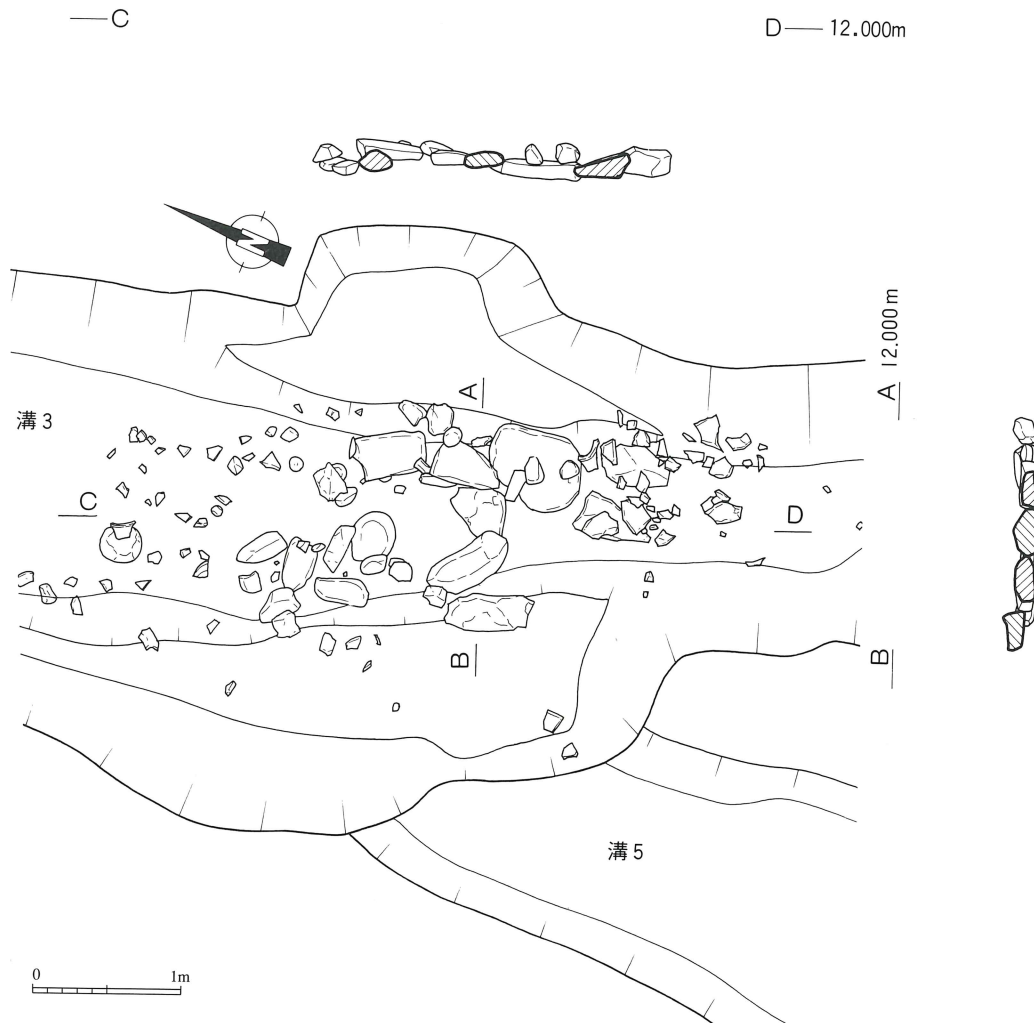
第16図 水門状ピット5実測図



第17図 ピット集中部実測図

礫群1 (第18図)

調査区北端C-2グリッドの溝3と溝5の切り合いが確認された部分で検出された。この礫群1は礫の検出レベルから、溝3が廃棄された直後ではなく、ある程度埋没後この場所に形成されたものである。礫は、20~50cmの大型の礫と拳大の小礫で構成され、安山岩と凝灰岩がほぼ同数である。凝灰岩には一部に火熱を受けたものがあった。また共伴する遺物はいずれも細片で出土状況に意図的な様相は見られなかった。



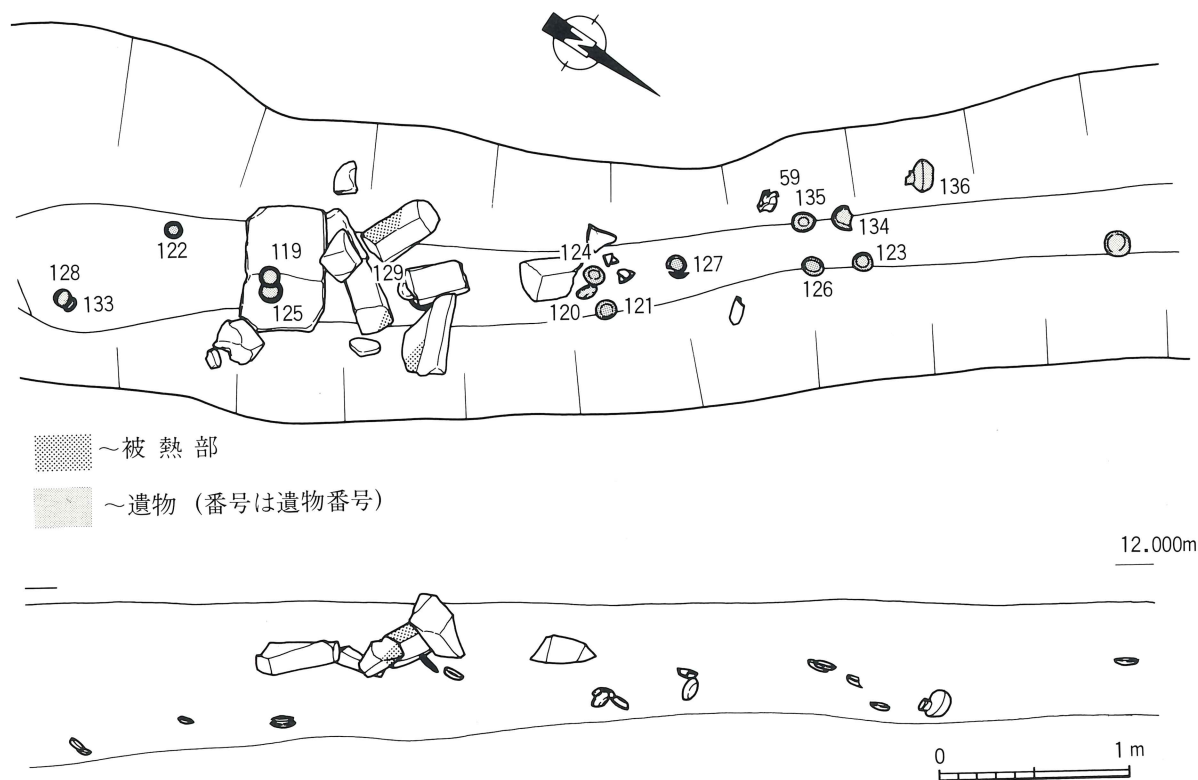
第18図 礫群1実測図

礫群2 (第19図)

礫群2は、溝3が溝2とほぼ平行して流れるB-5グリッドで確認された。ここから約1.5m南に溝内ピット群がある。礫群はすべてが凝灰岩で、最も大きなものは70×40cm、厚さ15cmの扁平な礫で、それ以外は平均して長さ40cm、厚さ20cmの角礫で一部には意識的な面取りを施したものも含まれる。この角礫には火熱を受けて赤変したものが含まれる。この赤変部分は全面に及ぶものではなくそれぞれの角礫の1面にのみ確認される。礫群およびその周辺で火を用いた痕跡は認められず、別の場所でなんらかの施設の一部として用いられていたものをここに廃棄したものと思われる。

礫の分布状況は礫群1と同様比較的上位で出土した。ここで出土した遺物は第19図に示すように須恵器の完形品(坏、平瓶)が16点出土している。この礫群もある程度溝が埋没した段階で投げ込まれたものと思われる。

出土遺物については、比較的溝の基底部～中位にかけて確認されていて、礫群とはややレベル差がある。このことから遺物と礫群が同時期とは考えにくい。また出土遺物の平面的な分布を見ると意識的な配置は認められないが、祭祀的な性格を持つものと思われる。



第19図 礫群2実測図

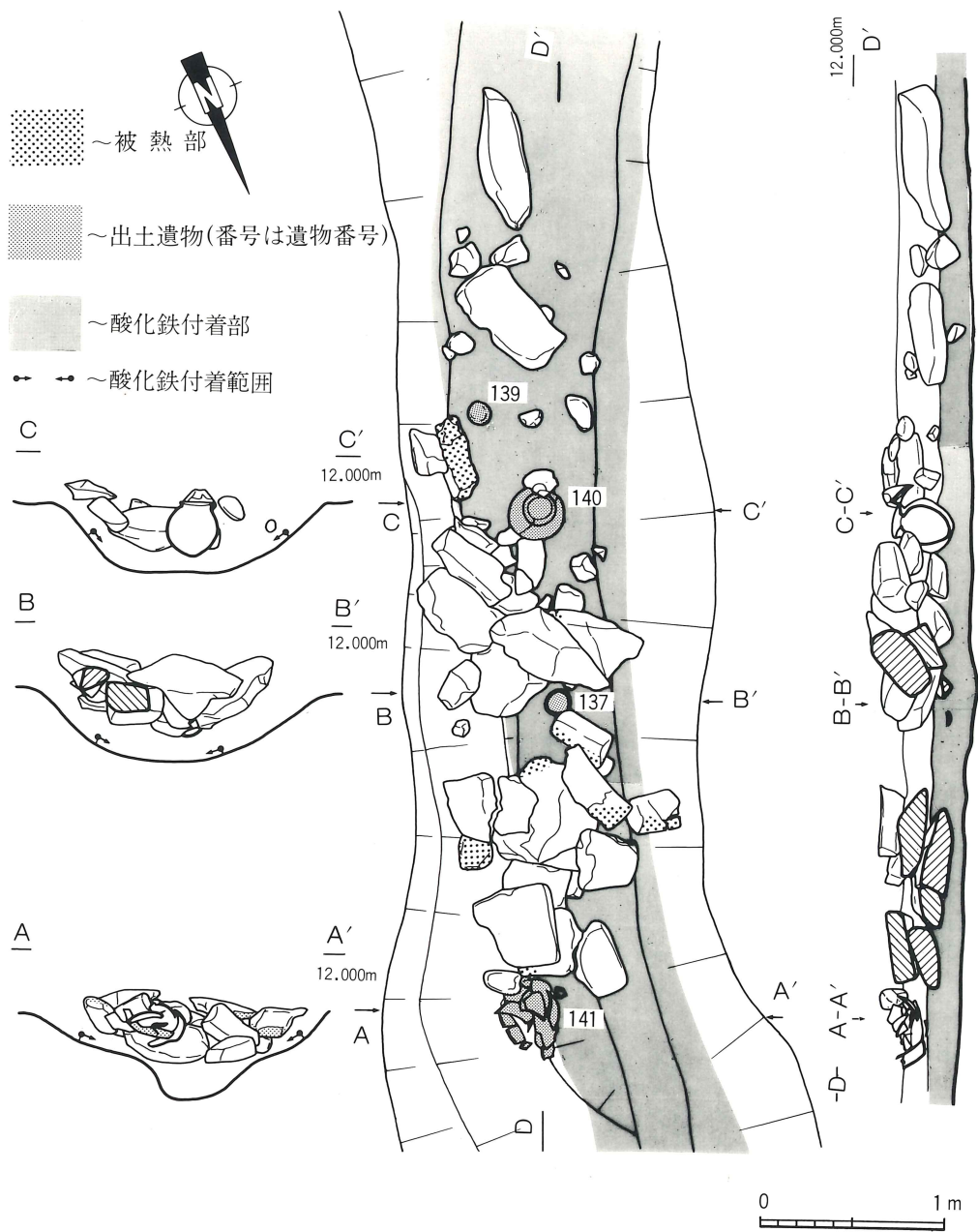
礫群3 (第20図)

礫群3はB-6グリッドの溝1と切り合うところに位置する。礫は凝灰岩の角礫で構成され、その範囲は約5mの長さに及ぶ。

礫は、溝の基底面からかなり上位のレベルにあり、長さ60～70cmの角礫、50cm程度の扁平な角礫、40cm程度の柱状の角礫に大別され、このうち約3分の1に火熱を受けたものが含まれる。なお被熱部分のあり方は礫群2の礫と同様の状況で、全体にはではなく部分的に受けるものが主体をなす。また柱状の角礫については意識的に面取りしたものが多く含まれる。

この礫群に共伴して北端部、中央部にそれぞれ土師器の壺が口縁部を上に向けた状態で出土し、それ以外に須恵器の坏、短頸壺などの完形品が出土した。礫自体は溝の東側から投げこまれた状況を呈しているが、土師器の壺は意識的に溝に正置したように思われる。炭化物や焼土は疎らではあるが礫群周辺に分布し、さらに北端にあった壺の内面に焼土が厚さ2cm程度確認された。溝の壁等に火熱を受けた痕跡は認められず、この場所で火を用いたという可能性は低いが、基底部を中心として酸化鉄が付着する部分が広がっていて、溝に水が流れていたことをうかがわせる。

遺物の出土状況および投げ込まれた礫については、礫群2同様何らかの祭祀にかかわるものと思われる。

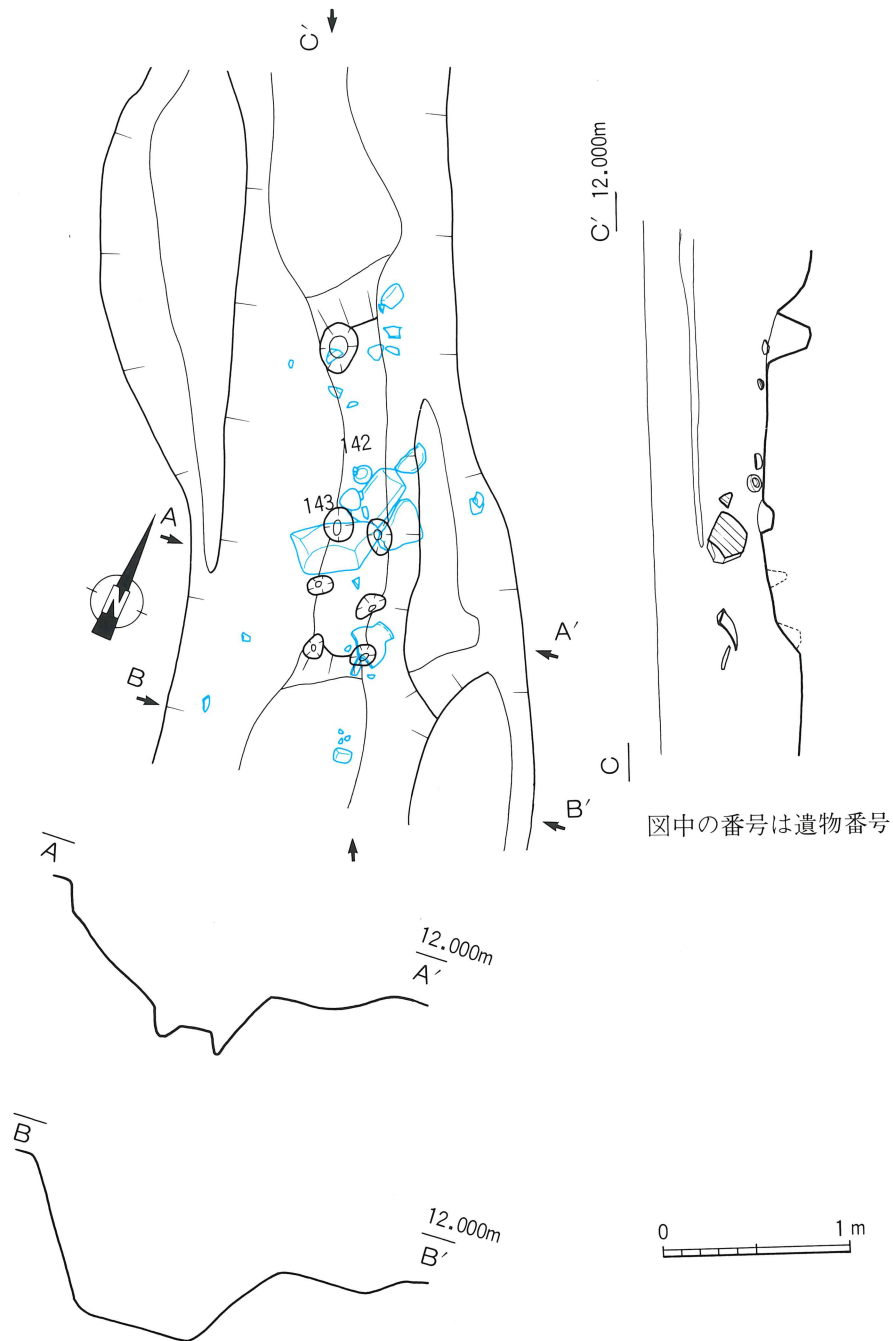


第20図 礫群3実測図

溝内ピット群 (第21図)

B-5グリッド南端において溝基底が長さ約1.8mにわたって断面が台形状に高さ20~25cm程度高まる。ピットは直径10~15cm、深さ10cmの小ピットで、高まり部分のほぼ中央部から南側下端ラインに沿って3基ずつ2列が平行して設けられる。また直径20cm、深さ約20cmのやや大きなピットが高まりの北側部分に1基設けられている。遺構の性格については橋状の施設か堰のような施設が想定されよう。

ここからは、やや浮いた状態で長さ30~45cmの凝灰岩の角礫が数個と土師器片、基底直上で須恵器の坏、平瓶が出土している。このうち土師器については流れ込みの可能性が高いが礫及び須恵器については、このピット群に関わる祭祀的な行為によるものと推定される。



第21図 溝内ピット群実測図

溝内ピット1・2 (第22図)

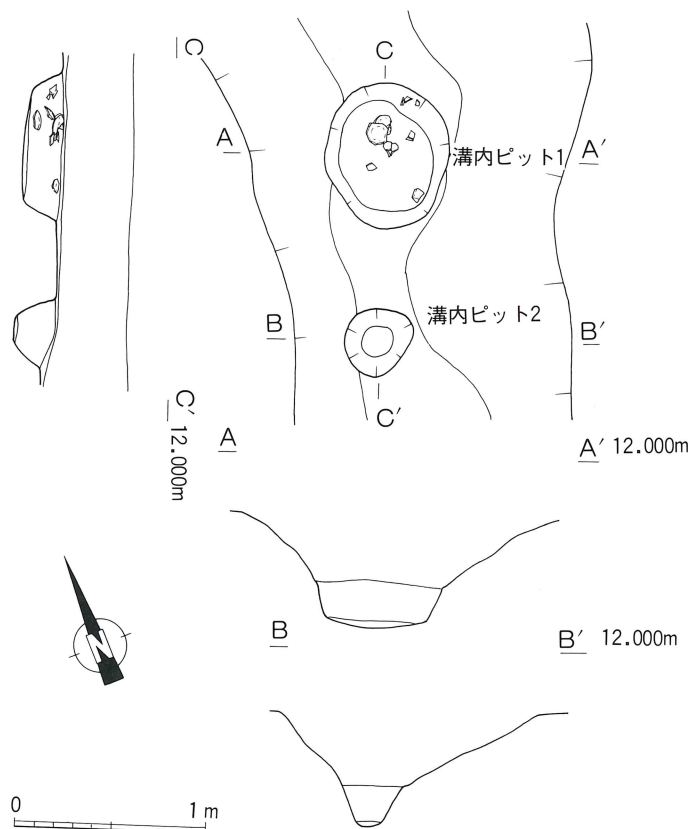
B-7グリッド西側において検出された。ピット1及び2は約40cmの間隔で溝3の基底部分に掘られていて北側に位置するものをピット1、南側のものをピット2とした。ピット1は長軸75cm、短軸65cm、深さ20cmの楕円形のピットで、内部からはやや浮いた状態で土師器の坏を含めて数点の遺物が出土した。ピット2は35×35cmの円形ピットで遺物は含まれていない。

溝内ピット3 (第23図)

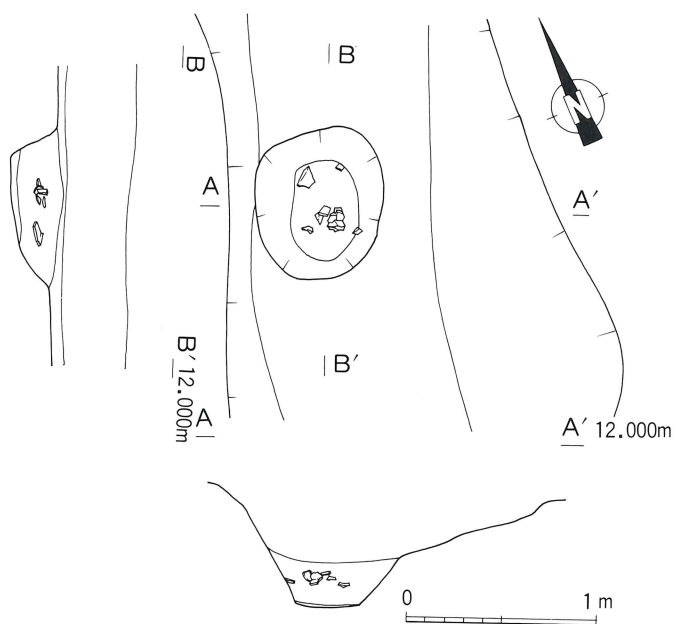
B-6グリッドの礫群3から約1m南側の溝基底部分において検出された。長軸81cm、短軸65cm、深さ28cmの楕円形のピットで、溝内の西壁沿いにある。遺物はやや浮いた状態で土師器の甕等が出土した。

この溝内ピット1～3はいずれも溝本体から連続して壁に酸化鉄が強く付着していて、溝3の構築時ないしはそれに近い時期には既に掘り込まれていたものと思われる。これらの遺構の性格に

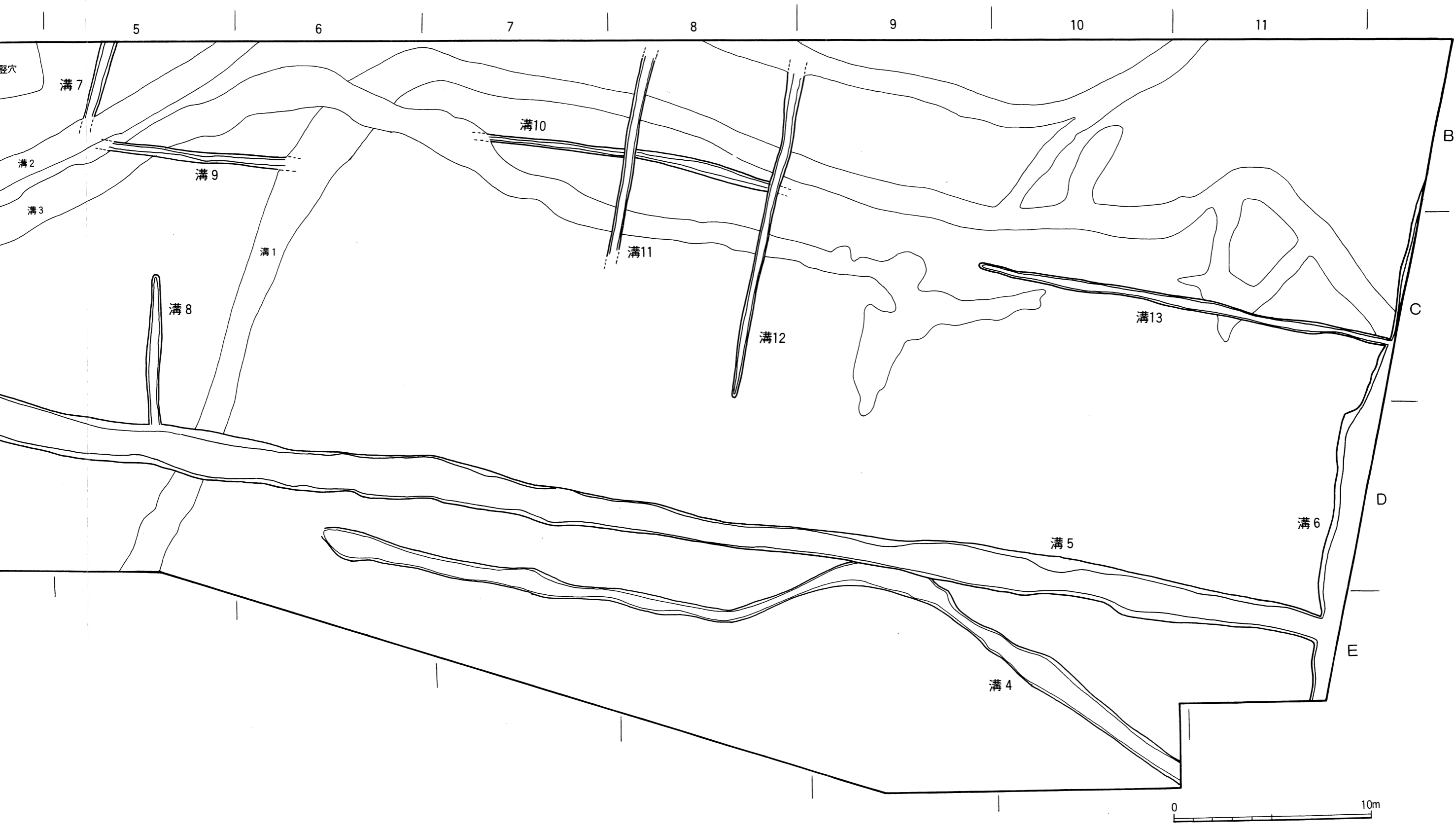
については不明であるが、例えば水量調節のための施設、あるいは柱を立てて板を渡す程度の簡便な橋状の施設等が想像される。



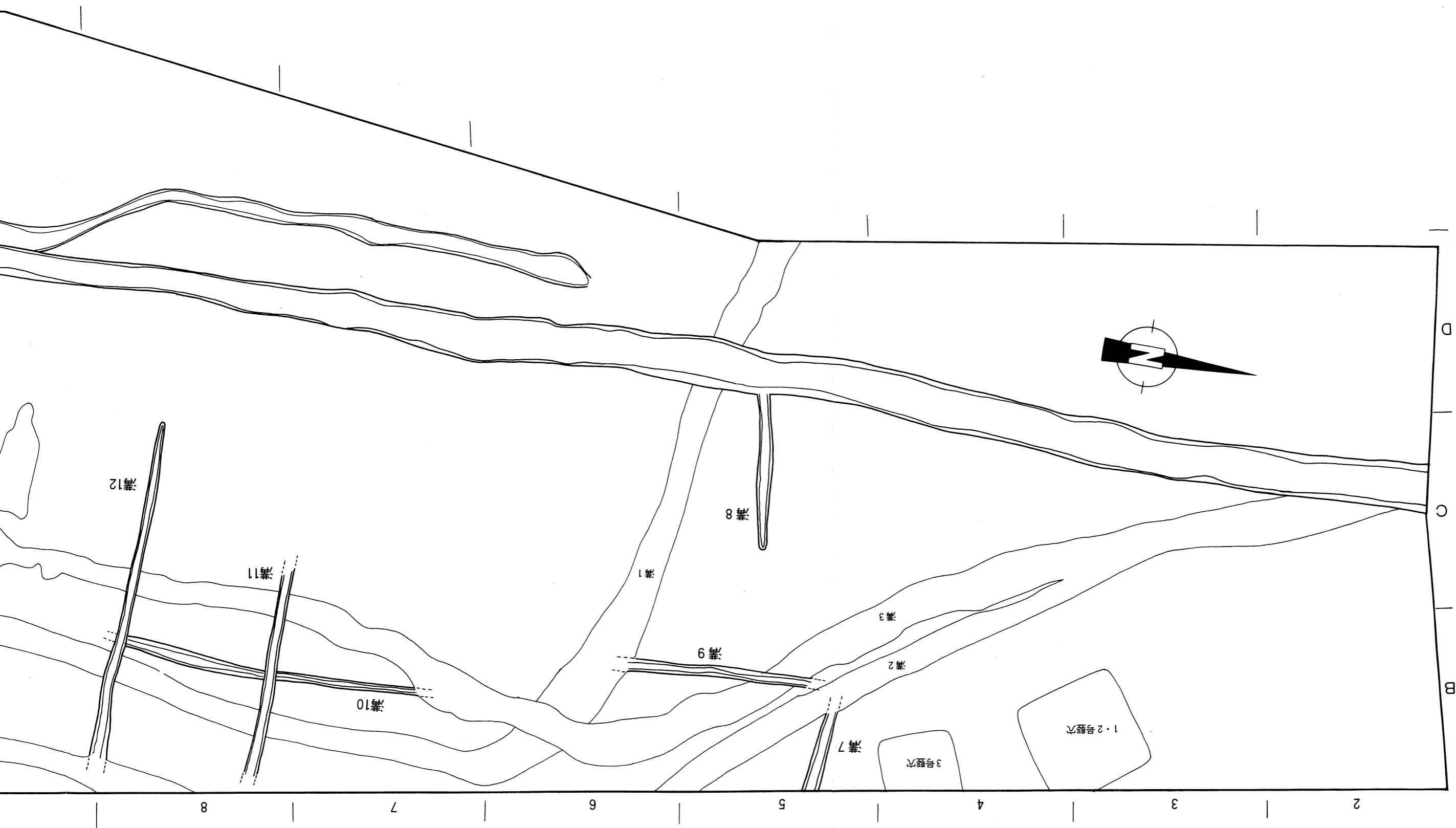
第22図 溝内ピット1・2実測図



第23図 溝内ピット3実測図



第24図 溝4～13実測図



時期不明の溝（第24図）

ここで時期不明の溝としたものは溝4～13までである。いずれも時期が特定できる遺物の出土がなく、流れこんだ遺物が若干出土したのみである。以下各溝の説明を行う。

溝4

調査区西側、主にE-6から発しE-8まではほぼ南北方向に流れ、E-9で南東方向から南西方向へと変化し調査区外へ消える。確認された部分で全長は46m、幅は30cmから1m、深さは10～20cmを測る。ただし上面はかなり削平を受けているものと思われ、溝の幅、深さともあくまでも現況の状況を示すものである。ここより出土した遺物は40点程度で細片のみであった。すべて流れ込みの状況を呈していて、時期を特定するには至らなかった。

溝5～溝13

9条の溝のうちほぼ南北方向に走るものが溝5、溝9、溝10、溝13、ほぼ東西に走るものが溝6、溝7、溝8、溝11、溝12である。このうち溝5・6・8、溝6・13、溝10～12はそれぞれ直交する。これらの溝はいずれも溝1～4を切るように設けられていて、今回の調査において最も新しい時代の所産の遺構群である。以下溝の説明を行う。

溝5と溝6は9条の溝のなかで最も規模の大きいもので、溝5は長さ約90m、幅1.5～2m、深さ10～15cmを測る。覆土内には中世から近世にかけての遺物を若干含む層が堆積していた。この溝がほぼ南北方向に走り、その南端部分で溝6と交わる。現道が走っているため溝6の全容は見ることができないが、ほぼ同規模の溝と考えられる。確認された部分で長さ24m、深さ30cmを測る。また溝7～溝13はいずれも幅50cm程度、深さは10cm程度である。溝6と溝13はつながっていることから、本来この小溝群は溝5ないし6とつながっていたと思われる。

これらの溝は、時期を明瞭に示す遺物の出土はなく即断はできないが、溝の広がる方向などから玉沢地区に展開する条里遺構となんらかの関係を示す遺構と想定されよう。

出土遺物 土器

第25図から第34図に遺物実測図を、第2表から第5表に遺物観察表を示している。概ね6世紀後半代から7世紀前半代の須恵器・土師器が主体である。大半は溝などに投げ込まれたものと思われるが一部に出土状況から何らかの祭祀にかかわるものも含まれる。

溝1出土遺物（第25図 1～2）

溝1から出土した遺物は量的にも非常に少なく、またその中で図化できるものは図に示した2点のみで共に須恵器の坏身である。特記すべき事項はない。

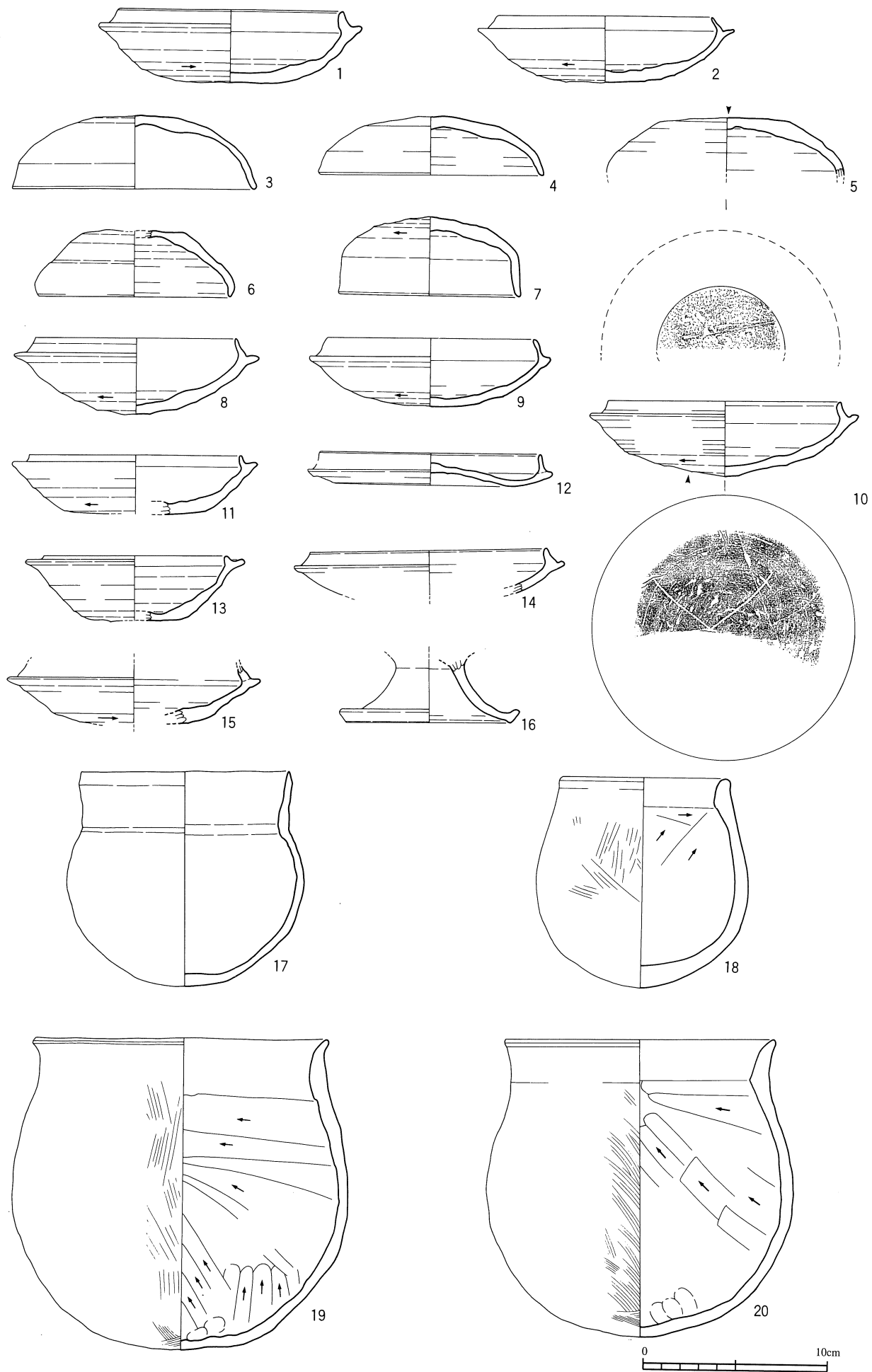
溝2出土遺物（第25図3～20 第26図21～27）

溝2から出土した遺物は須恵器の坏蓋・坏身・高坏・壺・土師器の埴・甕・壺・甑などである。溝1に比べて遺物の出土量は大幅に増加している。坏蓋では、口径12.5～13.5cm程度のもの（3～5）と10センチ程度のもの（6～7）に分けられる。坏身は、口径11cm程度のもの（8～9、11～13）と14cm程度のもの（10、14～15）に分けられる。土師器の埴（17～20）はほぼ同じ形態を持つものである。甕については器高が20cm未満で胴部がほぼ球形のものと長胴形のものが有る。

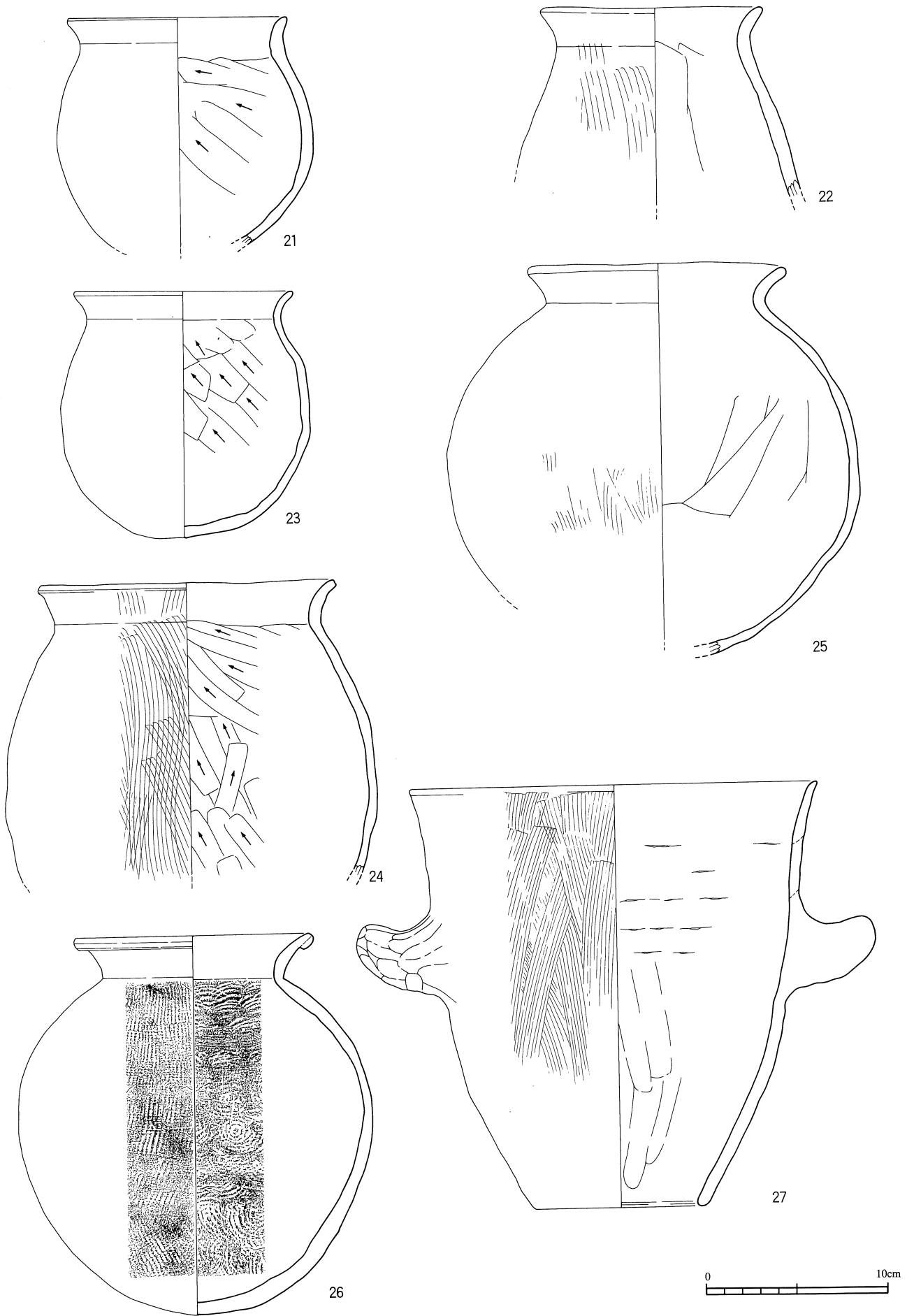
溝3出土遺物

（第27図28～57 第28図58～88 第29図89～108 第30図109～114 第31図115～118）

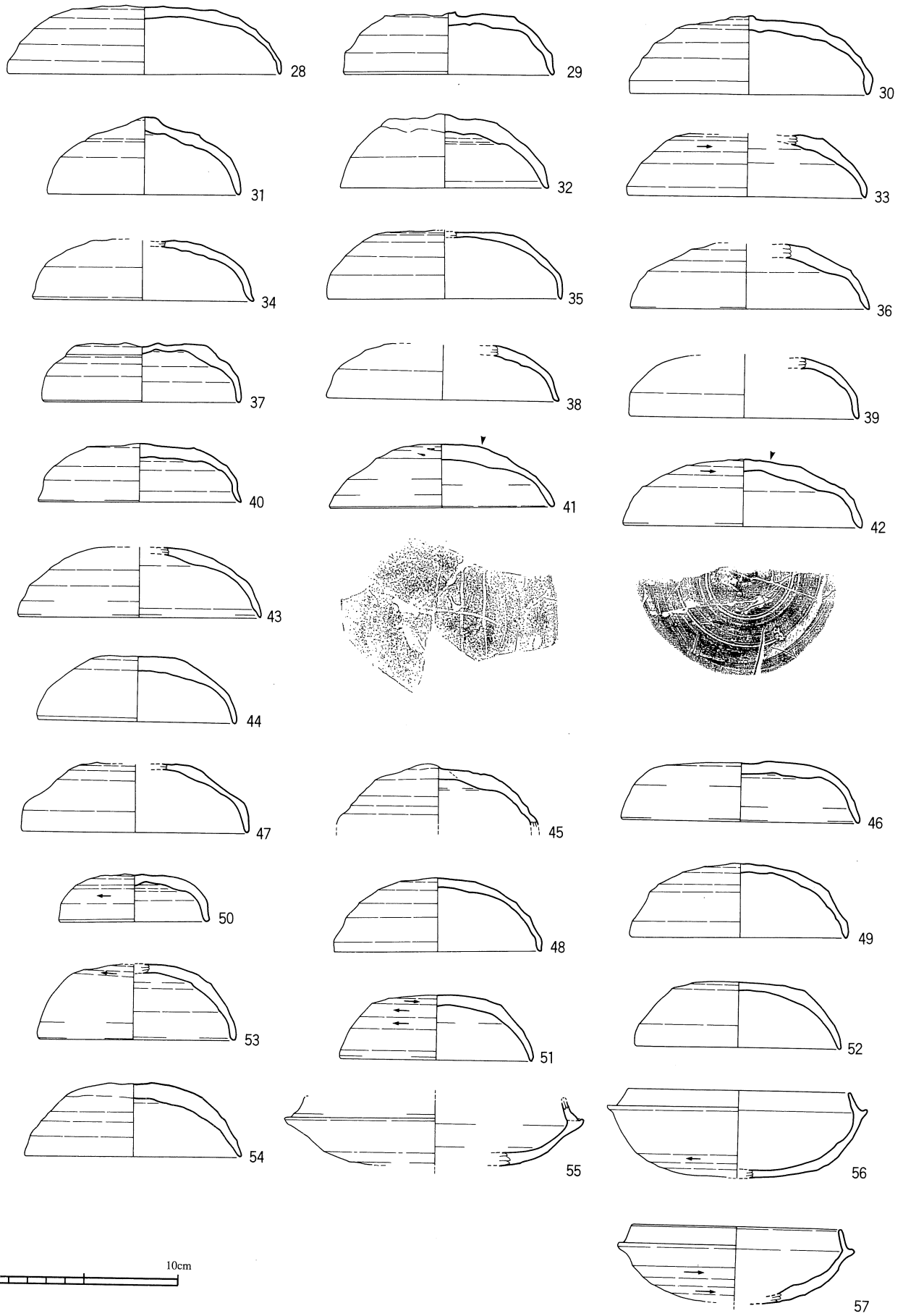
溝3は最も遺物の出土量が多い。大半が破片であったが一部完形品の出土もあった。この溝3では礫群やピット群などが検出され、それに伴って何らかの祭祀に関連する遺物も出土していることから、すべてが廃棄遺物ではなく祭祀にかかわる遺物も含まれているものと思われる。ただし意識的な配置などは確認されなかった。



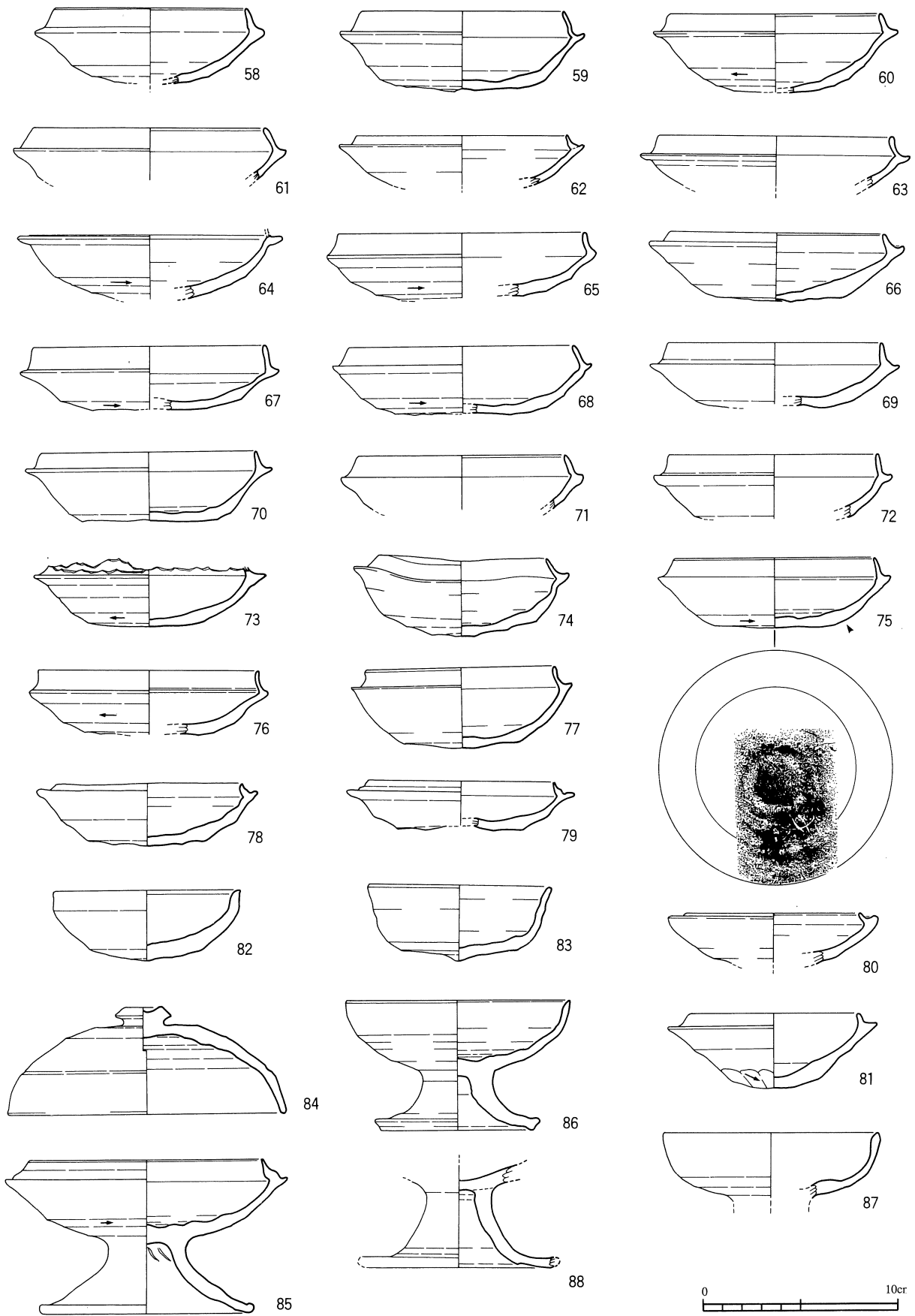
第25图 沟1·2出土遗物实测图



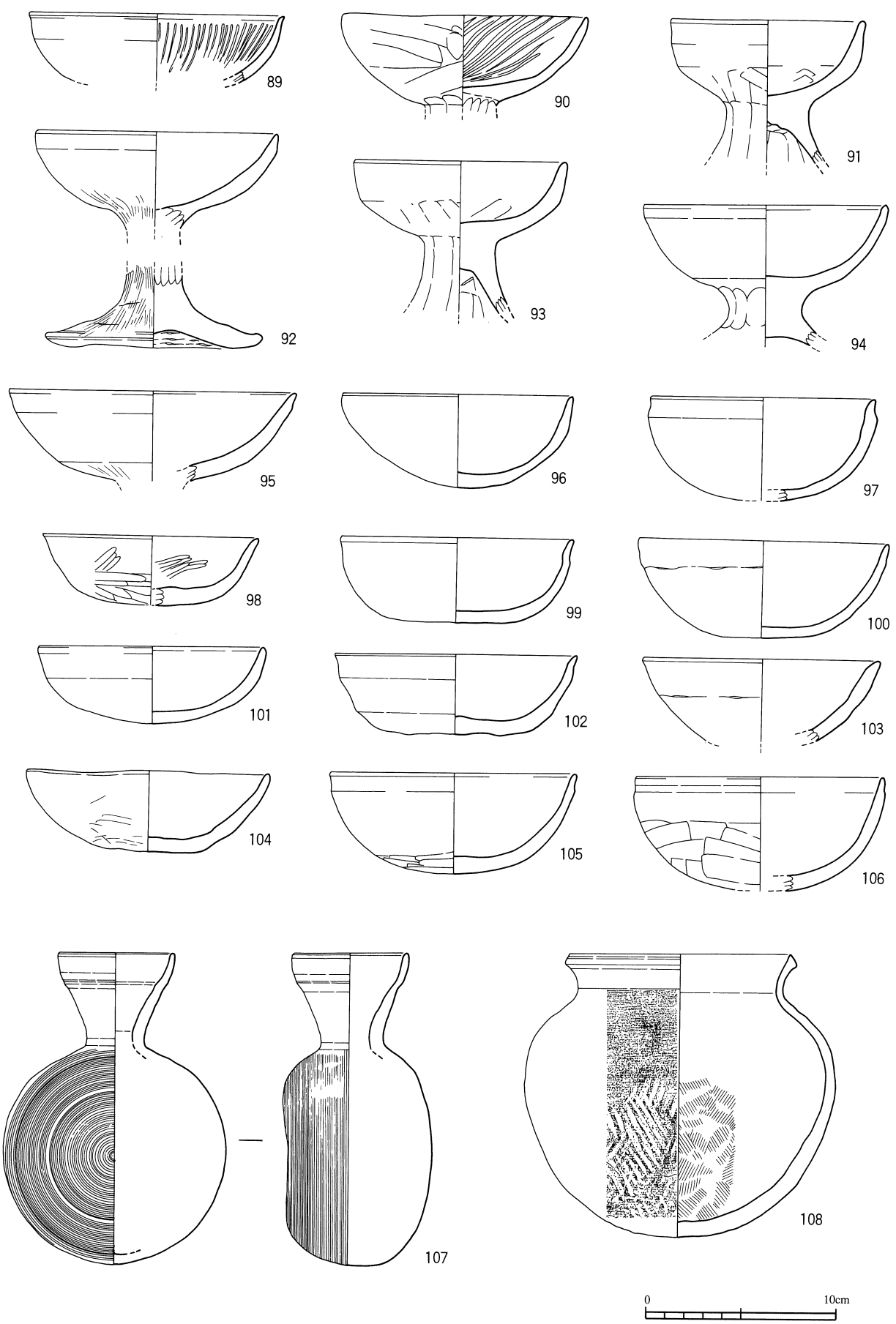
第 26 图 溝 2 出土遺物実測図



第 27 图 溝 3 出土遺物実測図 (1)



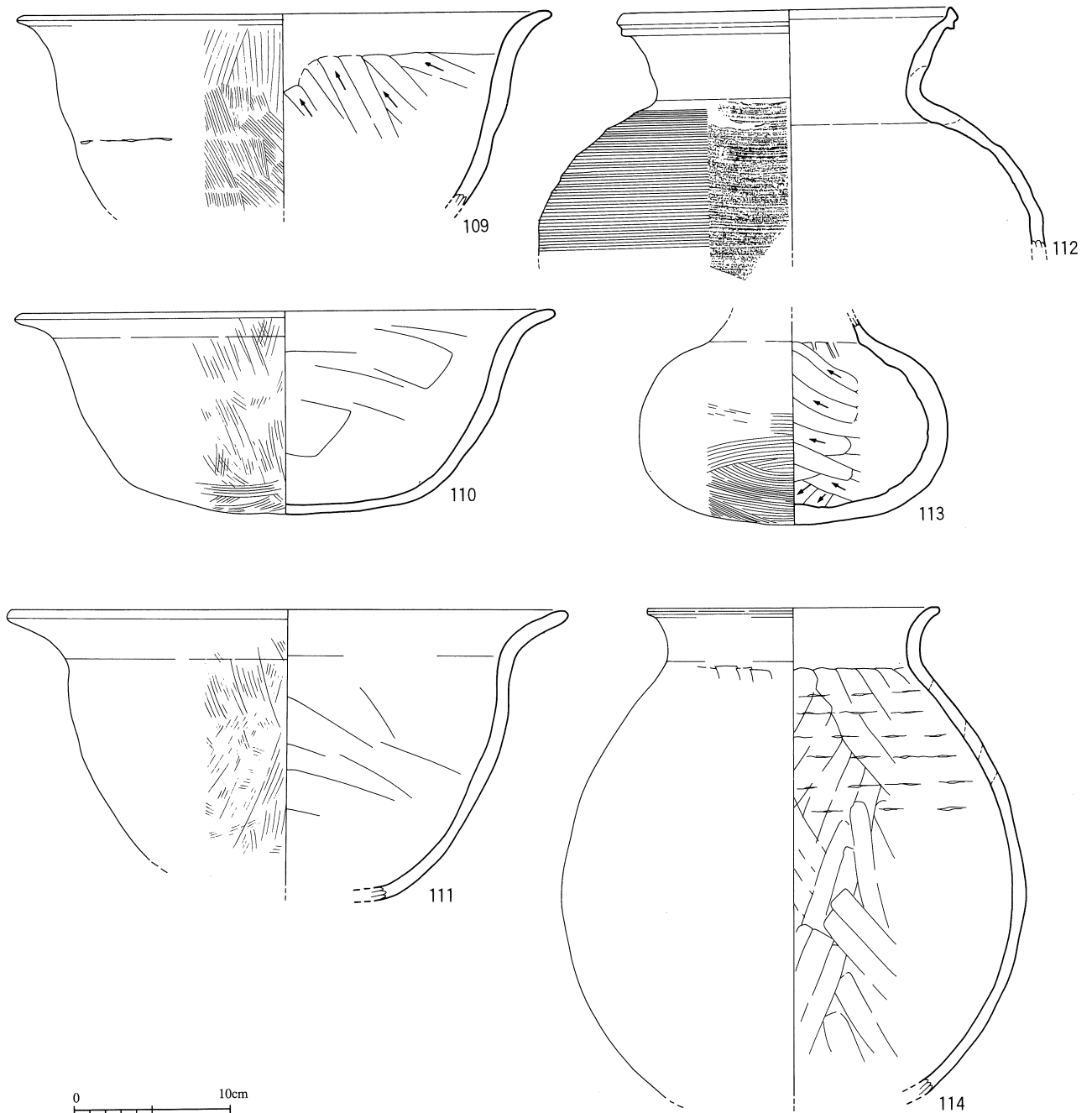
第28图 溝3出土遺物実測図(2)



第29図 溝3出土遺物実測図(3)

遺物は須恵器の坏蓋、坏身、高坏、提瓶、壺、土師器の高坏、碗、鉢、壺、甕、甑などがある。

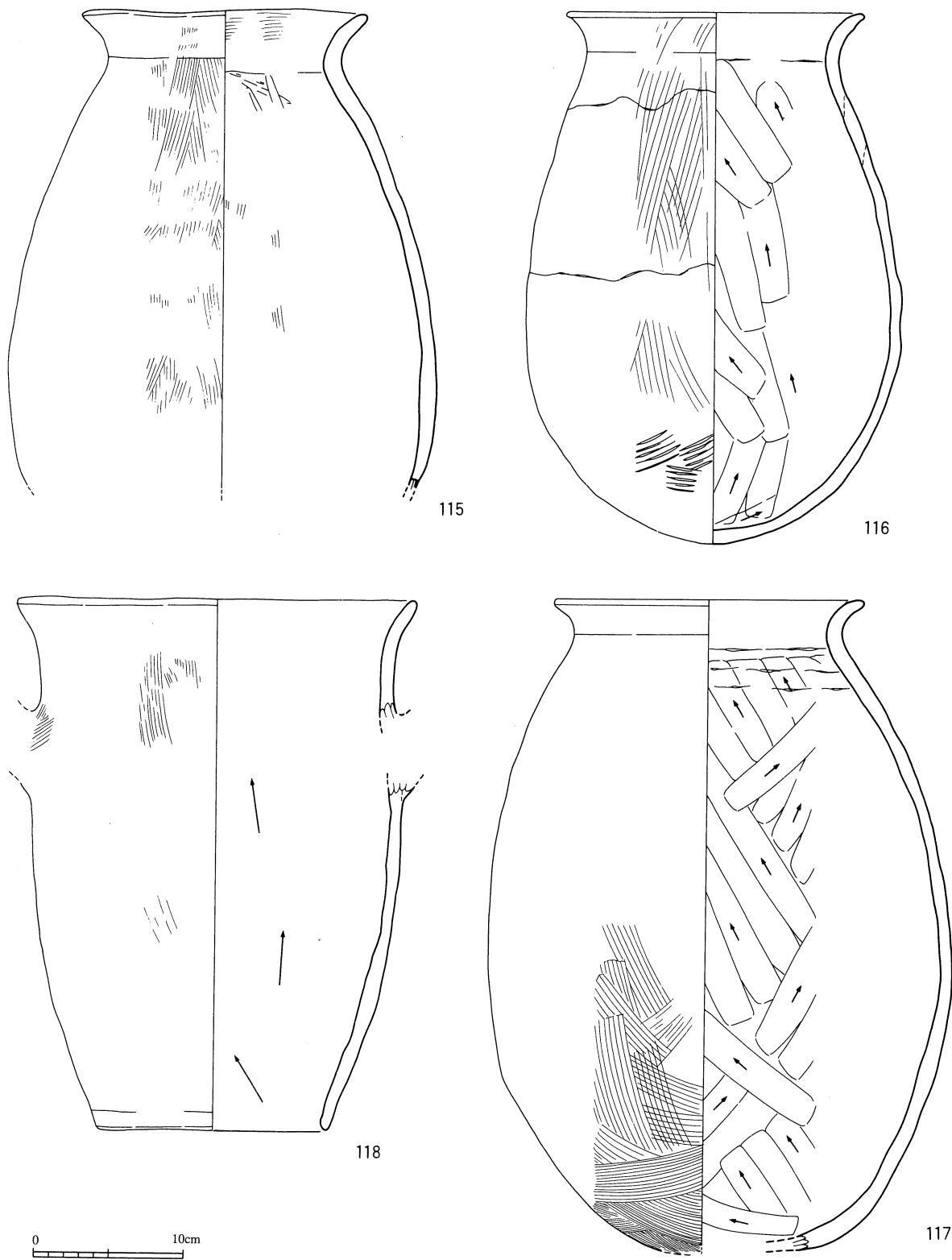
坏蓋は口径の最大値14.8cm (28)、最小8.1cm (50)と大きな差が有る。しかし大部分は11.8cm 平均の口径である。坏身の口径については最大値16.2cm (55)、最小値9.8cm (82)で、平均11.3cmの口径をもつ坏身が大半である。この中で73は口縁部が全周意識的に打ち欠いている。さらに81のように非常に器壁が分厚く、器面調整も手持ちヘラケズリやナデを用いたものもある。焼成も甘く異質なものが含まれる。この遺物は土師器工人が須恵器を模倣して製作した可能性もある。土師器の高坏については一部に暗文の見られるものもある。さらに碗については碗径、器高ともほぼ同規格で製作されている。鉢については口径が大きく器高の低い洗面器状の物とやや器高のある一般的な鉢の2種類がある。甕はやや頸部がしまり長胴である。胴部最大径は中位よりやや下にくる。



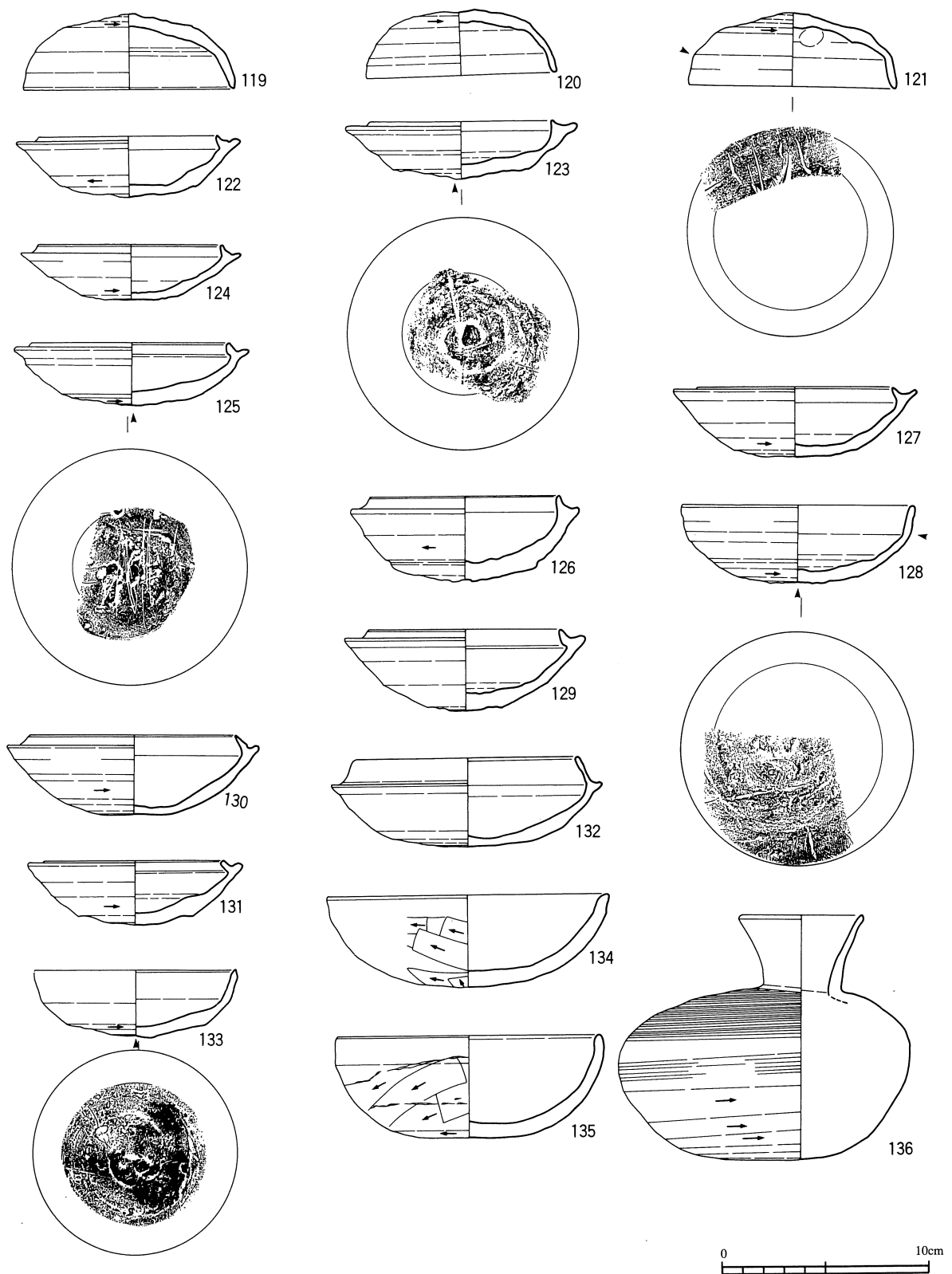
第30図 溝3出土遺物実測図(4)

礫群2出土遺物 (第32図119～136)

大半が祭祀にかかわる遺物と思われる。須恵器の坏蓋、坏身、平瓶、土師器の埴で、すべて完形品である。坏蓋は口径が10cm程度、坏身は9cm程度のものと12～13cmのものに分けられる。口径の小さいものは器高も低く2.7cm～3.2cm程度である。また受部にかえりの付かないものが含まれる。(128,133)



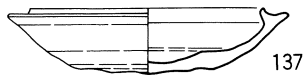
第31図 溝3出土遺物実測図(5)



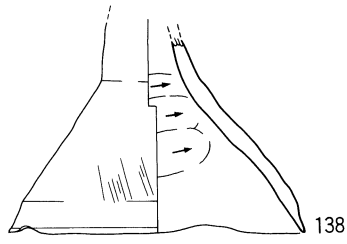
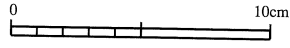
第32図 礫群2出土遺物実測図

礫群3出土遺物 (第33図 137～141)

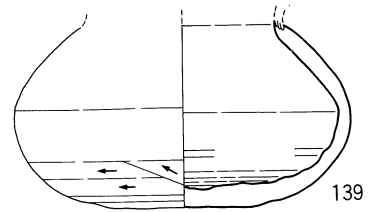
ここから出土した遺物も祭祀にかかわる遺物と思われる。遺物の構成は、須恵器の坏身、壺、土師器の高坏、壺、甕である。140の壺は礫群のほぼ中央部に正置されていたものでほぼ球形の胴部を持つ。また141の甕もおそらく正置されていたものと思われ、内部に炭化物が少量堆積していた。胴部がやや長胴化するものの溝3で見られた甕のように長くは伸びない。



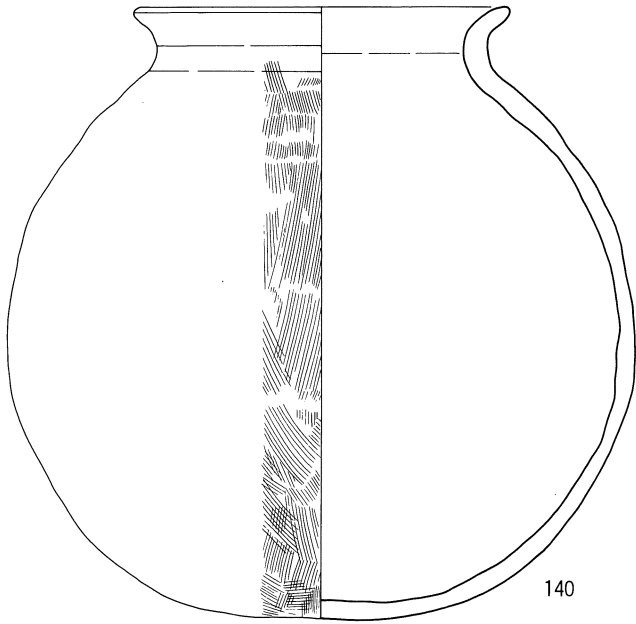
137



138

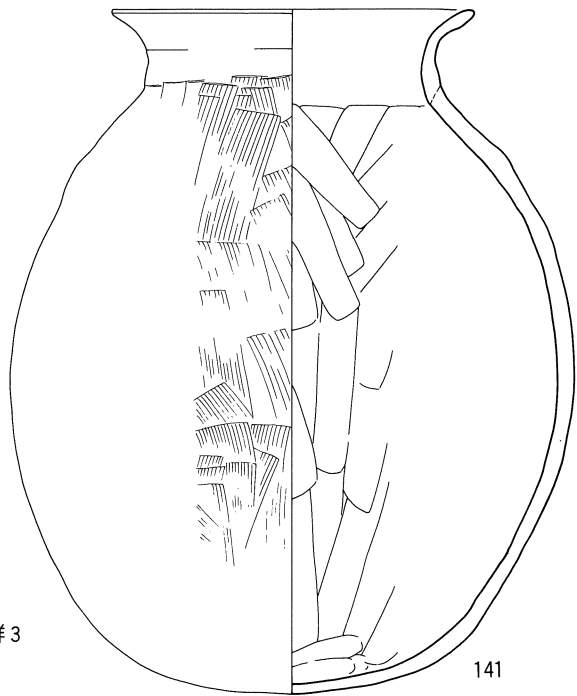


139

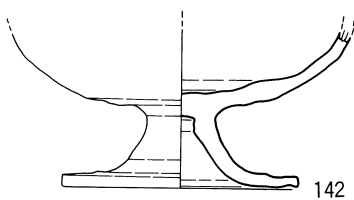
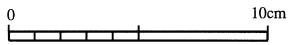


140

礫群 3

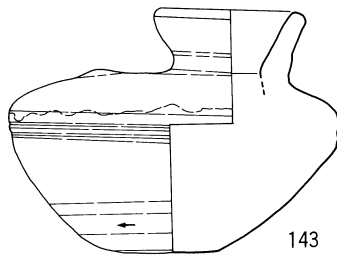


141



142

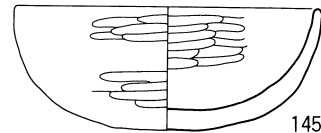
溝内ピット群



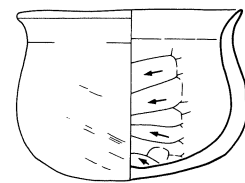
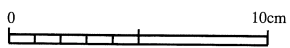
143



144



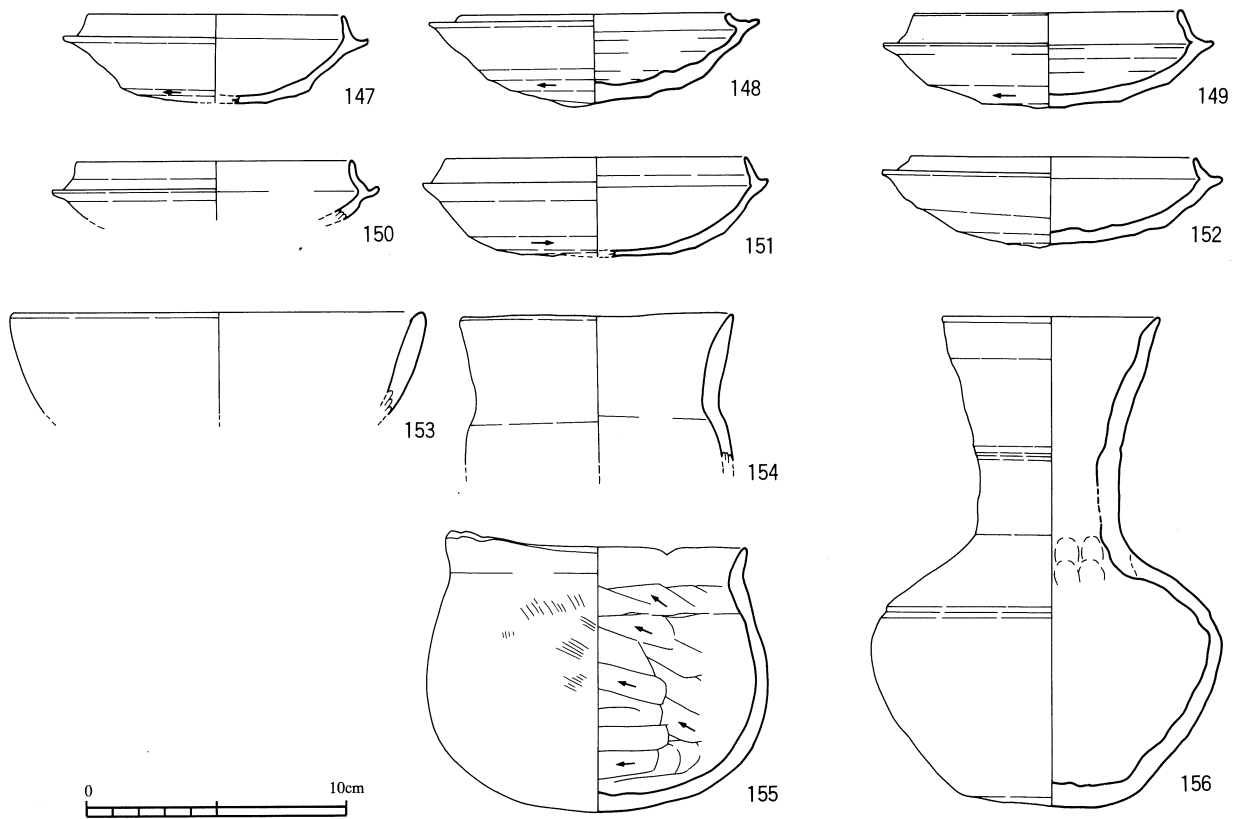
145



146

溝内ピット

第33図 礫群3・溝内ピット群・溝内ピット3・4出土遺物実測図



第34図 その他の出土遺物実測図

溝内ピット群出土遺物 (第33図 142・143)

須恵器の高坏と平瓶が出土した。高坏は脚部が比較的小ぶりで大きな坏部がつく。平瓶は器壁が全体に厚く、81と同様に、土師器工人が須恵器を模倣して製作したように思われる。

溝内ピット1出土遺物 (第33図 145)

土師器の碗で口径は12cmを測る。

溝内ピット出土遺物 (第33図 144・146)

須恵器の坏身と土師器の罎である。144は口径13cmを測る。

第2表 六反田地区出土土器観察表 (1)

番号	出土位置・遺構	種別	器種	規格() 寸法は取定値・単位 (cm)				胎土	成形	調整		焼成	色調		備考
				器高	口径	胴部最大径	底径			外面	内面		外面	内面	
1	溝1 18	須恵器	坏身	4.0	12.5	14.7		石英・白色粒	巻上げ	回転ヨコナデ・回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ・一定方ヨコナデ	良好	灰白色	明オリブ灰色	胴部がへこんでいる
2	溝1 7	"	"	3.6	11.8	14.2		角四石・長石・石英	積み上げ口クロ	回転ヨコナデ・回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ・ナデ	良好	褐色	灰白色	
3	溝2 一括	"	坏蓋	3.9	(13.6)			角四石・長石・赤色粒・白色粒	口クロ成形、ヘラ切り?	回転ヨコナデ・回転ヘラケズリ	ナデ	良好	鈍い黄褐色	鈍い黄褐色	
4	溝2 一括・B6包一括	"	"	3.2	12.4			長石・角四石・石英	積み上げ口クロ	回転ヨコナデ・回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ	不良	白灰色	白灰色	
5	溝2 29.一括	"	"	不明	不明			角四石	積み上げ口クロ	回転ヨコナデ・回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ	良好	淡青灰色	淡青灰色	胴部にヘラ記号
6	溝2・溝3最上層・B6包・C1一括	"	"	(3.6)	10.6			長石・石英・白色粒	積み上げ口クロ	回転ヨコナデ・回転ヘラケズリ・ヘラ切り(未調整)	回転ヨコナデ	良好	灰白色	灰白色	
7	溝2 59	"	"	4.3	(10.0)		10.0	角四石・長石・金雲母・白色粒	巻上げ	回転ヨコナデ・回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ	良好	灰白色	灰黄褐色	虫痕?
8	溝2セクション5・溝3	"	坏身	4.2	(11.1)	(14.0)		精緻	巻上げ	逆転回転ヘラケズリ・回転ヨコナデ	回転ヨコナデ・不定方ヨコナデ	良好	灰白色	灰白色	
9	溝2 一括	"	"	3.7	(11.6)	13.5		石英	積み上げ口クロ	回転ヨコナデ・ヘラケズリ後ナデ	回転ヨコナデ・不定方ヨコナデ	良好・取攪	灰色	灰色	
10	溝2 10, 16, 南北セクション	"	"	4.2	14.9	15.4		石英・白色粒	積み上げ口クロ	回転ヘラケズリ・回転ヨコナデ	回転ヨコナデ・不定方ヨコナデ	良好	灰色	灰色	底部外面にヘラ記号
11	溝2 26.一括・北側トレンチ	"	"	3.2	(11.8)	13.3		角四石・石英	積み上げ口クロ	回転ヨコナデ・回転ヘラケズリ・ヘラ切り(未調整)	回転ヨコナデ	良好	灰色	灰色	内側に虫痕が多数
12	溝2 一括	"	"	1.8	12.2	13.9		石英・黒色粒	積み上げ口クロ	回転ヨコナデ・回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ・指ナデ	良好	濃青灰色	濃青灰色	底部が大きくゆがむ
13	溝2 一括 溝3 最上層	"	"	(3.5)	(10.0)	(12.5)		石英・長石・白色粒	巻上げ	回転ヨコナデ・回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ	良好	灰白色	灰白色	
14	溝2 一括	"	"		(13.2)	(15.4)		石英	積み上げ口クロ	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	不良	白灰色	白灰色	
15	溝2 一括・B6包一括	"	"		(12.4)	(14.0)		石英	積み上げ口クロ	回転ヘラケズリ・回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	良好	淡青灰色	淡青灰色	

第3表 六反田地区出土土器観察表 (2)

番号	出土位置・遺構	種別	器種	規格 () 付きは最大値・単位 (cm)				胎土	成形	調整			色調		備考
				器高	口径	胴部最大径	底径			外面	内面	焼成	外面	内面	
16	溝2一括	須恵器	高坏				10.0	石英	積み上げ口 クワ	回転ヨコナテ	回転ヨコナテ	不良	淡褐色	淡褐色	
17	溝2一括	土師器	埴	11.9	(11.6)	(13.2)		砂粒	巻き上げ	ヨコナテ・タタキ	タタキ	やや不良	赤褐色	赤褐色	
18	溝2一括	"	"	13.8	(11.4)	(12.0)		灰色粒・白色粒	積み上げ	ヨコナテ・ハケメ後ナテ	ヨコナテ・ケズリ後ナテ	良好	淡黄色	淡黄色	
19	溝2一括	"	甕	17.2	16.5	18.7		石英・砂粒	巻き上げ	タテハケ・ヨコナテ・ヘラケズリ後ナテ	ヘラケズリ・ヨコナテ	良好	黄褐色	黄褐色	
20	溝2一括	"	"	16.3	14.8	16.8		砂粒	巻き上げ	ハケ→ヨコナテ→ケズリ後ナテ	ヘラケズリ・ヨコナテ	良好	褐色	褐色	
21	溝2 8	"	"	19.0	16.4	19.6		角閃石・石英・長石・白色粒・灰色粒	積み上げ	ヨコナテ・ナテ	ヨコナテ・ケズリ	良好	明褐色	明褐色	
22	溝2一括	"	"		16.8			角閃石・長石・白色粒	積み上げ	タテハケ・ヨコナテ	ヘラケズリ・ヨコナテ	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
23	溝2一括	"	"	18.4	16.2	18.9		長石・白色粒	積み上げ	ヨコナテ・ナテ	ヨコナテ・ケズリ	通有	淡黄色	淡黄色	
24	溝2一括	"	"		(22.0)	35.2		角閃石・長石・石英・赤色粒	積み上げ	タテハケ(3本/1cm)→ヨコナテ	ヨコナテ・ケズリ	通有	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
25	溝2 1	"	甕	29.5+α	19.4	30.8		白色・褐色粒	積み上げ	タテハケ・ナテ・ヨコナテ	ケズリ後ナテ・ヨコナテ	通有	淡黄色	淡黄色	
26	溝2 444	須恵器	"	28.2	17.0	26.0		角閃石・長石・石英・白色粒	積み上げ	櫛目タタキ・ヨコナテ	ヨコナテ・同心円状気孔・ナテ	通有	淡黄色	淡黄色	
27	溝2一括	土師器	甕	31.5	30.0	12.9		角閃石・長石・石英・赤色粒	積み上げ	タテハケ・ヨコナテ	ヘラケズリ・ヨコナテ	通有	灰白色	灰白色	つまみ部ヘラケズリ・粘土継ぎぎれ・出斑
28	溝3 824. 825	須恵器	坏蓋	3.6	14.8			白色粒	積み上げ口 クワ	連続回転ヘラケズリ・回転ヨコナテ	ヨコナテ 不定方向ナテ	良好	青灰色	青灰色	
29	溝3一括	"	"	3.3	(11.2)			石英	積み上げ口 クワ	回転ヨコナテ・ヘラ切り後ナテ	回転ヨコナテ・不定方向ナテ	良好	灰色	灰色	
30	溝3 44	"	"	4.3	(13.0)			角閃石・赤色粒・石英	積み上げ口 クワ	回転ヨコナテ・ヘラ切り後ナテ	回転ヨコナテ・不定方向ナテ	不良	灰白色	灰白色	残存率 1/2・6C木
31	溝3一括	"	"	4.1	(10.4)			石英	積み上げ口 クワ	ヘラ切り難し・回転ヨコナテ	一定方向ナテ・回転ヨコナテ	良好・堅緻	灰色	灰色	
32	溝3 576.655	"	"	4.0	11.2			石英・黒色粒	積み上げ口 クワ	ナテ・ヘラ切り後ナテ	ヨコナテ・不定方向ナテ	良好・堅緻	灰色	灰色	底部はやや凹みがある
33	溝3一括	"	"	(2.9)	(13.0)			石英・白色粒	巻き上げ	回転ヨコナテ・回転ヘラケズリ	回転ヨコナテ・不定方向ナテ	良好	灰色	灰色	
34	溝3 716.724	"	"	3.3	(12.0)			石英	巻き上げ	ナテ	不定方向ナテ・回転ヨコナテ	良好	灰色	灰色・暗灰色	
35	溝3一括最上層	"	"	3.7+α	(12.6)			石英	巻き上げ	回転ヨコナテ・回転ヘラケズリ	回転ヨコナテ・不定方向ナテ	良好	灰色	灰色	残存率 1/4
36	溝3一括	"	"	3.5+α	(12.8)			石英を含むが精緻	巻き上げ	回転ヨコナテ・回転ヘラケズリ	回転ヨコナテ	良好	灰色	灰色	残存率 1/4
37	溝3 31	"	"	3.2	10.6			角閃石・長石・白色粒	巻き上げ	回転ヨコナテ・回転ヘラケズリ	回転ヨコナテ・一定方向ナテ	良好	灰色	灰白色	縁に内方向にゆがみあり
38	溝3 914	"	"	4.0+α	(12.4)			角閃石を含むが精緻	積み上げ口 クワ	回転ヨコナテ	回転ヨコナテ	良好	灰色	灰色～灰色	
39	溝3 958	"	"	3.3+α	(12.2)			角閃石・石英	積み上げ口 クワ	ナテ	不定方向ナテ・回転ヨコナテ	良好	灰色	灰色	
40	溝3 292.一括・表採	"	"	(3.1)	(10.9)			石英・白色粒	積み上げ口 クワ	回転ヨコナテ・回転ヘラ切り	回転ヨコナテ・一定方向ナテ	良好	青灰色	青灰色	
41	溝3 578. 584. セクショ9	"	"	3.4	12.2			石英・黒色粒	積み上げ口 クワ	回転ヨコナテ・回転ヘラケズリ	回転ヨコナテ・指ナテ	良好	濃青灰色	濃青灰色	内面にヘラ記号
42	溝3一括	"	"	(3.6)	(12.9)			石英・白色砂粒	巻き上げ	回転ヨコナテ・回転ヘラケズリ・回転ヘラ切り	回転ヨコナテ・一定方向ナテ	良好	灰色	灰色	内面にヘラ記号
43	溝3最上層一括・B6包	"	"	(3.2)	(13.2)			長石・石英・白色粒	積み上げ口 クワ	回転ヨコナテ・回転ヘラ切り	回転ヨコナテ・不定方向ナテ	良好	灰白色	灰白色	
44	溝3最上層	"	"	3.5	(10.9)			石英・黒色粒	積み上げ口 クワ	ヘラ切り後ナテ・回転ヨコナテ・回転ヘラケズリ	不定方向ナテ・回転ヨコナテ	良好	灰色	灰色	灰が多かったのか外縁方向は調整がなされていない
45	溝3 757.一括	"	"					黒色粒	積み上げ口 クワ	回転ヨコナテ・回転ヘラケズリ	回転ヨコナテ・不定方向ナテ	良好	灰白色	灰白色	
46	溝3セクション4	"	"	(3.2)	(12.8)			角閃石・長石・石英	積み上げ口 クワ	回転ヘラ切り	回転ヨコナテ・不定方向ナテ	良好	鈍い黄褐色	灰白色	蓋面はざらつく
47	溝3 673	"	"	3.8+α	(12.2)			黒色粒	積み上げ口 クワ	回転ヨコナテ・回転ヘラケズリ	回転ヨコナテ・不定方向ナテ	良好	灰白色～黄褐色	灰白色	残存率 1/8
48	溝3 825	"	"	4.0	(11.1)			黒色粒	積み上げ口 クワ	回転ヨコナテ・回転ヘラケズリ	回転ヨコナテ・不定方向ナテ	良好	灰色～黒色	灰色	残存率 1/8
49	溝3 603	"	"	4.0	(11.6)			石英	積み上げ口 クワ	回転ヨコナテ・回転ヘラケズリ	回転ヨコナテ・不定方向ナテ	良好	にぶい赤褐色～暗赤褐色	赤色	
50	溝3 135	"	"	2.6	8.1	8.2		石英・白色粒	積み上げ口 クワ	回転ヨコナテ・回転ヘラケズリ	回転ヨコナテ・一定方向ナテ	良好	灰色	明黄褐色	
51	溝3一括・C6包一括	"	"	(3.5)	(10.2)			長石・石英・白色粒	積み上げ口 クワ	回転ヨコナテ・回転ヘラケズリ	回転ヨコナテ・不定方向ナテ	やや不良	赤褐色	赤褐色	
52	溝3 899.976	"	"	3.5	(11.2)			石英	積み上げ口 クワ	回転ヨコナテ・回転ヘラケズリ	ヨコナテ・不定方向ナテ	良好	灰色	灰色	
53	溝3一括	"	"	(4.0)	(10.5)			石英・白色粒	積み上げ口 クワ	回転ヨコナテ・回転ヘラケズリ・回転ヘラ切り後ナテ	回転ヨコナテ・不定方向ナテ	良好	青灰色	青灰色	
54	溝3 703. 714	"	"	3.9	(11.8)			石英	積み上げ口 クワ	回転ヨコナテ・ヘラ切り難し後ナテ	不定方向ナテ・ナテ	良好	暗褐色	暗褐色	
55	溝3一括・B5包・B4包	"	坏身	(3.4)	(14.6)	(16.2)		石英	積み上げ口 クワ	回転ヨコナテ・回転ヘラケズリ	回転ヨコナテ	良好	茶褐色	茶褐色	1部焼成不良
56	溝3最上層	"	"	4.2+α	(12.0)	(14.1)		石英	積み上げ口 クワ	回転ヨコナテ・回転ヘラケズリ	回転ヨコナテ・不定方向ナテ	良好・堅緻	灰色	灰色	
57	溝3最上層一括	"	"	(4.2)	(11.5)	(13.1)		石英・白色砂粒	積み上げ口 クワ	回転ヨコナテ・回転ヘラケズリ	回転ヨコナテ・指ナテ	良好	青灰色～淡灰色	青灰色～淡茶色	
58	溝3 68.一括・セクション9	"	"	(3.9)	(10.1)	(12.5)		石英	積み上げ口 クワ	回転ヨコナテ・回転ヘラケズリ	回転ヨコナテ・指ナテ	良好	淡青灰色	淡青灰色	外面全体に自然釉
59	溝3 489.944	"	"	4.0	(10.6)	(13.1)		石英を含むが精緻	積み上げ口 クワ	回転ヨコナテ・回転ヘラケズリ	回転ヨコナテ・不定方向ナテ	良好	灰褐色・灰色	灰褐色	
60	溝3 646.一括	"	"	(4.1)	(10.0)	(13.2)		石英・長石・白色粒	積み上げ口 クワ	回転ヨコナテ・回転ヘラケズリ	回転ヨコナテ・不定方向ナテ	良好	淡黄褐色	灰色	
61	溝3 960	"	"		(12.2)	(14.8)		石英を含むが精緻	積み上げ口 クワ	回転ヨコナテ	回転ヨコナテ	良好	灰赤色	灰赤色	残存率 1/8
62	溝3 198.一括	"	"		(12.8)	(13.1)		石英	積み上げ口 クワ	回転ヨコナテ	回転ヨコナテ	良好	淡青灰色	淡青灰色	

第4表 六反田地区出土土器観察表 (3)

香炉	出土位置・遺構	種別	器種	規格 () 付きは単位・単位 (cm)			胎土	成形	調整		焼成	色調		備考	
				器高	口径	胴部最大径			底径	外面		内面	外面		内面
63	溝3 699	須臾器	坏身		(12.4)	(14.2)	精緻	積み上げ口 クワ	回転ヨコナテ	回転ヨコナテ	良好	鈍い褐色	鈍い褐色		
64	溝3 一括	"	"	(3.4)		(14.2)	石英	積み上げ口 クワ	回転ヨコナテ・回転ヘラ ケズリ	回転ヨコナテ・指ナテ	良好	淡青灰色	淡青灰色		
65	溝3 一括	"	"	(3.3)	(13.0)	(14.4)	白色粒	巻上げ	連続回転ヘラケズリ・回 転ヨコナテ	回転ヨコナテ・不定方 向ナテ	良好	青灰色	青灰色		
66	溝3 一括	"	"	3.5	13.4	13.6	長石・角閃石・石英	積み上げ口 クワ	回転ヨコナテ・回転ヘラ ケズリ	回転ヨコナテ	不良	白灰色～黒灰色	白灰色～黒灰色		
67	溝3 394	"	"	3.4	(12.2)	(14.8)	角閃石・石英・白色粒	積み上げ口 クワ	連続回転ヘラケズリ・回 転ヨコナテ	回転ヨコナテ 不定方 向ナテ	良好	灰白色	灰白色	受部にねね焼き痕あり	
68	溝3 一括	"	"	3.1	12.0	(13.8)	白色粒	積み上げ口 クワ	連続回転ヘラケズリ・回 転ヨコナテ	回転ヨコナテ 不定方 向ナテ	良好	青灰色	青灰色		
69	溝3 956	"	"	3.3	(11.2)	(13.4)	石英を含むが精緻	積み上げ口 クワ	回転ヨコナテ・回転ヘラ ケズリ	回転ヨコナテ・不定方 向ナテ	良好	灰色・緑灰色の 自然釉	灰色	残存率 1/4	
70	溝3 一括	"	"	3.5	11.4	13	石英	積み上げ口 クワ	回転ヘラケズリ・回転ヨ コナテ	回転ヨコナテ 不定方 向ナテ	良好	灰色	灰色	底部に自然釉付着 ねね焼き痕	
71	溝3 680	"	"		(11.0)	(13.0)	石英を含むが精緻	積み上げ口 クワ	回転ヨコナテ	回転ヨコナテ	良好	暗灰色	灰色		
72	溝3 633	"	"		(11.0)	(12.8)	石英を含むが精緻	積み上げ口 クワ	回転ヨコナテ	回転ヨコナテ・ヘラケ ズリ	良好	暗緑灰色	灰色	残存率 1/8	
73	溝3 一括	"	"	(2.9)		12.4	石英	積み上げ口 クワ	回転ヨコナテ・回転ヘラ ケズリ	回転ヨコナテ・不定方 向ナテ	良好・堅 緻	灰色	灰色	目録通りの部分を人為 的に削った可能性有り	
74	溝3 633.一括	"	"		(8.8)	(11.5)	石英	積み上げ口 クワ	回転ヨコナテ・回転ヘラ ケズリ	回転ヨコナテ・不定方 向ナテ	良好	灰色	灰白色	焼き歪みが大きい	
75	溝3 1	"	"	3.7	10.5	12.2	角閃石・長石・石英・白色 粒	積み上げ口 クワ	回転ヨコナテ・回転ヘラ ケズリ	回転ヨコナテ・一定方 向ナテ	良好	灰色～オリーブ 灰色	灰色	底部外面にヘラ記号	
76	溝3 最上層.一括	"	"	3.3	(11.9)	(12.5)	白色粒	積み上げ口 クワ	回転ヘラケズリ・回転ヨ コナテ	回転ヨコナテ・不定方 向ナテ	良好	青灰色	青灰色		
77	溝3 915.933.1041 .1088.109最上層.一括	"	"	4.2	(9.7)	11.6	石英	積み上げ口 クワ	回転ヨコナテ・ヘラ切り離 し後ナテ(ケズリ?)	回転ヨコナテ・不定方 向ナテ	良好・堅 緻	灰色	灰色		
78	溝3 一括	"	"	3.3	(9.7)	(11.8)	石英を含むが精緻	積み上げ口 クワ	回転ヨコナテ・回転ヘラケ ズリ・ヘラ切り後ナテ	回転ヨコナテ・不定方 向ナテ	良好	灰色	灰色		
79	溝3 340.694	"	"	2.5	(9.8)	(12.1)	石英を含むが精緻	積み上げ口 クワ	回転ヨコナテ・ヘラ切り 後ナテ	回転ヨコナテ・不定方 向ナテ	良好	灰色	灰色	残存率 1/4	
80	溝3 一括 B6包	"	"		(9.1)	(11.0)	石英	積み上げ口 クワ	回転ヨコナテ	回転ヨコナテ	良好	黒～濃青灰色	黒～濃青灰色		
81	溝3 一括	"	"	3.8	9.0	10.9	角閃石・石英	積み上げ口 クワ	手持ちヘラケズリ・ミガ キ状のナテ	ナテ 不定方向ナテ	通有	淡褐色	淡褐色	土師器工が須臾器を 模倣して製作した可能性 有り	
82	溝3 940	"	"	3.6	9.8		石英	積み上げ口 クワ	ナテ・ヘラ切り後ナテ	ヨコナテ・一定方向ナテ	良好・堅 緻	灰色	灰色	底部は平たく中央部が やや突き出す	
83	溝3 一括	"	"	3.9	11.2		石英	積み上げ口 クワ	回転ヨコナテ・回転ヘラ ケズリ	回転ヨコナテ・指ナテ	良好	淡青灰色	淡青灰色		
84	溝3 一括・C4番ち込み	"	坏蓋	(5.6)	(14.4)		角閃石・白色粒	積み上げ口 クワ	回転ヨコナテ・回転ヘラ ケズリ	回転ヨコナテ・不定方 向ナテ	良好	灰色	灰色		
85	溝3 一括.最上層・B5 B4一括	"	高坏	80.5	(12.2)	(15.1)	11.3	石英・白色粒	口クワ	回転ヨコナテ・回転ヘラ ケズリ	回転ヨコナテ・一定方 向ナテ	良好・堅 緻	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	
86	溝3 50	"	"	6.7	11.6		8.0	角閃石・長石・白色粒	巻上げ・指 付	回転ナテ	回転ナテ	良好	灰白色	灰白色	7C前半
87	溝3 718	"	"		(11.2)			石英	積み上げ口 クワ	ヨコナテ・ヘラケズリ	ヨコナテ	良好	灰色	灰色	
88	溝3 最上層	"	"			10.0		石英・角閃石・石英	積み上げ口 クワ	回転ヨコナテ・ナテ	回転ヨコナテ	良好	白灰色	白灰色	
89	溝3 一括	土師器	"	3.6	13.4			角閃石・長石・雲母・石 英・赤・白色粒	積み上げ	ナテ・ヨコナテ	ナテ・暗文・ヨコナテ	良好	褐色	褐色	内面に放射状暗文
90	溝3 938	"	"		13.1			石英・白色粒	積み上げ	ヘラケズリ・ナテ	暗文	良好	褐色	褐色	内面に放射状暗文
91	溝3 924	"	"		10.4			石英・赤・白色粒	積み上げ	ヘラナテ・ヨコナテ	ヘラナテ・胴部内面ヘ ラケズリ	良好	淡褐色	淡褐色	
92	溝3 451.479.927	"	"	11.5+α	13.0	11.7		角閃石・雲母・長石・石英・ 赤・白色粒	積み上げ	タテハケ・ナテ・ヨコナ テ	ナテ・ヨコナテ	通有	黄褐色	黄褐色	粘土紐つなぎ痕
93	溝3 928.一括	"	"		11.4			角閃石・長石・石英・赤・ 白色粒	積み上げ	ヘラナテ・ヨコナテ	ヨコナテ・ヘラナテ・胴 部内面ヘラケズリ	良好	淡褐色	淡褐色	
94	溝3 404	"	"	(8.2)	(13.0)			角閃石・長石・石英・赤色 粒・白色粒	積み上げ	ヨコナテ・ナテ・指頭E	ヨコナテ・ヘラケズリ	通有	鈍い黄褐色	褐色	
95	溝3 一括	"	"	(4.8)	(15.4)			角閃石・長石・石英・赤色 粒・白色粒	積み上げ	ハケメ・ヨコナテ	ヨコナテ	通有	淡褐色	鈍い黄褐色	
96	溝3 一括	"	壺	4.9	12.4			角閃石・石英・雲母・赤色 粒	積み上げ	ナテ	ナテ	良好	にぶい褐色	にぶい褐色	器面が荒れている
97	溝3 50.52.61.69	"	"	5.5+α	(12.0)			角閃石・石英・赤色粒	積み上げ	指ナテ・器面が荒れてい て調整不明	ナテ	良好	淡褐色	淡褐色	
98	溝3 752.754	"	"		36.5	(11.6)		角閃石・赤色粒・長石・白 色粒	積み上げ	ミガキ	不明	良好	にぶい褐色	にぶい褐色	
99	溝3 607.628.634	"	"		4.4	(12.4)		角閃石・長石・石英・赤色 粒	積み上げ	器面が荒れていて調整不明		良好	にぶい褐色	にぶい褐色	
100	溝3 一括	"	"		5.1	(13.6)		角閃石・石英・赤色粒	積み上げ	器面が荒れていて調整不明		良好	淡褐色	淡褐色	
101	溝3 一括	"	"		4.1	12.0		角閃石・長石・石英・赤色 粒	積み上げ	器面が荒れていて調整不明		通有	褐色	褐色	
102	溝3 134.482	"	"		4.3	(13.0)		角閃石・赤色粒	積み上げ	回転ヨコナテ・ナテ	ナテ	通有	淡褐色～褐色	にぶい褐色～黒 色	
103	溝3 一括	"	"		4.3+α	(12.8)		角閃石・石英・赤色粒	積み上げ	指ナテ・粘土紐結合痕有り・調整不明		良好	淡褐色	淡褐色	
104	溝3 20	"	"		4.3	13.2		石英・角閃石・灰色粒	積み上げ	ハケ・ナテ・ヨコナテ	丁取をナテ	良好	淡黄色	淡黄色	
105	溝3 最上層	"	"	(5.4)	(12.9)			角閃石・長石・石英・赤色 粒・白色粒	積み上げ	手持ちヘラケズリ?・ナ テ・ヨコナテ	ナテ	通有	灰白色～淡黄褐色	灰白色～淡黄褐色	器面はざらつく
106	溝3セクション5・B5 包一括	"	坏身	(6.0)	(13.1)			角閃石・長石・石英・赤色 粒・白色粒	積み上げ	ヨコナテ・手持ちヘラケ ズリ	ナテ?	通有	淡褐色	淡褐色	
107	溝3 135	須臾器	甗	16.6	6.2	11.9		石英・白色粒	積み上げ口 クワ	回転ヨコナテ・カキメ	回転ヨコナテ	良好	暗灰色	暗灰色	
108	溝3 939	"	甗	15.1	11.8	16.6		長石・石英・白色粒	積み上げ	タタキ・カキメ・ハケメ・タ タキ・ヨコナテ	回転ヨコナテ・ハケメ	良好	緑灰色・にぶい 褐色	灰白色	
109	溝3 一括	土師器	鉢		33.4	28.8		長石・角閃石・赤・白色粒	積み上げ	タテハケ・回転ヨコナテ	ヘラケズリ・回転ヨコ ナテ	良好	淡褐色	淡褐色	外面黒斑有り

第5表 六反田地区出土土器観察表 (4)

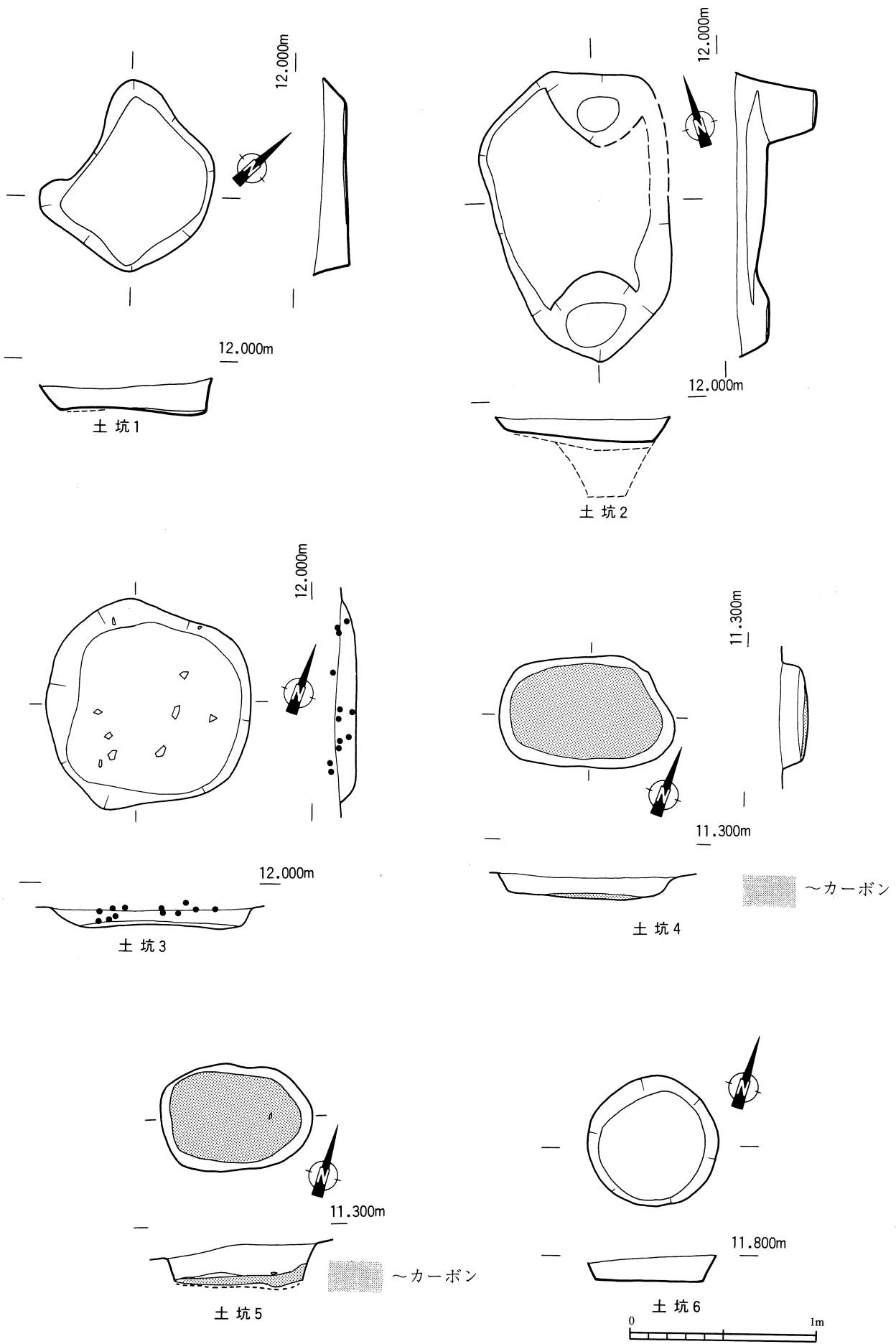
番号	出土位置・遺構	種別	器種	規格 () 付きは規元径・単位 (cm)				胎土	成形	調整		焼成	色調		備考
				器高	口径	胴部最大径	底径			外面	内面		外面	内面	
110	溝3 750	土師器	鉢	12.6	33.4	28.6	19.7	角四角・褐色・白色粒	積み上げ	タテハケ・ナテ・ヨコナテ	ケズリ後ナテ・ヨコナテ	通有	浅黄色	浅黄色	
111	溝3 933	"	"	(18.2)	35.1	26.9		角四角・石英・白色粒	積み上げ	タテハケ・ナテ・ヨコナテ	ケズリ後ナテ・ヨコナテ	良好	浅黄色	浅黄色	
112	溝3 670.671一括	須臾器	甕		(15.2)	32.0		石英を含むが精緻	積み上げ	ヨコナテ・カキメ	ヨコナテ	良好・暖貫	灰色	灰色	
113	溝3 一括	土師器	壺			(14.4)		角四角・長石・石英・茶色粒	積み上げ	調整不明・ハケメ	ヨコナテ・ヘラケズリ	通有	にぶい褐色	にぶい褐色	
114	溝3 2	"	甕	29.2+α	18.2	28.9		角四角・長石・石英・赤・白色粒	積み上げ	タテハケ・ナテ・ヨコナテ	ヘラケズリ・ヨコナテ	良好	黄褐色	黄褐色	胎土紐つなぎ痕・外面黒斑
115	溝3 753	"	"	30.0	18.8	27.7		褐色・白色・灰色粒	積み上げ	タテハケ・ナテ・ヨコナテ	ハケ・ヘラケズリ・ヨコナテ	良好	浅黄色~灰褐色	浅黄色~灰褐色	外面に炭化物付着
116	溝3 一括	"	"	34.2	(19.4)	(24.5)		角四角・長石・石英	積み上げ	タテハケ後ヨコナテ・タテキ嵐	ヨコナテ・ヘラケズリ	良好	灰褐色	灰褐色	
117	溝3 922	"	"	42.2	20.3	29.8		角四角・長石・石英・赤色粒・白色粒	積み上げ	ハケ ヨコナテ	ヘラケズリ ヨコナテ	通有	浅黄褐色	浅黄褐色	胎土紐つなぎ痕
118	溝3 927	"	甕	35.0	(25.8)	24.8		角四角・長石・白色粒・褐色粒・灰色粒	積み上げ	ヨコナテ・ハケメ後ナテ	ナテ・ケズリ	通有	浅黄色	浅黄色	
119	磙群2 56	須臾器	坏蓋	3.7	10.4			長石・石英・白色粒	巻き上げ	回転ナテ・回転ヘラケズリ	回転ヨコナテ・一定方向ナテ	良好	灰白色~灰色	灰白色~灰色	
120	磙群2 38	"	"	3.1	9.2			角四角・長石・石英・白色粒	巻き上げ	回転ヨコナテ・回転ヘラケズリ	回転ヨコナテ・一定方向ナテ	良好	灰色	灰色	
121	磙群2 39	"	"	3.6				石英・白色粒	巻き上げ・ミズビキ	回転ヨコナテ・回転ヘラケズリ	回転ヨコナテ・一定方向ナテ	良好	オリーブ灰色	オリーブ灰色	外面にヘラ記号
122	磙群2 42	"	坏身	3.0	8.6	11.0		角四角・長石・白色粒	巻き上げ	回転ヨコナテ・回転ヘラケズリ	回転ヨコナテ・一定方向ナテ	良好	青灰色	青灰色	
123	磙群2 P7	"	"	4.0	8.8	11.4		角四角・石英・白色粒	巻き上げ	回転ヨコナテ・回転ヘラケズリ	回転ヨコナテ・一定方向ナテ	良好	青白色	青白色	外面にヘラ記号
124	磙群2 37	"	"	2.7	8.8	10.8		角四角・長石・白色粒	巻き上げ	回転ナテ・回転ヘラケズリ	回転ヨコナテ・一定方向ナテ	良好	灰白色	灰白色	
125	磙群2 58	"	"	3.1	9.8	11.6		石英・金雲母・白色粒	巻き上げ	回転ナテ・回転ヘラケズリ	回転ヨコナテ・一定方向ナテ	良好	青灰色	青灰色	底部外面にヘラ記号
126	磙群2 57	"	"	4.1	9.2	11.2		角四角・長石・金雲母・白色粒	積み上げ・タテキ嵐	回転ヨコナテ・回転ヘラケズリ	回転ナテ	良好	灰色	浅黄色	内面スス付着
127	磙群2 32	"	"	3.3	12.0	9.6		角四角・長石・白色粒	巻き上げ	回転ヨコナテ・回転ヘラケズリ	回転ヨコナテ・一定方向ナテ	良好	灰白色(内側に赤サビ付着)		
128	磙群2 40	"	"	3.3	11.4			角四角・長石・金雲母・白色粒	巻き上げ	回転ヨコナテ・回転ヘラケズリ	回転ヨコナテ・一定方向ナテ	良好	灰色	灰白色	蓋の可能性有り 外面にヘラ記号
129	磙群2 46	"	"	4.0	9.4	11.8		角四角・長石・白色粒	巻き上げ	回転ナテ・回転ヘラケズリ	回転ヨコナテ・一定方向ナテ	良好	明緑褐色	明緑褐色	
130	磙群2 P6	"	"	3.9	10.1	12.4		黒色・白色粒	巻き上げ	回転ヨコナテ・回転ヘラケズリ	回転ヨコナテ・一定方向ナテ	良好	明紫褐色	灰白色	
131	磙群2 48	"	"	3.1	9.0	10.6		石英・雲母・白色粒	積み上げ・タテキ嵐	回転ヨコナテ・回転ヘラケズリ	回転ヨコナテ・一定方向ナテ	良好	灰白色	灰色	
132	磙群2 P9	"	"	4.3	11.0	13.3		黒色・白色粒	巻き上げ	回転ナテ・回転ヘラケズリ	回転ナテ・一定方向ナテ	良好	明オリーブ灰色	灰白色	
133	磙群2 41	"	"	3.3	10.0			石英・白色粒	巻き上げ	回転ヨコナテ・回転ヘラケズリ	回転ヨコナテ・一定方向ナテ	良好	灰色	灰色	蓋の可能性有り 外面にヘラ記号
134	磙群2 P4	土師器	塊	5.0	13.0			角四角・長石・白色粒	巻き上げ	平滑なヨコナテ・回転ヘラケズリ	平滑なヨコナテ	良好	灰白色	灰白色	黒斑あり
135	磙群2 P3	"	"	4.5	13.8			角四角・長石・白色・茶色粒	積み上げ	ナテ・ヘラケズリ	ナテ	2次焼成・赤変	浅黄褐色	灰白色	黒斑あり 2次焼成
136	磙群2 P1	須臾器	半瓶	16.0	7.9	19.2		角四角・長石・石英・白色粒	巻き上げ	回転ヨコナテ・回転ヘラケズリ・カキメ	回転ヨコナテ	良好	灰白色	灰色	
137	磙群3 2	"	坏身	2.6	9.1	11.0		長石・石英	巻き上げ	回転ヨコナテ・回転ヘラケズリ	回転ヨコナテ・一定方向ナテ	良好	青灰色	青灰色	
138	磙群3 7	土師器	高坏			11.4		角四角・長石・石英・赤石粒	積み上げ	ハケメ後ナテ・ヨコナテ	ケズリ後ナテ・ヨコナテ	通有	にぶい褐色	にぶい褐色	脚部?
139	磙群3 6	須臾器	壺			13.1		長石・白色粒	巻き上げ	回転ヨコナテ・回転ヘラケズリ	ナテ・回転ナテ	良好	青灰色	青灰色	
140	磙群3 4	土師器	"	31.6	19.6	32.4		角四角・長石・茶色粒	積み上げ	ヨコナテ・ハケメ	ヨコナテ	良好	浅黄褐色	浅黄褐色	黒斑あり
141	磙群3 集1	"	甕	35.4	18.8	29.2		角四角・長石・石英・赤色粒	積み上げ	タテハケ・ヨコナテ	ヘラケズリ・ヨコナテ	通有	浅黄褐色	浅黄褐色	底部付近の器面がざらつく
142	溝3 ビット群 51	須臾器	高坏			9.2		黒色・白色粒	巻き上げ・ミズビキ	回転ヨコナテ	回転ヨコナテ・一定方向ナテ	良好	灰白色	灰白色	
143	溝3 ビット群 60	"	半瓶	9.6	5.9	13.0		石英・白色粒	巻き上げ・胎付	回転ヨコナテ・まだらに自然磨・ナテ・ケズリ	ヨコナテ	良好	自然釉・暗オリーブ・灰白色		
144	溝3 ビット3 3一括	須臾器	坏身		(12.0)	13.2		石英・赤色粒・白色粒	積み上げ・胎付	回転ヨコナテ・回転ヘラケズリ	回転ヨコナテ・指ナテ	良好	淡青灰色	淡青灰色	
145	溝3 ビット1	土師器	塊	4.8	(12.0)			角四角・石英・赤色粒	積み上げ	ミガキ・器面が荒れて調整不明		不明	不明		
146	溝3 ビット3一括	"	罎	6.6	8.7	9.0		角四角・長石・石英・赤色粒	積み上げ	ナテ後ケズリ?・ヨコナテ	ヨコナテ・ヘラケズリ	通有	にぶい褐色	にぶい褐色	
147	溝2.3 一括	須臾器	坏身	3.9	(10.0)	(12.0)		石英	積み上げ・胎付	回転ヨコナテ・回転ヘラケズリ	回転ヨコナテ・不定方向ナテ	良好・暖貫	灰色	灰色	
148	C4落ち込み	"	"	3.6	(10.6)	(13.2)		石英・白色粒	積み上げ・胎付	回転ヨコナテ・回転ヘラケズリ	回転ヨコナテ・シボリ痕	良好・暖貫	灰白色	灰白色	
149	C4落ち込み	"	"	3.7	10.8	13.1		石英・白色粒	積み上げ・胎付	回転ヘラケズリ 回転ヨコナテ	回転ヨコナテ 不定方向ナテ	良好	灰色	灰色	
150	C4落ち込み	"	"		(10.9)	(13.1)		精緻	巻き上げ	回転ヨコナテ	回転ヨコナテ	良好	灰白色	灰白色	
151	C4落ち込み	"	"	3.8	12.1	13.4		石英	積み上げ・胎付	連続回転ヘラケズリ・回転ヨコナテ	回転ヨコナテ 不定方向ナテ	良好	青灰色	青灰色	
152	溝3 642.643一括・溝2一括	"	"	3.6	11.1	13.6		黒色粒	積み上げ・胎付	回転ヨコナテ・連続回転ヘラケズリ	不定方向ナテ	良好	灰白色・灰白色	灰白色	現存率 3/4・6C未~7C初
153	B-4 一括	土師器	塊		16.2			角四角・長石・白色粒・褐色粒	積み上げ	ナテ	ナテ	普通	浅黄色	浅黄色	
154	B-4 一括	"	小型壺		(10.8)	(10.6)		石英・灰褐色・白色粒	積み上げ	やや丁寧なナテ	磨滅の不鮮明なナテ	良好	赤褐色	赤褐色	
155	C4落ち込み 44	"	"	10.3	(11.0~11.8)	13.4		角四角・長石・石英・赤色粒	積み上げ	ハケメ・ヨコナテ	ヨコナテ・ヘラケズリ	良好	灰白色	灰白色	
156	C4落ち込み	須臾器	長頸壺	19.0	8.4	13.8	7.0	石英	積み上げ・胎付	回転ヨコナテ	指オサエ・回転ヨコナテ	良好・暖貫	青灰色	青灰色	自然釉多く付着
157	土坑 5-1	土師器	甕		(18.6)	22.3		角四角・石英	積み上げ	ハケメ・ヨコナテ	ヘラケズリ・ヨコナテ	普通	明褐色	明褐色	

土坑 (第35図～第39図)

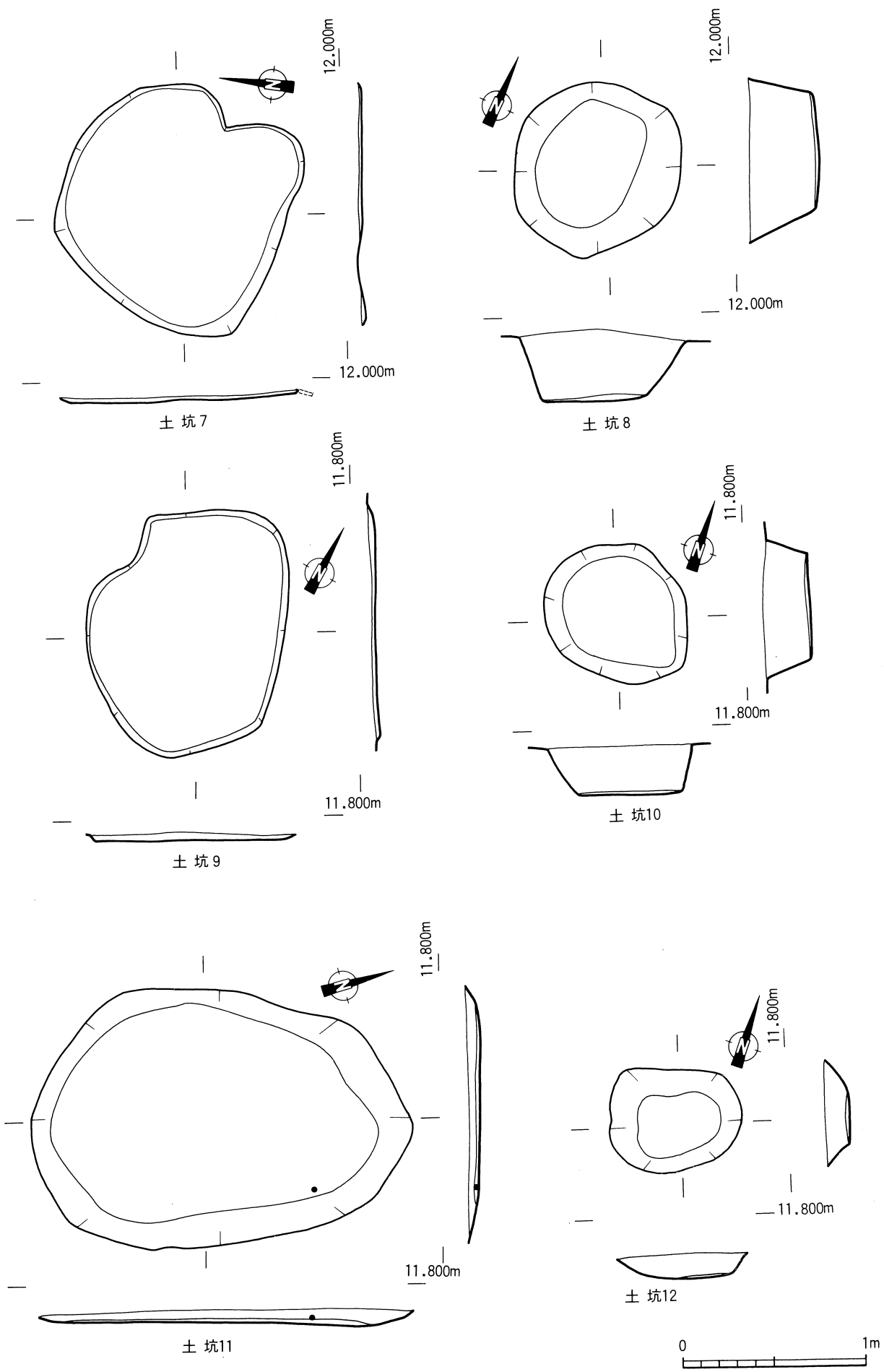
調査において確認された土坑は計21基である。このうち遺構の時期を示す遺物が出土したのは1基である。各土坑の計測値は第5表に示す通りである。遺物が含まれる土坑はおおむね6世紀後半から7世紀前半代にかけての所産で溝1～3とほぼ同時期に設けられたものと思われる。また土坑4と土坑5は炭敷きの土坑で、検出場所、規模、平面観とも類似している。土坑5は溝1を切るように設けられていて、少なくとも7世紀以降の所産であることが言える。ただし火葬墓とするには規模、出土遺物などから積極的な提示はできない。

第6表 土坑計測表

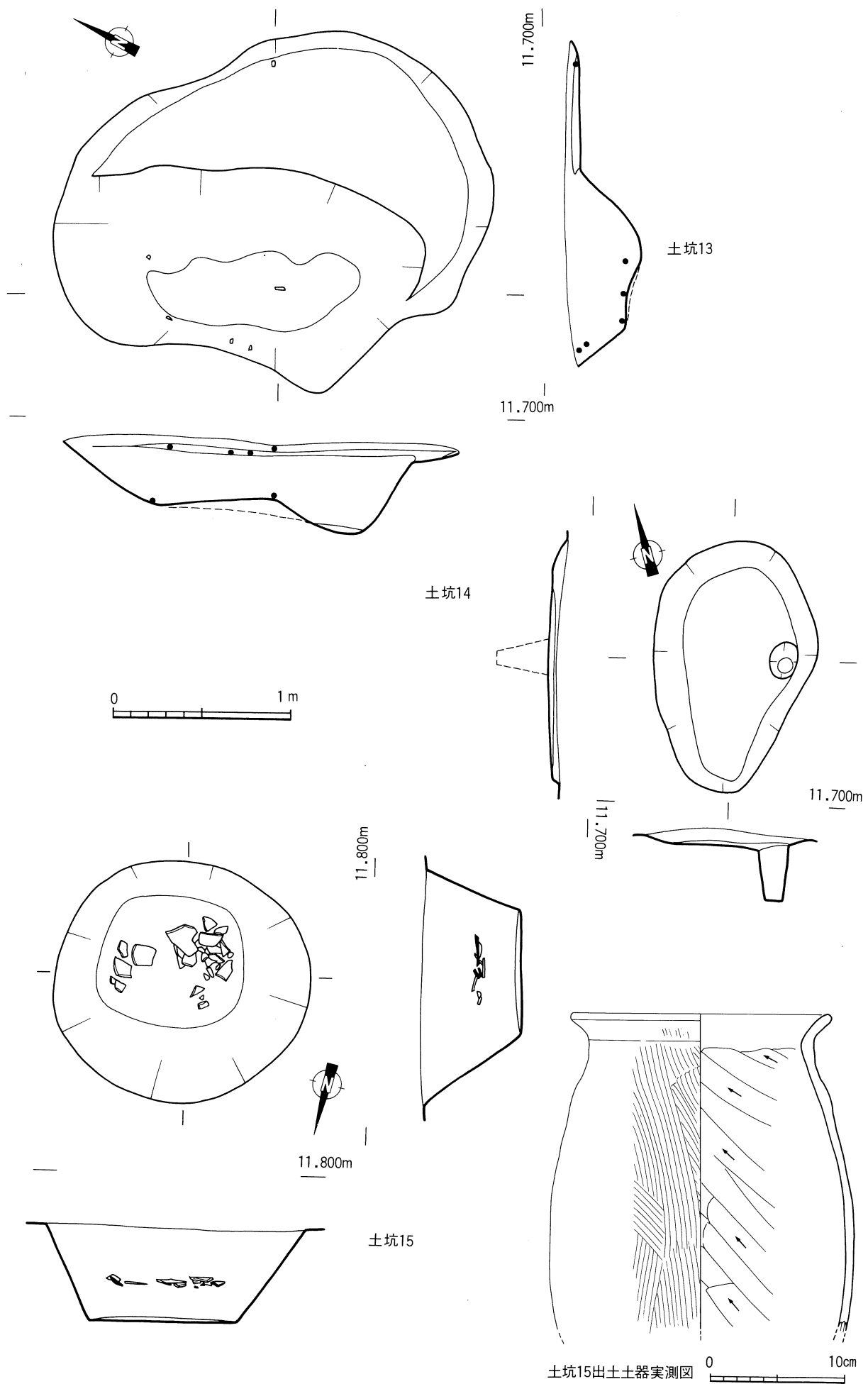
土坑番号	検出地点	平面形	長さ (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	出土遺物	時期	備考
土坑1	B-2	不整形	105	100	5	無し		
土坑2	B-3	長楕円形	155	100	5	無し		
土坑3	C-4	円形	115	115	10	有り 細片		
土坑4	C-5	楕円形	97	60	12	無し		炭敷き
土坑5	D-5	楕円形	85	60	25	有り		炭敷き 溝1を切る
土坑6	C-6	円形	75	70	10	無し		
土坑7	E-7	不整形	67	65	5	無し		
土坑8	E-7	円形	45	45	35	無し		
土坑9	E-7	不整形	65	55	5	無し		
土坑10	E-8	円形	85	70	20	無し		
土坑11	F-9	楕円形	210	135	5	有り 黒曜石1		
土坑12	F-9	円形	70	60	12	無し		
土坑13	D-10	不整形	250	200	40~30	有り 細片		流れ込み
土坑14	D-10	長楕円形	140	90	6	無し		
土坑15	D-11	円形	143	134	55	有り 土師器	6世紀後半代の甕	
土坑16	E-11	略長方形	700	200~280	5~20	有り		流れ込み
土坑17	C-11	不整形	400~500	250	5~10	有り		溝13に切られる
土坑18	C-11	不整形	190	175	20	有り		流れ込み
土坑19	C-11	円形	150	140	15	有り		流れ込み
土坑20	B-10	円形	125	125	60	有り 細片		流れ込み
土坑21	B-10	長楕円形	160	60	20	有り		流れ込み



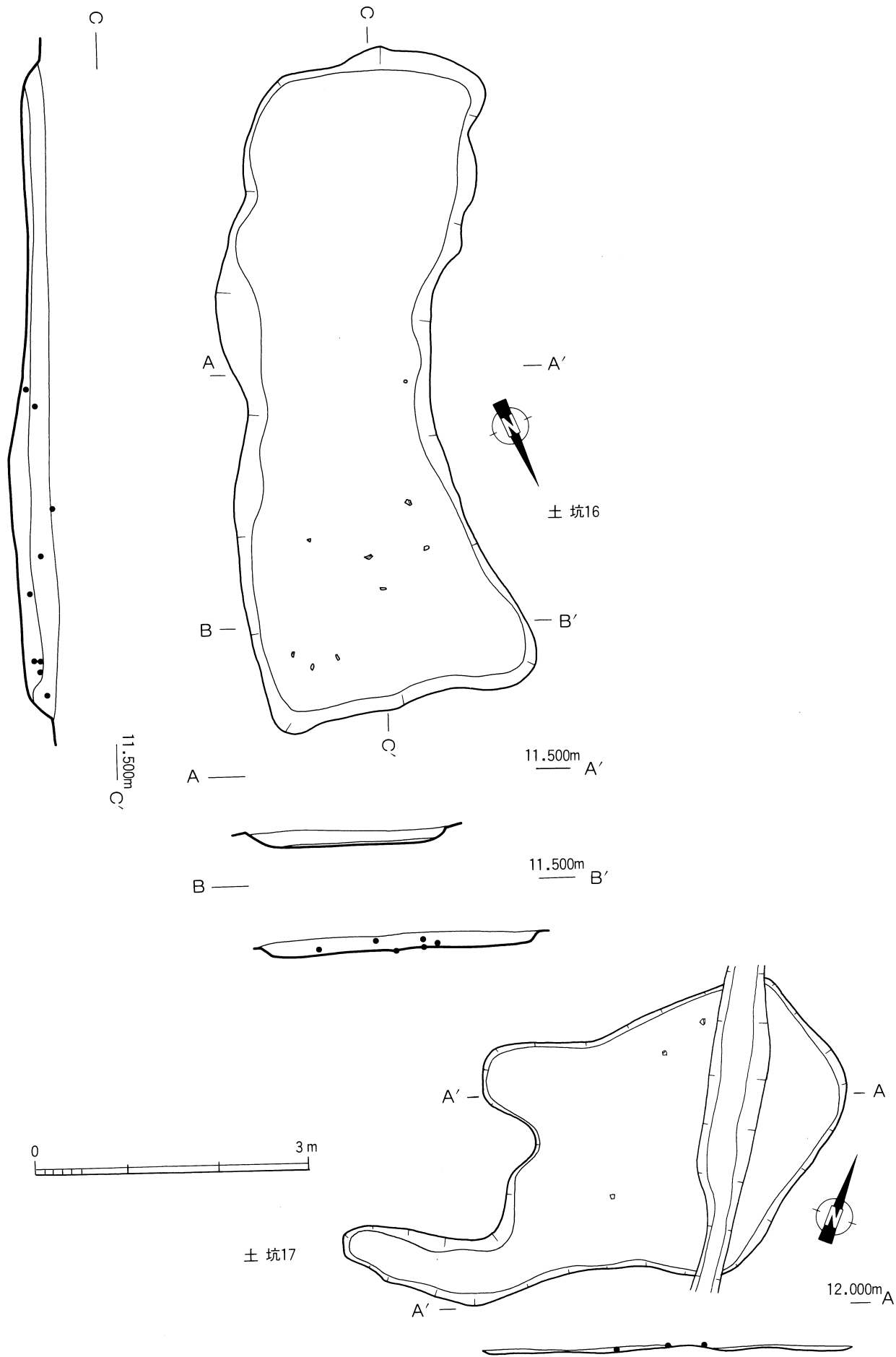
第35図 土坑実測図(1)



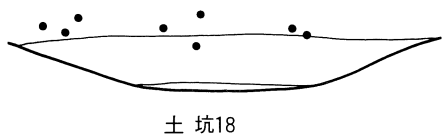
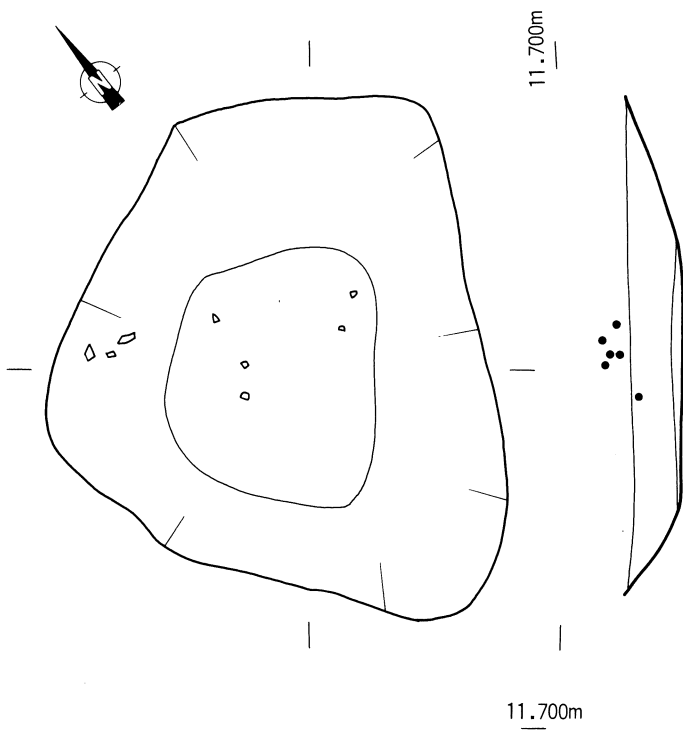
第36图 土坑实测图(2)



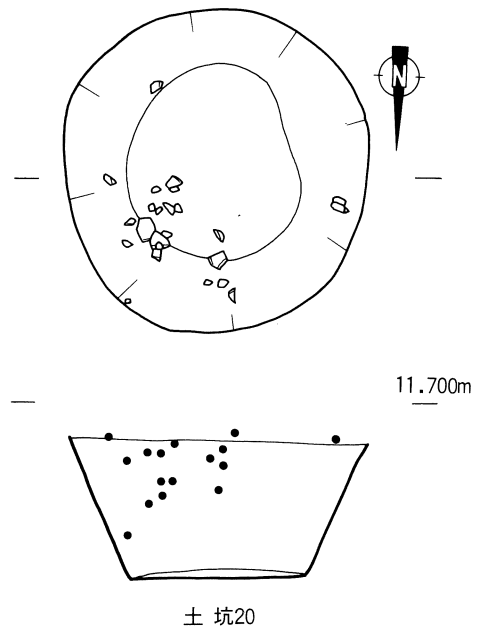
第37图 土坑实测图 (3)



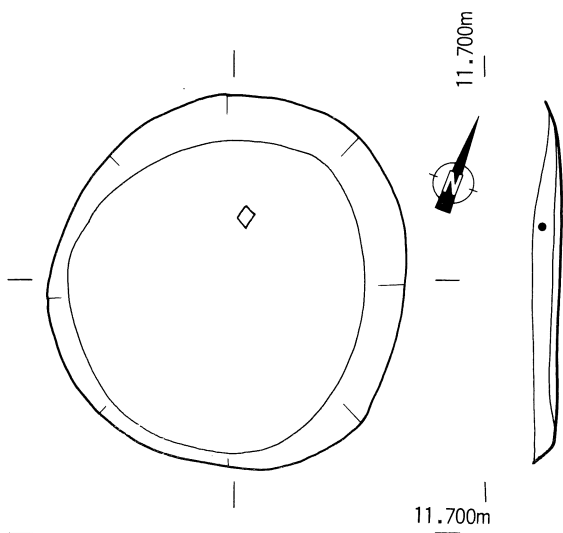
第 38 图 土坑实测图 (4)



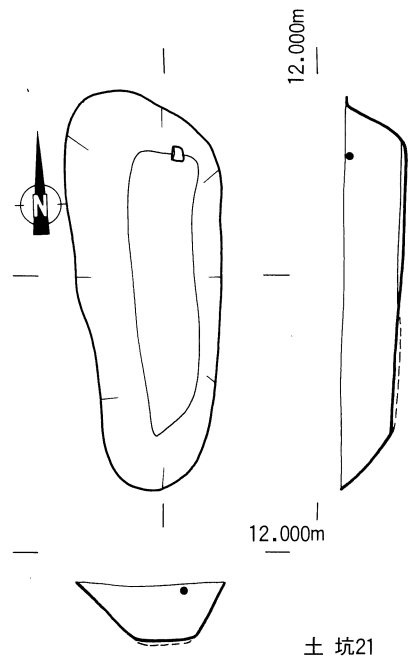
土坑18



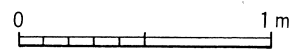
土坑20



土坑19



土坑21



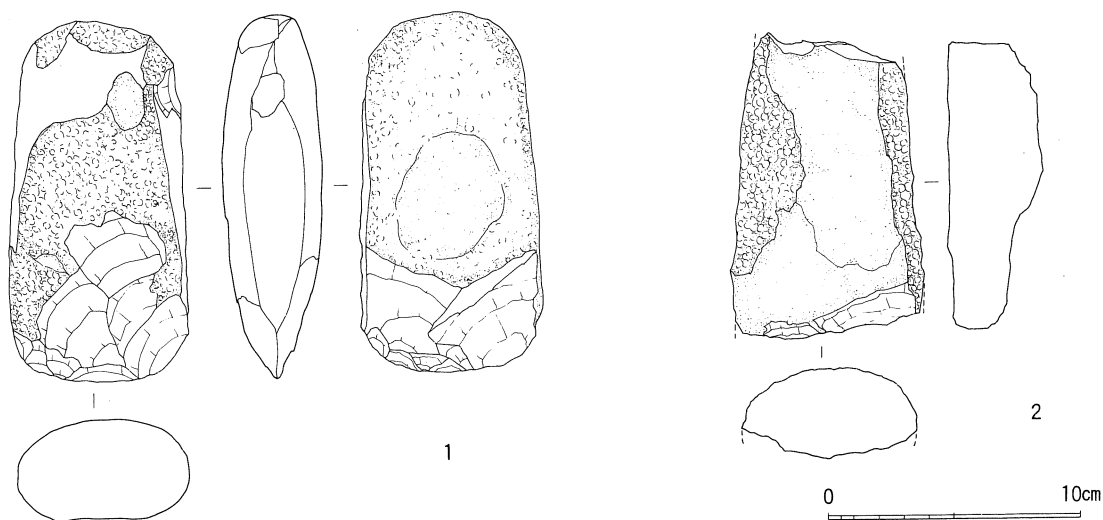
第39图 土坑实测图(5)

出土遺物 石器

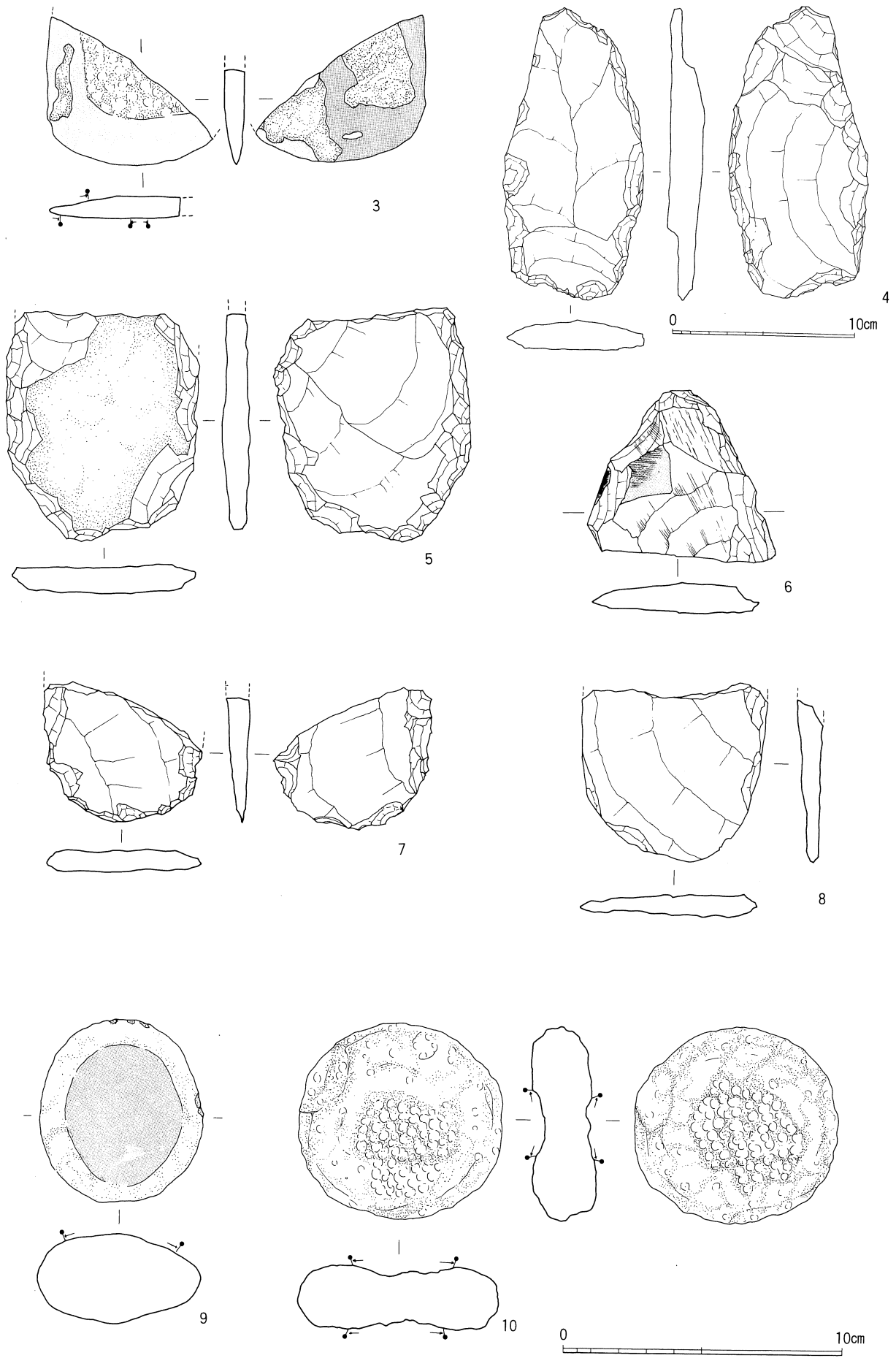
包含層及び各遺構から出土した石器は、第40図～第42図に示している。内訳は太型蛤刃石斧2、磨製石斧1、扁平打製石斧5、敲石1、凹石4、磨石2、砥石1である。1は研磨面が全面に及ばず、部分的に観察される。刃部は使用時の破損が著しい。2は両側縁部に敲打痕が認められるものの自然面が大きく広がる。製作中の破損により廃棄されたものと思われる。3は両刃の扁平な磨製石斧である。4～8は扁平打製石斧で使用されている石材も輝石安山岩や結晶片岩である。このうち4は横剥ぎの剥片を用いている。9は扁平で小ぶりの円礫の全面に研磨が施され、側縁部が部分的に使用されている。10～13は凹石だがこのうち10・11は軽石という非常に脆弱な石材を用いている。14～15は磨石で、このうち15は中央部を凹石として、側縁部を敲石として兼用している。16は砥石で、両面使用によって断面が凹レンズ状になる。ただし使用痕が顕著に観察されるのは片面のみである。

第7表 六反田地区出土石器観察表

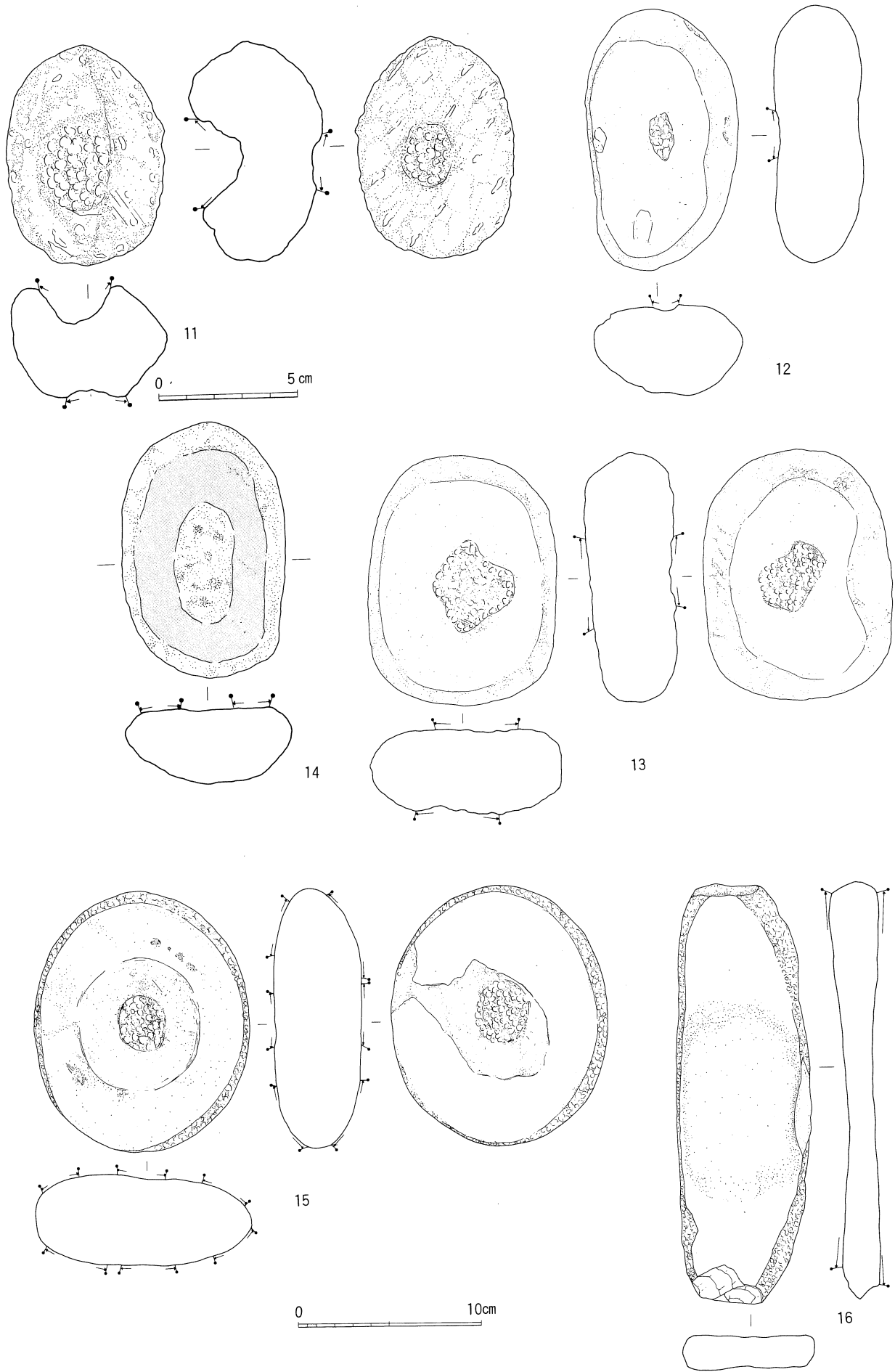
挿図番号	出土地点	遺物番号	種類	石材	法量 (cm・g)				備考
					長さ	幅	厚さ	重量	
1	溝3	67	太型蛤刃石斧	硬質砂岩	14.3	6.7	3.9	659.4	研磨面は一部 刃部つぶれ
2	溝2	28	太型蛤刃石斧	結晶片岩	12.1	7.6	3.5	448.4	未製品
3	包含層	一括	磨製石斧	輝石安山岩	5.3	6.0	0.7	24.1	刃部のみ
4	E8	一括	扁平打製石斧	輝石安山岩	16.0	7.5	1.9	232.4	ほぼ完形 横長剥片使用
5	試掘		扁平打製石斧	輝石安山岩	8.4	6.7	0.9	95.0	基部欠
6	包含層	一括	扁平打製石斧	結晶片岩	6.2	6.7	1.1	65.2	刃部欠
7	F10	一括	扁平打製石斧	輝石安山岩	4.9	5.4	0.7	30.6	基部欠
8	試掘		扁平打製石斧	結晶片岩	6.2	6.7	0.7	47.8	基部欠
9	包含層	一括	敲石	砂岩?	6.6	5.9	3.2	185.3	側縁部に2ヶ所使用痕
10	包含層	一括	凹石	軽石	7.0	7.2	2.2	62.2	両面に使用痕
11	土坑3	4	凹石	軽石	7.9	5.6	4.5	61.5	両面に使用痕
12	溝3	一括	凹石	軽石	14.1	8.2	4.9	493.3	片面使用
13	溝2	一括	凹石	安山岩	13.6	10.4	4.3	877.4	両面使用
14	溝3	上層一括	磨石	安山岩	9.2	5.9	2.6	285.2	片面に研磨面
15	溝2	一括	磨石+凹石	硬質砂岩	14.1	11.8	4.8	1,264.6	両面に研磨面 側縁部全周及び両面に使用痕
16	溝3	473	砥石	結晶片岩	22.8	7.2	1.8	700.7	両面研磨で凹レンズ状になる



第40図 六反田地区出土遺物実測図(1)



第41图 六反田地区出土遺物実測图(2)



第 42 图 六反田地区出土遺物実測図 (3)

第2節 山伏田地区

1 調査の概要

当地区は、六反田地区と二反田地区に挟まれていて調査区は長さ約100m、幅40m、約4000㎡を対象とした。

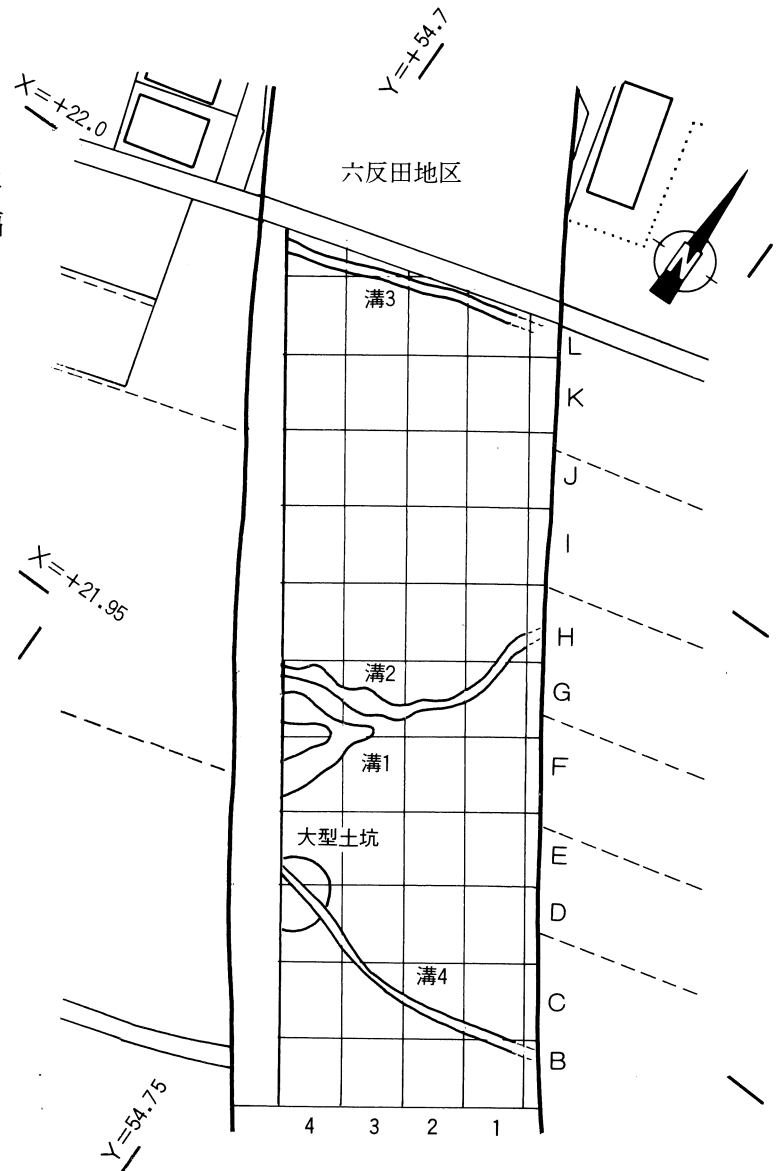
さらにここを10×8mのグリッドに分け調査を進めた。

調査は一部六反田地区と重複しながら行われ、4条の溝と縄文時代の包含層を確認した。

縄文時代の包含層は、縄文後期中葉～晩期後葉の遺物が出土した。遺物は後述する二反田遺跡の包含層に比べると出土量は希薄である。

溝は弥生時代前期末を主とするものが2条、古墳時代の所産と思われるものが1条、時期不明の溝が1条である。弥生時代の溝は、在地色の強い北部九州系の土器と下城式土器が共伴して出土した。その他の溝は、数点の遺物が出土したに過ぎない。

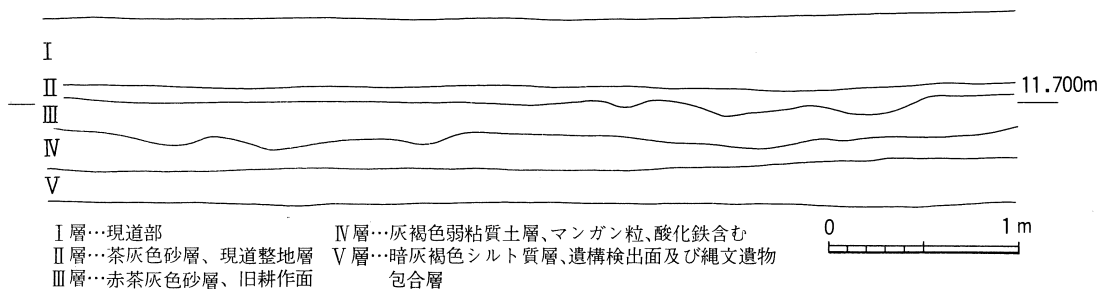
その他不整形の大型土坑が1基検出されているが時期は不明である。



第43図 山伏田地区遺構及びグリッド配置図 (1/100)

2 基本土層

当地区の基本土層は、第44図に示したように大きく5層に分層できる。I層は現道部分と基礎、II層はこの現道に伴う整地層、III層は赤茶灰色砂層で旧耕作面、IV層は灰褐色弱粘質土層でマンガング粒や酸化鉄を含む層である。この層は縄文時代から近代までの遺物が混在して含まれる。V層は暗灰褐色シルト質層で遺構の検出面である。ただし検出された遺構の状況から、この層の上面はかなり削平されていることが推定される。またこのV層は縄文時代の遺物を包含する層で平均して上面から約20cmのなかで遺物の出土を見た。



第44図 山伏田地区基本土層図

3 各時代の遺構と遺物

溝1 (第46図)

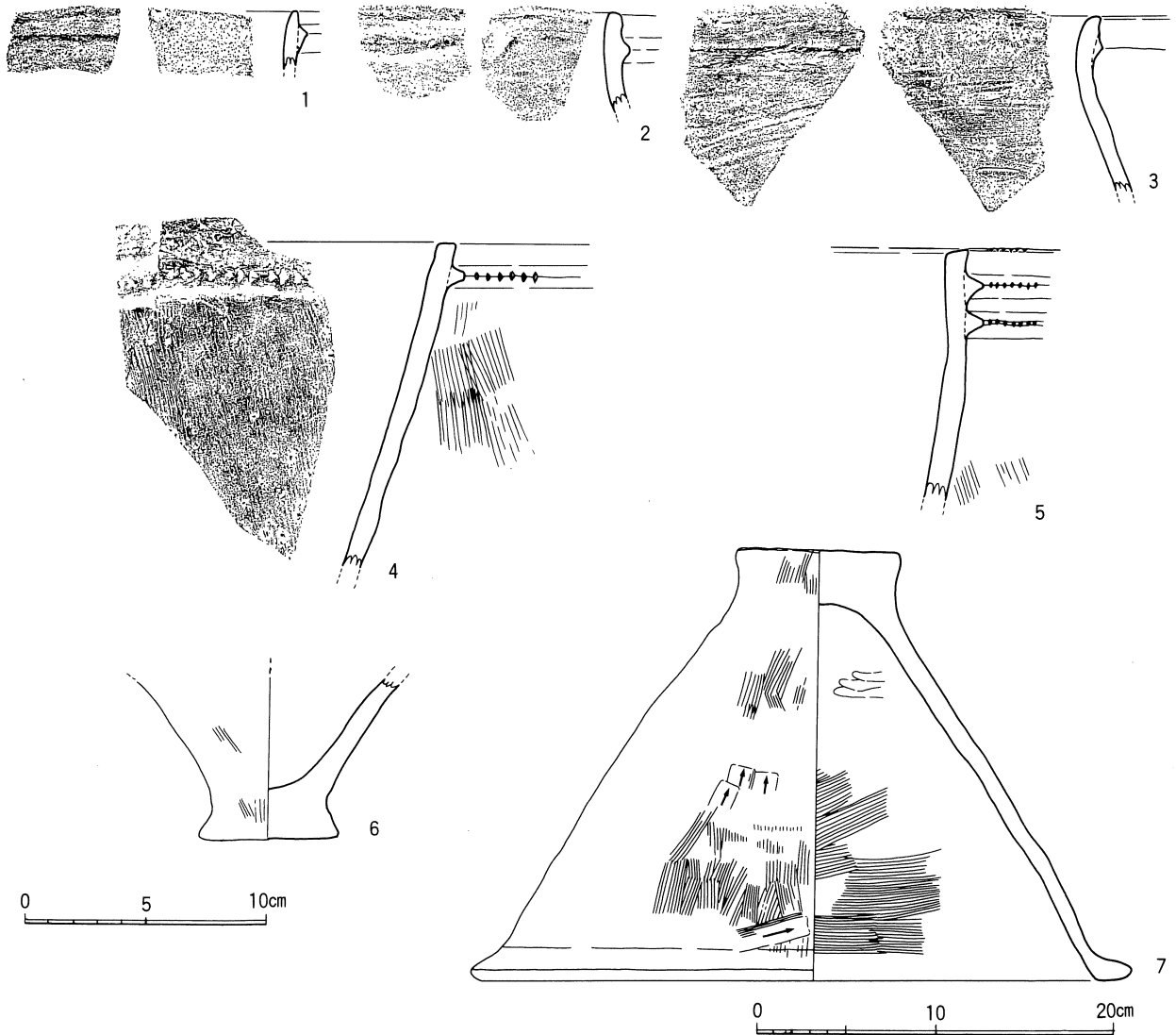
調査区ほぼ中央部をやや蛇行しながら東西に流れ、検出した長さは29mを測る。西側では幅が2~3mで次第に狭くなり東端部では80cmに狭まる。溝の内部には部分的に酸化鉄が付着している。

溝2 (第46図)

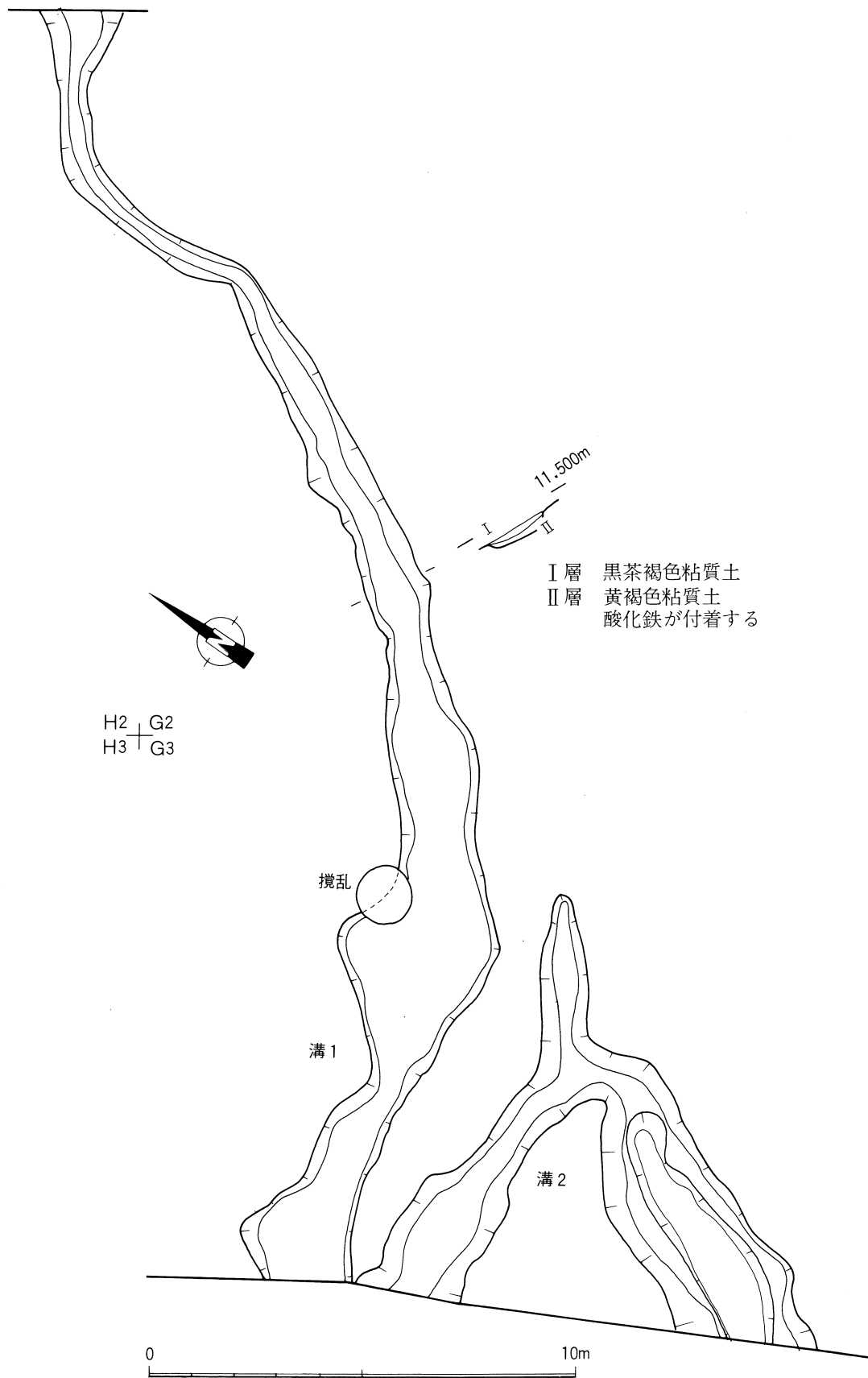
溝1に隣接して検出された。当初溝1とほぼ同位置から発し、その後東に下がる溝と北方向に伸びる溝の2本が結合し、平面観はY字状に分岐する溝となった。幅のある部位で2~3m、幅の狭い部位で1m程度となる。出土遺物は北側部分から溝1とほぼ同時期の遺物がわずかに出土した。

溝1・溝2内出土遺物

第45図に示したものが溝1及び2から出土した遺物である。1~3は、いずれも深鉢である。口縁部に巡る突帯は無刻目で、すべて溝1から出土した。4~5は甕で溝2から出土した。いずれも下城式土器で口縁部が直行し口縁端部直下に1条ないし2条の刻目を施した突帯が巡る。外面は



第45図 溝1・2出土遺物実測図



第46図 溝1・2実測図

タテハケを施す。6は甕の底部である。外面にハケ目を施す。7は溝1から出土したもので甕とも見ることができ、口縁部が朝顔状に大きく開く器形から蓋とした。外面は縦方向のハケ、内面は横方向のハケを施す。この2条の溝は4・5や7などの出土遺物から弥生時代前期末～中期前半にかけての所産と思われ、この溝の時期を示す遺物と考えられる。

溝3 (第47図)

溝3は調査区北端L-1～L-4グリッドにかけて検出された。溝はほぼ東西方向に流れ、確認された長さは約20m、幅は0.5～1m、深さは15cm～20cmである。溝内からは古墳時代の甕の把手部分を含めて数点の遺物が出土したが、いずれも出土状況から流れ込みの可能性が高い。そのため時期を確定できなかった。

しかし、六反田地区で確認された時期不明の溝とほぼ方向が一致することから条里遺構との関連が考えられよう。

溝4 (第48図)

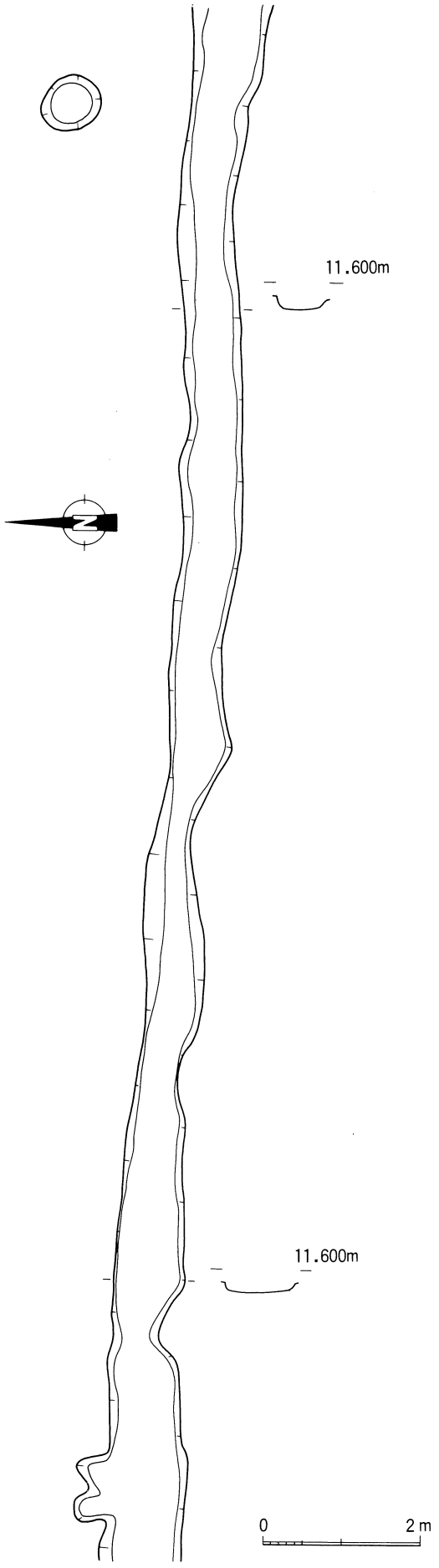
溝4は調査区の南半部E-4～B-1グリッドにかけて検出された。この溝は大きなカーブを描きながら南東方向に流れ、西部分では大型土坑を切る。溝の規模は長さ約23m、幅0.5～0.7mを測る。深さは5cm～10cmと浅く遺物もすべて流れこみであった。そのため時期を明確にはできなかった。

不整形大型土坑 (第49図)

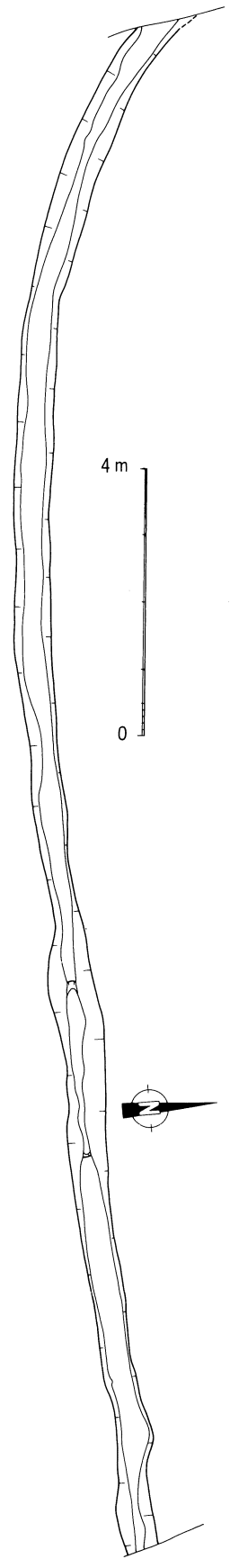
不整形大型土坑は調査区南半部のE-4及びD-4グリッドで検出された。西側が一部里道によって攪乱を受けている。

遺構は、ほぼ円形の平面観を呈し、上端が直径5m、下端が直径3.2m、深さが検出面から70cmを測る。断面は逆台形を呈し北壁沿いに一部テラス状の段をもつ。なお遺物は埋土上層部で若干出土したが、いずれも流れこみで遺構の時期を示すものは出土していない。

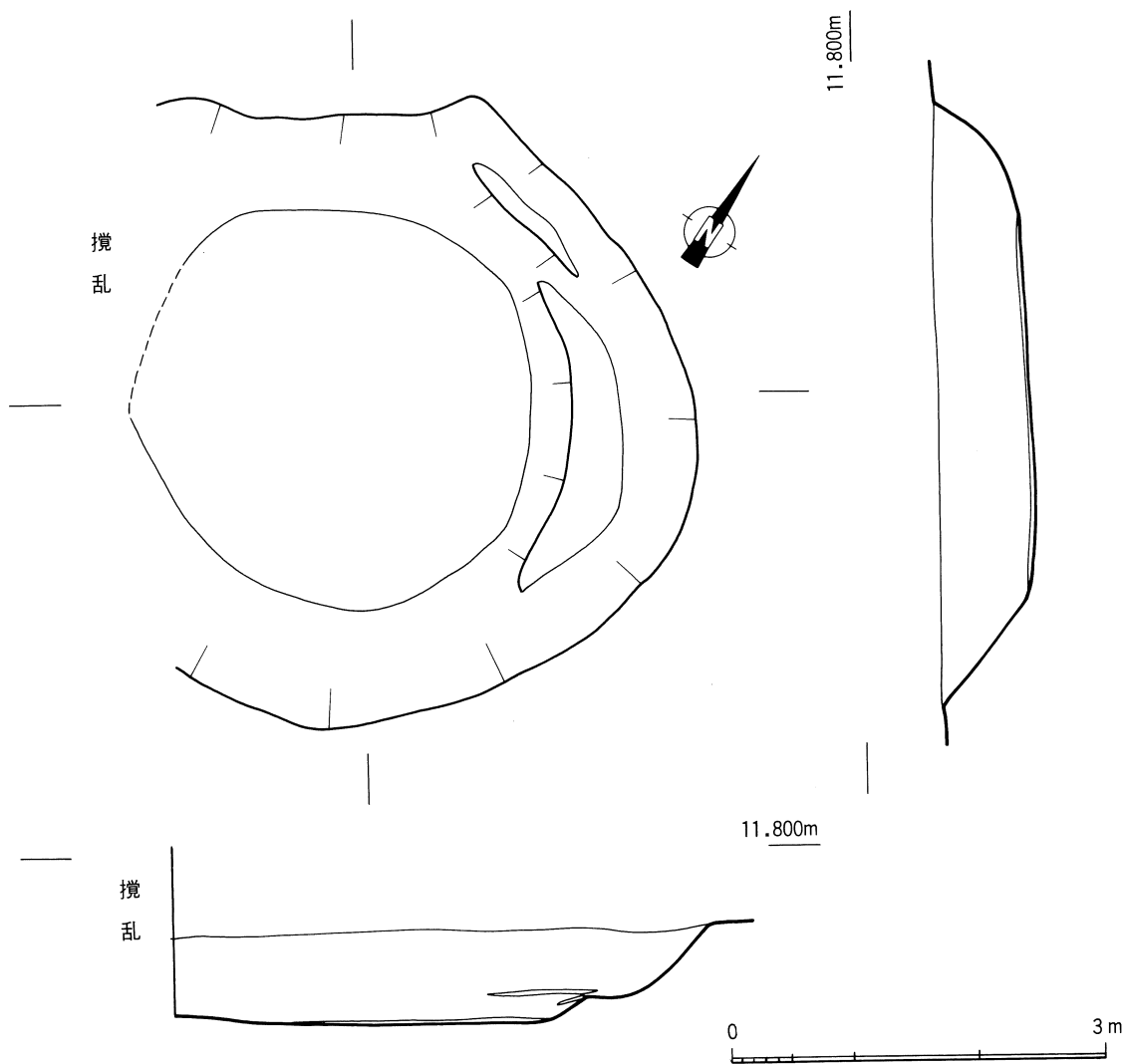
なお、この遺構と類似した不整形大型土坑が二反田地区の調査でも検出されている。水田耕作を行う際の水溜などの施設として用いられた可能性もある。



第47図 溝3実測図



第48図 溝4実測図



第49図 不整形大型土坑実測図

4 包含層

当地区の包含層は、第44図に示した土層図のなかで第V層にあたる。調査では縄文後期～弥生中期初頭の遺物が出土した。その遺物分布は第50図に示したようにほぼ調査区全面に広がる。目立った集中部分はなくわずかに中央部にやや分布密度の高いグリッドが見られるのみである。この包含層自体は層の上位から下位にかけて遺物がまんべんなく出土するわけではなく、上位から10～20cmの範囲で出土し、それ以下になるとほとんど出土しない。出土した遺物は縄文時代後期中葉、後期後半、晚期中葉、晚期後半の土器・石器である。

以下各遺物の説明を行う。しかし第3節の二反田地区の報告において縄文晚期土器については詳細な分類を行っているため、本節では大まかな分類にとどめておく。

土器

土器についてはI類からVI類まで分類した。

I類 (第51図8)

波状口縁で、縄文を施しその後口縁部のラインに平行して2条の凹線を施す。さらにこの凹線内には連続する刺突文が施される。凹線を施すなどの技法から後期中葉でもやや古式の様相を呈するものと思われる。

II類 (第51図9・10)

胴部の破片のみであるが縄文を施文後に平行しながら斜行する沈線を8～10条施すもので、高知県片粕遺跡を標識とする片粕式土器と思われる。この土器は時期的には北久根山式土器とほぼ平行し後期中葉に比定される。県内では大野町の夏足原遺跡や小牧遺跡で出土している。

III類 (第51図11～15)

短く屈曲した口縁部や胴部の上位に磨消縄文を施すもので、そこに沈線や列点文、波状文などを施すものである。いわゆる西平式土器と呼ばれる後期後半に比定される土器群である。

IV類 (第51図16)

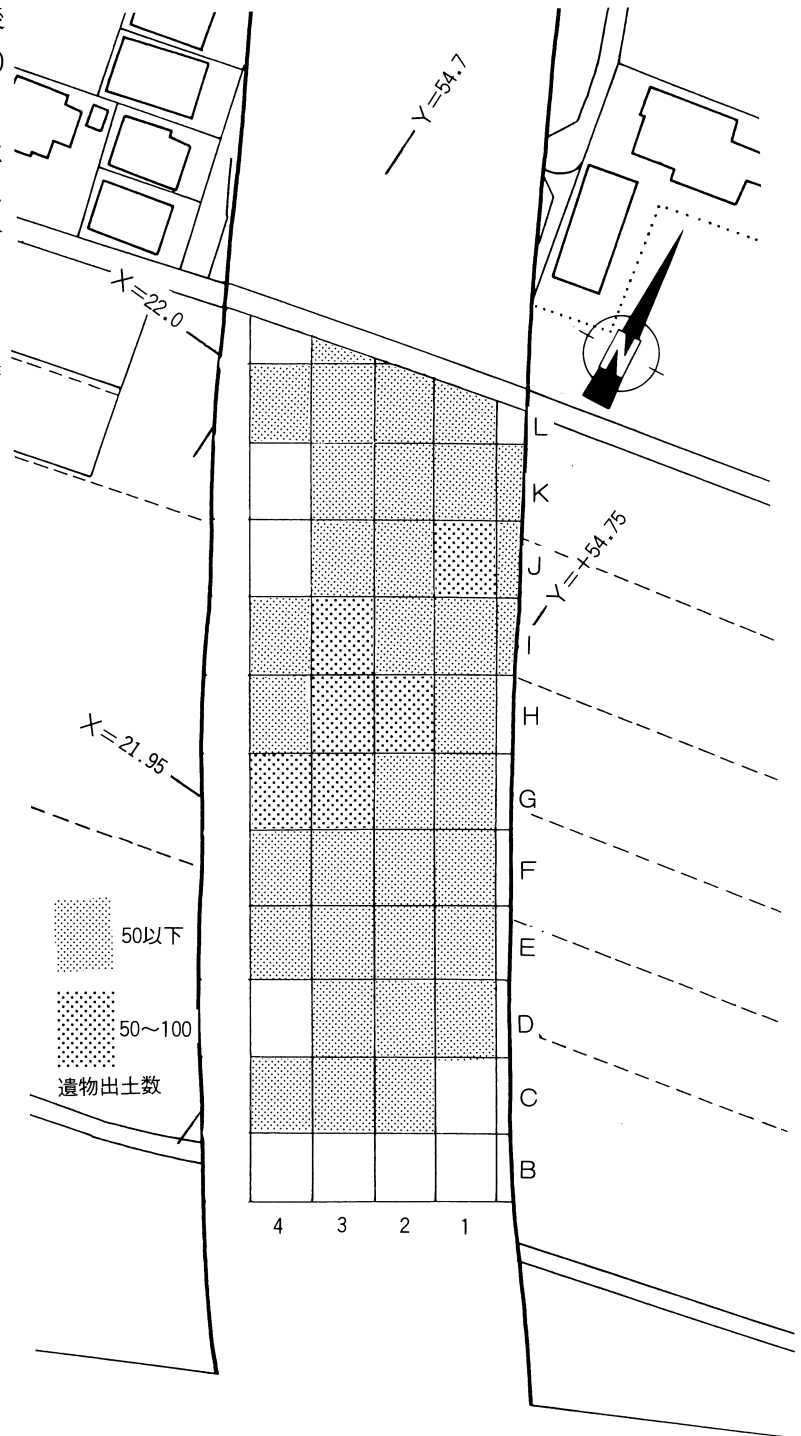
器壁は薄く内面および外面にはヘラ状工具による磨きが観察される。胴部と口縁部の文様帯との間にわずかに段がつく。文様構成は沈線のみで構成され口縁端部直下に3条、その下位は2条の平行する沈線が巡る。これは滋賀里I式に類似し晩期初頭に比定されるものと思われる。

V類 (第51図17～22 第52図23～40)

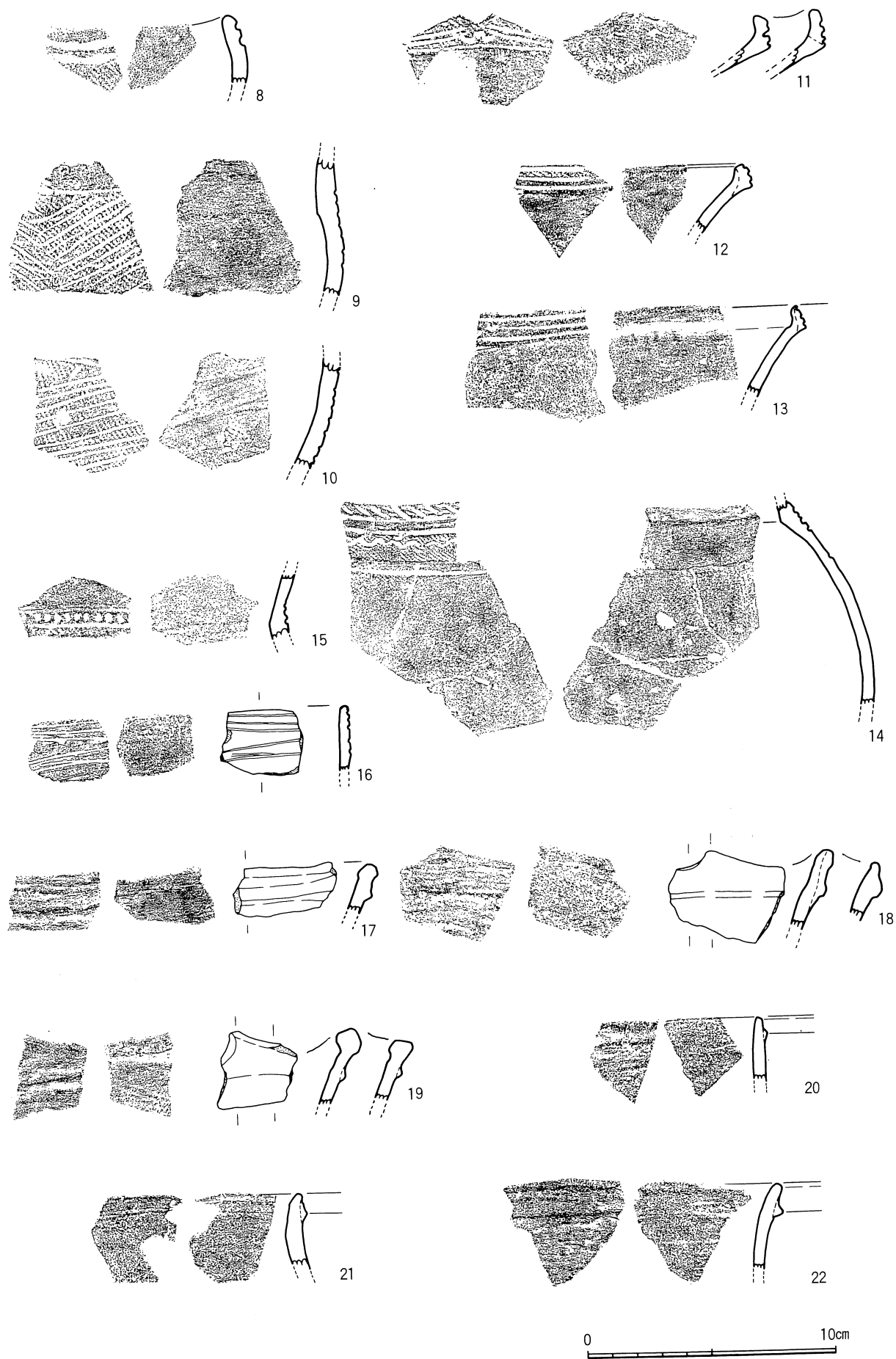
縄文晩期後半に比定される突帯文土器を中心とした土器群で、それに付け加えて鱗状の突起などの特徴をもつ。深鉢をA類、浅鉢をB類とした。

VI類 (第52図41～45)

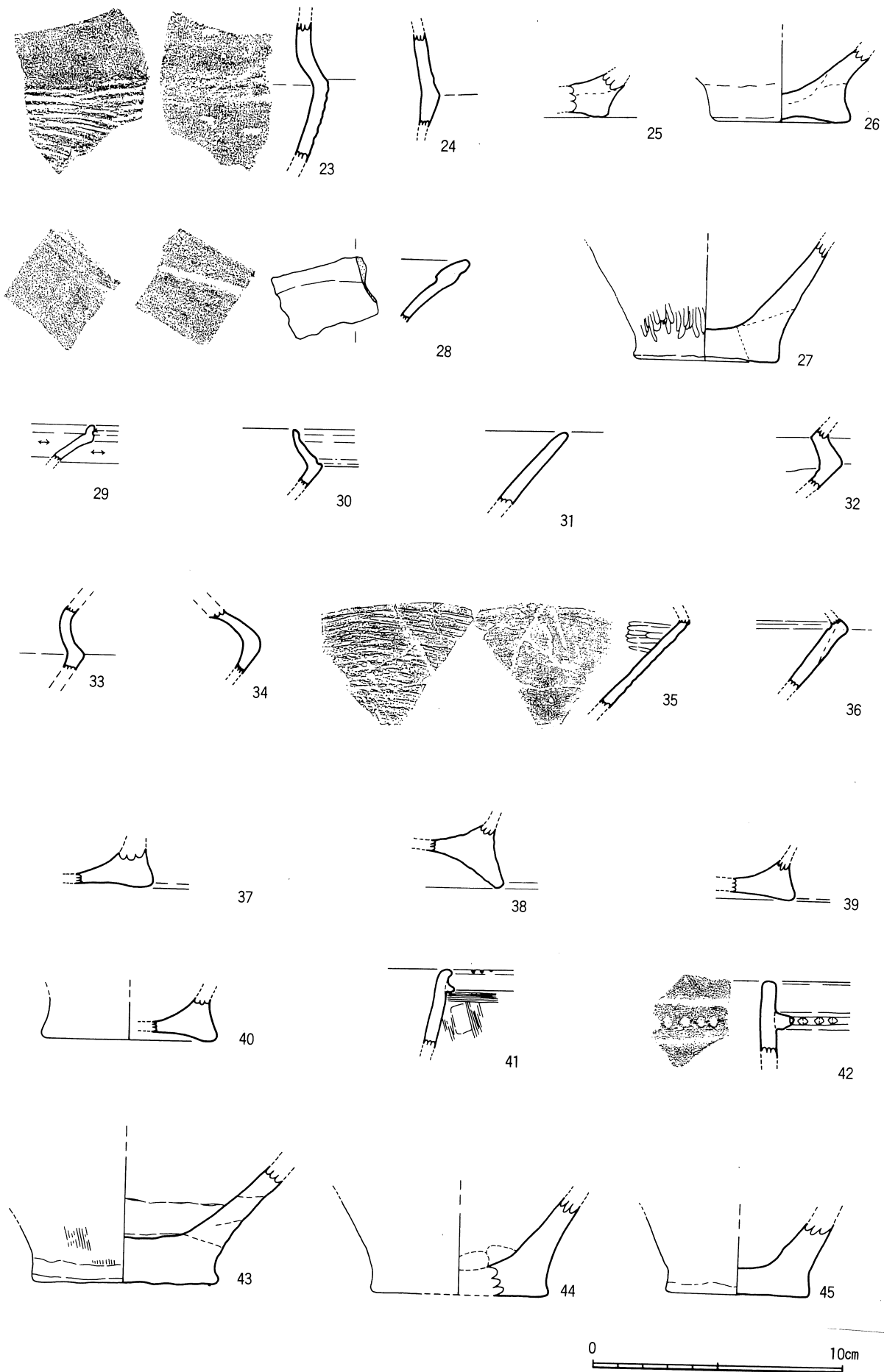
直行する口縁部に突帯が巡りそこに刻目を施す。外面はハケによる調整が観察される。弥生時代前期末から中期初頭にかけての所産で下城式土器と呼ばれる一群である。



第50図 山伏田地区包含層遺物分布図



第51图 包含層出土土器实测图 (1)



第 52 图 包含層出土土器実測图 (2)

第8表 山伏田地区出土土器観察表

挿図番号	出土地点	遺物番号	器種	分類	胎土	色調		調整		法量 (cm)				備考
						内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大径	底径	
1	溝1	35	深鉢	VA	角・長・石英	黒灰色	灰白色	ナテ	ナテ					無刻目突帯
2	溝1	65	深鉢	VA	角・長・石英・金雲母	灰白色	灰白色	ナテ	ナテ					無刻目突帯
3	溝1	9	深鉢	VA	角・長・石英・白色粒	灰白色	灰白色	貝殻条痕後ナテ	貝殻条痕後ナテ					無刻目突帯
4	溝2	2	甕	VI	角・長・石英・褐色粒	浅黄橙	浅黄橙	ナテ	ナテ後ハケ					1条刻目突帯
5	溝2	18	甕	VI	角・長・石英	鈍い橙	橙	ヨコナテ	ナテ後ハケ					2条刻目突帯+口唇部刻目
6	溝2	2	甕底	—	角・長・石英	黒褐色	鈍い橙	ナテ	ナテ後ハケ				5.8	
7	溝1	25.58.70.71	蓋	—	角・長・石英	鈍い黄橙	鈍い黄橙	ナテ後ハケ	ナテ後ハケ	36.2	19.3		8.9	外面スス
8	H3	7	深鉢	I	角・長・石英	明褐色	明褐色	ナテ	ナテ 凹線 刺突					
9	H2	28	深鉢	II	角・長・石英	灰白色	浅黄橙	ナテ	ナテ後磨消 縄文					片柏式
10	H2	142	深鉢	II	角・長・石英・金雲母	淡黄橙	淡黄橙	ナテ	ナテ後磨消 縄文					片柏式
11	E1	1	深鉢	III	角・長・石英・金雲母	灰白色	灰白色	不明	磨消縄文+ 刺突文+沈線					西平式
12	L2	44	深鉢	III	角・長・石英	鈍い黄橙	鈍い黄橙	ナテ	ナテ 沈線+ 磨消縄文					西平式
13	K2	2	深鉢	III	角・長・石英	浅黄橙	灰白色	ナテ	沈線 ナテ					西平式
14	C4	34,523	深鉢	III	角・長・石英・金雲母	鈍い黄橙	灰黄褐	ヨコナテ	ナテ+沈線+ 波状文+沈線					西平式
15	G3	86	深鉢	III	角・長・石英	褐色	褐色	ナテ	ナテ 列点文					西平式
16	E5	17	深鉢	IV	角・長・石英	灰白色	うすい橙	ナテ	ナテ後沈線					遊里1式?
17	E4	3	深鉢	VA	角・長・石英・金雲母	黒褐色	灰白色	ナテ	ナテ					鱗状突起
18	E3一括	—	深鉢	VA	角・長・石英・金雲母	浅黄橙	浅黄橙	ナテ	不明					鱗状突起
19	E4一括	—	深鉢	VA	角・長・石英・金雲母	黒褐色	灰白色	ケズリ後ナテ	ナテ					鱗状突起
20	H2	136	深鉢	VA	角・長・石英	鈍い橙	鈍い橙	ナテ	ヨコナテ					無刻目突帯
21	L2	58	深鉢	VA	角・長・石英	鈍い橙	橙	ナテ	ヨコナテ					無刻目突帯
22	H0	2	深鉢	VA	角・長・石英	黒灰色	灰白色	ナテ	ナテ					無刻目突帯
23	L3	13	深鉢	VA	角・長・石英	褐色	鈍い黄橙	ナテ	ナテ 貝殻条痕					
24	E3	16	深鉢	VA	角・長・石英・金雲母	黒褐色	鈍い黄褐色	ナテ	ナテ					
25	L3	36	深鉢底	VA	角・長・石英	鈍い橙	橙	ナテ	ナテ				7.6	
26	F1	26	深鉢底	VA	角・長・石英	灰白色	灰白色	ナテ	ナテ					
27	F1	15	深鉢底	VA	角・長・石英	橙	橙	ヨコナテ	ミガキ ナテ				7.6	
28	E5	4	浅鉢	VB	角・長・石英・金雲母	暗黄橙	暗黄橙	ナテ	ナテ					波状口縁
29	D1	2	浅鉢	VB	角・長・石英	灰褐色	灰褐色	ミガキ	ミガキ 沈線					やや古式か?
30	D3	5	浅鉢	VB	角・長・石英	浅黄橙	浅黄橙	ナテ	ナテ 沈線					「く」字状口縁
31	L2	38	浅鉢	VB	角・長・石英	灰白色	灰白色	ナテ	ナテ					
32	C4	27	浅鉢	VB	角・長・石英	黒褐色	灰白色	ナテ	ナテ					
33	D2	9	浅鉢	VB	角・長・石英	浅黄橙	浅黄橙	ナテ	ナテ					
34	L3	22	浅鉢	VB	角・長・石英	橙	橙	ナテ ケズリ	ミガキ					両面スス
35	I3	8	浅鉢	VB	角・長・石英・金雲母	黒褐色	明赤褐色	ミガキ	貝殻条痕後 ナテ					
36	C4	3	浅鉢	VB	角・長・石英	黒褐色	灰白色	ナテ	ナテ					
37	I2	7	浅鉢底	VB	角・長・石英	黒褐色	浅黄橙	タタキ後ナテ	タタキ後ナテ					内面スス
38	K3	10	浅鉢底	VB	角・長・石英	鈍い褐色	鈍い褐色	ナテ	ナテ					
39	K2	5	浅鉢底	VB	角・長・石英・金雲母	橙	淡橙	ナテ	ナテ					
40	I3	3	浅鉢底	VB	角・長・石英・金雲母	橙	橙	ナテ	ナテ				9.2	
41	F1	4	甕	VI	角・長・石英	黒褐色	鈍い褐色	ナテ	口唇部刻目+ 刻目突帯					下城式
42	G4	3	甕	VI	角・長・石英	暗灰白色	暗灰白色	ナテ	ナテ+ 刻目突帯					下城式
43	G3	41	甕底	—	角・長・石英	鈍い橙	橙	ナテ後ハケ	ヘラケズリ後 ナテ				8.2	
44	2層一括	—	甕底	—	角・長・石英	褐色	橙	ナテ 指頭圧	ナテ				9.4	
45	3層一括	—	甕底	—	角・長・石英	不明	浅黄橙	ナテ	ナテ				7.6	

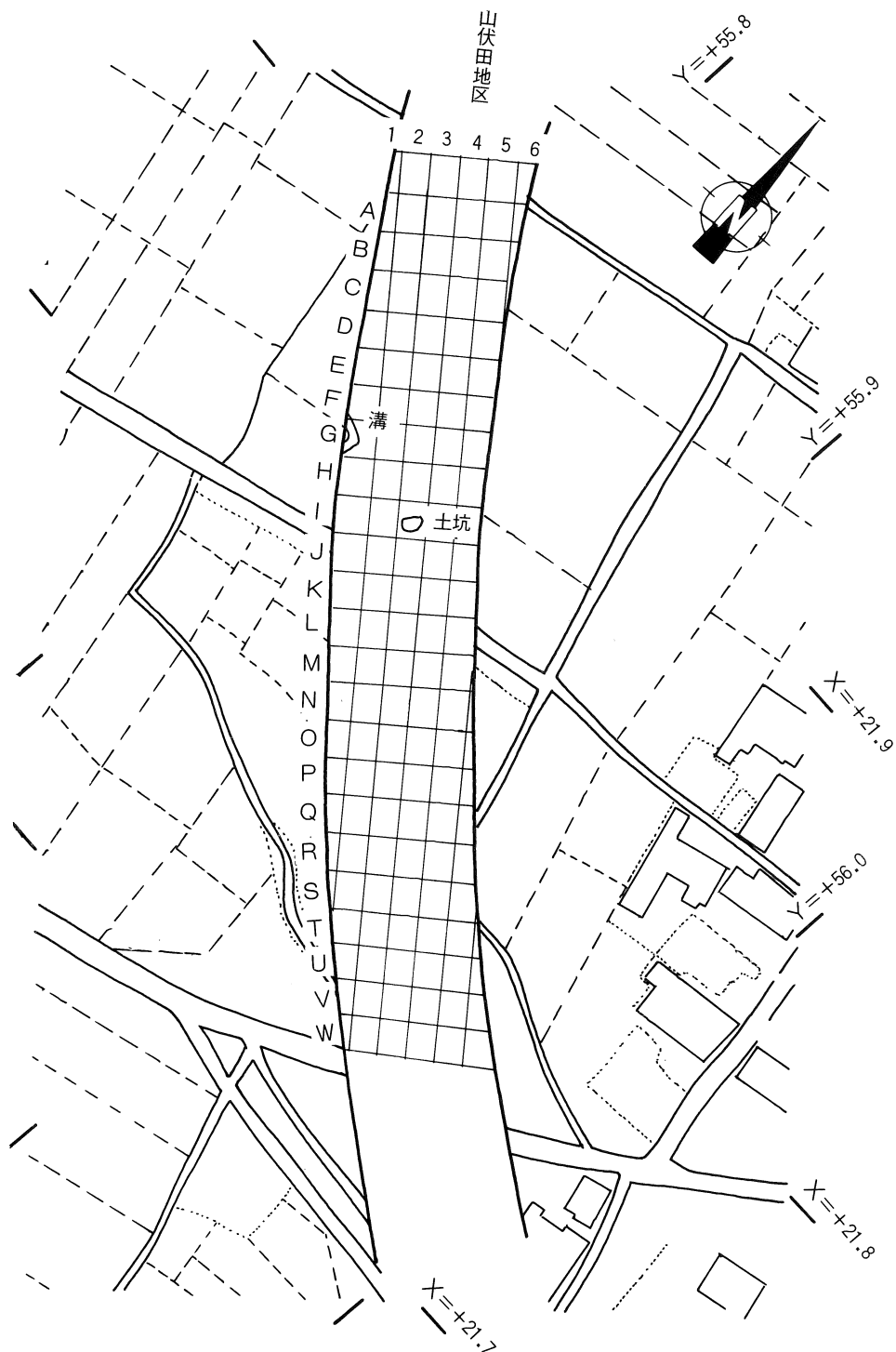
第3節 二反田地区

1 調査の概要

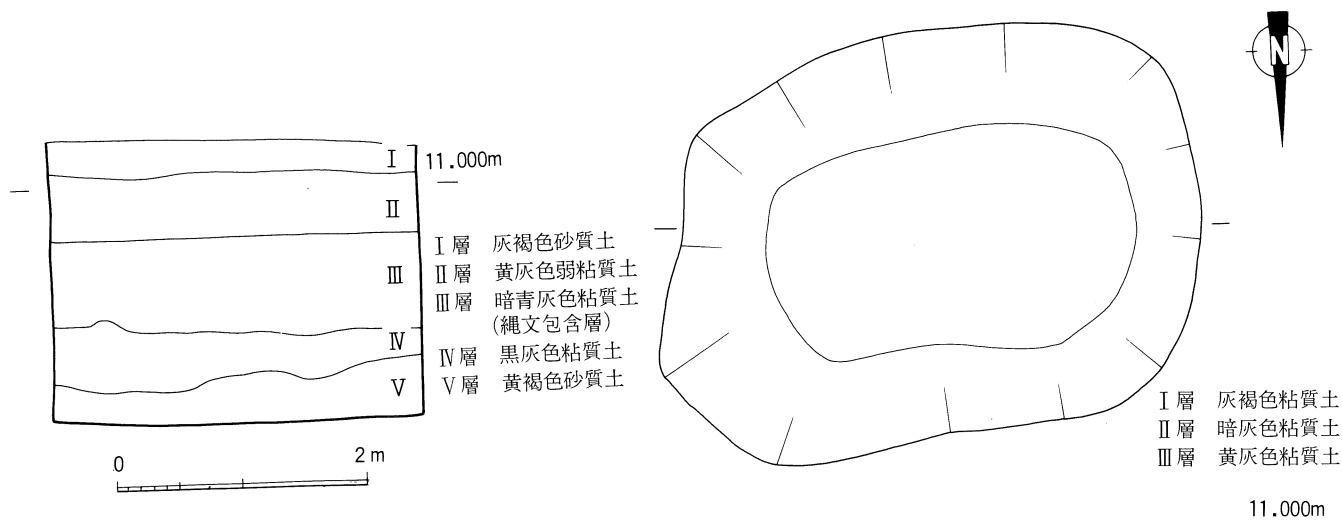
二反田地区の調査は玉沢地区条里跡遺跡群のなかで最も早く行った。調査区はわずかに字田中屋敷地区も含むが、大きく二反田地区とした。幅40m、長さ260m、調査対象面積約10000㎡の広範囲に及ぶ。試掘調査で北半部と南半部の一部で比較的良好な包含層が確認された。本調査は10m×8mのグリッドを設定し包含層の掘下げを行った結果、縄文時代晩期を主体とした遺物が出土した。その他、溝が1条、大型土坑が1基、ピットが10数個検出されたが時期は不明である。また、調査区南半部で確認された低湿地状の落ち込み(旧河道?)部分でプラント・オパール分析を行い、縄文時代晩期の水田耕作等の存在の有無について検出作業を実施したが、それを裏づける資料は得られなかった。

2 基本土層

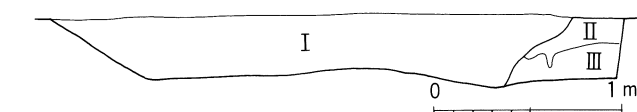
二反田地区の基本土層は、第54図に示した通りである。第I層は灰褐色砂質土で現耕作土である。第II層は黄灰色弱粘質土で現水田面の床土である。第III層は暗青灰色粘質土でII層との境付近にマンガンが約1cm堆積する。また酸化鉄も若干含まれる。この層が縄文晩期の包含層である。IV層は黒灰色粘質土でかなり粘性が強く白色粘土がブロック状にわずかに含まれる。V層は黄褐色砂質土で酸化鉄の含有量の問題か全体に赤みを帯びた層である。わずかに粘質土が混じるが大半は2~5cmの礫である。



第53図 二反田地区グリッド配置図(1/200)



第54図 二反田地区基本土層図



第55図 不整形大型土坑実測図

3 各時代の遺構と遺物

不整形大型土坑 (第55図)

この遺構はI-3グリッドのほぼ中央部で検出された。長軸5.6m、短軸4.2m、深さ55~75cmを測る。平面観は北東部がやや張り出す不整形な形状を示す。遺構内からは埋土上面で土器の細片がわずかに出土したが時期を特定するには至らなかった。同様の遺構は山伏田地区においても検出されている。

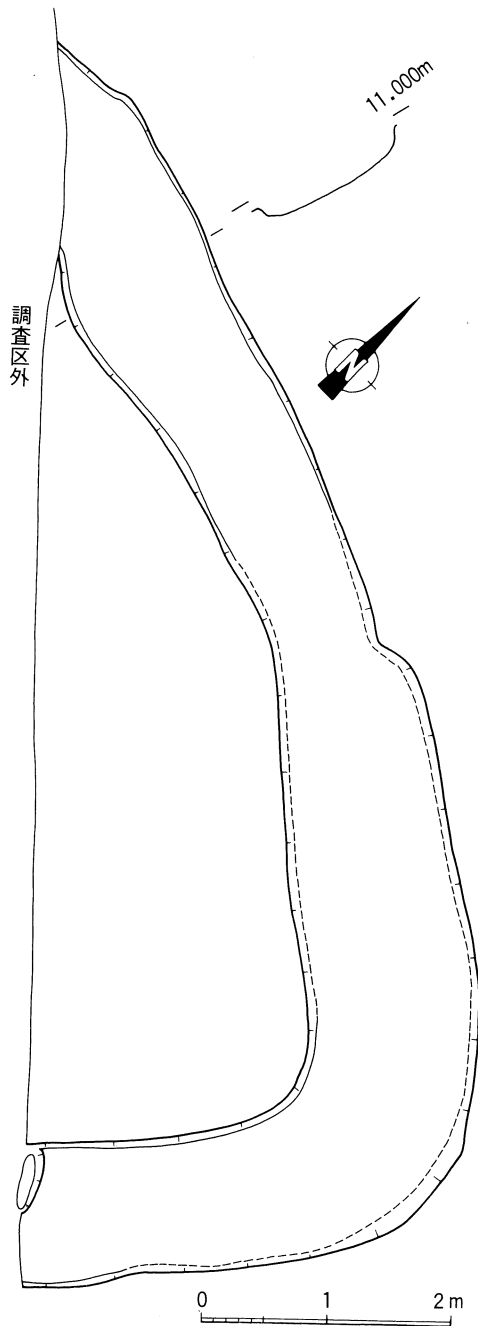
溝 (第56図)

溝は調査区北半部G-1グリッドからH-1グリッドにかけて検出された。G-1グリッドの西壁から発し約8m南東に伸び、そこから西にほぼ直角に曲がり約3m伸び調査区外へ続く。深さは約20cmで上部はかなり削平を受けているものと思われる。この遺構の性格は不明でさらに出土遺物もなく時期の特定はできなかった。

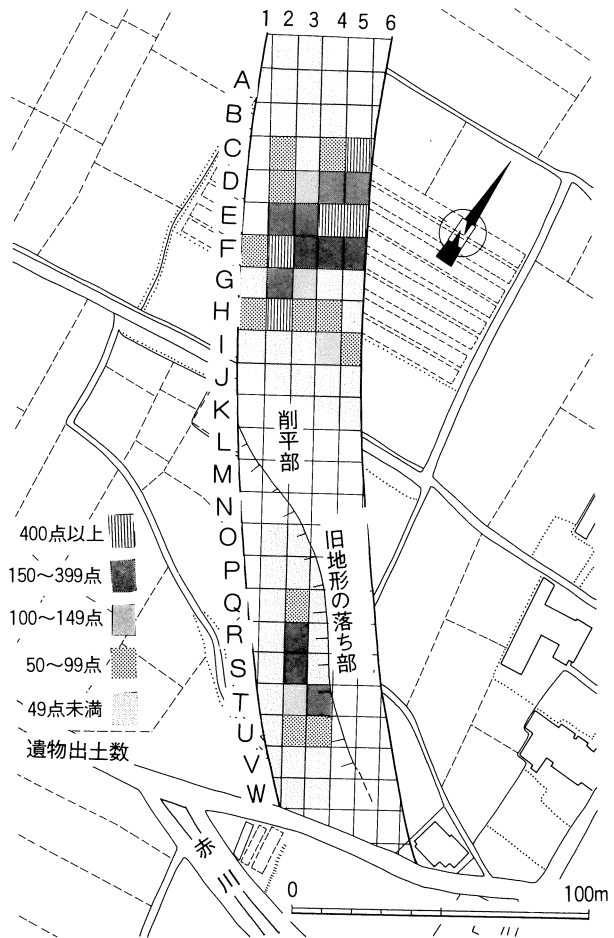
包含層 (第57図)

当地区の地形は北東部分の六反田地区から南西にかけて次第に下っていく様相を呈していて、包含層もそれに伴い山伏田地区から連続して分布する。ただしL-1グリッド付近からV-6グリッドにかけて旧地形の落ちが認められ、土層の堆積状況が大きく変わる。北半部は比較的安定した土質であるのに対して、落ちから西側部分はシルトが多く含まれた低湿地状の土が堆積し最下層には礫が広がる。調査区の南にこの落ちとほぼ平行して七瀬川の支流である赤川が流れる。おそらくこの落ちは、かつての赤川の旧河道と思われる。また、包含層に伴う時期の水田耕作が存在する可能性もあったためプラント・オパール分析を行ったが、古墳時代以降の水田面しか確認できなかった。また包含層の調査では第54図に示したように遺物が集中する場所が確認された。特に北半部のC-5、E-4~5、F-2、H-2が400点以上の遺物が出土したグリッドである。これらを中心として遺物が分布する。そこで縄文晩期に属する遺構の精査を行ったが住居跡等遺構の検出には至らなかった。ただ濃密に遺物が集中する地点には住居跡が存在していた可能性はあるものと思われる。

これに対して、南半部は一部水田耕作の影響で包含層が削平されほとんど遺物が出土しないグリッドもあれば、落ち部分に沿って堆積する層から、やや集中して出土したグリッドもあったが、出土



第56図 溝実測図



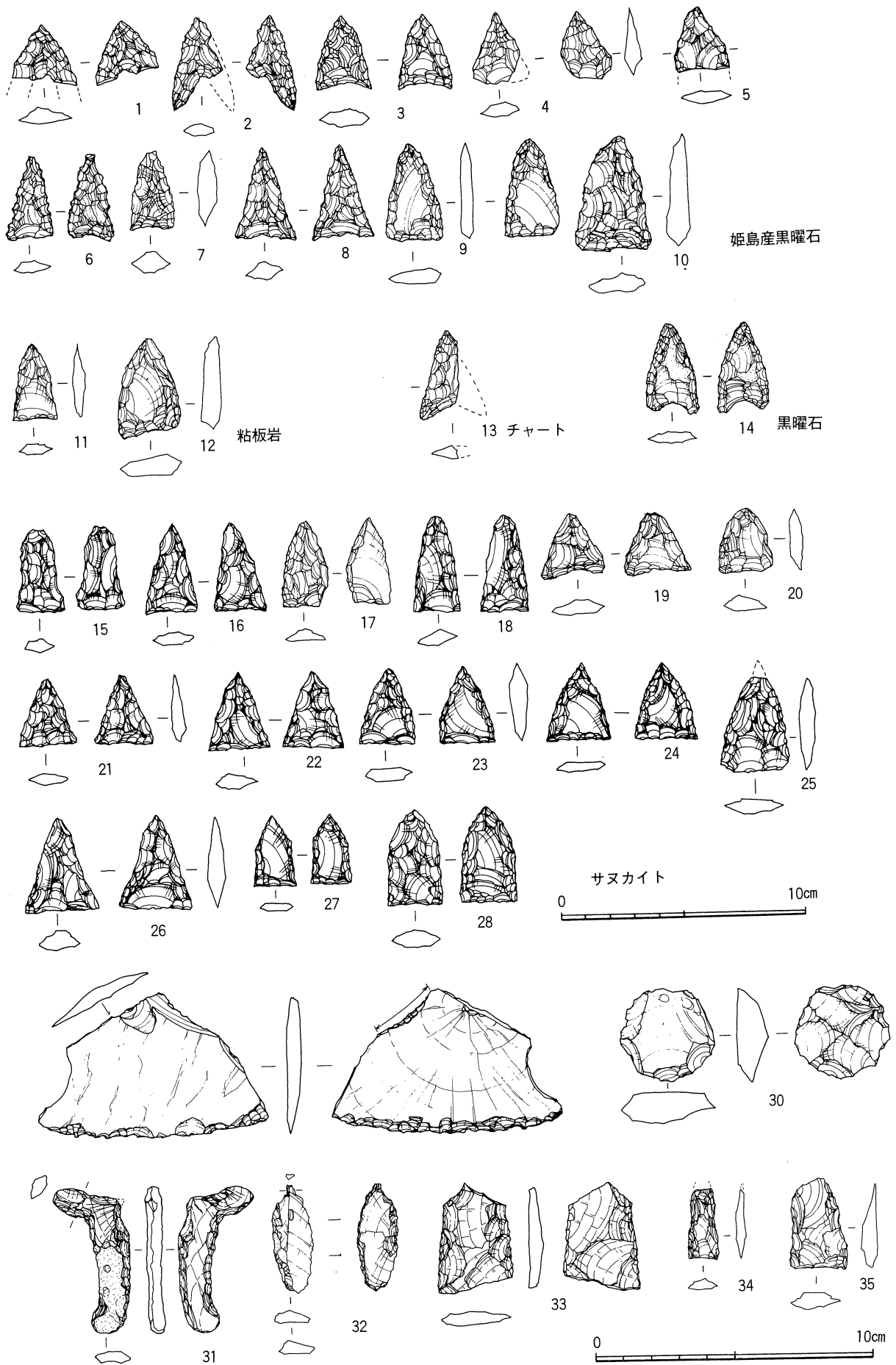
第57図 二反田地区包含層遺物分布図

遺物から前者の包含層とは若干時期に差がある。

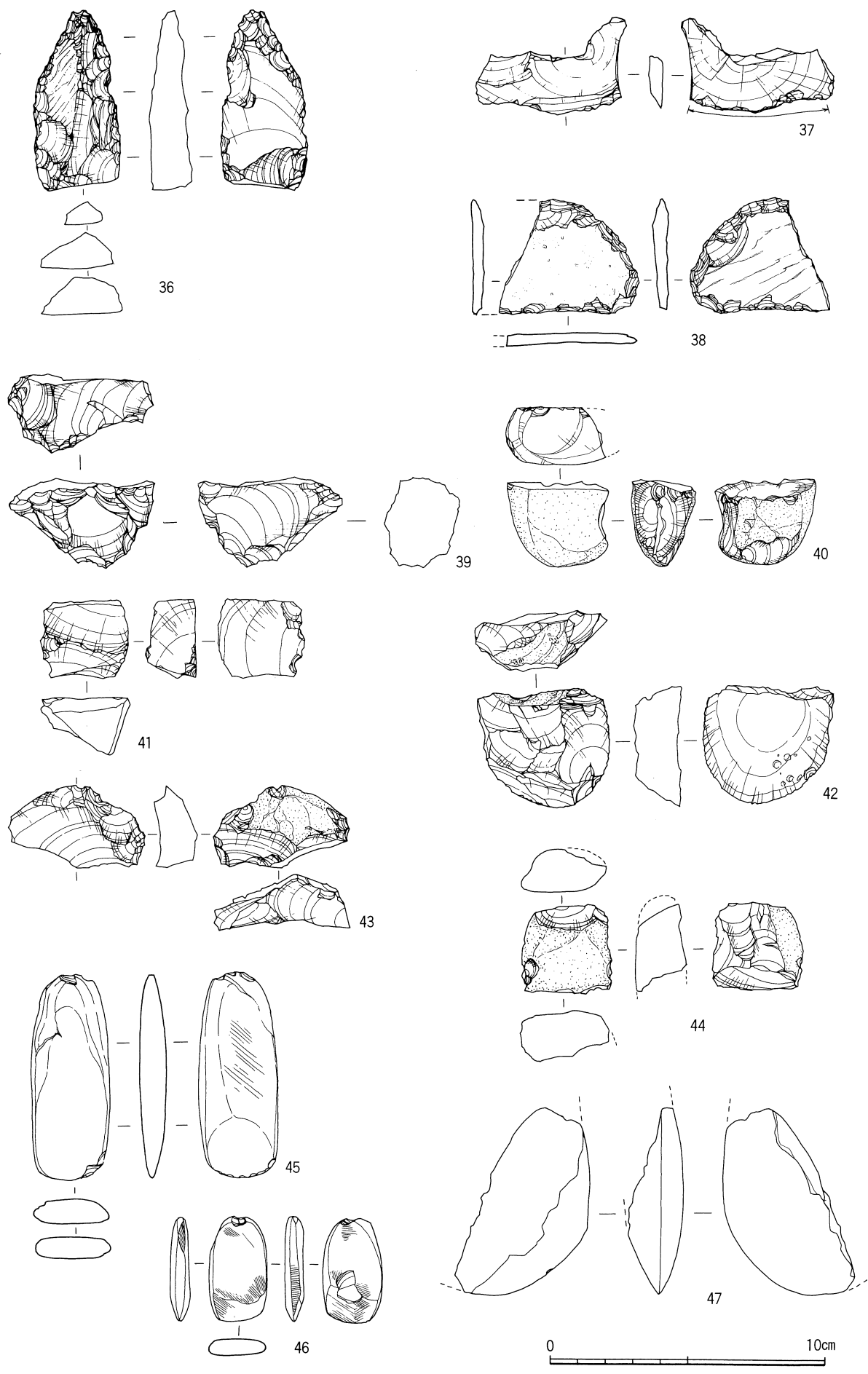
遺物

石器 (第58図～第63図)

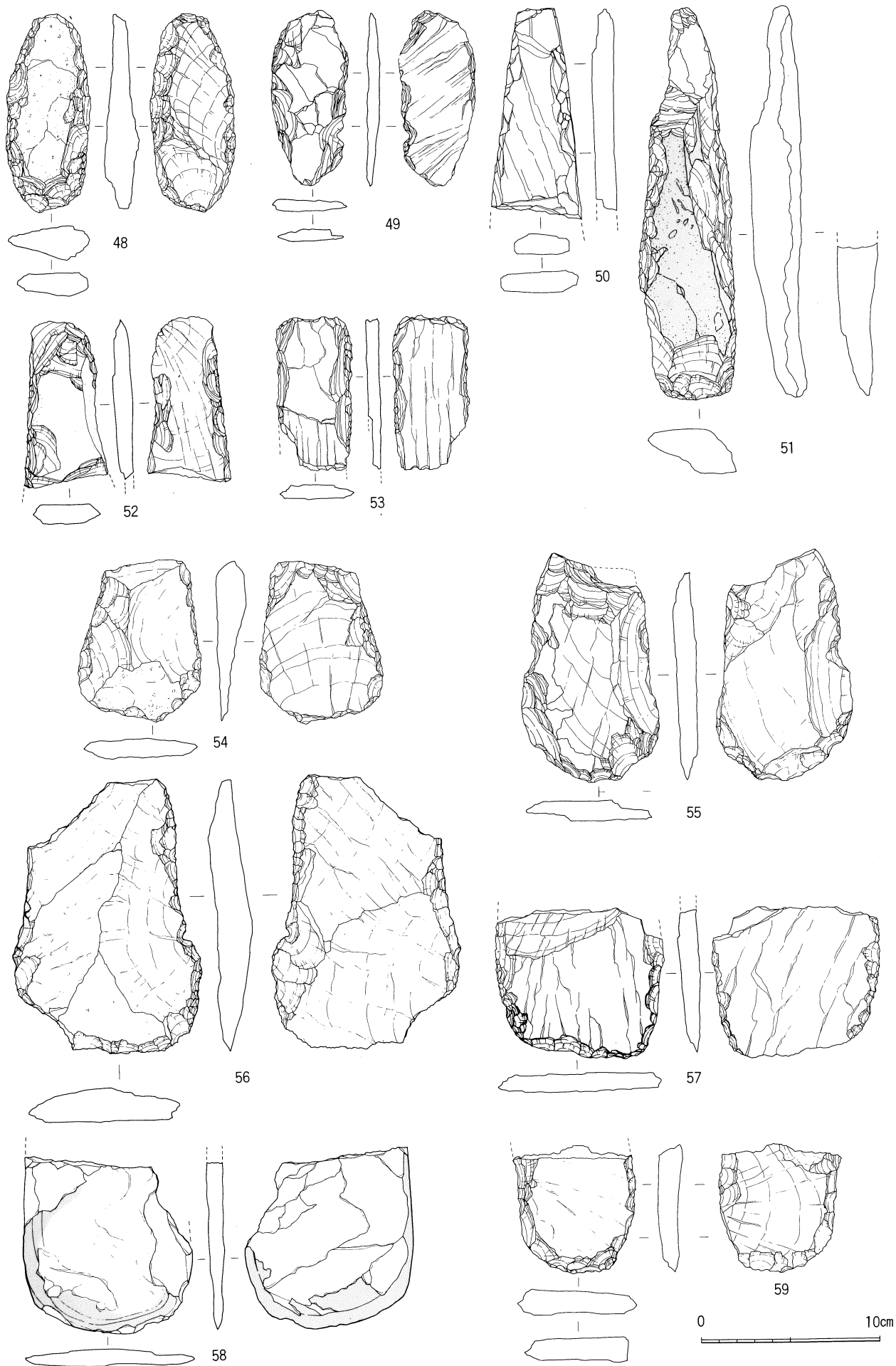
包含層から出土した遺物は、ほとんどが縄文時代晩期の所産のもので口縁部に突起がつくものや鍵状口縁を持つ浅鉢、刻目や無刻目の突帯が巡る深鉢など縄文晩期でも中葉から後半にかけて出現する遺物が主体となる。そこに石鏃や扁平打製石斧、磨石や石錘といった石器が伴う。石器の組成は石鏃28点、スクレイパー2点、石錐1点、異形石器1点、二次加工剥片5点、横刃型石器(?)1点、石核6点、扁平打製石斧18点、磨製石斧1点、敲石6点、石ノミ2点、磨石9点、敲石5点、凹石1点、石錘10点、石弾(?)16点、砥石2点、石棒(?)1点、管玉2点で、用いられた石材は石鏃など、剥片石器の大半は姫島産黒曜石とサヌカイトが主となる。また扁平打製石斧は結晶片岩と輝石安山岩、ヒン岩を用いる。磨石や石錘は主に安山岩が用いられている。さらに石棒(?)は千枚岩、管玉にはヒスイやメノウが用いられている。(第12表)



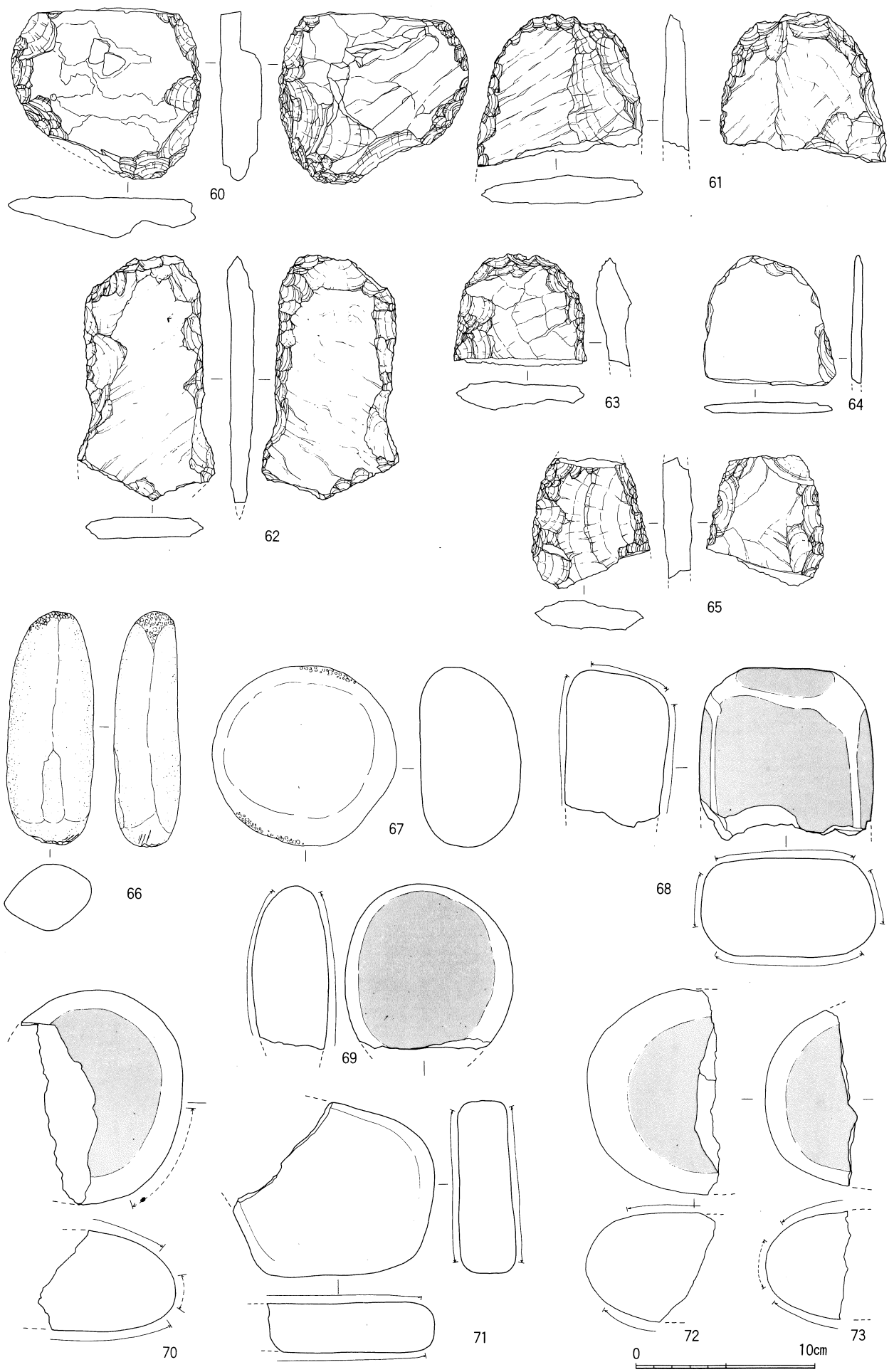
第58図 包含層出土石器実測図(1)



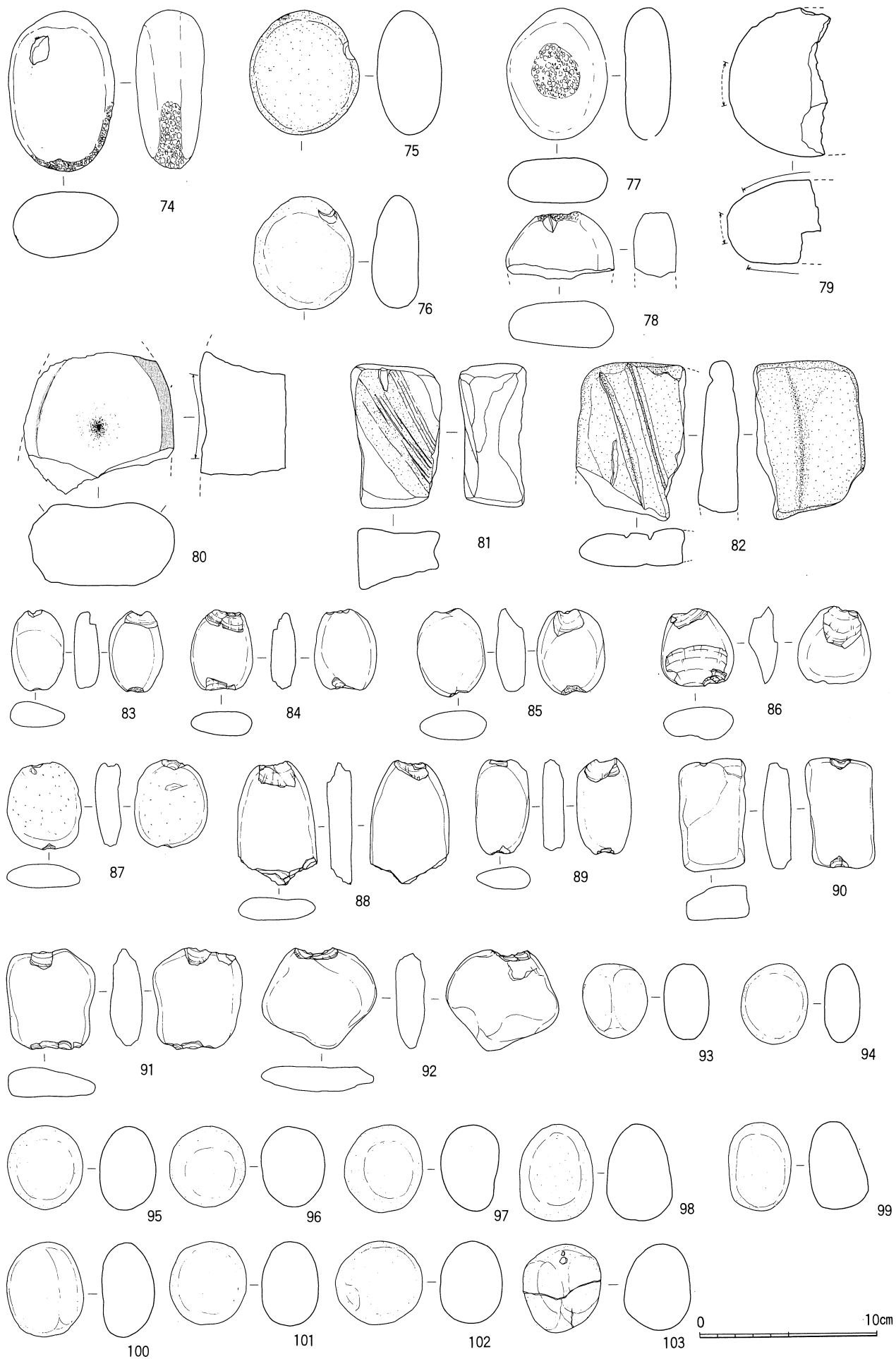
第 59 图 包含層出土石器实测图 (2)



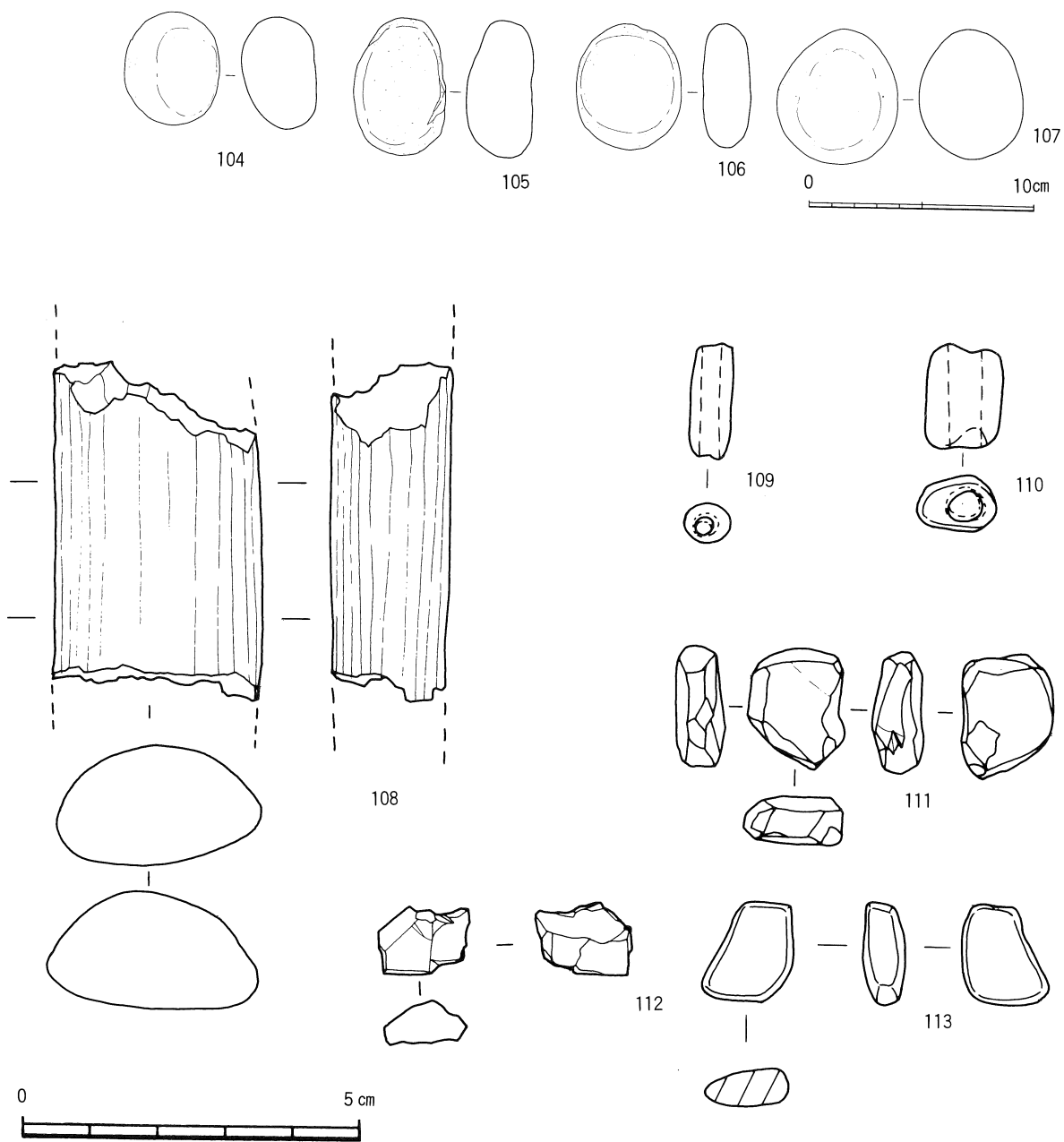
第60图 包含層出土石器实测图 (3)



第 61 图 包含層出土石器实测图 (4)



第 62 图 包含層出土石器实测图 (5)



第63図 包含層出土石器実測図(6)

第9表 二反田地区出土石器観察表(1)

挿図番号	出土地点	遺物番号	種類	石材	法量 (cm・g)				備考
					長さ	幅	厚さ	重量	
1	H1	112	石鏃	姫島産黒曜石	1.7	1.7	0.5	0.6	両脚欠
2	G2	19	石鏃	姫島産黒曜石	2.5	1.3	0.3	0.7	片脚欠
3	E4	829	石鏃	姫島産黒曜石	2.0	1.4	0.4	1.0	完形
4	D3	一括	石鏃	姫島産黒曜石	1.9	1.2	0.4	0.7	片脚欠
5	G2	29	石鏃	姫島産黒曜石	1.2	1.4	0.3	0.8	両脚欠
6	I2	一括	石鏃	姫島産黒曜石	2.3	1.2	0.3	0.7	ほぼ完形
7	F3	183	石鏃	姫島産黒曜石	2.0	1.1	0.6	1.2	完形
8	I1	3	石鏃	姫島産黒曜石	2.6	1.6	0.5	1.0	完形
9	I4	S6	石鏃	姫島産黒曜石	2.6	1.5	0.3	1.4	完形
10	D5	315	石鏃	姫島産黒曜石	3.0	2.0	0.5	3.9	完形
11	D5	303	石鏃	粘板岩	2.0	1.2	0.3	0.7	完形
12	E4	235	石鏃	粘板岩	2.7	1.6	0.5	2.5	完形
13	K2	VIII層一括	石鏃	チャート	2.4	0.9	0.4	0.6	片脚欠
14	試掘	一括	石鏃	黒曜石	2.5	1.4	0.3	1.1	完形
15	E2	S3	石鏃	サヌカイト	2.3	1.4	0.3	1.1	完形

第10表 二反田地区出土石器観察表(2)

挿図番号	出土地点	遺物番号	種類	石材	法量 (cm・g)				備考
					長さ	幅	厚さ	重量	
16	I2	S1	石鏃	サヌカイト	2.3	1.4	0.4	1.1	完形
17	G4	103	石鏃	サヌカイト	2.3	1.2	0.3	0.8	片脚欠
18	E5	S1249	石鏃	サヌカイト	2.5	1.2	0.4	1.2	完形
19	G4	55	石鏃	サヌカイト	1.7	1.7	0.4	0.8	完形
20	F3	204	石鏃	サヌカイト	1.7	1.4	0.4	0.8	完形
21	E2	S4	石鏃	サヌカイト	1.8	1.5	0.3	0.6	完形
22	G2	S15	石鏃	サヌカイト	2.1	1.6	0.4	1.0	完形
23	E5	1035	石鏃	サヌカイト	2.0	1.5	0.3	1.1	完形
24	G2	S1	石鏃	サヌカイト	2.0	1.7	0.3	1.0	完形
25	C2	S3	石鏃	サヌカイト	2.5	1.8	0.4	2.3	完形
26	G2	S14	石鏃	サヌカイト	2.4	1.9	0.5	1.5	完形
27	U4	一括	石鏃	サヌカイト	1.8	1.0	0.2	0.5	完形
28	F3	S182	石鏃	サヌカイト	2.6	1.4	0.5	1.8	完形
29	E5	353	スクレイパー	粘板岩	5.3	8.4	0.6	27.0	
30	G2	一括	スクレイパー	粘板岩	3.7	3.5	1.1	13.1	円形
31	J5	S3	異形石器	サヌカイト	7.4	1.8	0.6	5.0	
32	D5	307	石錐	姫島産黒曜石	5.3	1.9	0.6	2.8	
33	試掘	-	二次加工剥片	サヌカイト	5.2	3.7	0.7	5.7	
34	E5	705	二次加工剥片	サヌカイト	3.3	1.4	0.5	1.1	石鏃未製品?
35	F4	VIII層一括	二次加工剥片	粘板岩	4.4	2.6	0.7	3.9	石鏃未製品?
36	S3	一括	二次加工剥片	姫島産黒曜石	8.3	4.2	1.7	26.3	
37	E5	493	二次加工剥片	粘板岩	6.0	2.0	0.5	6.2	
38	F2	S4	横刃型石器?	安山岩	6.0	7.5	0.6	58.3	
39	A3	8	石核	姫島産黒曜石	3.1	5.2	2.6	34.9	
40	一括	-	石核	姫島産黒曜石	4.1	5.0	3.1	29.8	
41	T2	-	石核	姫島産黒曜石	3.6	4.2	2.1	15.0	
42	E5	495	石核	姫島産黒曜石	5.7	6.0	2.0	326.0	
43	D4	326	石核	姫島産黒曜石	4.0	5.6	1.7	19.0	
44	E5	205	石核	姫島産黒曜石	4.4	4.5	2.5	19.8	
45	G3	S14	石ノミ	緑泥片岩	7.5	2.9	1.0	38.0	完形
46	U4	VIII層	石ノミ	蛇紋岩	3.9	2.1	0.6	9.0	完形
47	J3	S9	磨製石斧	斑礫岩	6.9	4.9	1.9	61.0	刃部の一部のみ
48	J5	S4	扁平打製石斧	ヒン岩	11.0	4.6	1.8	92.0	完形
49	E5	1263	扁平打製石斧	結晶片岩	9.8	4.3	0.6	39.0	完形
50	E2	15	扁平打製石斧	結晶片岩	11.6	5.0	1.1	99.0	刃部欠
51	E5	521	扁平打製石斧	結晶片岩	21.8	5.3	2.9	334.0	ほぼ完形
52	R3	VIII層	扁平打製石斧	輝石安山岩	9.0	4.6	1.0	57.0	刃部欠
53	G2	S8	扁平打製石斧	結晶片岩	8.4	4.1	0.7	40.0	刃部欠
54	R3	VIII層	扁平打製石斧	ヒン岩	8.9	6.9	1.7	97.0	完形
55	E4	303	扁平打製石斧	粘板岩	12.8	7.5	1.1	155.0	基部欠
56	C4	41	扁平打製石斧	輝石安山岩	15.2	10.4	2.0	341.0	基部欠
57	一括	-	扁平打製石斧	輝石安山岩	8.1	9.5	1.1	117.0	基部欠 刃部研磨
58	一括	-	扁平打製石斧	結晶片岩	10.0	9.6	0.9	129.0	基部欠
59	H2	S19	扁平打製石斧	ヒン岩	7.0	6.6	1.5	92.0	基部欠
60	E4	470	扁平打製石斧	輝石安山岩	9.6	10.8	2.2	271.0	基部欠
61	F3	8	扁平打製石斧	輝石安山岩	8.5	8.8	1.6	133.0	刃部欠
62	G1	2	扁平打製石斧	ヒン岩	13.6	7.7	1.4	189.0	刃部欠
63	G2	S13	扁平打製石斧	輝石安山岩	6.2	7.1	1.9	94.0	刃部欠
64	E5	7	扁平打製石斧	砂岩	7.2	7.5	0.5	61.0	刃部欠
65	E5	1080	扁平打製石斧	輝石安山岩	7.3	6.6	1.6	89.0	基部・刃部欠
66	試掘	-	敲石	安山岩	12.8	4.8	3.7	324.0	
67	D5	129	磨石	安山岩	10.0	10.3	5.6	867.0	敲石と兼
68	表採	-	磨石	安山岩	9.1	9.7	5.7	983.0	4面使用
69	F5	58	磨石	安山岩	9.4	9.2	4.2	585.0	2面使用
70	C2	S1	磨石	硬質砂岩	11.9	7.7	5.6	729.0	敲石と兼
71	D2	15	磨石	安山岩	9.5	11.2	3.0	545.2	2面使用
72	B1	9	磨石	硬質砂岩	7.1	11.3	6.0	625.0	2面使用
73	E3	161	磨石	安山岩	9.8	5.1	6.0	393.0	敲石と兼
74	E5	78	敲石	安山岩	9.0	5.9	3.8	248.0	磨石と兼

第11表 二反田地区出土石器観察表(3)

挿図番号	出土地点	遺物番号	種類	石材	法量 (cm・g)				備考
					長さ	幅	厚さ	重量	
75	F4	63	磨石	安山岩	6.9	6.2	3.6	217.0	全面使用
76	G2	S10	磨石	安山岩	6.2	5.6	2.6	121.0	片面使用
77	E5	1329	敲石	安山岩	7.4	5.6	2.5	143.0	片面使用
78	H2	S12	敲石	安山岩	3.7	6.1	2.4	80.0	1/2欠
79	J2	14	敲石	安山岩	8.4	5.6	4.6	296.9	1/2欠
80	試掘	—	凹石	安山岩	4.0	4.2	2.3	453.0	被熱で剥落
81	E2	S18	砥石	軽石	8.1	5.0	3.2	142.0	刃砥
82	E5	1180	砥石	砂岩	8.8	6.0	2.0	124.0	刃砥
83	D5	368	石錘	安山岩	4.7	3.0	1.4	26.0	円～楕円
84	E5	9	石錘	安山岩	4.5	4.5	1.3	32.0	円～楕円
85	J3	13	石錘	安山岩	5.0	3.2	1.3	41.0	円～楕円
86	E4	196	石錘	頁岩	4.4	4.2	1.6	33.0	円～楕円
87	D5	316	石錘	安山岩	5.0	3.8	1.7	41.0	円～楕円
88	I2	7	石錘	安山岩	12.7	4.5	1.3	60.5	円～楕円
89	F3	529	石錘	頁岩	5.4	3.0	1.2	28.0	円～楕円
90	E5	605	石錘	安山岩	6.2	3.7	1.6	73.0	方形
91	E5	222	石錘	安山岩	5.7	5.0	1.7	77.0	方形
92	試掘	—	石錘	安山岩	5.8	6.4	1.7	51.0	方形
93	E5	1245	石弾?	安山岩	4.2	3.6	2.5	49.0	
94	H2	S20	石弾?	安山岩	4.5	3.8	2.0	33.0	
95	H3	55	石弾?	安山岩	4.7	4.2	3.1	52.0	
96	E4	407	石弾?	安山岩	4.5	4.3	3.5	84.0	
97	I4	S5	石弾?	安山岩	4.8	4.4	3.4	90.0	
98	G2	S29	石弾?	安山岩	5.4	4.1	3.6	97.0	
99	F2	S15	石弾?	安山岩	4.9	3.5	3.2	84.0	
100	D4	32	石弾?	安山岩	5.4	4.3	2.9	80.0	
101	E5	一括	石弾?	安山岩	4.6	4.5	3.3	71.5	
102	E4	679	石弾?	安山岩	4.6	4.7	3.5	72.0	
103	E4	426	石弾?	安山岩	4.8	4.4	3.7	100.0	
104	D4	30	石弾?	軽石	6.1	4.1	2.8	48.0	
105	G2	511	石弾?	安山岩	6.0	4.1	2.8	48.0	
106	T3	VII層	石弾?	安山岩	6.0	4.5	2.0	45.0	
107	F5	162	石弾?	安山岩	5.6	4.7	2.1	78.0	
108	R2	—	石棒?	千枚岩	4.7	3.1	1.8	45.0	基部・先端欠
109	F2	表採	管玉	ヒスイ	1.7	0.7	—	0.8	
110	T3	VIII層	管玉	メノウ	1.5	1.2	—	2.1	
111	一括	—	原石類	ヒスイ	1.8	1.3	0.7	2.8	加工有り
112	E5	1084	原石類	ヒスイ	1.0	1.3	0.5	1.0	加工無し
113	D5	116	原石類	ヒスイ	1.5	1.5	0.7	1.8	加工有り

第12表 石器と石材

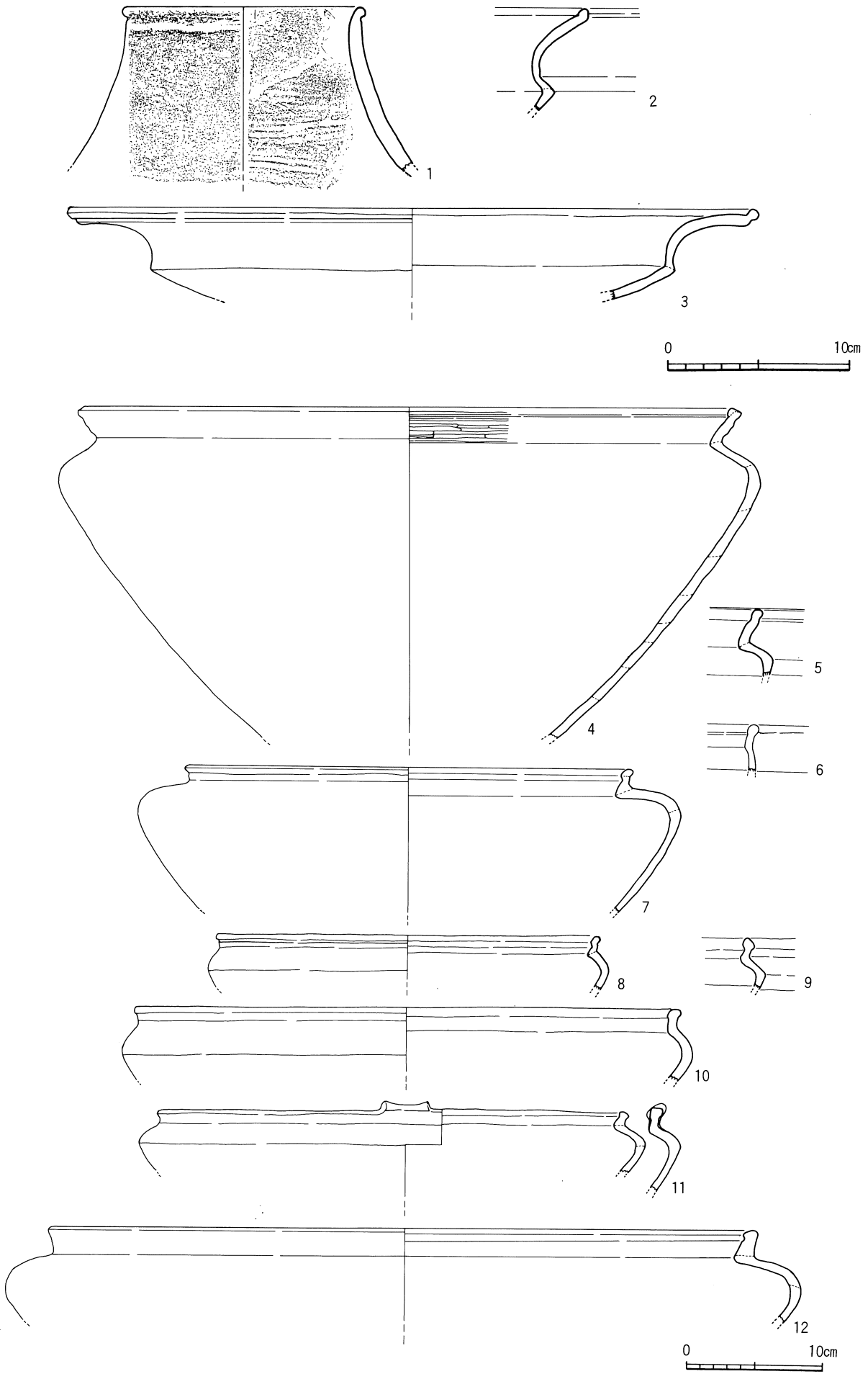
器種 \ 石材	姫島産黒曜石	黒曜石	サヌカイト	粘板岩	チャート	緑泥片岩	蛇紋岩	斑糲岩	結晶片岩	輝石安山岩	ヒン岩	安山岩	硬質砂岩	軽石	頁岩	砂岩	千枚岩	ヒスイ	メノウ	計	
	石鏃	10	1	14	2	1															28
スクレイパー				2																	2
異形石器			1																		1
石錘	1																				1
二次加工剥片	1		2	1																	5
横刃型石器?												1									1
石核	6																				6
石ノミ						1	1														2
磨製石斧								1					1								
扁平打製石斧				1					5	7	4										18
磨石												7	2								9
敲石												5						5			
凹石												1									
砥石														1		1					2
石錘												8									10
石弾?										14					1						15
石棒?																					1
管玉																					1
計	18	1	17	7	1	1	1	1	5	21	4	20	2	2	2	2	1	1	1	1	110

土器

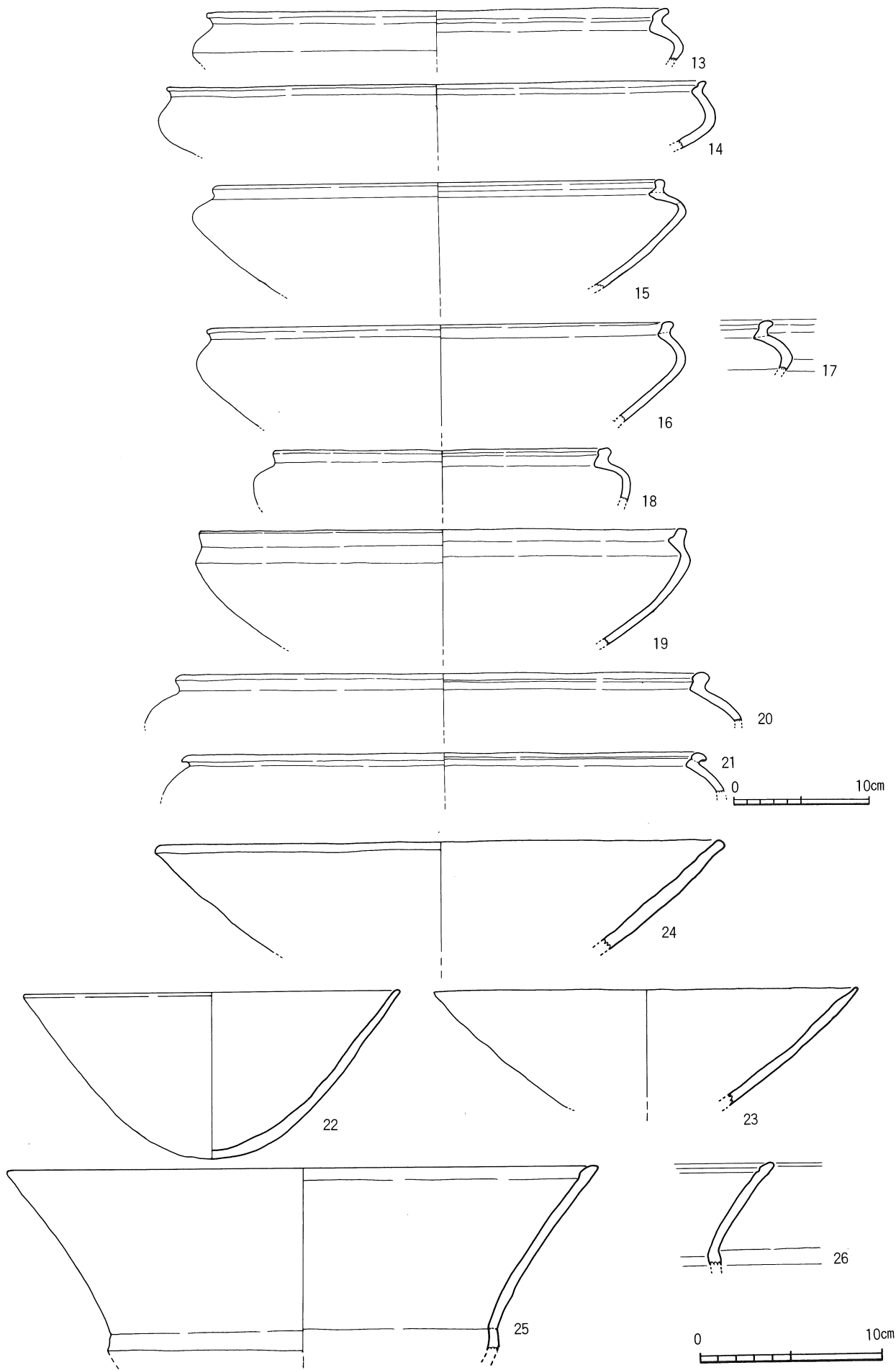
包含層から出土した土器は、縄文晩期中葉から後半にかけてのものが大半を占める。第64図から第85図、観察表は第14表から第19表に示している。

このうち浅鉢E類、深鉢K類は縄文晩期前半～中葉までさかのぼるものと思われる。また、浅鉢H類、深鉢N類は刻目突帯文土器の範疇に含まれるもので、晩期後半に属するものであろう。それ以外の浅鉢はいわゆる鍵状口縁をもつものだが、口縁部の作りがやや退化傾向にある。上菅生B式の範疇に含まれる土器だが、やや新しい時期と考えられる。深鉢は、無刻目の突帯が付くものが含まれるが、指でつまみ出したような低い張り出ししか持たないもの(Ma類)と突帯を張り付けた第13表 土器分類表

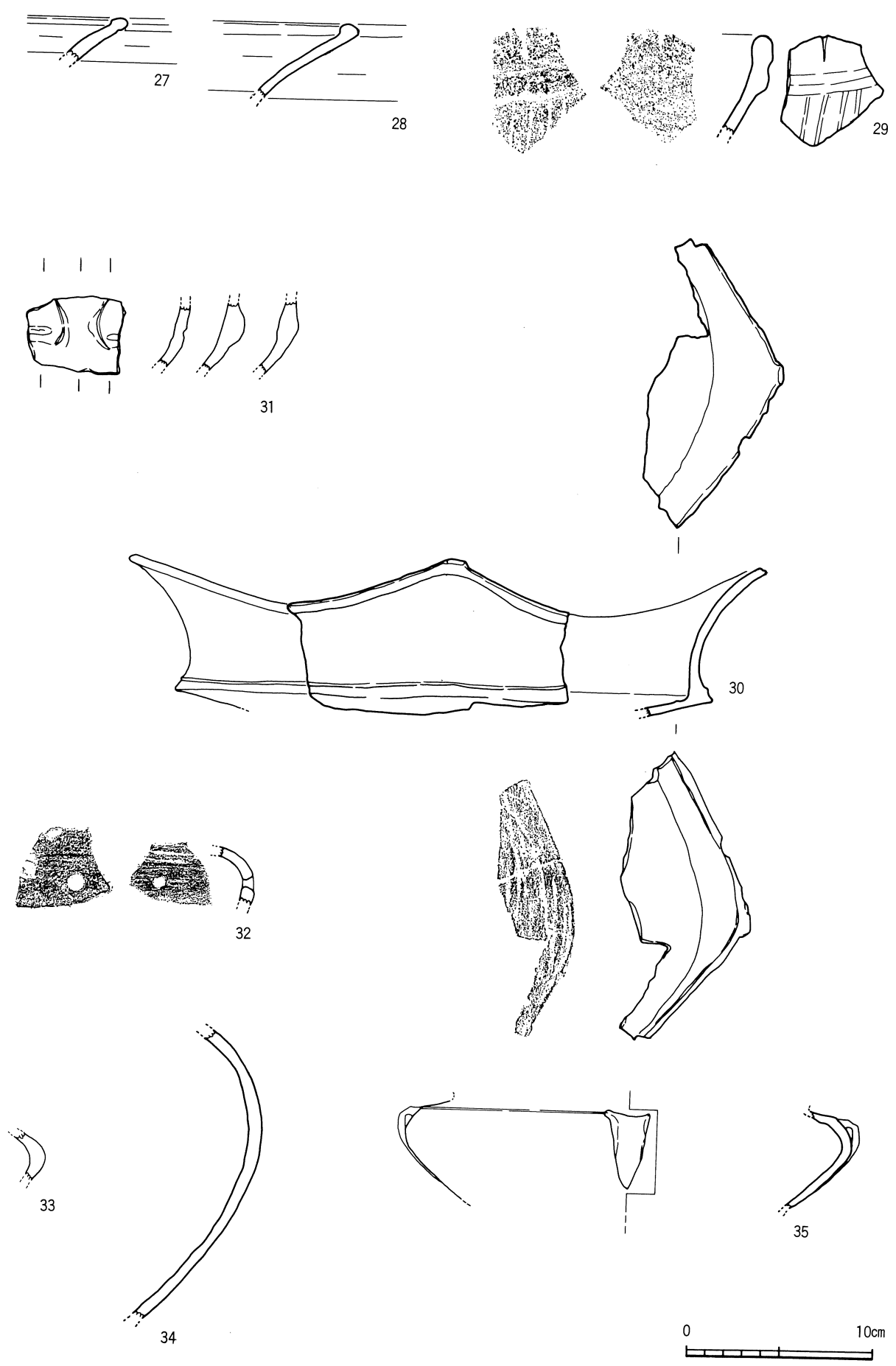
器種		分類	口縁部の形状	成形の特徴	
壺		A		口縁端部が丸く肥厚し、外面に1条の沈線	
		B		口縁端部の肥厚部がAに比べて長く伸びる傾向で沈線も消失	
浅鉢	精製	C	素口縁	1 素口縁のみ 2 素口縁+退化気味の突起 3 素口縁で口縁端部が内面に丸く肥厚する	
		D	鍵状口縁	退化が進む	
	粗製	E		口縁は長く外反し、端部が丸く肥厚する	
		F	素口縁	端部が丸く肥厚するものあり	
		G	鍵状口縁	1 長く比較的しっかりした作り 2 玉状に短く寸詰まる突起がつくもの有り 3 退化が進み、さらに短く先細る	
		H	逆「く」字状口縁	屈曲部に刻目を施すものあり	
方形浅鉢		I		1 口縁部が台形状に肥厚し波状部の頂部に突起がつく 2 屈曲部に細かい刻目を施す	
特殊な形態の浅鉢		J		胴部最大径付近に装飾を施したり、 口縁部に刻目入りの突起+沈線など	
深鉢		K		口縁部が内湾し、端部は短く内傾して内面に稜が残る	
		L	素口縁	1 胴部に屈曲あり 2 屈曲なし 3 素口縁+突起 4 上半部に数条の斜行沈線 5 口唇部に刻目	
		M	無刻目突帯	a	指で突帯状につまみだす 1 突帯状につまみ出す 2 突起がつく 3 数条の斜行沈線を施す 4 口唇部に刻目
				b	突帯張り付け 1 突帯のみ 2 退化した突起 3 上半部に数条の斜行沈線 4 口唇部刻目 5 突帯が波状に巡る
N	刻目突帯	1 工具等施文 2 指施文 3 指施文の可能性ある			
鉢		O		そろばん玉状の胴部に長めの口縁部で端部は内面に丸く肥厚	
		P		胴部上半部で屈曲し内湾しながら立ち上がる口縁がつく	
		Q		丸底で壺に近い形状	
		R		手づくねの痕跡を明瞭に残す浅い鉢	
底部		S	鉢	丸底	
		T	浅鉢 or 鉢	高台がつく	
		U	深鉢	1 「ハ」字状に開き上げ底 2 ほぼ垂直に立ち上がり上げ底 3 上げ底気味 4 平底	



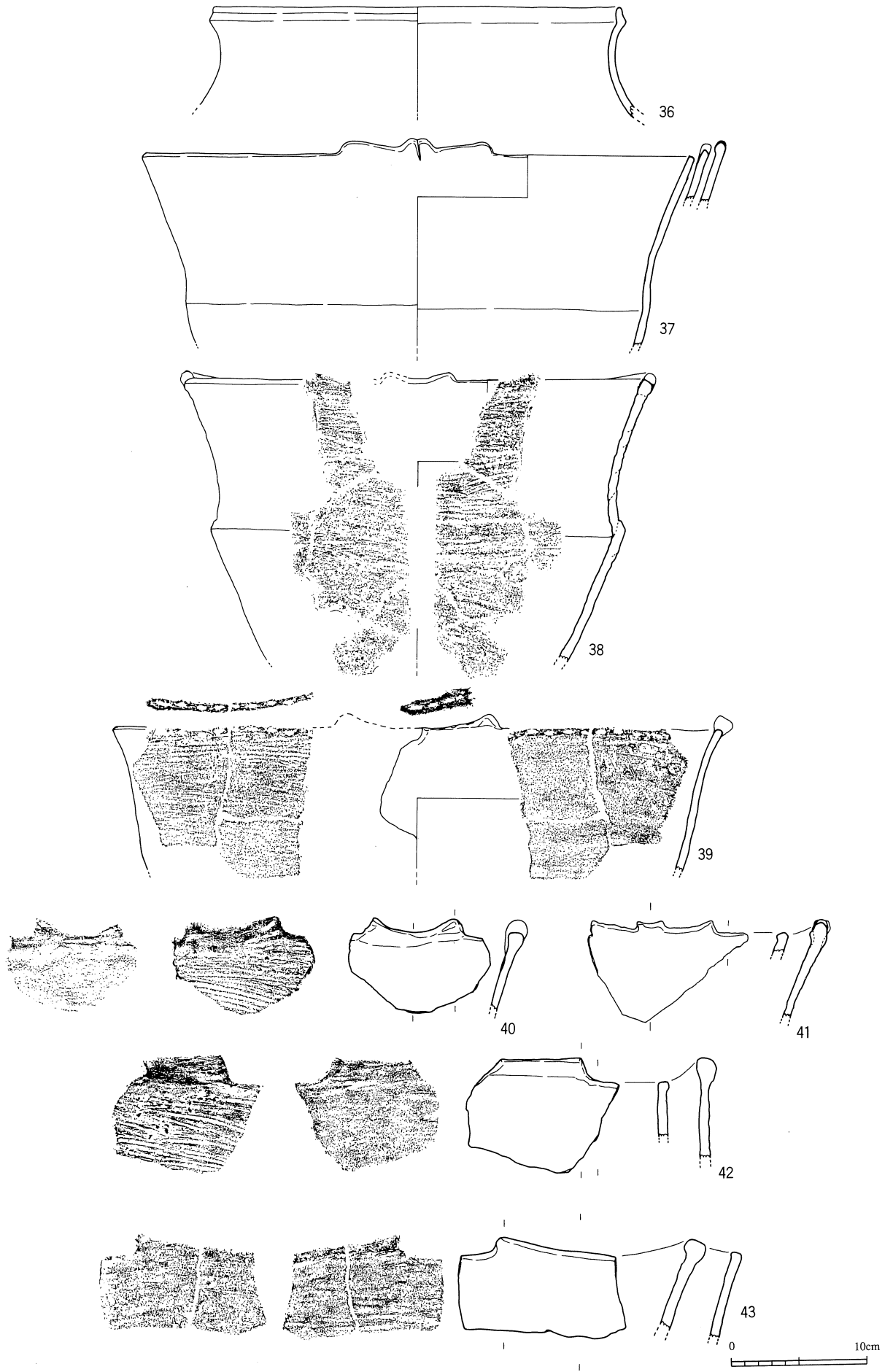
第64图 包含層北半部出土土器实测图(1)



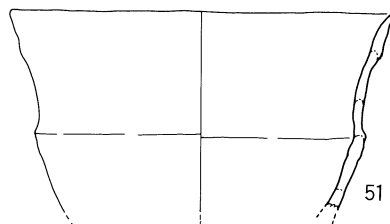
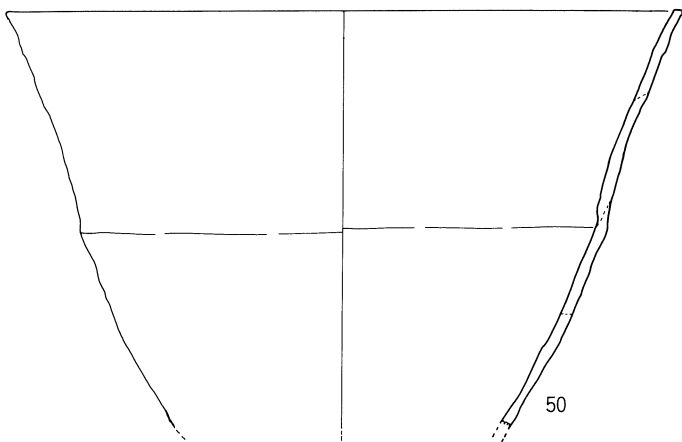
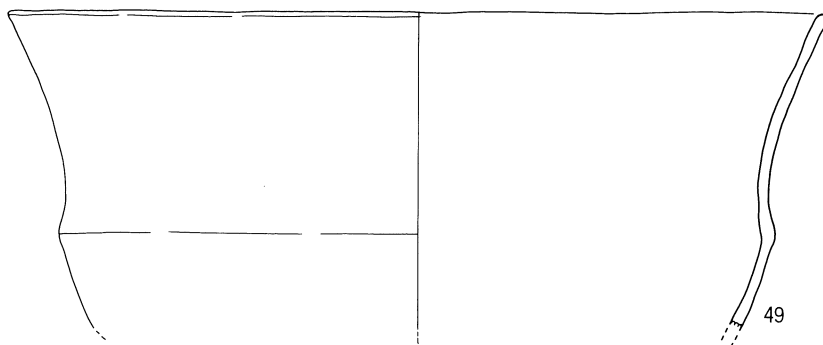
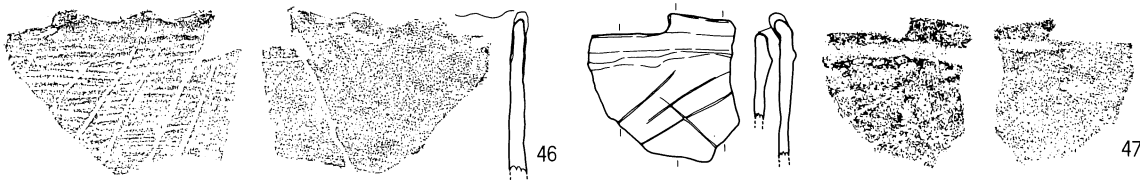
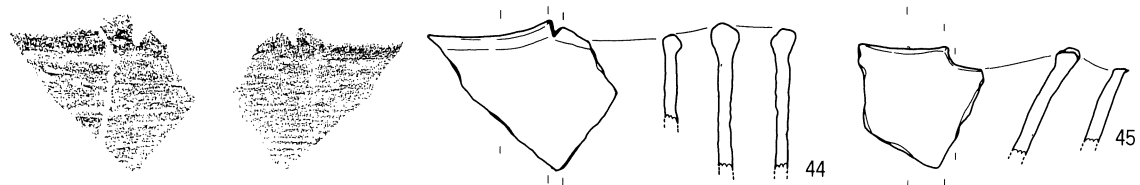
第 65 图 包含層北半部出土土器実測图 (2)



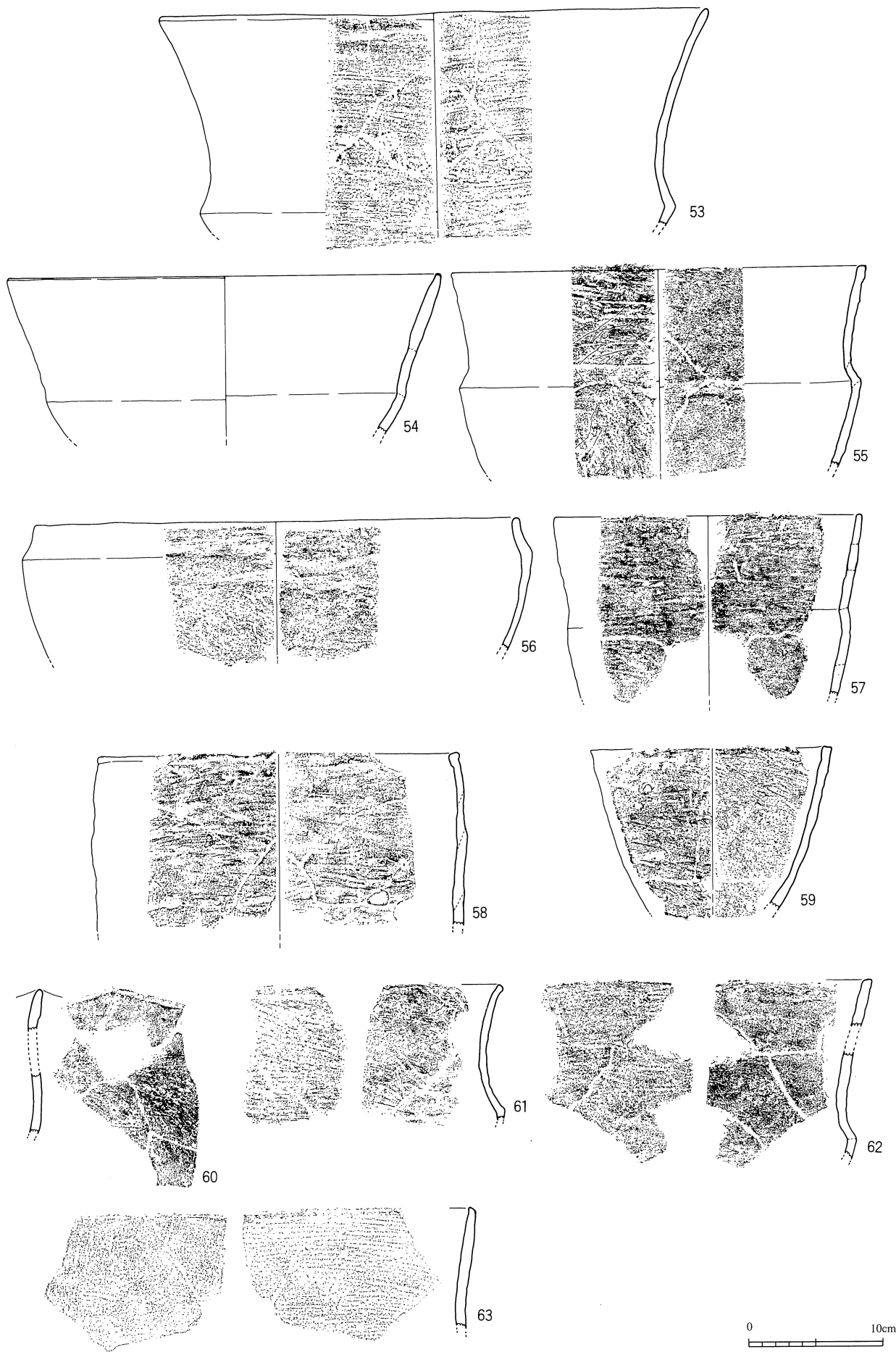
第 66 图 包含層北半部出土土器実測图 (3)



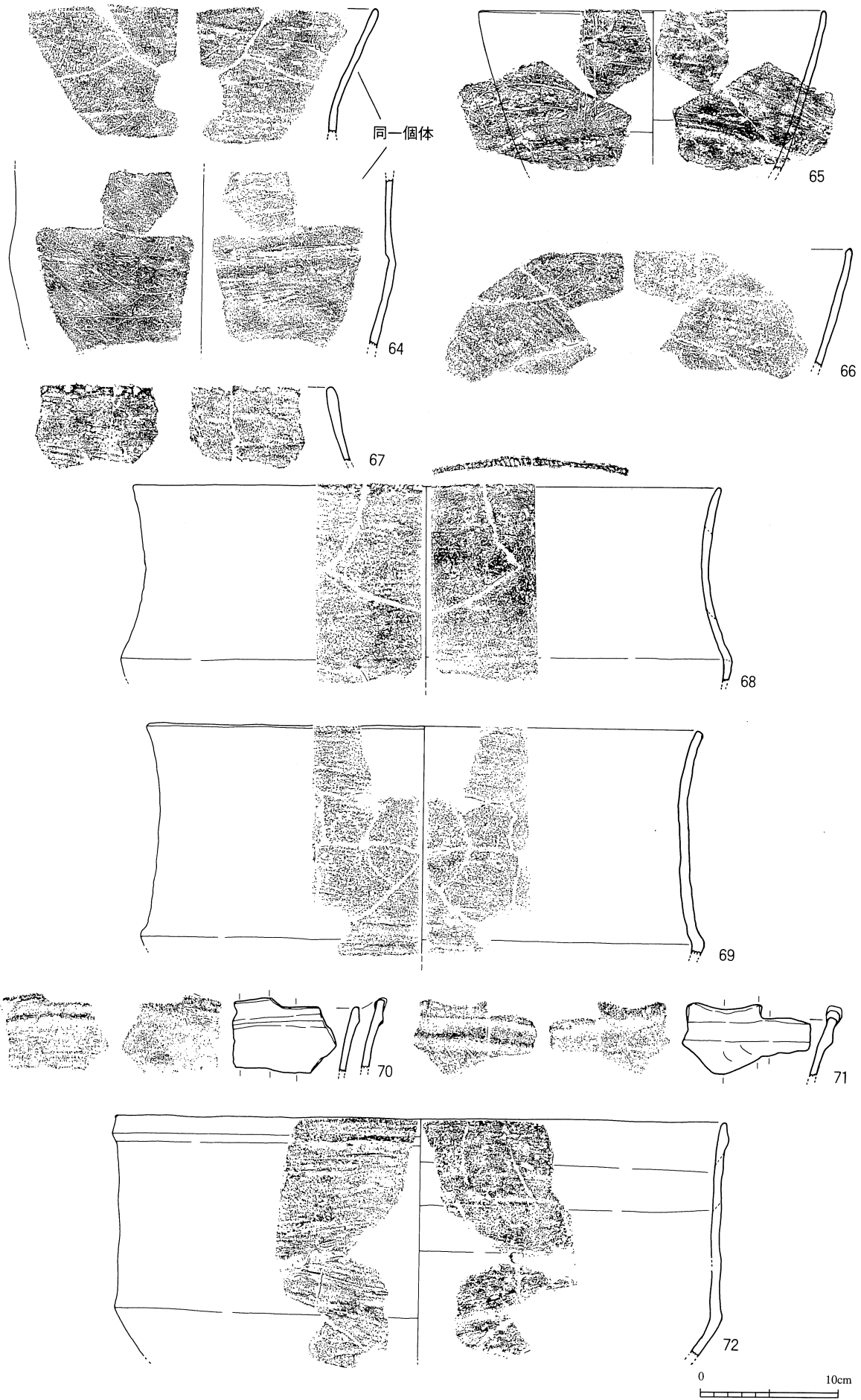
第67图 包含層北半部出土土器実測图(4)



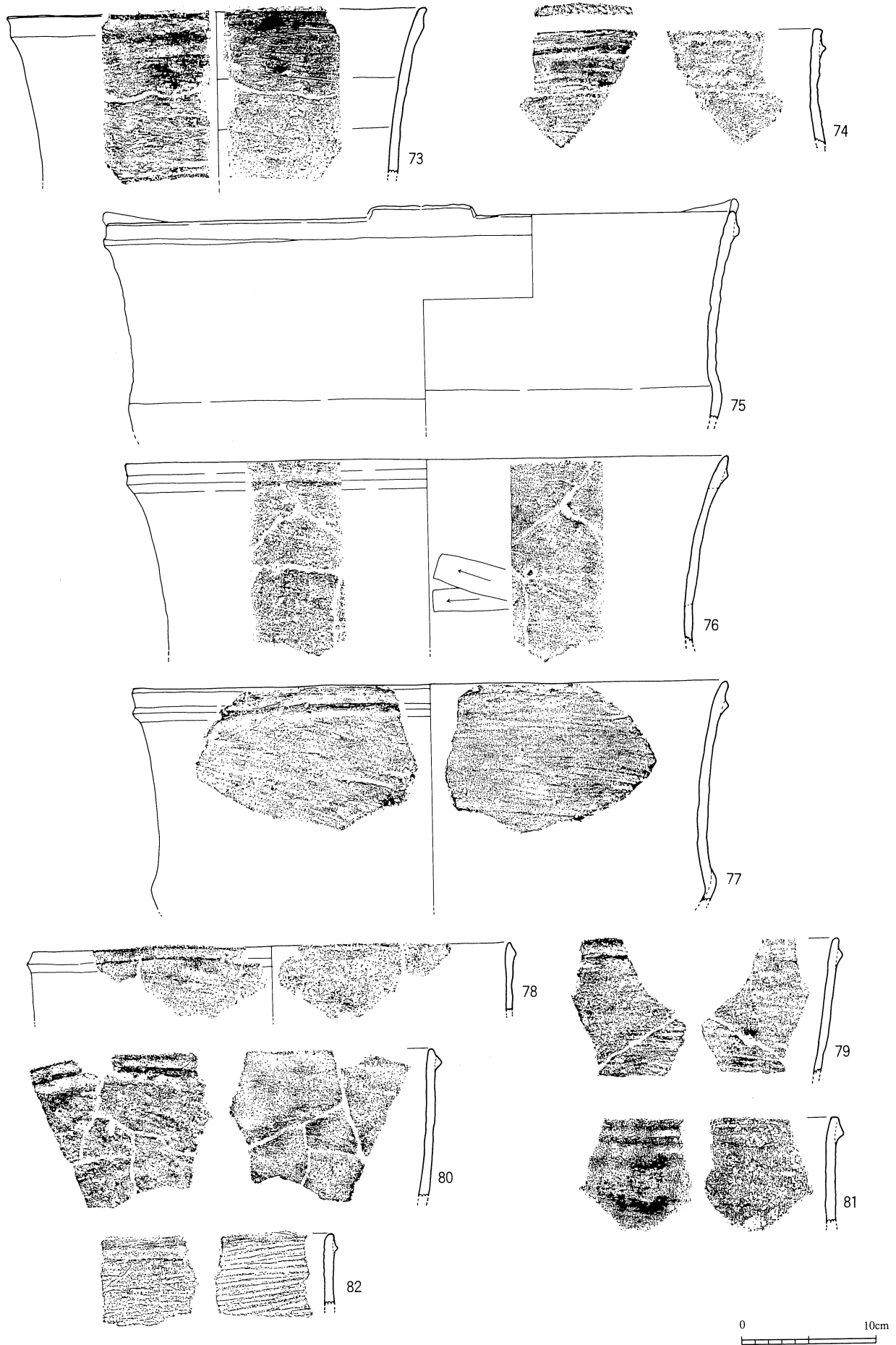
第68图 包含層北半部出土土器实测图(5)



第69图 包含層北半部出土土器实测图(6)



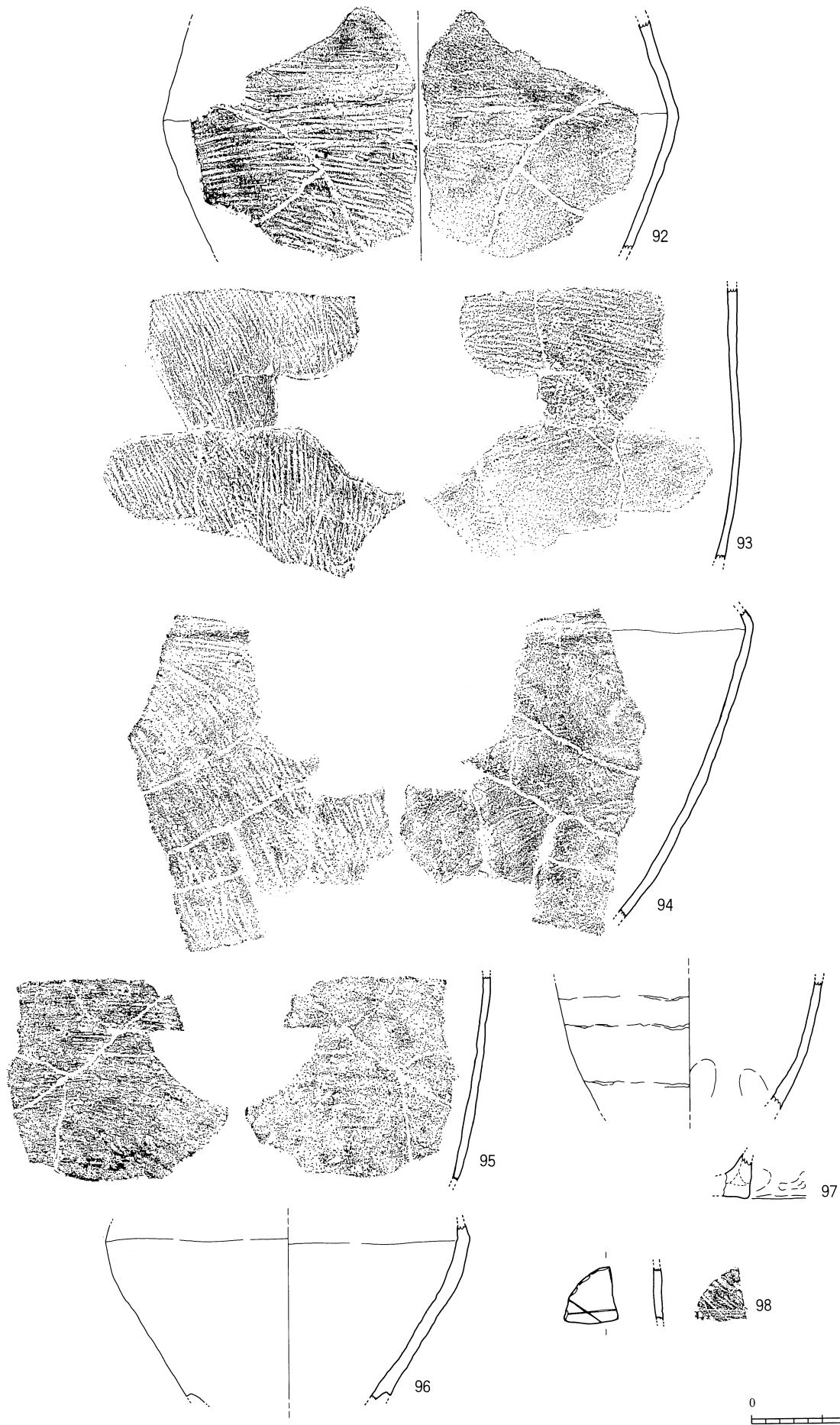
第70図 包含層北半部出土土器実測図（7）



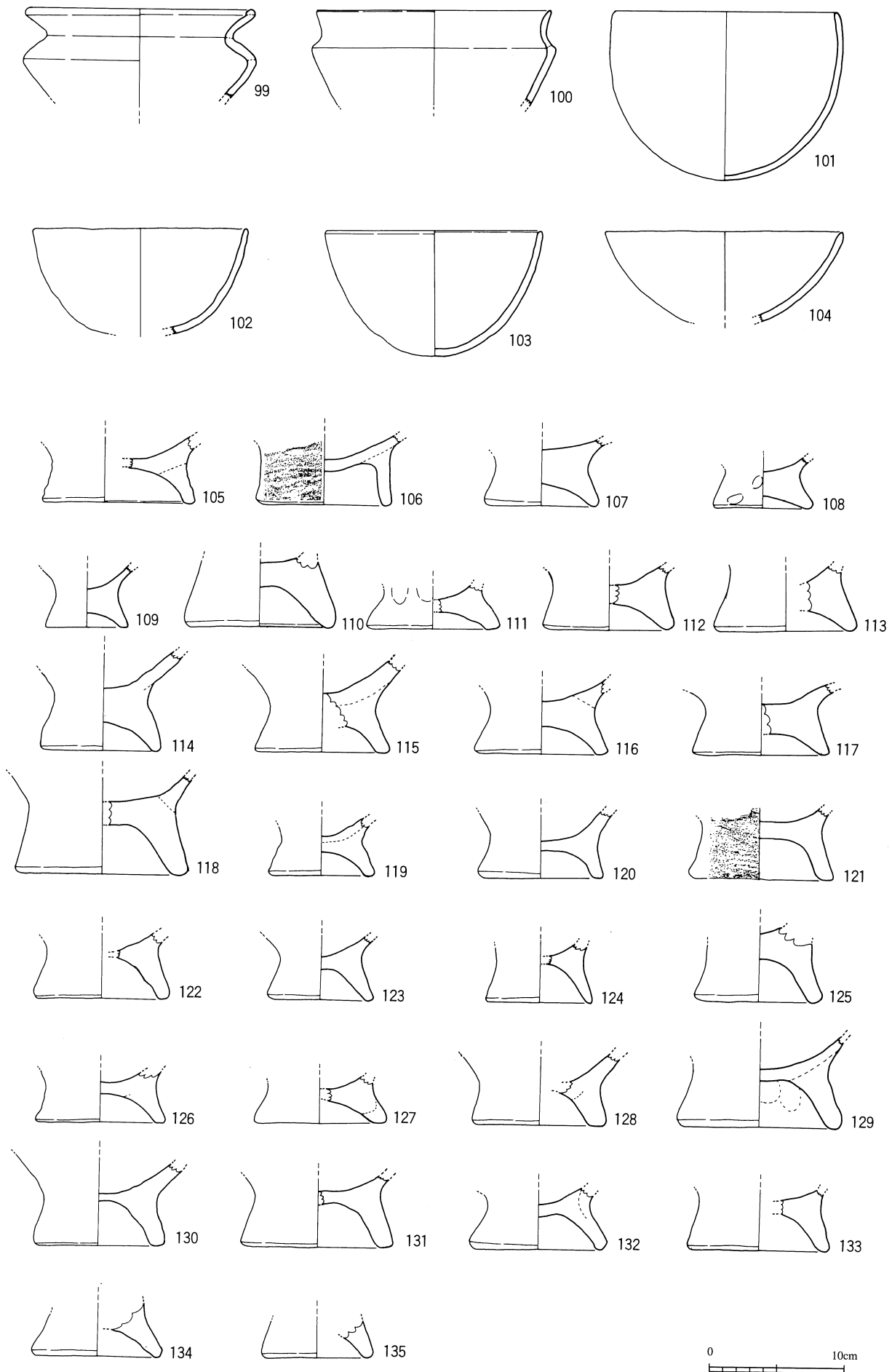
第71図 包含層北半部出土土器実測図(8)



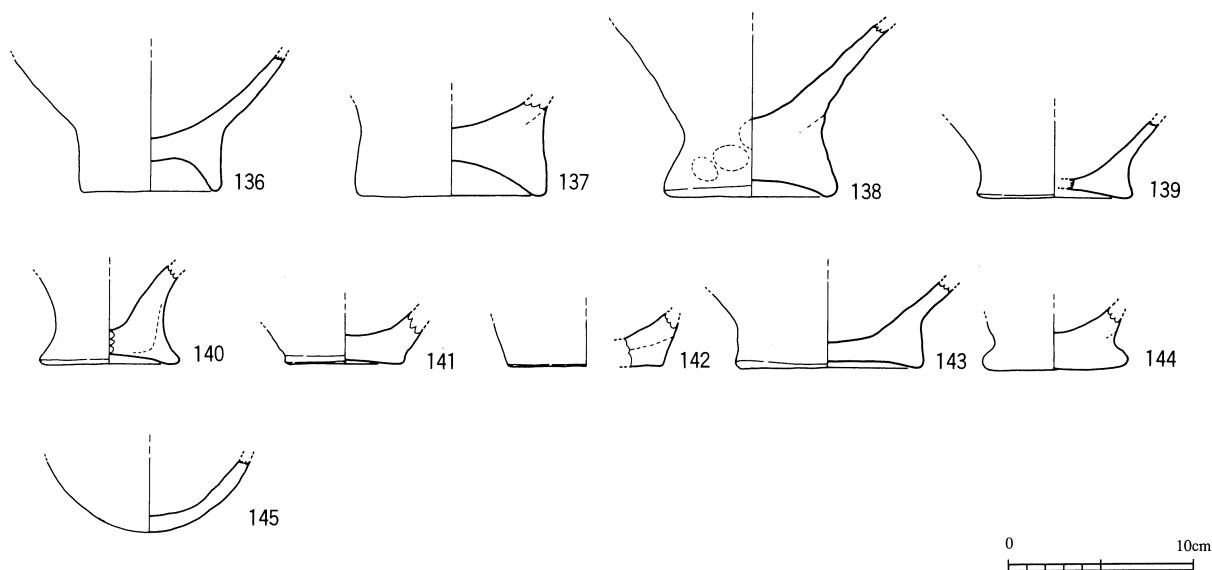
第72图 包含層北半部出土土器实测图(9)



第73图 包含層北半部出土土器实测图 (10)



第74图 包含層北半部出土土器实测图 (11)

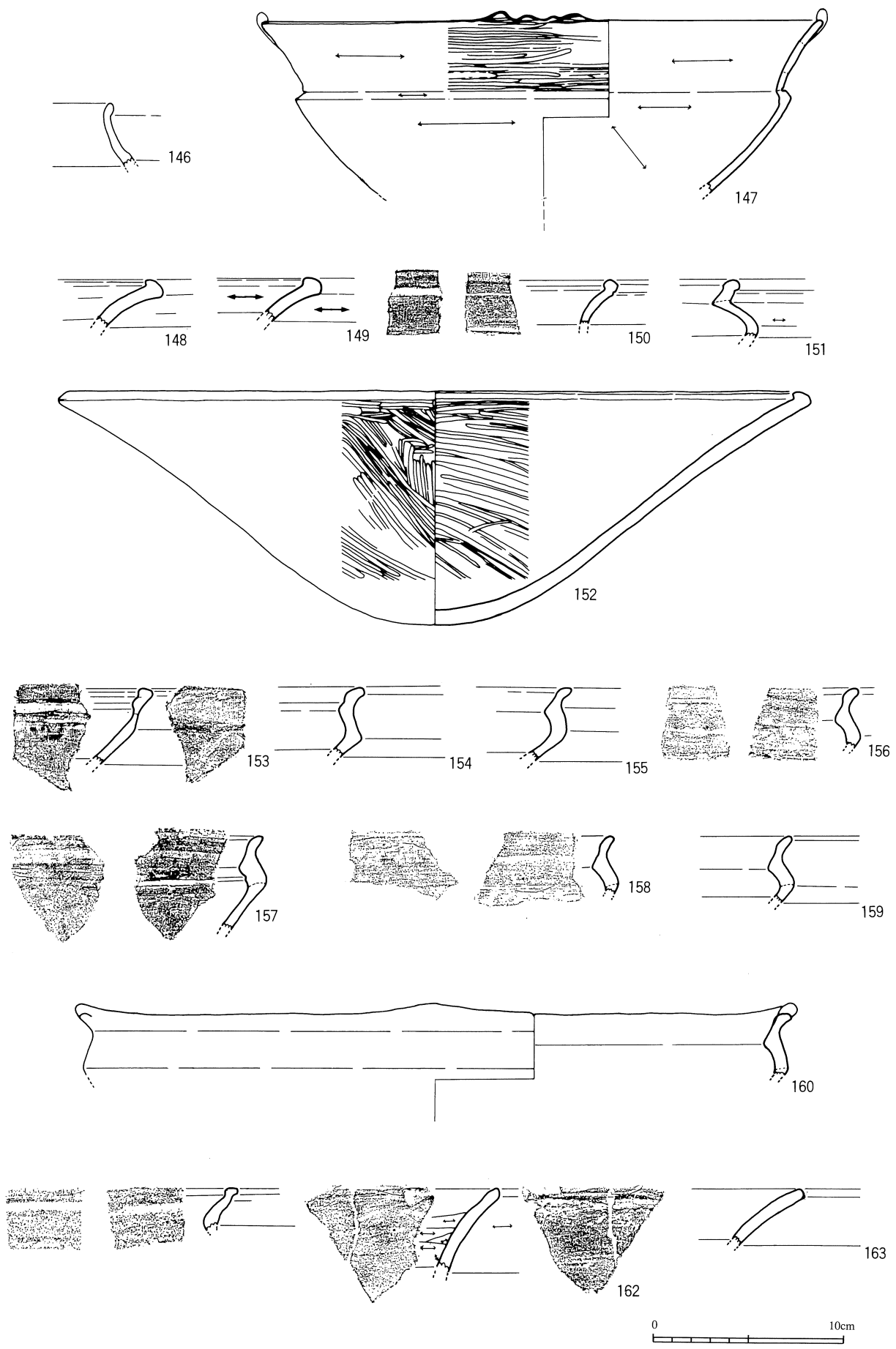


第75図 包含層北半部出土土器実測図(12)

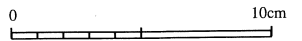
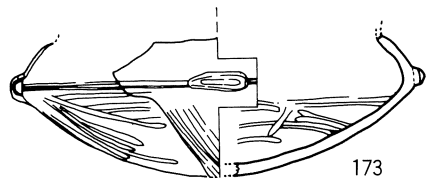
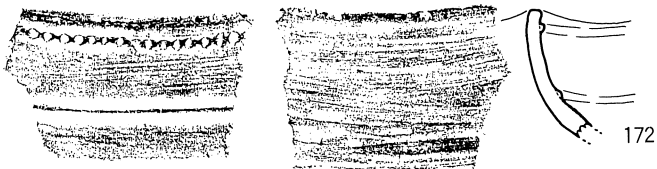
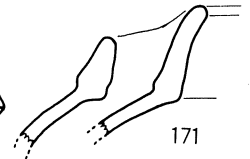
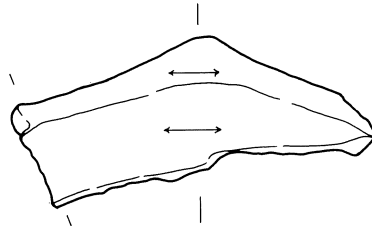
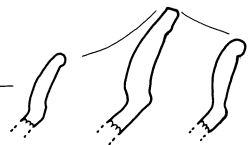
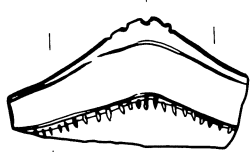
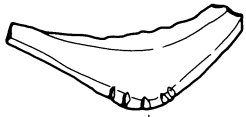
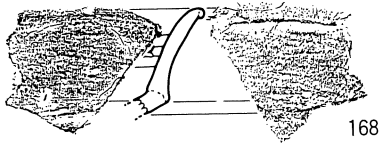
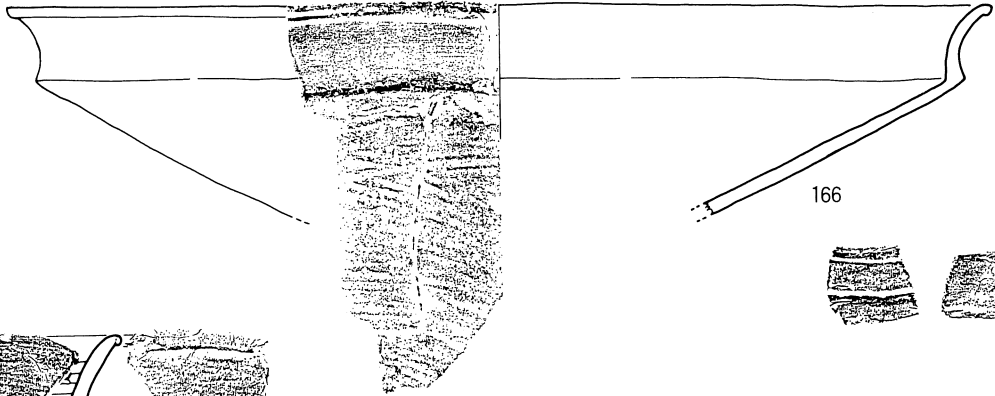
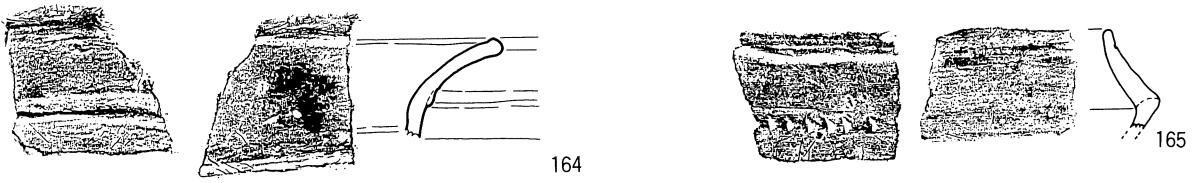
痕跡が明瞭なもの(Mb類)に大別される。刻目突帯文土器は工具による施文と指による施文の比率は若干後者が多い。刻目突帯文土器のなかでも古式の様相を呈するものと思われる。鱗状あるいはリボン状突起についてもやや退化気味に作られているもの(浅鉢C2類、深鉢L3類、Ma2類)と非常に退化したもの(浅鉢G2類、深鉢Mb2類)が出土している。さらに深鉢には胴部外面上半部に2~3条の細い沈線を斜行ないしは波状に施文したり(深鉢L4類、Ma3類、Mb3類)口唇部に細かい刻目を施すもの(L5類、Ma4類、Mb4類)が含まれる。いずれも瀬戸内海沿岸地域の影響を受けたと考えられる一群である。その他、方形の浅鉢(I類)や浅鉢の胴部に把手状の装飾を施すもの(J類)などさまざまなバリエーションをもつ。遺物の分布状況及び遺物の形態から、調査区を二分し北半部と南半部の大きく2グループに分かれる様相が見られた。

北半部(A~Kグリッド)で出土した土器を詳細に見ると、浅鉢についてはいわゆる逆「く」字状に屈曲するタイプ(H類)のものはまったく出土しておらず、口縁部がやや内湾しながら外反し、端部が丸く肥厚する浦久保式に近い様相を持つタイプ(C3類・E類)がわずかに出土し、残りはすべて素口縁(C1類・C2類・F類)か鍵状口縁(D類・G1類・G2類)である。

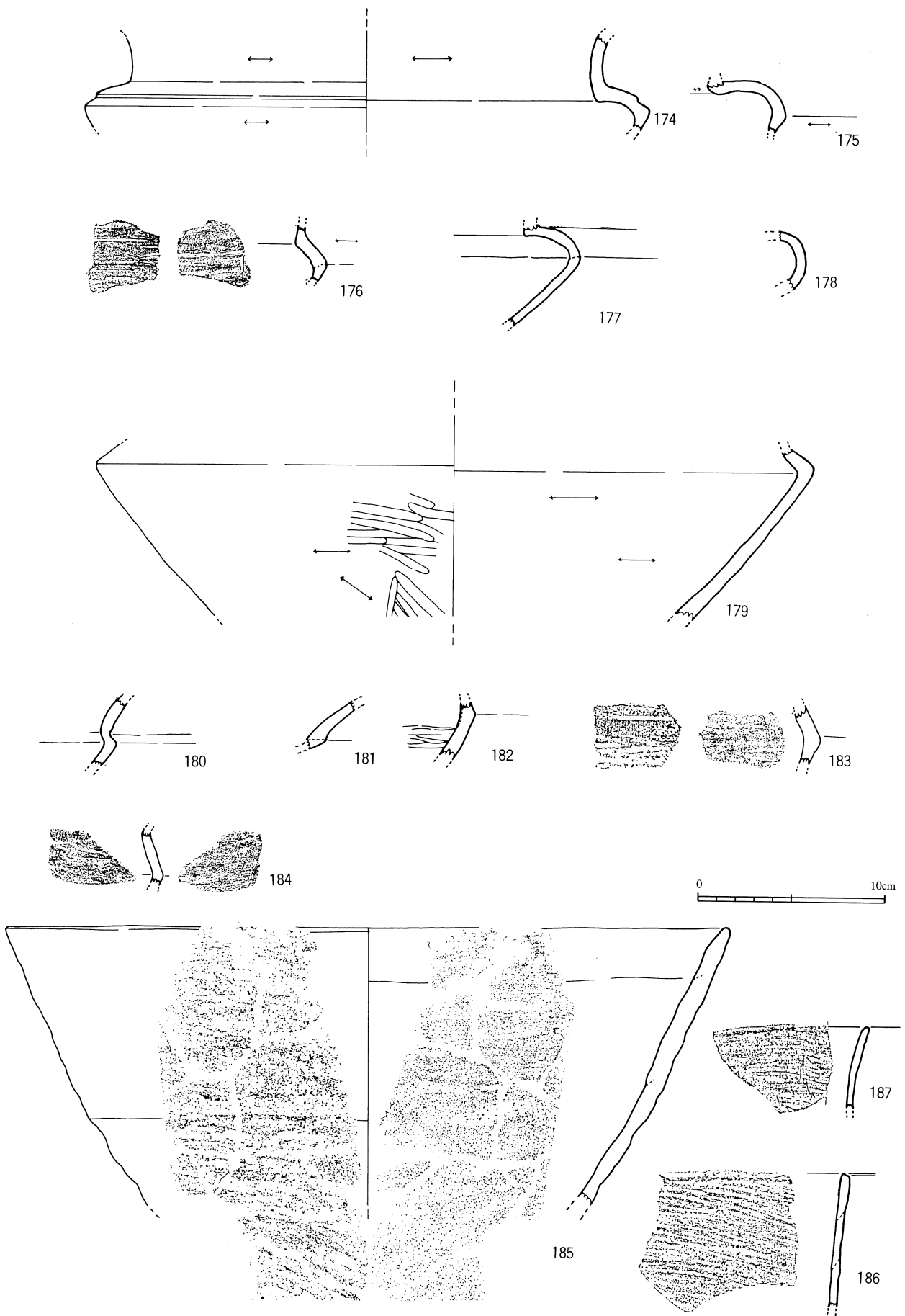
ただし鍵状口縁は明瞭な段を持つしっかりした作りのもの(G1類)は少なく、大半がやや寸詰まり気味で、退化傾向にあるもの(D類・G2類)が主体となる。また頂部に刻目を施し口縁部を肥厚させるタイプの方形浅鉢(I1類)が出土している。深鉢では、口縁部の内面に稜の残るやや古式のもの(K類)と素口縁タイプ(L類)、無刻目突帯(M類)が主体で、刻目突帯はほとんど出土しない。無刻目突帯については、突帯を貼り付けず指などでつまみ出したタイプ(Ma類)が混じる。浅鉢、深鉢とも口縁部にリボン状の突起がつくものもあるが形がやや崩れかけたものが多く、これも退化傾向にあるといえる。さらに、深鉢には口唇部に細かい刻目を施すものや胴部上半部を中心としてへら状工具で斜行する沈線を数条平行させて施したり交差させたりしたものが見られた。刻目突帯もわずかに含まれるが5点未満の出土にとどまっている。いずれも工具による施文が施される。



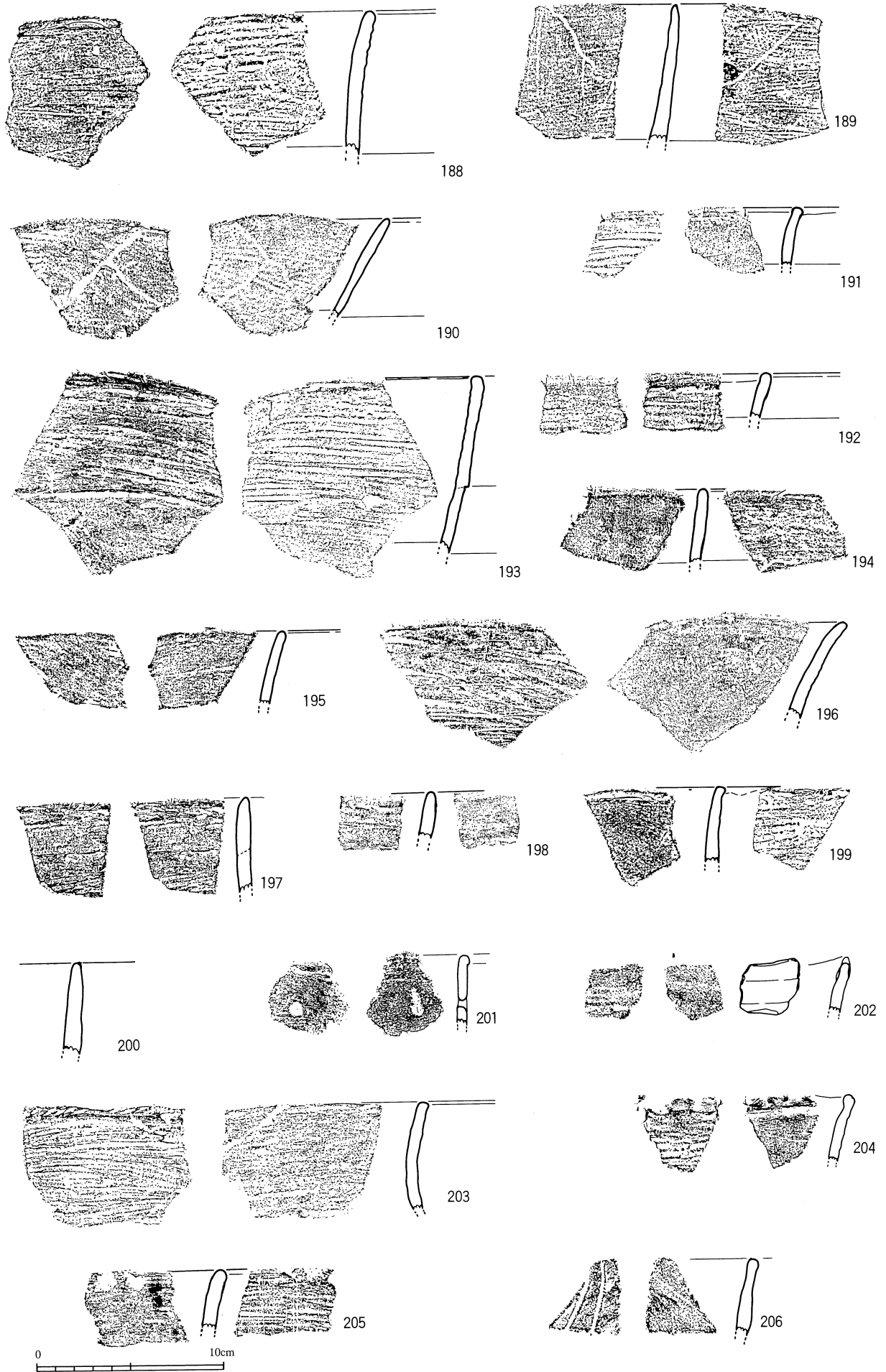
第76图 包含層南半部出土土器实测图(1)



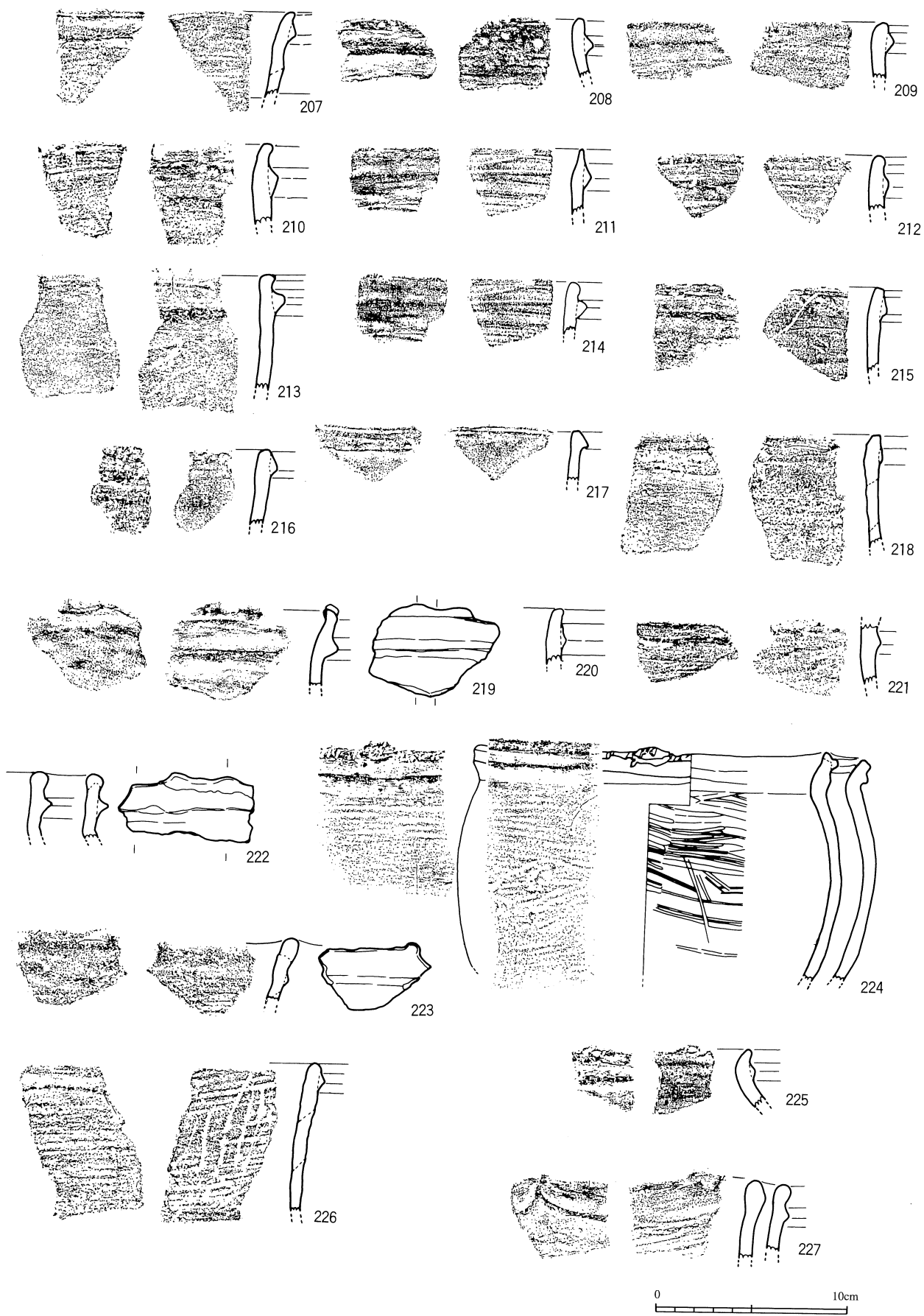
第77图 包含層南半部出土土器実測图(2)



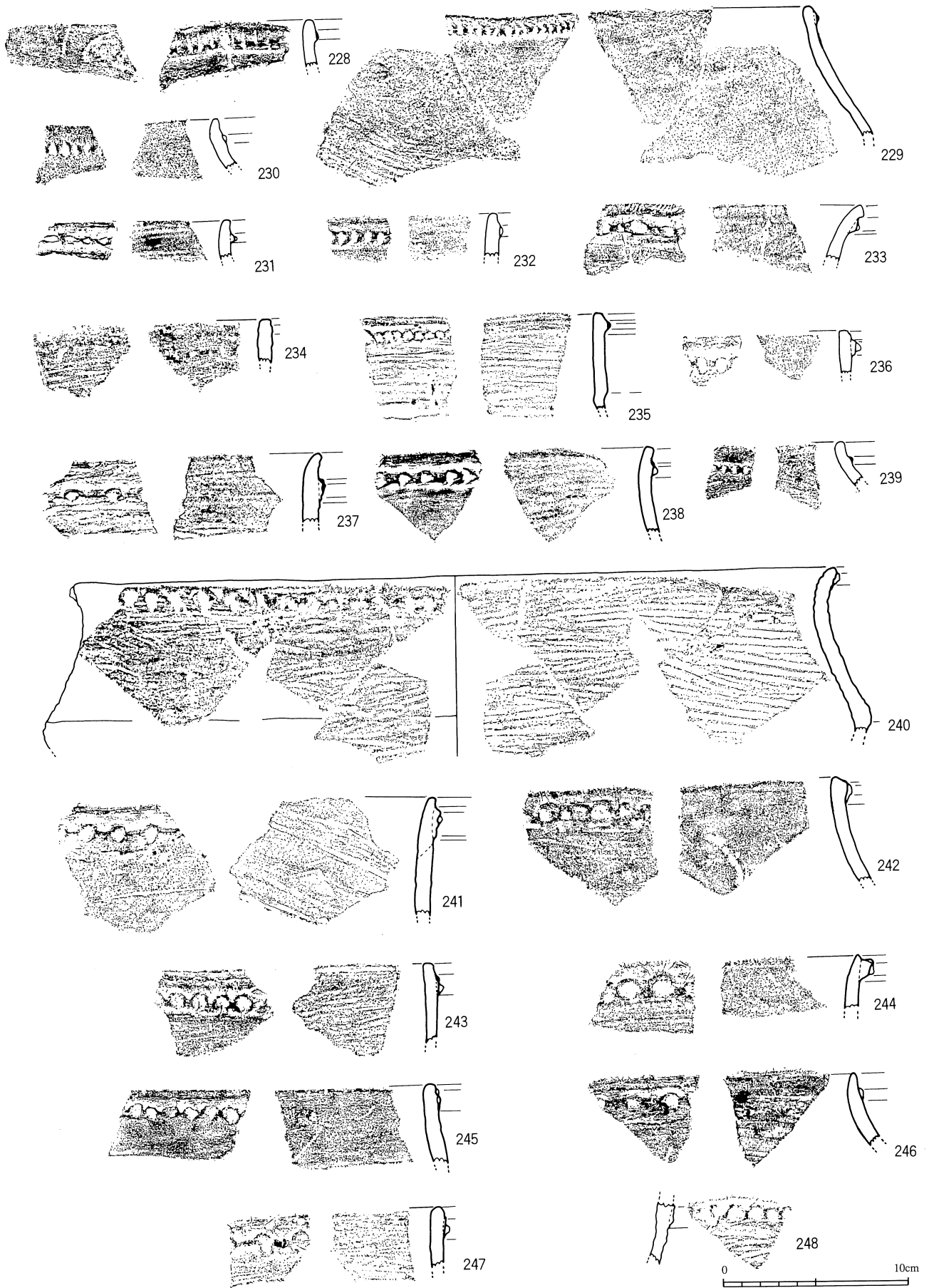
第78图 包含層南半部出土土器实测图(3)



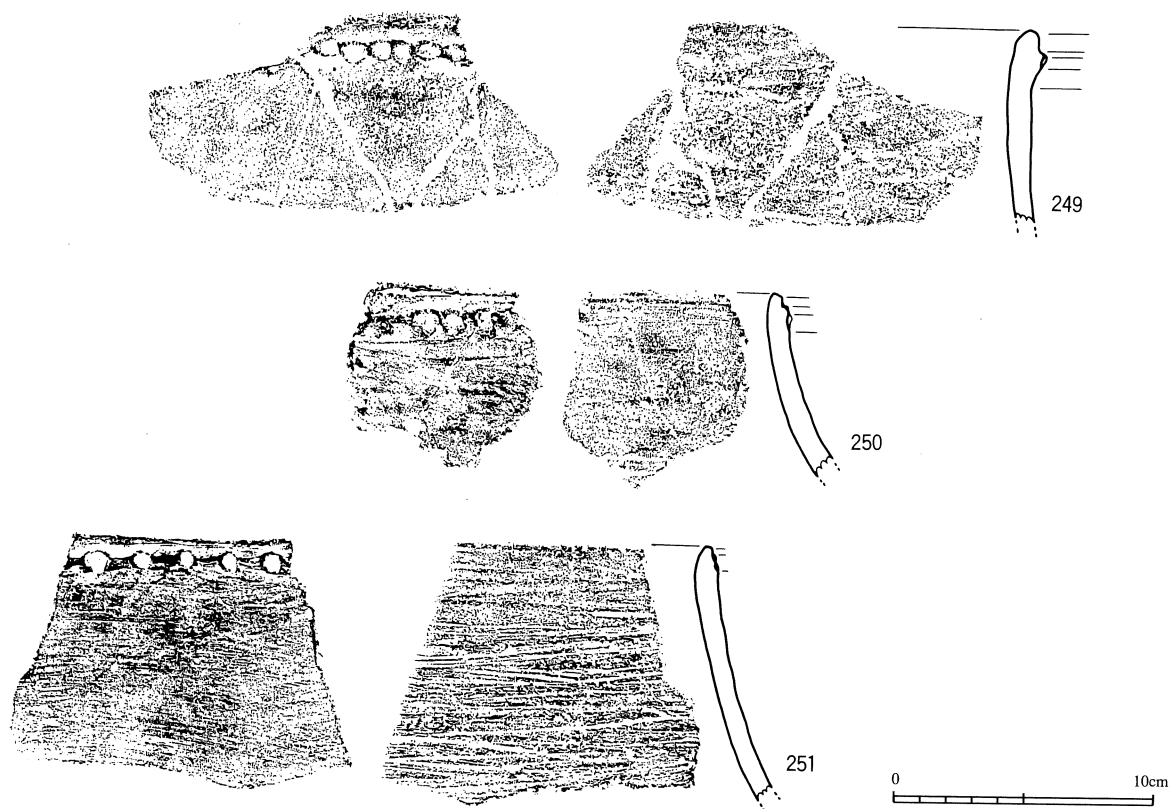
第79图 包含層南半部出土土器实测图(4)



第 80 图 包含層南半部出土土器実測図 (5)



第81图 包含層南半部出土土器实测图(6)



第82図 包含層南半部出土土器実測図（7）

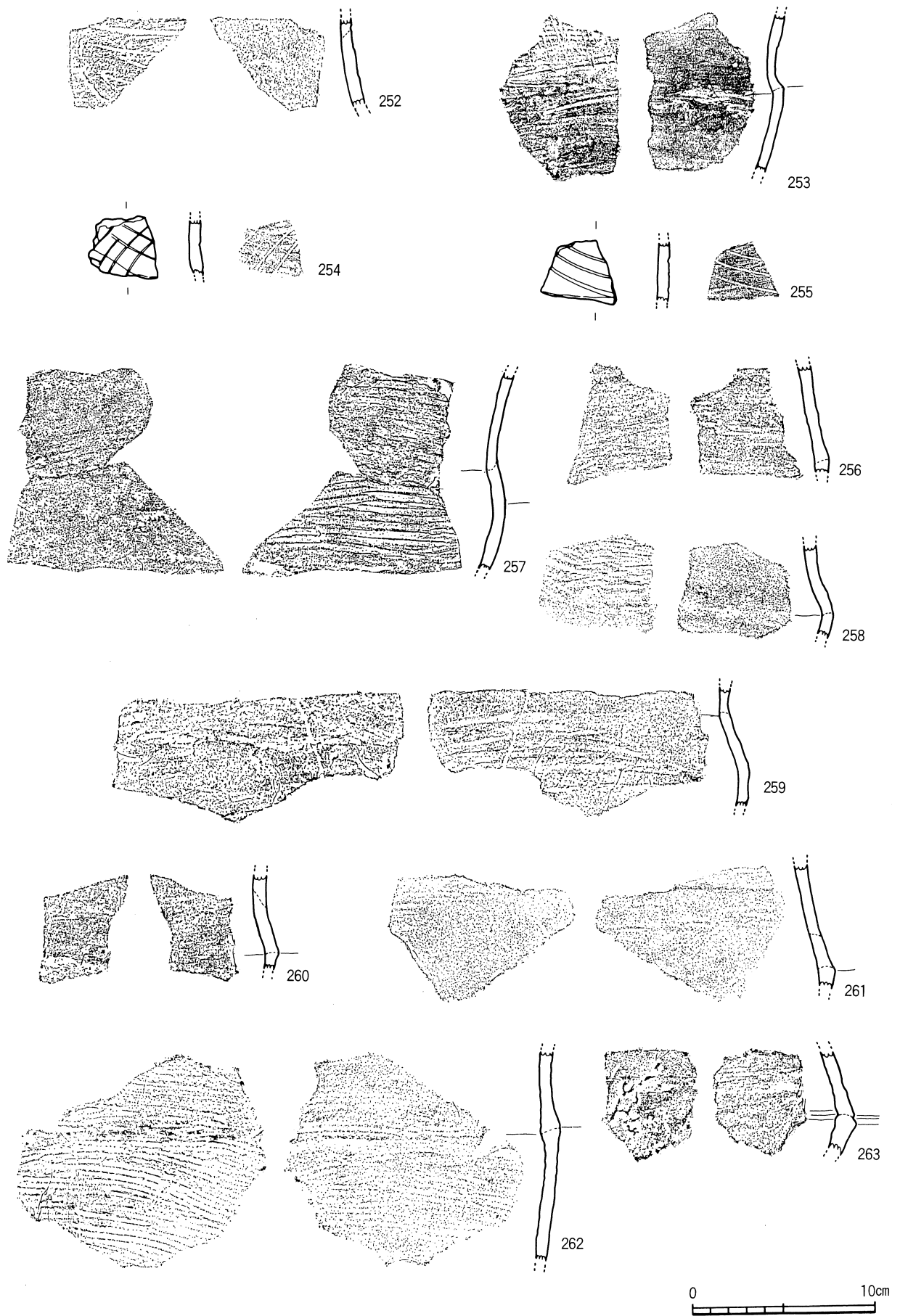
これに対して南半部では、浅鉢に逆「く」字状に屈曲する口縁を持つもの（H類）が含まれるようになる。また鍵状口縁のものも共伴するが、断面が玉状に肥厚するものや先細り気味のものなど退化傾向が進んでいる。（D類・G2類・G3類）方形浅鉢では波状部に細かい刻目を施すもの（I2類）が出土している。さらに深鉢では全体的な出土量はさほど多くないが、刻目突帯の出土比率が増える。

刻目突帯の施文方法は、指によるものと工具によるものがほぼ同比率で出現する。さらに刻目突帯はすべて1条で、胴部の屈曲部等に施文している例も無い。胴部にヘラ状工具で沈線を施す例は北半部とほぼ同じ比率で観察される。無刻目突帯では、指でつまみ出したタイプは無くなり突帯を貼り付けたもののみとなる。

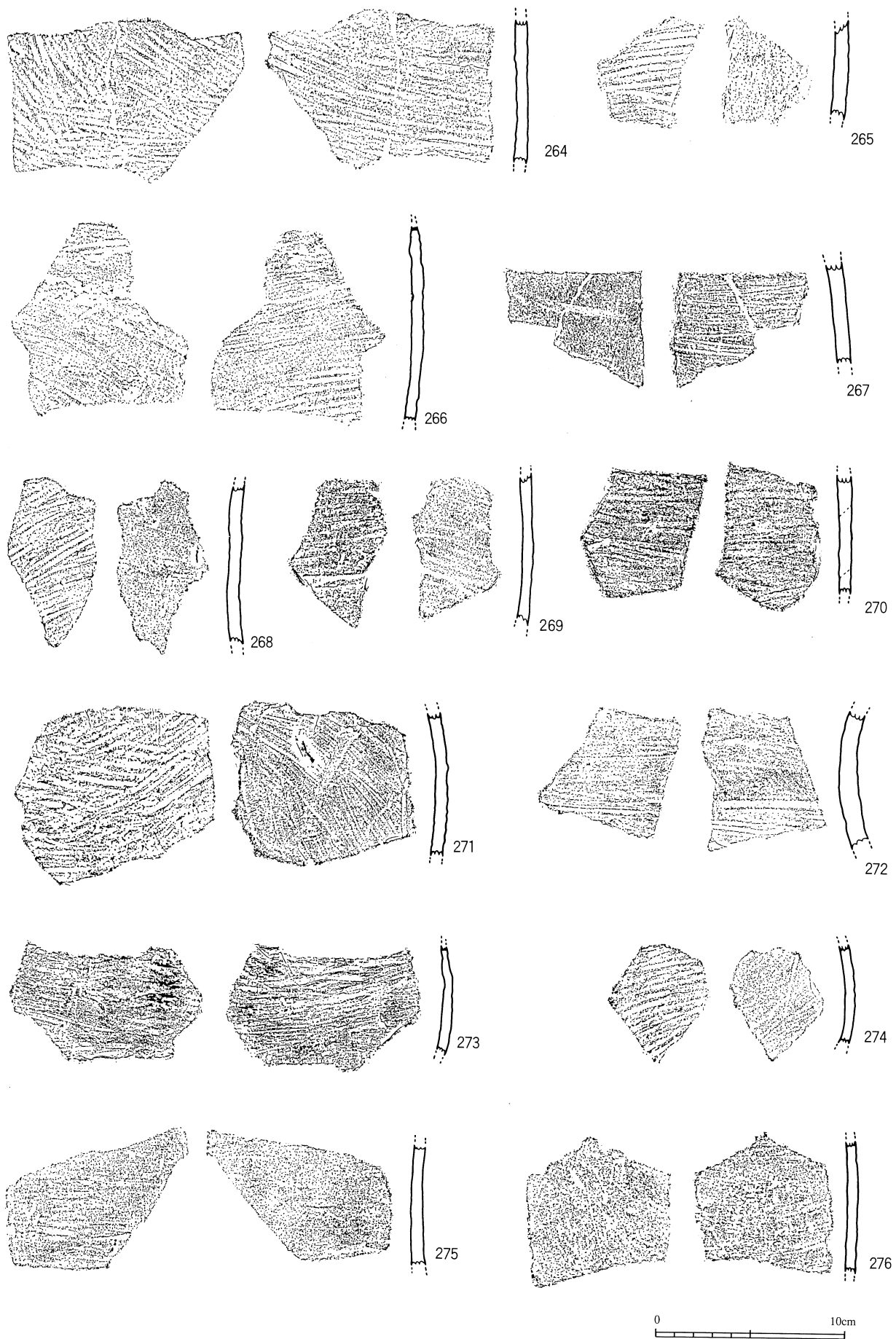
リボン状の突起については、さらに退化傾向が進み第147図のようにほとんど消えてしまうものも含まれる。

次に器種の組成については、北半部も南半部も壺がわずかに混じり、浅鉢が25%前後、鉢が1~2%で残りは深鉢ということで大きな差は認められない。また共にこの時期の基本的な姿ともいえる。

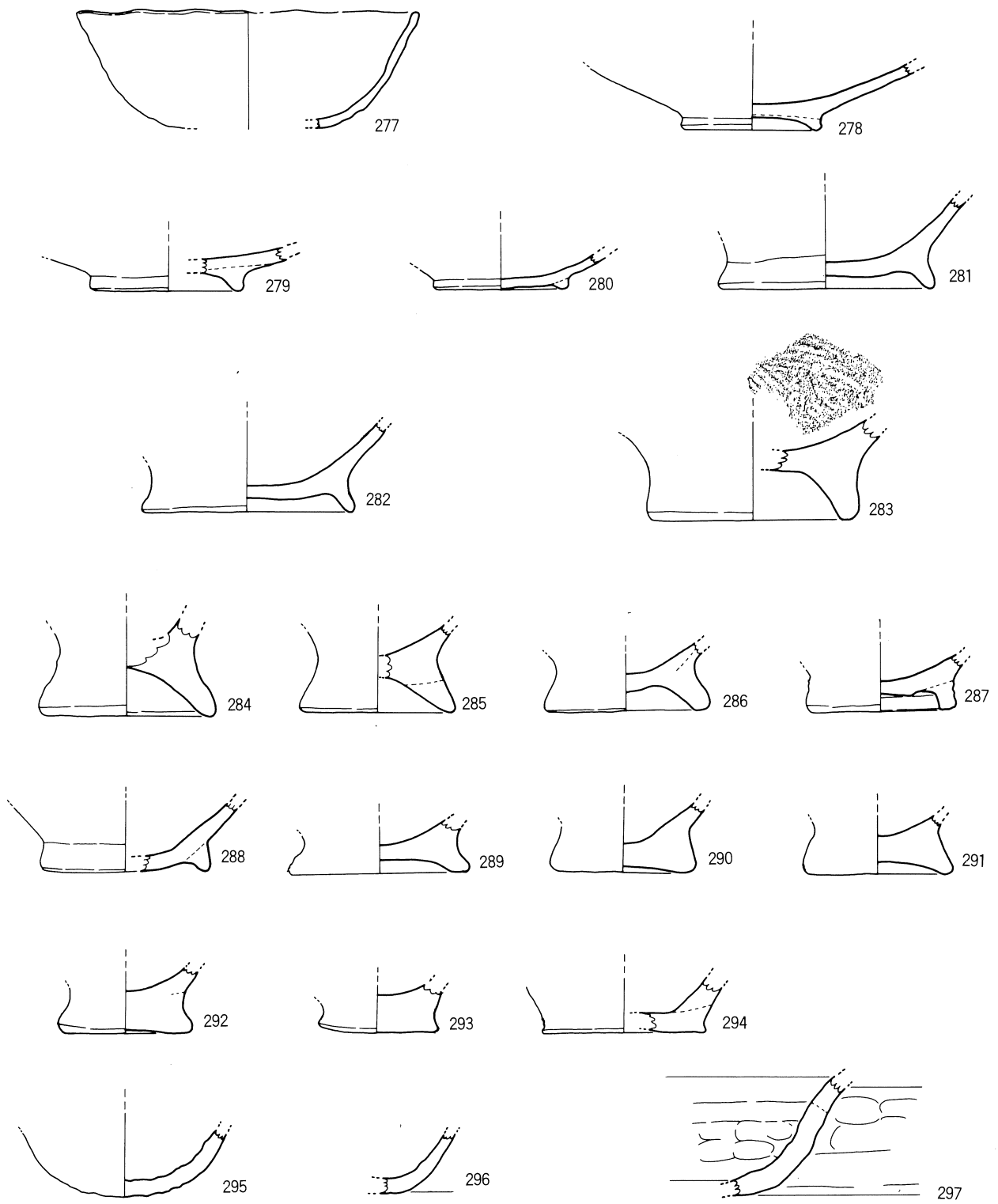
ところが土器の製作手法については個々に見た場合かなり差異が認められる。いずれも縄文時代晩期後半に属するものの、この差が時期差をあらわしているものと考えられるが、一部重複しながら隣接する中で、これだけの差異が生じることについては非常に興味深い事例といえよう。



第83图 包含層南半部出土土器实测图(8)



第84图 包含層南半部出土土器实测图(9)



0 10cm

第 85 图 包含層南半部出土土器实测图 (10)

第14表 二反田地区出土土器観察表(1)

挿図 番号	出土地点	遺物 番号	器種	分類	胎土	色調		調整		法量 (cm)				施文等
						内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大径	底径	
1	F3	148.153	壺	A	角閃 長石	灰白	灰白	ナテ	ナテ	13.2				
2	C1	一括	浅鉢	E	長石 石英	灰白	灰白	"	"					
3	G4	72.74	"	"	角閃 長石 石英	黄橙	黄橙	"	"	37.6				口縁部沈線
4	E5	S3	"	G1	"	暗灰白	暗灰黄	ミガキ ナテ	"	48.7	25.0			内外ス
5	K4	P1	"	"	"	黒褐	灰白	ナテ	"					内外ス
6	F2	P60	"	"	"	灰白	褐灰	"	"					内外ス
7	"	P69	"	G2	"	黒褐	暗褐	"	"	33.0	10.0			内外ス
8	E4	430	"	"	"	黒褐	暗褐	ケズリ ナテ	"	27.8				内外ス
9	F2	P109	"	"	"	黒褐	暗褐	ナテ	"					内外ス
10	E4	188.336	"	"	"	黒褐	暗褐	"	"	40.2				内外ス
11	E5	644	"	"	"	黒褐	暗褐	"	"					内外ス
12	E4E5	353	"	"	"	暗黄橙	暗黄橙	ケズリ ナテ	丁寧なナテ	50.2				内外ス
13	E4	189	"	"	"	浅黄橙	暗黄橙	"	ナテ	39.8				内外ス
14	F4	105	"	"	"	浅黄橙	暗黄橙	"	"	33.6				外ス
15	F5	178	"	"	"	黒褐	暗黄橙	ナテ	"	32.9				外ス
16	E5	46	"	"	"	黄橙	暗黄橙	ケズリ ナテ	"	34.0				外ス
17	E4	382	"	"	"	黒褐	灰白	ナテ	"					内外ス
18	E5	500	"	"	"	淡黄橙	黄褐	"	"	24.7				
19	C2	P26	"	"	"	灰褐	灰褐	"	"	35.7				
20	E5	12	"	"	"	灰白	灰白	"	"	39.7				内外ス
21	F5	172	"	"	"	黒褐	黒褐	"	丁寧なナテ	38.6				内外ス
22	E5	565	"	F	"	褐灰	黒褐	"	ナテ	20.4	9.0			内外ス
23	G4	83	"	"	"	黒褐	灰黄褐	"	"	23.2				内外ス
24	E5	349	"	"	"	浅黄橙	浅黄橙	"	ケズリ ナテ	31.0				外2次焼成 内外ス
25	"	1160	"	"	"	黒灰	灰白	"	"	32.0				内外ス
26	F4	149	"	"	"	黒灰	灰白	ミガキ	"					内外ス
27	F2	P283	"	C3	"	褐灰	黒褐	"	ミガキ					
28	F5	98	"	"	"	黒褐	黒褐	"	"					
29	E5	1267	"	J	"	灰白	灰白	不明	不明					リボン+刻目 縦に沈線
30	F2	一括	"	I1	"	灰白	灰白	ケズリ ナテ	平滑ナテ	34.0	10.0			外ス 赤彩
31	E5	662	"	J	"	橙	浅黄橙	ケズリ ナテ	ナテ					つまみ状の突起
32	F2	P191	"	-	"	黒褐	褐灰	ナテ	"					穿孔
33	K4	P1	"	-	"	黒褐	褐灰	"	"					
34	H5	12	"	-	"	灰白	灰白	ケズリ ナテ	ケズリ ナテ					内外ス
35	J4	P12	"	J	"	暗灰	淡黄	ナテ	ナテ					耳状突起
36	D5	337	深鉢	K	"	灰黄褐	灰黄褐	平滑ナテ	平滑ナテ					
37	E5	34	"	L3	"	灰黄褐	褐灰	貝殻条痕 ナテ	貝殻条痕 ナテ	29.5				リボン+刻目
38	H2	P216	"	"	"	黒褐	暗茶褐	"	"	40.4				リボン 内外ス
39	E4	728	"	L3+5	"	灰黄褐	黄橙	"	"	33.8				リボン 口唇部刺突文
40	F5	165	"	L3	"	褐灰	灰黄褐	"	平滑ナテ					
41	"	一括	"	"	"	褐灰	灰黄褐	ナテ	ナテ					内外ス
42	E5	20	"	"	"	黄褐	黄褐	貝殻条痕 ナテ	貝殻条痕 ナテ					外ス
43	E4	254	"	"	"	黒褐	灰黄褐	ナテ	"					
44	E5	30	"	"	"	黒灰	暗灰黄	貝殻条痕	貝殻条痕					リボン+刻目
45	F5	267	"	"	"	黄橙	黄橙	ナテ	ナテ					内外ス
46	I4	P37	"	L3+4	"	灰褐	灰褐	貝殻条痕	"					斜行沈線
47	F2	P420	"	"	"	黒褐	灰褐	ナテ	"					斜行沈線
48	F3	258	"	"	"	浅黄橙	浅黄橙	貝殻条痕 ナテ	貝殻条痕					斜行沈線
49	F1	P12	"	L1	"	褐	褐灰	ナテ	ナテ	43.0				
50	E5	35	"	"	"	浅黄橙	浅黄橙	貝殻条痕	貝殻条痕	35.3				

第15表 二反田地区出土土器観察表(2)

挿図 番号	出土地点	遺物 番号	器種	分類	胎土	色調		調整		法量 (cm)				施文等
						内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大径	底径	
51	E5	1266	深鉢	L1	角閃 長石 石英	褐	褐灰	ナテ	ナテ	20.2				
52	"	1364	"	"	"	浅黄橙	淡黄	ナテ	貝殻条痕	43.2				内外ス
53	E4	251	"	"	"	浅黄橙	淡黄	貝殻条痕 ナテ	"	39.8				
54	E5	985	"	"	"	淡黄橙	淡黄	ナテ	ナテ	31.6				内外ス
55	"	66	"	"	"	淡黄橙	淡黄	"	貝殻条痕 ナテ	30.0				内ス
56	"	421	"	"	"	灰黄褐	灰黄褐	"	"	35.0				
57	I4	P36	"	"	"	灰黄褐	灰黄褐	"	"	22.4				内ス
58	E4	67	"	L2	"	灰黄褐	灰黄褐	貝殻条痕 ナテ	"	26.0				外ス
59	"	268	"	"	"	黒灰	淡黄	"	ケズリ ナテ	17.4				外ス
60	I4	P17	"	"	"	黄橙	淡黄	ナテ	貝殻条痕 ナテ					波状口縁
61	E5	130	"	L1	"	黄橙	淡黄	"	"					内外ス
62	D5	145	"	"	"	黒褐	暗灰褐	"	ナテ					内ス
63	F3	一括	"	"	"	暗灰褐	黒褐	"	貝殻条痕 ナテ					
64	E5	617	"	L1+4	"	褐灰	黄橙	ケズリ ナテ	ナテ	30.0				細い工具で弧状の沈線
65	I4	P81	"	"	"	黒褐	灰褐	"	"	24.5				細い工具で弧状の沈線
66	E5	53	"	"	"	橙	橙	ナテ	"					細い工具で弧状の沈線
67	F5	190	"	L1+5	"	黒褐	黒褐	貝殻条痕 ナテ	貝殻条痕 ナテ					口唇部刻目
68	G3	101	"	"	"	黒褐	浅黄橙	ナテ	ナテ	41.7				口唇部刻目
69	E5	653	"	"	"	橙	明赤褐	"	"	39.6				口唇部刻目
70	F2	P38	"	Ma2+3	"	灰黄褐	灰黄褐	"	"					リボン
71	"	P9	"	"	"	灰黄褐	灰黄褐	"	"					リボン 沈線
72	E5	66	"	Ma1	"	灰黄褐	灰黄褐	"	貝殻条痕 ナテ	43.0				
73	E4	263	"	"	"	淡黄橙	淡黄橙	ケズリ ナテ	ケズリ ナテ	30.2				
74	E5	90	"	Mb4	"	淡黄橙	淡黄橙	ナテ	貝殻条痕 ナテ					
75	F4	23.24	"	Mb2	"	明赤褐	明赤褐	"	ナテ	45.6				
76	G4	75	"	Mb1	"	黒灰	淡黄灰	ケズリ ナテ	ナテ	44.0				
77	E5	85	"	"	"	褐灰	黄橙	貝殻条痕 ナテ	ケズリ ナテ	43.2				
78	D4	65.66	"	"	"	黄橙	黄橙	ナテ	ナテ					
79	I3	P32	"	"	"	褐灰	灰黄褐	貝殻条痕 ナテ	貝殻条痕 ナテ					
80	F2	P21	"	"	"	灰褐	灰褐	ナテ	ナテ					
81	D4	122	"	"	"	黄橙	橙	"	"					
82	F3	一括	"	"	"	灰白	灰橙	貝殻条痕 ナテ	貝殻条痕 ナテ					外ス
83	G3	P14	"	N1	"	黒褐	黒褐	貝殻条痕	"					
84	"	P21	"	"	"	黒褐	黒褐	ナテ	ナテ					
85	E5	49.62	"	胴部	"	灰褐	褐	"	貝殻条痕 ナテ					
86	"	291	"	"	"	黒褐	黒褐	"	"					
87	I4	P2	"	"	"	黄褐	暗褐	"	"					
88	E5	402	"	"	"	灰黄褐	灰黄褐	"	"					
89	I4	P22	"	"	"	褐灰	褐灰	"	ナテ					
90	E5	12.14	"	"	"	褐灰	灰褐	貝殻条痕 ナテ	貝殻条痕 ナテ					
91	F4	5.11	"	"	"	灰褐	淡黄橙	"	"					
92	E4	344	"	"	"	黄橙	褐	平滑ナテ	"					
93	F2	116	"	"	"	黄橙	褐	貝殻条痕 ナテ	"					
94	E5	459	"	"	"	灰褐	灰褐	"	"					
95	"	412	"	"	"	灰黄褐	褐	ナテ	"					
96	E4	178	"	"	"	黄橙	灰白	ケズリ ナテ	ケズリ ナテ					内外ス
97	H4	25	"	"	"	橙	橙	ナテ	ナテ					
98	E4	458	"	"	"	橙	橙	貝殻条痕 ナテ	貝殻条痕 ナテ					
99	F5	178	鉢	O	"	黄褐	黒褐	ナテ	ナテ	16.8	6.5			
100	I4	P5	"	P	"	黄褐	黒褐	ケズリ ナテ	"	16.9	7.0			

第16表 二反田地区出土土器観察表(3)

挿図 番号	出土地点	遺物 番号	器種	分類	胎土	色調		調整		法量 (cm)				施文等
						内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大径	底径	
101	E2	P86	鉢	Q	角閃 長石 石英	褐灰	黒褐	ナテ	ナテ	16.0	12.3			
102	E5	172	"	"	"	黄橙	黄橙	"	"	15.4	7.5			外スス
103	E4	381	"	"	"	灰黄褐	茶褐	ケズリ ナテ	ケズリ ナテ	15.8	9.0			外スス
104	E5	20	"	"	"	灰白	灰白	ナテ	ナテ	17.0				外スス
105	E4	501	浅鉢底	T	"	明赤褐	黒褐	"	"				10.8	内スス
106	E5	313	"	"	"	淡黄橙	淡黄橙	ケズリ ナテ	貝殻条痕 ナテ				9.8	
107	"	32	深鉢底	U1	"	灰褐	橙	ナテ	ナテ				8.2	
108	"	416	"	"	"	黒褐	褐	"	"				7.2	
109	"	837	"	"	"	灰褐	橙	"	"				5.9	
110	E4	761	"	"	"	褐灰	浅黄橙	"	"				11.0	
111	E5	506	"	"	"	浅黄橙	浅黄橙	"	"				9.6	
112	F4	46	"	"	"	浅黄橙	浅黄橙	"	"				9.4	
113	E2	P47	"	"	"	灰褐	橙	"	"				10.3	
114	E4	224	"	"	"	黒褐	明赤褐	"	"				8.9	内スス
115	D4	20	"	"	"	灰黄褐	橙	"	"				9.6	
116	E5	942	"	"	"	灰褐	橙	"	"				9.6	
117	F4	119	"	"	"	橙	橙	"	"				9.9	
118	F2	P3	"	"	"	橙	灰褐	"	"				12.4	
119	E4	879	"	"	"	灰褐	赤褐	"	"				7.8	
120	E5	1123	"	"	"	灰褐	橙	"	"				9.0	
121	"	73	"	"	"	黒褐	黄橙	"	貝殻条痕 ナテ				10.4	内スス
122	試掘	-	"	"	"	褐灰	黄橙	ケズリ ナテ	ナテ				9.2	
123	F3F4	164	"	"	"	黒褐	橙	ナテ	"				7.6	
124	I2	P1	"	"	"	黒褐	橙	"	"				7.4	
125	F2	P154	"	"	"	淡黄橙	淡黄橙	"	"				9.2	
126	E4	339	"	"	"	黒褐	明赤褐	"	"				9.2	内スス
127	C5	91	"	"	"	浅黄橙	浅黄橙	"	"				9.5	
128	E2	P85	"	"	"	褐灰	橙	"	"				9.6	
129	E4	8	"	"	"	明赤褐	明赤褐	"	"				10.8	
130	E5F5	854	"	"	"	淡黄橙	淡黄橙	"	"				9.4	
131	D4	33	"	"	"	褐灰	黄橙	"	"				10.9	
132	F2	P120	"	"	"	褐灰	黄橙	"	"				9.1	
133	F5	181	"	"	"	褐灰	黄橙	"	"				10.2	
134	E4	22	"	"	"	灰黄褐	黄橙	"	"				9.0	
135	E5	1206	"	"	"	灰黄褐	黄橙	"	"				8.0	
136	C5D5E5	124	"	U2	"	橙	橙	"	"				7.5	
137	C4	67	"	"	"	橙	橙	"	"				9.7	
138	E4	516	"	U3	"	黒褐	黄橙	"	"				9.0	
139	C5	157	"	"	"	明赤褐	明赤褐	"	"				8.2	
140	E5	115	"	"	"	褐灰	黄橙	"	"				7.3	
141	I3	P9	"	"	"	黒褐	橙	"	"				6.0	
142	"	P8	"	U4	"	黄橙	黄橙	"	"				8.1	
143	I4	P73	"	"	"	褐	褐	"	"				9.8	
144	E4	471	"	"	"	黒褐	赤褐	"	"				7.8	内スス
145	E5	64	鉢底	S	"	灰褐	橙	ケズリ ナテ	"					
146	T4	Ⅷ層	壺	B	"	灰白	灰白	平滑ナテ	平滑ナテ					外面丹塗り
147	R3	"	浅鉢	C2	"	灰茶褐	灰茶褐	ミガキ ナテ	ミガキ ナテ	30.0				リボン
148	S3	"	"	C3	"	褐灰	褐灰	ミガキ	ミガキ					
149	T4	"	"	"	"	黒褐	黒褐	"	"					

第 17 表 二反田地区出土土器観察表 (4)

挿図 番号	出土地点	遺物 番号	器 種	分類	胎 土	色 調		調 整		法 量 (cm)				施文等
						内 面	外 面	内 面	外 面	口径	器高	最大径	底径	
150	S3	VII層	浅鉢	C3	角閃 長石 石英	黒褐	黒褐	ミガキ	ミガキ					
151	"	"	"	G2	"	黒褐	黒褐	"	"					
152	R3T3T4	"	"	C3	"	黒褐	黒褐	"	"	40.5	12.4			
153	S3	"	"	G2	"	黒褐	黒褐	ケズリ ナデ	ナデ					内面スス
154	S2	"	"	G3	"	黒褐	黒褐	ミガキ	ケズリ ナデ					
155	S3	"	"	"	"	灰白	灰白	ケズリ ナデ	ナデ					外面スス
156	T3	"	"	"	"	灰白	灰白	ナデ	"					
157	"	"	"	"	"	灰茶	灰茶	"	"					
158	"	"	"	"	"	灰茶	灰茶	ケズリ ナデ	"					
159	"	"	"	"	"	黒褐	黒褐	"	"					
160	"	"	"	"	"	黄褐	黄褐	ナデ	"	38.0				波状口縁
161	J4	P13	"	"	"	黄褐	黄褐	"	"					
162	R3	VII層	"	F	"	黄褐	黄褐	ケズリ ナデ	"					内スス
163	S3	"	"	"	"	暗茶褐	暗茶褐	ナデ	"					内外スス
164	"	"	"	"	"	暗茶褐	暗茶褐	ミガキ	ケズリ ナデ					突帯
165	"	31	"	H	"	褐灰	明褐灰	ミガキ ナデ	ミガキ ナデ					外面丹塗り
166	R3	VII層	"	"	"	褐灰	明褐灰	平滑ナデ	条痕 平滑ナデ	38.5				
167	S3	"	"	"	"	茶褐	明褐灰	ナデ	ミガキ ナデ					
168	"	"	"	"	"	茶褐	茶褐	ミガキ ナデ	"					内スス
169	"	"	浅鉢胴	-	"	茶褐	黒褐	ケズリ ナデ	貝殻条痕 ナデ					内外スス 上半部に沈線
170	"	"	方形浅鉢	12	"	黒褐	黒褐	ミガキ	条痕 ナデ					屈曲部に刻目
171	R3	"	"	11	"	褐灰	褐灰	"	ミガキ					外面丹塗り
172	S3	"	浅鉢?	J	"	浅黄橙	浅黄橙	貝殻条痕	貝殻条痕					突帯2条 (内1条に刻目)
173	"	"	浅鉢	"	"	灰褐	灰黄褐	ミガキ	ミガキ					胴部に突起 丹塗り
174	T3	"	"	-	"	黒灰	黒灰	ミガキ ナデ	"			31.1		肩に沈線2 精製
175	"	"	"	-	"	黒灰	黒灰	ケズリ ナデ	"					精製
176	T4	"	"	-	"	黒灰	黒灰	"	"					精製
177	S3	"	"	-	"	暗茶褐	黒灰	ミガキ	"					外スス 精製
178	T3	"	"	-	"	黒褐	黒褐	ナデ	ナデ					精製
179	"	"	"	-	"	黒褐	黒褐	ミガキ	ミガキ			40.0		
180	R3	"	"	-	"	暗灰茶褐	暗灰茶褐	ナデ	ナデ					内外スス
181	S3	"	"	-	"	明灰褐	明灰褐	"	"					"
182	"	"	"	-	"	茶褐	茶褐	ケズリ ナデ	ケズリ ナデ					内スス
183	"	"	"	-	"	明灰褐	明灰褐	ナデ	ナデ					内外スス
184	"	"	"	-	"	暗茶褐	明灰褐	ケズリ ナデ	"					
185	T3	"	深鉢	L2	"	浅黄橙	浅黄橙	ナデ	貝殻条痕 ナデ	39.4				内スス
186	R3	"	"	"	"	暗茶褐	黒茶褐	"	貝殻条痕					外スス
187	"	"	"	"	"	明灰褐	明灰褐	貝殻条痕	"					内外スス
188	"	"	"	"	"	明灰褐	明灰褐	ケズリ ナデ	"					内スス
189	T3	"	"	"	"	明灰褐	明灰褐	貝殻条痕	"					
190	R3	"	"	"	"	暗灰茶褐	暗灰茶褐	"	"					内外スス
191	S3	"	"	"	"	暗灰茶褐	暗茶褐	ナデ	"					内スス
192	R3	"	"	"	"	黒褐	黒褐	貝殻条痕	"					内外スス
193	S3	"	"	"	"	黄橙	灰白	"	"					外スス
194	"	"	"	"	"	茶褐	茶褐	ナデ	ナデ					内スス
195	"	"	"	"	"	茶褐	茶褐	"	"					内外スス
196	R3	"	"	"	"	灰黄褐	黄橙	"	貝殻条痕					外スス
197	T3	"	"	"	"	黒褐	茶褐	"	ナデ					
198	S3	"	"	"	"	明灰褐	明灰褐	"	"					外スス
199	R3	"	"	"	"	灰茶褐	灰茶褐	ナデ	貝殻条痕					

第18表 二反田地区出土土器観察表(5)

押図 番号	出土地点	遺物 番号	器種	分類	胎土	色調		調整		法量 (cm)				施文等
						内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大径	底径	
200	S3	VII層	深鉢	L2	角閃 長石 石英	暗茶褐	灰茶褐	ナテ	ナテ					外スス
201	"	セクション	"	"	"	黒褐	黒褐	"	貝殻条痕 ナテ					
202	T3	VII層	"	L3	"	黒灰	灰茶褐	"	ナテ					
203	S3	"	"	L5	"	黒褐	黒褐	貝殻条痕	貝殻条痕					内外スス 口唇部刻目
204	"	"	"	"	"	黒褐	茶褐	ナテ	"					内スス 口唇部刻目
205	S2	"	"	L4+5	"	黒褐	茶褐	"	"					口唇部刻目 沈線
206	S3	"	"	L4	"	黒褐	茶褐	"	ナテ					内スス 沈線
207	R3	"	"	Mb1	"	黒褐	黒褐	"	"					内外スス
208	S3	"	"	"	"	黄橙	灰黄褐	貝殻条痕 ナテ	"					
209	T3	"	"	"	"	暗褐灰	暗橙	ナテ	"					
210	"	"	"	"	"	黒灰	灰白	"	"					内スス
211	S3	"	"	"	"	黒褐	灰黄褐	貝殻条痕	貝殻条痕					
212	U3	"	"	"	"	灰黄	灰黄	ナテ	ナテ					
213	R3	"	"	"	"	黒褐	黒褐	"	"					内外スス
214	"	21	"	"	"	黒褐	黒褐	"	"					
215	"	VII層	"	"	"	灰黄褐	灰黄褐	貝殻条痕 ナテ	"					
216	"	"	"	"	"	褐灰	黒褐	平滑ナテ	"					
217	I3	"	"	"	"	黄橙	黄橙	ナテ	"					
218	T3	"	"	"	"	黒灰	灰白	"	"					内スス
219	S3	"	"	Mb2	"	褐	褐	"	"					リボン
220	"	"	"	Mb1	"	黒褐	灰白	ケズリ ナテ	ケズリ ナテ					外スス
221	"	"	"	"	"	灰黄褐	灰黄褐	貝殻条痕	貝殻条痕					
222	"	"	"	Mb2	"	灰黄褐	明灰褐	ナテ	ナテ					リボン
223	"	"	"	"	"	灰黄褐	明灰褐	"	"					内スス リボン
224	T3	"	"	Mb4	"	褐灰	褐灰	ヘラケズリ ミガキ	貝殻条痕 ナテ	19.4				口唇部刻目
225	S3	"	"	"	"	黒褐	淡黄橙	ミガキ	ナテ					口唇部刻目
226	T3	"	"	Mb1	"	茶灰	茶灰	貝殻条痕	貝殻条痕					
227	S3	"	"	Mb5	"	黄橙	黄橙	"	ナテ					口縁部に波状の突帯
228	T3	"	"	N1	"	黒褐	黒褐	ナテ	"					刻目突帯
229	"	"	"	"	"	灰白	黄橙	"	貝殻条痕 ナテ					刻目突帯 内外スス
230	"	"	"	"	"	黒灰	黒灰	"	ナテ					刻目突帯
231	S3	セクション	"	"	"	黒褐	黒褐	貝殻条痕 ナテ	"					刻目突帯
232	"	65	"	"	"	黒褐	灰黄褐	"	貝殻条痕					刻目突帯
233	"	セクション	"	"	"	橙	浅黄橙	ケズリ ナテ	ナテ					刻目突帯 口唇部刻目
234	T3	VII層	"	"	"	暗灰黄	暗褐	ナテ	"					刻目突帯
235	終点トレンチ	26	"	"	"	浅黄橙	灰黄褐	貝殻条痕	貝殻条痕					刻目突帯
236	T3	VII層	"	"	"	暗茶褐	黒褐	ナテ	ナテ					刻目突帯
237	S3	1	"	"	"	黒褐	黒褐	平滑ナテ	貝殻条痕					刻目突帯
238	"	セクション	"	"	"	黒褐	浅黄橙	貝殻条痕 ナテ	ナテ					刻目突帯 外スス
239	T3	VII層	"	"	"	茶褐	黒褐	ナテ	"					刻目突帯
240	U3	"	"	N2	"	浅黄橙	浅黄橙	貝殻条痕	貝殻条痕	42.0				刻目突帯
241	S3	"	"	"	"	灰褐	灰褐	貝殻条痕 ナテ	貝殻条痕 ナテ					刻目突帯 外スス
242	U4	"	"	"	"	橙	浅黄橙	ナテ	"					刻目突帯 外スス
243	T3	"	"	"	"	黒褐	暗茶褐	貝殻条痕 ナテ	"					刻目突帯
244	U3	"	"	"	"	灰黄	灰黄	ナテ	ナテ					刻目突帯
245	U4	"	"	N3	"	黒褐	浅黄橙	貝殻条痕 ナテ	貝殻条痕 ナテ					刻目突帯
246	"	"	"	"	"	灰黄褐	浅黄橙	ナテ	ナテ					刻目突帯 外スス
247	U3	"	"	"	"	明灰黄	明灰黄	"	"					刻目突帯
248	S3	"	"	"	"	明灰黄	明灰黄	貝殻条痕	貝殻条痕					刻目突帯 内スス
249	S4	"	"	"	"	明灰黄	明灰黄	"	"					刻目突帯

第19表 二反田地区出土土器観察表(6)

挿図 番号	出土地点	遺物 番号	器種	分類	胎土	色調		調整		法量 (cm)				施文等
						内面	外面	内面	外面	口徑	幅	最大径	底径	
250	S5	V層	深鉢	N3	角閃 長石 石英	明灰黄	明灰黄	貝殻条痕	貝殻条痕					刻目突帯
251	U4	"	"	"	"	明褐灰	黄橙	ケズリ ナテ	ケズリ ナテ					刻目突帯
252	T3	"	深鉢胴	-	"	黒灰	黄橙	ナテ	ナテ					横に沈線
253	S3	"	"	-	"	黒褐	黄橙	"	貝殻条痕 ナテ					内外スス 縦の沈線
254	"	"	"	-	"	黒褐	黄橙	平滑ナテ	ナテ					格子目状沈線
255	"	"	"	-	"	黒褐	黄橙	ナテ	貝殻条痕					斜行沈線
256	"	"	"	-	"	黒褐	明灰褐	貝殻条痕 ナテ	"					
257	T3	"	"	-	"	黒褐	明灰褐	"	貝殻条痕 ナテ					
258	"	"	"	-	"	黒褐	明灰褐	ナテ	"					
259	"	"	"	-	"	黒褐	黄橙	貝殻条痕	"					
260	"	"	"	-	"	黒褐	赤褐	"	"					
261	"	"	"	-	"	黒褐	赤褐	ナテ	ナテ					
262	"	"	"	-	"	黒褐	赤褐	貝殻条痕	貝殻条痕					
263	S3	"	"	-	"	灰褐	灰褐	"	"					
264	T3	"	"	-	"	黒灰	浅黄	"	"					
265	S3	"	"	-	"	黒褐	浅黄	ナテ	"					
266	U3	"	"	-	"	灰黄	黒灰	貝殻条痕	"					
267	S3	"	"	-	"	灰黄	明灰	"	ナテ					外面丹塗り
268	T3	"	"	-	"	灰黄	明灰	貝殻条痕 ナテ	貝殻条痕					
269	T3	"	"	-	"	黒灰	黄褐	ナテ	貝殻条痕 ナテ					
270	S3	"	"	-	"	茶褐	黄褐	貝殻条痕	貝殻条痕					
271	S3	"	"	-	"	黒褐	茶褐	"	"					内外スス
272	U3	"	"	-	"	黒灰	灰黄	"	"					内スス
273	S3	"	"	-	"	茶褐	茶褐	"	"					外スス
274	T3	"	"	-	"	黒褐	灰	ナテ	"					外スス
275	"	"	"	-	"	黒褐	灰	"	"					内スス
276	"	"	"	-	"	黄褐	灰	貝殻条痕 ナテ	"					内スス
277	S3	"	鉢	R	"	黒褐	黒褐	ナテ	ナテ					手づくね
278	"	"	浅鉢底	T	"	褐灰	浅黄橙	"	ヘラミガキ				6.4	内スス
279	"	"	"	"	"	褐灰	浅黄橙	"	ナテ				7.4	内スス
280	"	"	"	"	"	褐灰	浅黄橙	"	"				6.4	内スス
281	"	"	"	"	"	褐灰	浅黄橙	貝殻条痕 ナテ	貝殻条痕 ナテ				10.4	内スス
282	"	"	"	"	"	黄橙	黄橙	ナテ	ナテ				10.5	
283	"	"	深鉢底	U1	"	淡黄橙	褐灰	貝殻条痕	"				10.4	
284	"	"	"	"	"	褐灰	褐灰	ナテ	"				8.6	内スス
285	U4	"	"	"	"	灰褐	黄橙	"	"				7.7	
286	S3	"	"	"	"	灰褐	灰褐	"	"				7.9	
287	"	"	"	U2	"	黒灰	白黄灰	ケズリ ナテ	"				7.3	内外スス
288	R3	"	"	U3	"	灰褐	淡黄橙	ナテ	"				8.4	
289	T3	"	"	"	"	黒灰	淡黄橙	"	"				8.5	内スス
290	R3	"	"	"	"	褐灰	淡黄橙	"	"				7.2	
291	S3	"	"	"	"	橙	淡黄橙	"	"				7.4	
292	T3	"	"	U4	"	橙	淡黄橙	"	"				6.4	内スス
293	S3	"	"	"	"	橙	淡黄橙	"	"				5.9	
294	T3	"	"	"	"	橙	淡黄橙	"	"				8.2	
295	"	"	鉢底	S	"	黒灰	黄灰	ケズリ?	"					内スス
296	"	"	"	"	"	橙	黄灰	ナテ	ナテ					
297	S3	"	"	"	"	橙	黄灰	指頭圧	指頭圧					内スス

第4章 まとめ

1 玉沢地区の縄文晩期土器について

玉沢地区における九州横断自動車道建設に伴う発掘調査は、長さ約500m、幅40mが対象となり北から六反田地区、山伏田地区、二反田地区と分けて実施した。このうち六反田地区は古墳時代の集落とそれに関連する付属施設が中心であったが、山伏田地区及び二反田地区は縄文時代後期から晩期にかけての良好な資料が得られた。近年、ここから約2km北で荏隈杉下遺跡が、南西約2kmで植田市遺跡がそれぞれ発掘調査され、いずれの遺跡でも縄文時代晩期後半の土器が出土している。

山伏田地区では、縄文後期中葉から後期後半にかけての片粕式やそれに続く西平式土器が出土している。これを上限として途中空白期間があった後、晩期前半さらに中葉以降再び遺物が山伏田地区や二反田地区で出現する。

大分県の縄文晩期については、高橋徹氏（註1）により土器編年が行われている。基本的には大石式→浦久保式→上菅生B式→下黒野式の流れで変遷する。以後坂本嘉弘氏（註2）や後藤一重氏（註3）を始め様々な研究者によって補強がなされてきた。この中で最も古い位置にある土器は山伏田地区で1点出土した滋賀里系土器である。次に浦久保式に近い形態の浅鉢や深鉢が二反田地区の北半部で数点出土した。しかしいずれも出土量は非常に少ない。これに対して、いわゆる鍵状口縁を持つ浅鉢や無刻目突帯の付く深鉢を指標とする上菅生B式に当たる時期から出土量は急激に増す。前項で若干触れたが、二反田地区は調査区の北半部と南半部（以下北側、南側で表す）で明確に時期差が認められる。器形別には壺、浅鉢、深鉢、鉢という器形が出土していて、組成も北が1%、19%、77%、3%、南が1%、22%、75%、2%と基本的にはこの時代の遺跡としては平均的な数値といえる。

浅鉢は、北側では鍵状口縁の明瞭な段がくずれ長さも短くなりつつあるものが主体となり（D類、G2類）、上菅生B式でもやや新しい時期になるものと思われる。これに対して、南側ではさらに退化傾向はすすみ長さも非常に短くなる（G3類）。さらにこれと共に逆「く」字状口縁を持つ浅鉢が共伴する（H類）。この浅鉢は下黒野式の範疇に含まれるものであり、このタイプの浅鉢は北側では全く出土していない。方形浅鉢I類は波状部に小さな突起が付くタイプが北側で、波状部及び胴部に刻目を施すタイプが南側で出土している。また比較的小振り度で若干押しつぶされたような胴部を持つ浅鉢J類は特殊な装飾を胴部最大径付近に施すものがあり、北側から出土のものは把手状の突起が付く、南側で出土したものは長楕円形のボタン状の突起がつく。

深鉢では 1. 口縁部に付くりボンあるいは鱗状突起の形態 2. 口唇部につく刻目 3. 胴部上半部に沈線を施すもの 4. 突帯文の施された土器の4点について触れる。1については北側では台形状の比較的しっかりした作りの突起が素口縁の深鉢に付くものが多い。これに対して南側では無刻目突帯の付く深鉢に非常にくずれた突起が付くものが主体をしめる。1例だけ浅鉢に突起が付くものがあるが深鉢のそれよりさらに退化が進んだものである（C2類）。2については出土量がほぼ同数であり、北側のそれは非常に細かい刻目を施文するのに対してやや粗い施文となるが大きな変化は見られない。3は瀬戸内沿岸地域で見られる土器に類似したもので（註4）、植田市遺跡では刻目突帯文土器に施文されている例が報告されている。（註5）しかし二反田地区では刻目突帯文土器にこのような沈線文様を施した土器は出土していない。また文様構成も数条の斜行沈線のみと、それが格子目状に交差するものと、非常に細い2条沈線で直線とカーブを織り交ぜながら施文するものがある。今後の類例の増加を待ちたいが、現状では北側と南側で大きな差異はない。さて4については大きな差が認められる。つまり北は無刻目突帯文土器が主体となり、南側では無刻目突帯文土器と共に刻目突帯文土器が主体となる点である。北で出土した無刻目突帯Ma類4点、Mb類13点、これに対して刻目突帯文土器（N1類）は2点である。しかし南側ではMa類が出土せず、M

b類が21点出土した。また刻目突帯文土器N1類は12点、N2・N3類は9点出土している。このように非常に明瞭な差が認められる。指でつまみだしたタイプの深鉢(Ma類)は刻目突帯文土器が盛行する時期には姿を消すようである。このMa類の存在が新旧の土器編年の中で考えなくてはいけないものなのかは今後の検討課題といえよう。また刻目突帯文土器については北側では工具による施文、南では指施文と工具施文がほぼ同数である。突帯の位置は口縁部直下からやや下に付くものがそれぞれ見られ、ここでは施文方法の変遷は追うことはできない。しかしMa類→Mb類とN類の共伴→N類単独という大きな流れは追えよう。なおN類については突帯の位置、施文方法等でさらに細分できる可能性も含んでいる。今調査ではその点が若干材料不足であり、今後大分平野における当該時期の資料増加を待って再検討を加える必要がある。

山伏田地区及び二反田地区の縄文晩期の遺物は、前半から中葉にかけての遺物がごく少量混じるものの主体は晩期後半代で、上菅生B式から下黒野式の範疇に入るものである。上限は上菅生B期でも浅鉢の口縁部の形態から新しい時期といえよう。下限は無刻目と刻目が混在することから刻目突帯文単純期とはいえず、その点から下黒野式より若干古くなる様相を持つ。上菅生B期から下黒野期の過渡期的な位置に当たるものと考えたい。なお、第86図から第91図に北部と南部の土器を器種ごとにまとめて図示しているので参照願いたい。

さて玉沢地区条里跡の調査では、後期中葉から後半、さらに晩期前半から中葉の土器が若干出土していることから、後期中葉の段階で小規模な集落が沖積地内における微高地に出現し、晩期後半に入りその規模の拡大を含めて、遺跡の数も増大していったことがうかがえる。代表的な遺跡では雄城台遺跡(註6)、浜長無田遺跡(註7)、丹生川遺跡(註8)、植田平石遺跡(註9)、荏隈杉下遺跡(註10)、植田市遺跡、下黒野遺跡(註11)などがあげられる。このうち雄城台遺跡、荏隈杉下遺跡はほぼ二反田遺跡と並行する時期といえる。これに一部重複しながら後続するものが植田市遺跡、さらに下黒野遺跡、丹生川遺跡、植田平石遺跡、一方平II遺跡(註12)へとつながるものと思われる。そして山伏田地区から出土した弥生前期の土器へとつながる。おそらく当該地区周辺でもこのころには稲作が導入されるようになったものと思われる。

註1 高橋徹「大分県考古学の諸問題(1)－刻目突帯文土器の出現とその展開について－」

『大分県地方史』第98号 1980

同上 『菅生台地と周辺の遺跡』竹田市教育委員会 1986

註2 坂本嘉弘『大野原の先史遺跡』大分県文化財調査報告第65輯 大分県教育委員会 1984

同上 「東九州における縄文晩期開始の問題」『おおいた考古』6 大分県考古学会 1993

註3 後藤一重『楠野』大分県文化財調査報告第63輯 大分県教育委員会 1983

同上『香々地の遺跡』香々地町文化財調査報告書第2集 香々地町教育委員会 1995

註4 岡山県山陽町南方前池遺跡を標識とする前池式、同じく御津町備前原遺跡を標識とする原下層式などとの類似性が認められる。

註5 吉田寛『植田市遺跡』大分県教育委員会 1994

註6 『大分市史』上 大分市 1987

註7 『大分市埋蔵文化財調査年報』6 大分市教育委員会 1995

註8 註6に同じ

註9 染矢和徳『植田平石遺跡』大分県教育委員会 1994

註10 平成4年に大分県教育委員会が調査実施 今年度報告書刊行予定

註11 註1に同じ

註12 調査担当者甲斐寿義氏(大分県文化課)御教示による

2. 古墳時代の遺構について

六反田地区では、大小13条の溝が確認された。最も遺物が多く出土した3条の溝は調査区の北に隣接する北ノ後遺跡とほぼ並行する時期の遺構と見てよい。調査で溝1→溝2→溝3の順に構築されていったことが確認されている。ただし溝1と2については多少重複する時期もあったようである。また、いずれの溝にも水門状の施設があった可能性がある。この周辺の地形は六反田地区から二反田地区にかけて次第に標高が下がっていく景観を持ち、おそらくこのような溝を導水路とした水田がこの一帯に展開していたものと思われる。二反田地区で行ったプラント・オパール分析でも古墳時代に相当する土層に水田耕作面と思われる層が検出されている。(註13)

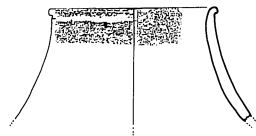

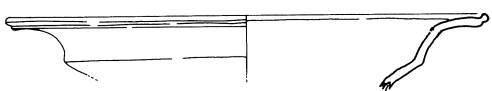
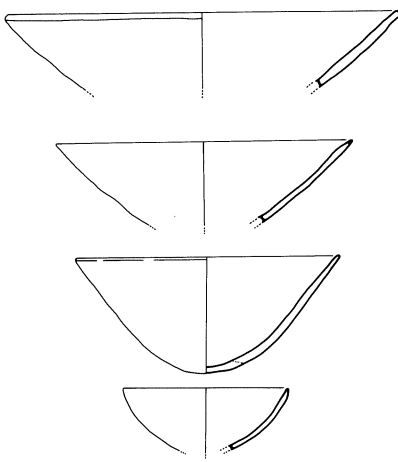
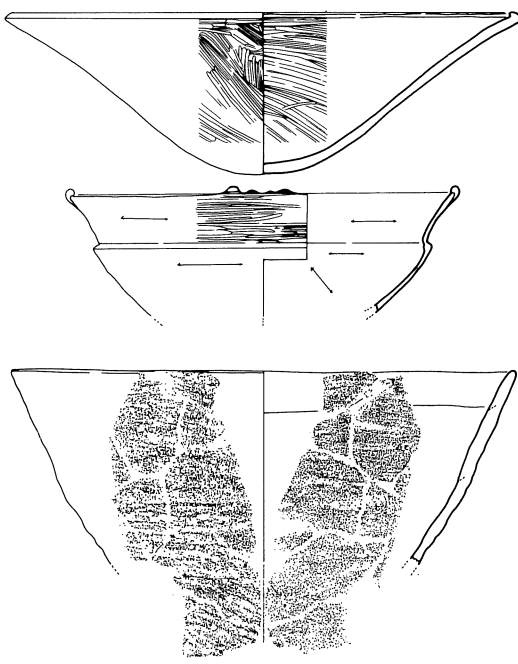
ただし溝1から溝3の構造上若干の差が認められる。それは溝の深さで、最も古い溝1は比較的浅く掘られているのに対して、溝2・3は全体に深く掘られている。溝2及び3の間にも時期が新しくなるにつれ同様の傾向が認められる。さらに溝1は調査区東側付近から発しているのに対して、溝2・3はほぼ北側から流れる。試掘調査で北ノ後遺跡と六反田地区の間には河道ないしはそれに近い落ち込みがあったことが確認されている。溝の変遷は水源の変化に影響を受けていたものと思われるし、溝を深く掘ることについては大量の水が必要となるような開発行為が行われていた可能性も考えられる。

溝2で確認された礫群については、構成する礫が部分的に赤変しているものがある。しかし、礫群の周辺では火を用いている痕跡が認められない点から、あらかじめ火熱を受けていた礫を溝に投げ込んでいる。礫の大半は凝灰岩系の石材で意識的な面取りが認められる。これは、カマド施設等を廃棄した際の袖石などを投げ込んだとも考えられるが、非常に大きなものも含まれていることからそれ以外の用途で用いられていたものも含まれているものと思われる。また、これと共に須恵器や土師器の完形品が共伴していることから、カマド廃棄にかかわるものか、溝にかかわる祭祀行為に伴うものか、両面を想定すべきであろう。

なお時期の不明な溝については、大部分の溝の遺存状態が非常に悪く、遺物もほとんど出土していないため時期の特定も出来ないが、現在当地区周辺に残る条里遺構の地割の軸線上に位置することから(註14)、条里遺構にかかわる溝と考えてよいものと思われる。

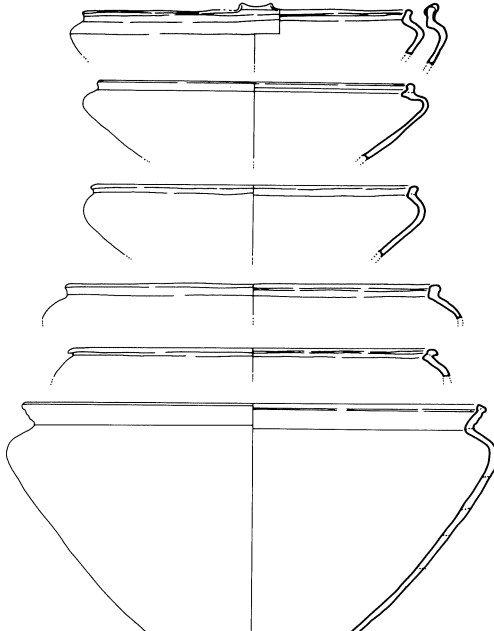
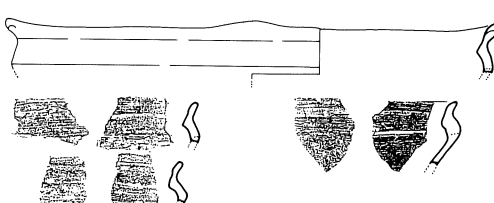
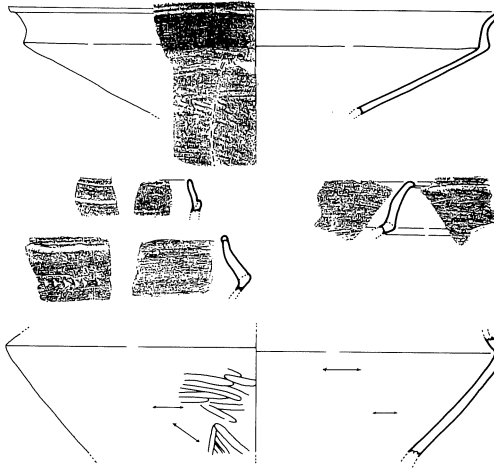

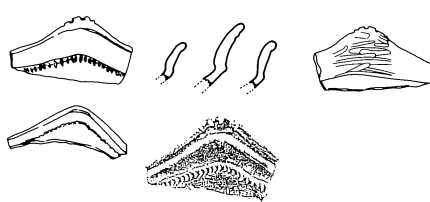

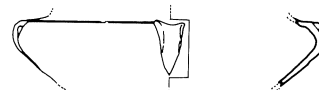
註13 本書所収『プラント・オパール分析結果から見た二反田地区の水田開発』より引用

註14 出田和久「豊後・大分の条里地割」『大分市史』上 大分市1987

器種	北部	南部
壺		
浅鉢 E類		
浅鉢 C類		

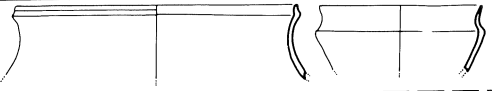
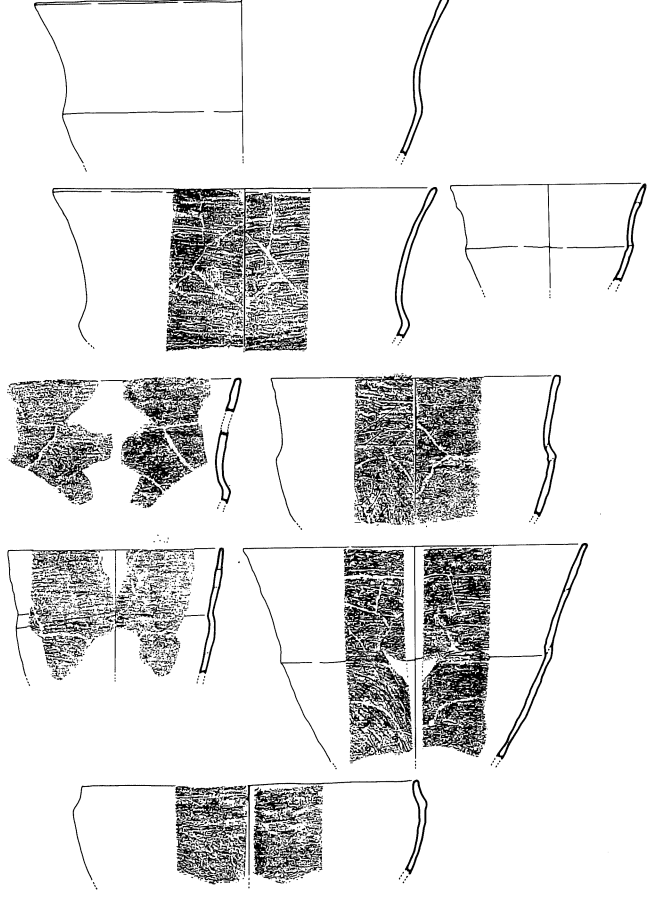
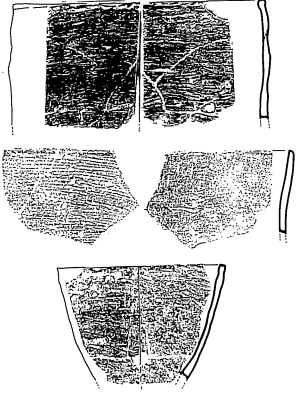
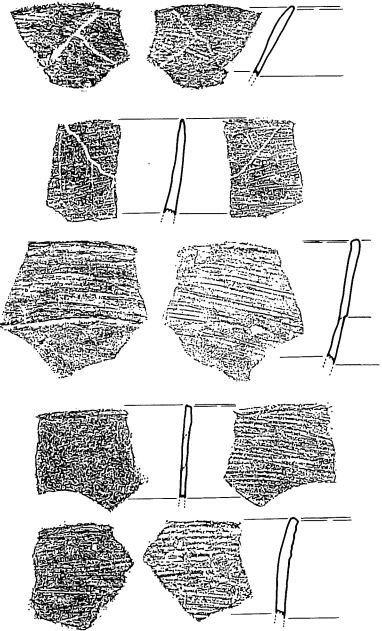
(縮尺・不同)

第 86 図 二反田地区包含層北部・南部出土土器对比図 (1)

器種	北部	南部
浅鉢 G類		
浅鉢 H類		
方形 浅鉢		
特異な 形態 の浅鉢		

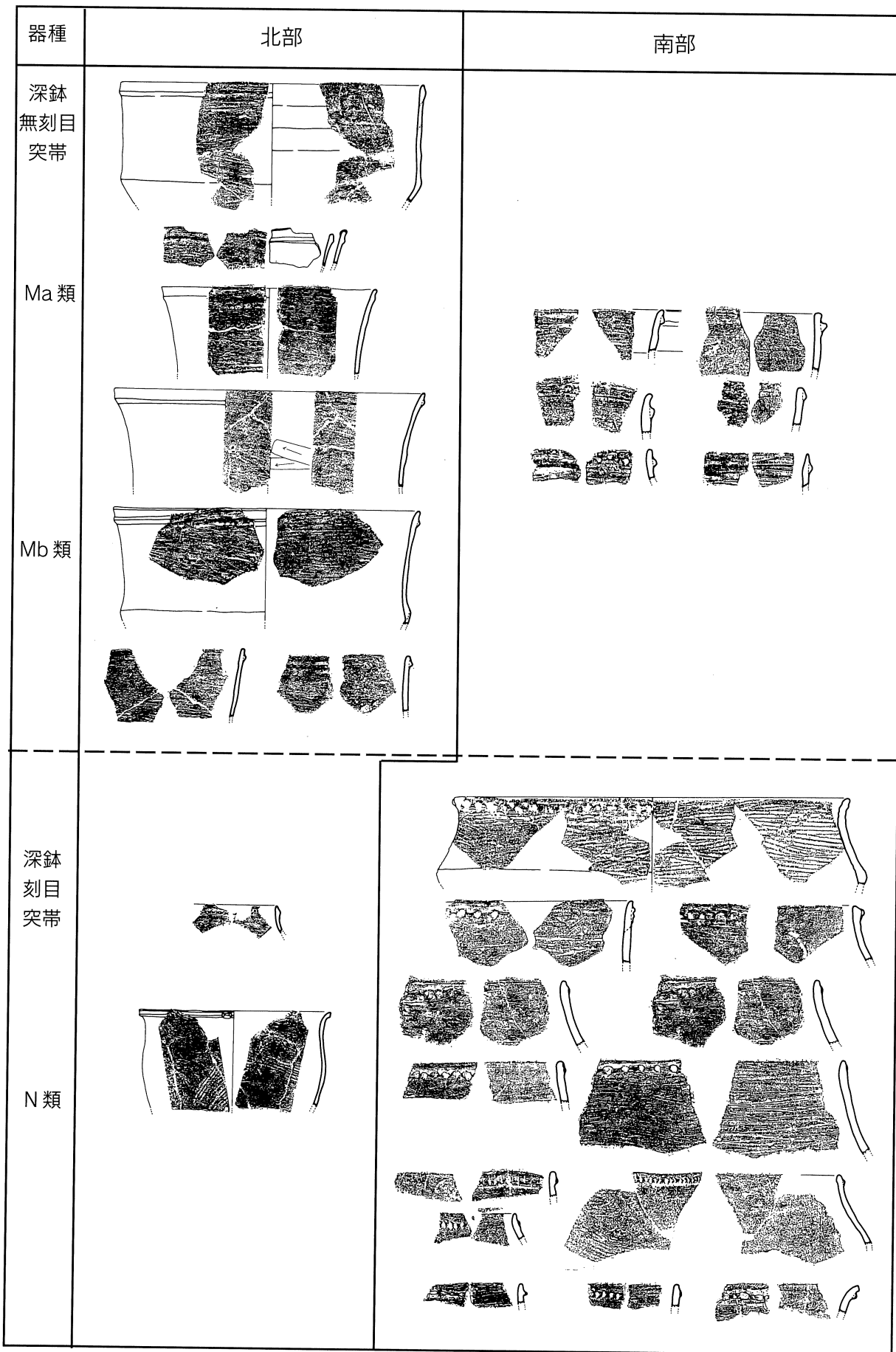
(縮尺・不同)

第 87 図 二反田地区包含層北部・南部出土土器対比図 (2)

器種	北部	南部
深鉢 K類		
深鉢 L1類		
深鉢 L2類		

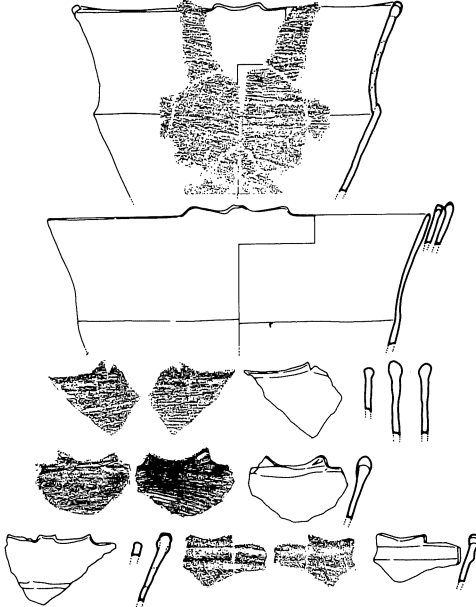
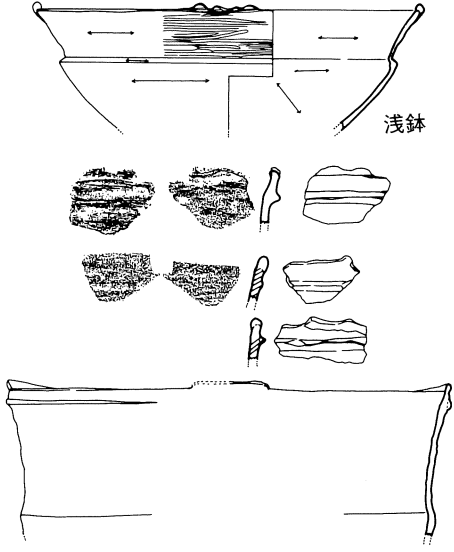
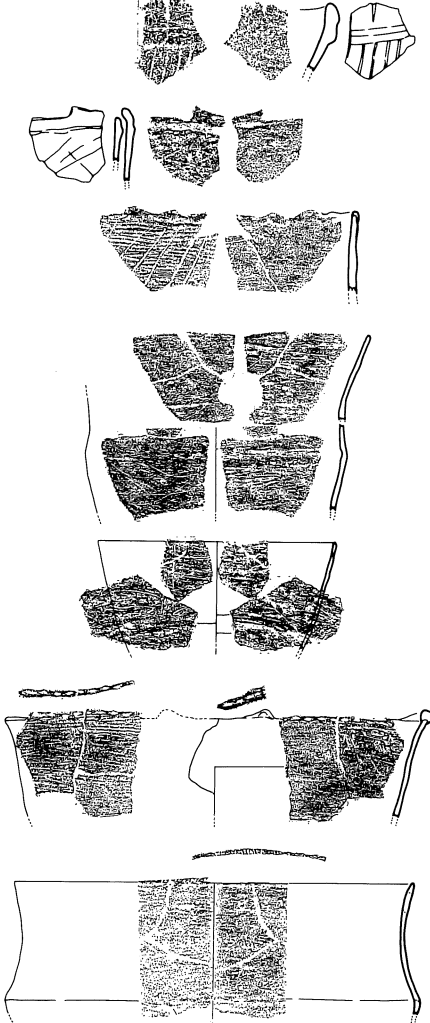
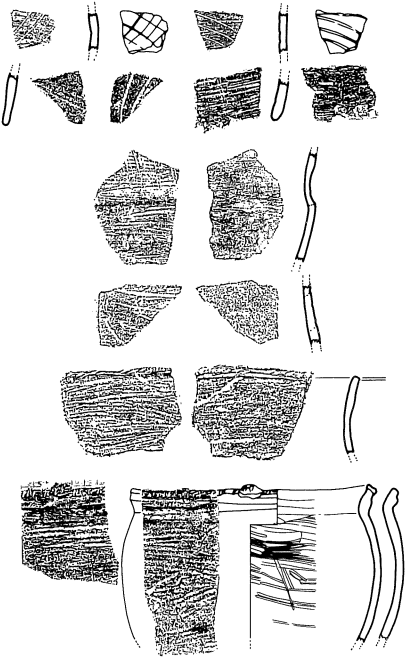
(縮尺・不同)

第88図 二反田地区包含層北部・南部出土土器対比図(3)


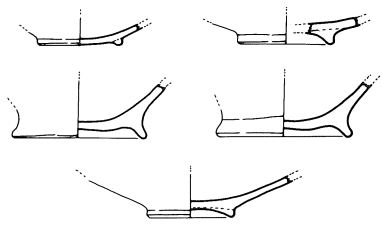
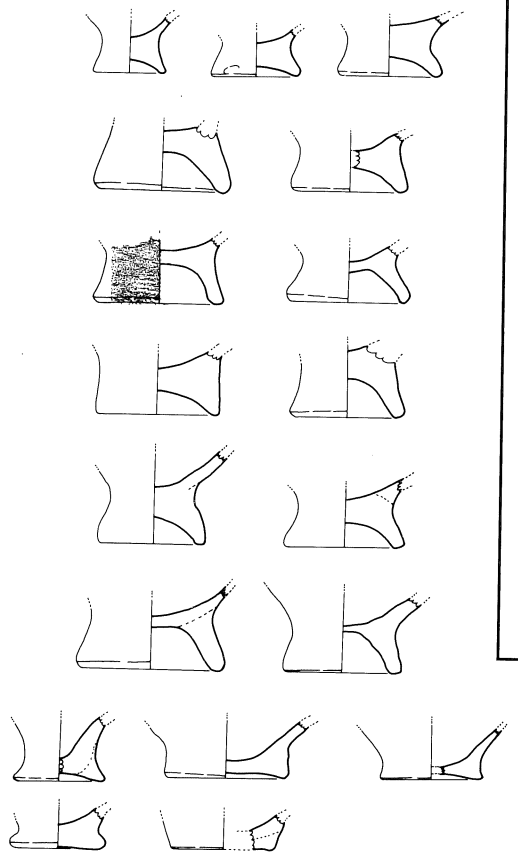
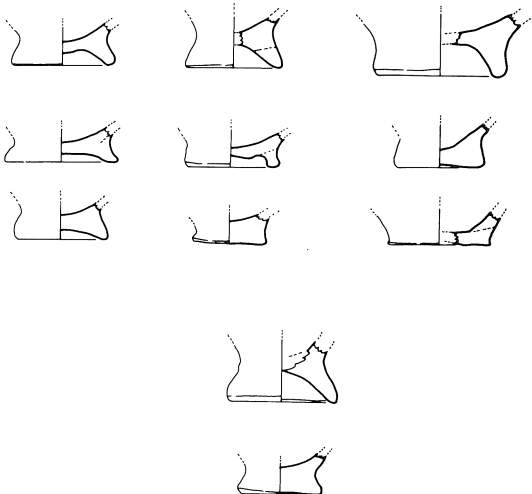


(縮尺・不同)

第 89 図 二反田地区包含層北部・南部出土土器対比図 (4)

器種	北部	南部
<p>深鉢</p> <p>リボン状 及び 鱗状 突起</p>		 <p>浅鉢</p>
<p>深鉢</p> <p>瀬戸内の 様相を 呈するもの</p>		

第 90 図 二反田地区包含層北部・南部出土土器対比図 (5) (縮尺・不同)

器種	北部	南部
浅鉢 底部		
深鉢 底部		

第91图 二反田地区包含層北部・南部出土土器对比图 (6)

(縮尺・不同)

付論 プラント・オパール分析結果から見た二反田地区の水田開発

大分短期大学 佐々木 章

はじめに

土壌中にあるプラント・オパール（イネ科植物の珪化機動細胞などの化石）を分析することで、過去のイネ科植生やイネ科作物の生産量を推定する方法をプラント・オパール分析法と呼ぶ。プラント・オパール分析法によって、埋没水田の作土層を推定することができる。

玉沢地区には条里状の区割りが残っている。二反田地区の発掘調査では、縄文晩期中頃から晩期後半の遺物が多数検出され、発掘区の南部は、地形的にやや低いことがわかった。北部九州では、ほぼこの時期に相当する水田が発掘されている。そこで、二反田地区でもこの低地を利用して水田が作られていた可能性を含め、プラント・オパール分析によって検討することになった。

分析方法

旧河道痕に沿うと見られる低地は、発掘調査区の南部のトレンチ壁面でよく観察できる。プラント・オパール分析試料はこのトレンチの南西壁面から採取した。採取場所は北からA～E地点とした。C地点では暗渠が左右に検出されたので、その部分からも分析試料を採取した。D地点には旧河道と考えられる堆積が見られた。この堆積土層からも試料を採取した。A～Eの採取地点は、発掘調査区のグリッド番号、K1、M1、O1、P1、Q1に含まれる。（第93図）

プラント・オパールの大きさは50 μ m程度で、肉眼では観察できない。そのため後代の攪乱や採取時の汚染（コンタミネーション）に対して細心の注意が必要である。そのため、採土管を用いて注意深く採取した。採取した試料は採土管につめたまま研究室に持ち帰り第92図に示す手順に従って定量分析を行った。

土層が薄く採土管が使えない場合は、やむなくビニール袋に採取したが、使用した用具などはそのつど十分に洗浄して汚染の可能性をできるだけ小さくした。

分析結果および考察

分析結果を、第20図の植物体中の珪化機動細胞密度を使って、植物体重量に換算して第94図に示す。単位は広さ10a（1,000m²）深さ1cmの土壌中に埋没した植物の地上部乾物重（t）で示してある。イネについては、生産されたであろう糶量も推定してあわせ示した（細線）。

現在まで発掘によって畦畔などの遺構が検出された水田遺構の作土層の分析結果では、経験的にイネ糶に換算して1（t/10a/cm）を超えることが多い。水田作土層の推定には、この値を一つの基準と考えている。

また、灌漑を必要とする乾田では、春から秋にかけての灌漑期には還元が進行し、冬期には水が少ないため酸化が進行する。周期的に訪れる還元と酸化のくりかえしによって、水田下層には鉄やマンガンが集積する。これらの集積層は、断面の観察でも判断できることが多い。埋没水田の存在を予想するさいにはこの点も考慮した。

A地点では、あわせて10層が観察された。上から①～⑩層とする。①～⑤層は、遺物などから、現代以前近世まで、⑥、⑦層は古墳以前弥生まで、⑧～⑩層は縄文晩期と推定されている。②層から、やや多量のイネ機動細胞プラント・オパール（以後イネとする、他も同じ）が検出された。③層からも検出されるが、②層からの落ち込みの可能性もある。⑤層中央部でも検出されている。⑤層下部から⑦層を中心に、ヨシ属が多量に検出されている。近世になってヨシの多い湿地を開発して水田化したことが考えられる。

一方、B地点では8層が観察された。①～⑤層が現代～近世まで、⑥、⑦層が古墳～弥生、⑧層

が縄文晩期とされる。①～③では多量のイネが検出されたが④、⑤層では、ほとんど検出されなかった。さらに下層の⑥層では、多量に検出された。この量は先に述べた経験的に埋没水田と判断する基準を超過している。この層は安定して広がっていることから、水田作土層と判断される。時期は、古墳以前、弥生までとされるが、直上層が近世以降であり、中世の遺物を欠いているところから、この水田の使用年代の下限は中世まで降る可能性がある。⑦層中央部からも検出されたが、⑥層からの落ち込みの可能性はある。なお、A地点と異なり、一般にヨシ属の量が少ない。

C地点では④層までは現代以前弥生までの遺物が混在するうえ、建設時期未詳の2基の暗渠に挟まれている。⑤層からは、縄文晩期の遺物が出土する。C地点の分析結果では、①、②層で多量のイネが検出されたほか、③層中部、④層中部でも少量のイネが検出された。左側暗渠からは検出できなかったが、右側の暗渠を埋設した土壌からは少量のイネが検出されている。暗渠を建設した際に、土壌とともにプラント・オパールが混入した可能性が高い。縄文晩期の遺物を包含する⑤層からは検出されていない。

D地点では、旧河道に堆積したと考えられる7層が観察されたが、時期はいずれも不明である。③～⑦層から試料を採取した。③層は黒褐色、④層は黄褐色で、鉄の集積が見られ乾田の可能性が指摘された。分析でも③層から非常に多量のイネが検出され、観察結果との整合性が高い。④、⑤、⑥層からも少量のイネが検出されている。③層のイネが、⑤、⑥層まで落ち込む可能性は少ないと考えられる上、⑤層の上面は、断面で見る限りほぼ水平であり、水田であった可能性がある。しかし、本格的に水田が開発されたのは、③層の水田からであろう。時期がはっきりしないが、比較的新しいと考えられる。

E地点では6層が観察された。②～⑥層から試料を採取した。①～④層が現代以前近世、⑤層は近世から弥生まで、⑥層が縄文晩期と考えられている。理由はわからないが、②、③層ではイネがほとんど検出されないが、④層で少量、⑤層では多量に検出され、⑥層でも少量検出された。⑤層は明らかに水田と考えられる量である。土層もほぼ水平に近い。乾田特有の土層分化が見られないことから、湿田と考えられる。弥生の遺物があるが、時代は近世まで降る可能性がある。⑥層は縄文晩期とされるが、直上の⑤層からの落ち込みの可能性が考えられるので、縄文晩期の水田と断定するには無理がある。

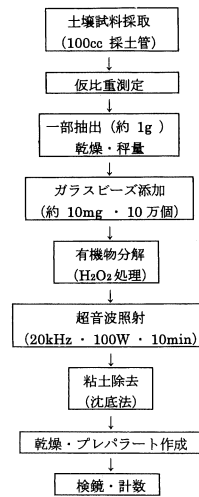
以上、5地点とも土層の堆積時期を細かく特定することができないのは残念であるが、分析結果から、全面的に水田化したのは近世になってからと考えられる。しかし、部分的には開発されていたようで、たとえばB地点では、少なくとも中世までには水田化されていた。上限は、弥生～古墳に遡る可能性がある。しかし、当初期待されたように縄文晩期までは遡らないようである。E地点でも近世まで降りる可能性はあるが、それ以前の開田を思わせる。この地点では、縄文晩期とされる⑥層から、少量のイネ機動細胞プラント・オパールが検出されたが、直上層の⑤層が湿田の作土層と考えられるので、落ち込みの危険性が高い。縄文晩期の水田と断定するには無理がある。

今回調査した旧河道沿いと見られる低地には、弥生～古墳期に小規模な水田があった可能性はあるが、中世に大規模な開発があったことを示すような分析データは得られなかった。低地を大規模に開発するためには、灌漑水路を整備するとともに計画的な排水路を整備する必要がある。発掘でも、時代は未詳だが、多くの暗渠排水路が検出された。水掛りさえ可能なら、むしろ微高地のほうが、開田しやすいともいえる。今回は、遺構や遺物包含層が浅く、分析試料を得ることができなかったが、二反田地区の詳細な開発史に関して、今後、微高地から低地までを含めて総合的に検討した上で判断したい。

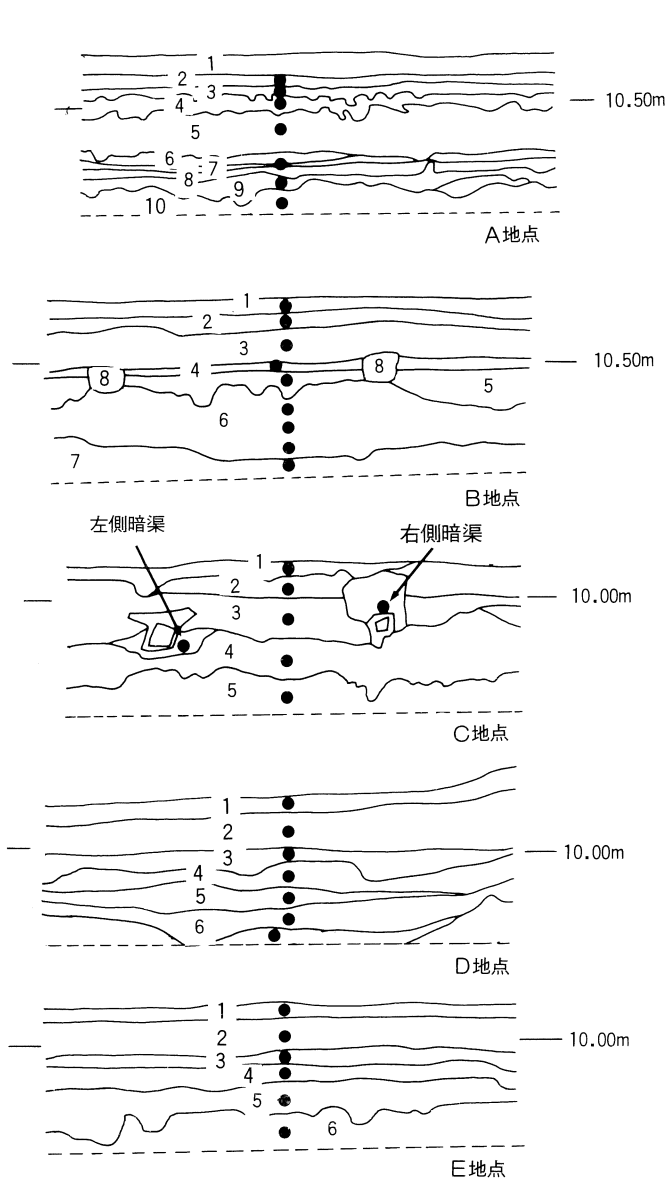
最後に、今回このような形でプラント・オパール分析の機会を与えていただいた関係者に感謝したい。

第20表 植物体中の珪化機動細胞密度

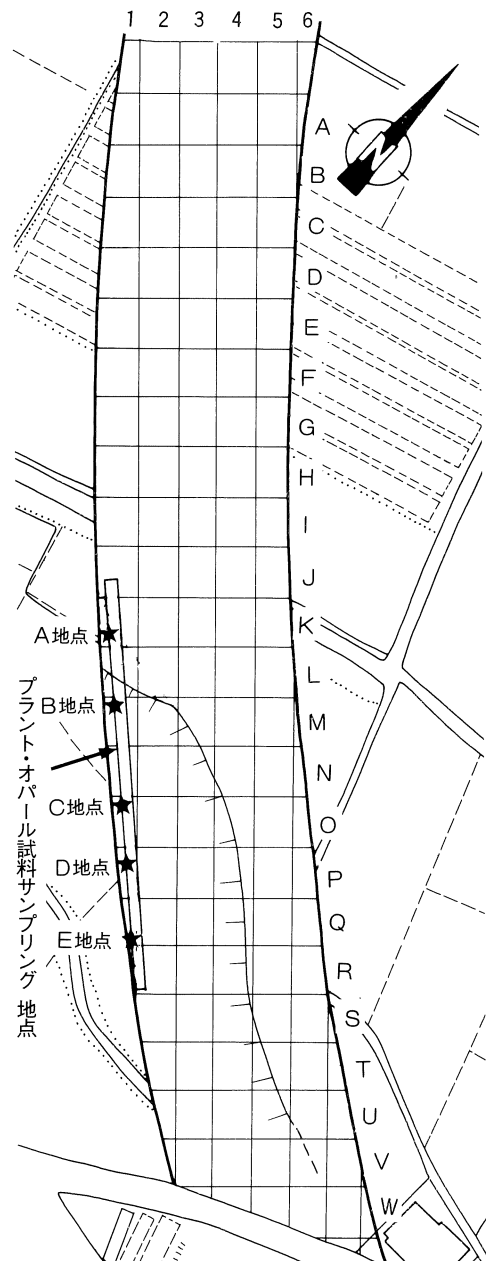
プラント・オパール 分析分類名	代表植物	植物体中密度 (10 ⁴ 個/μg)
イネ	イネ <i>Oryza sativa</i>	3.40
ヨシ属	ヨシ <i>Phragmites communis</i>	1.44
タケ亜科	ゴキダケ <i>Pleiolabastus Chino</i> var. <i>virides f. pumilis</i>	20.83
ウシクサ族	ススキ <i>Miscanthus sinensis</i>	2.79

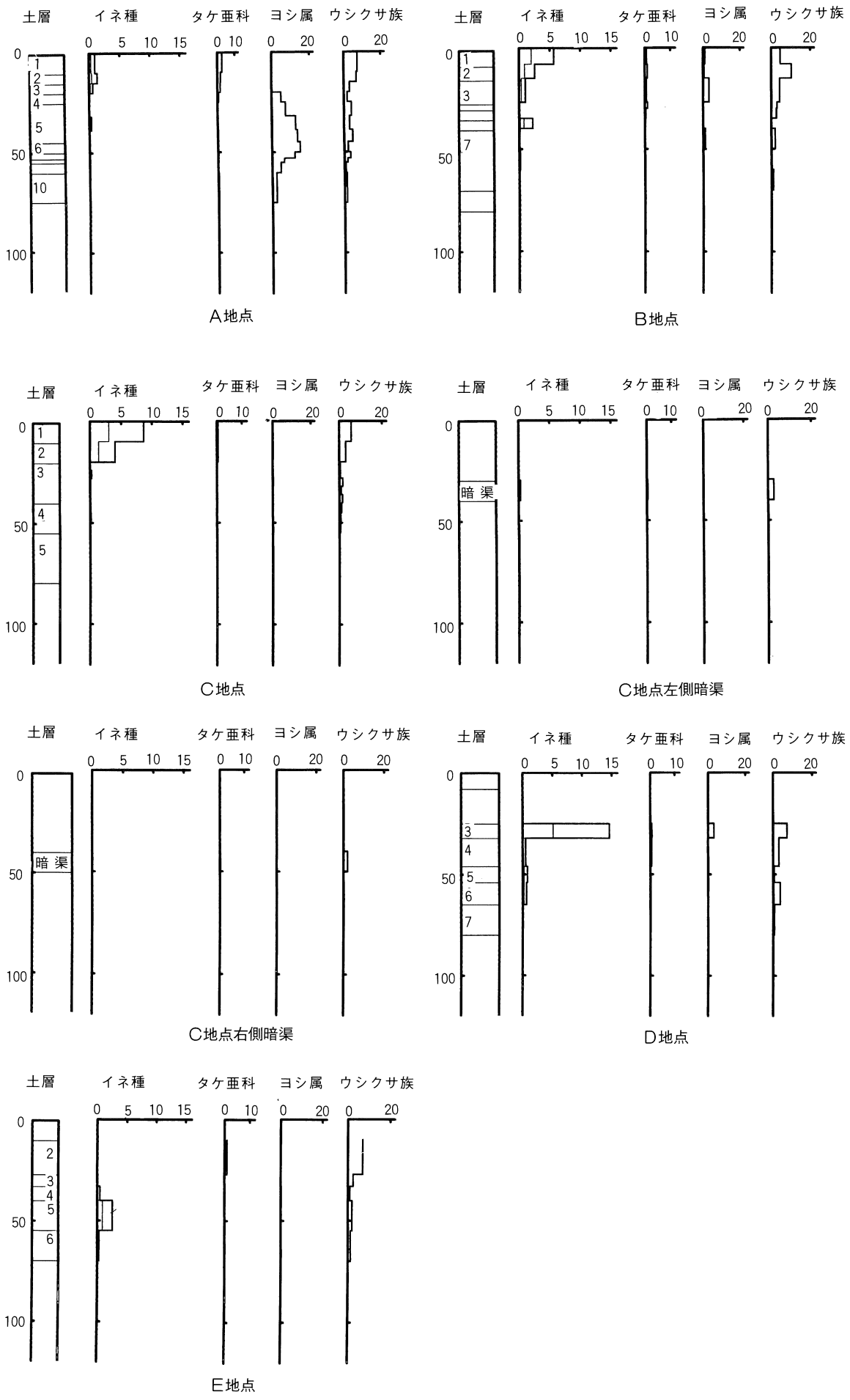


第92図 プラント・オパール定量分析手順



第93図 プラント・オパール試料サンプリング地点及び採取地点土層図

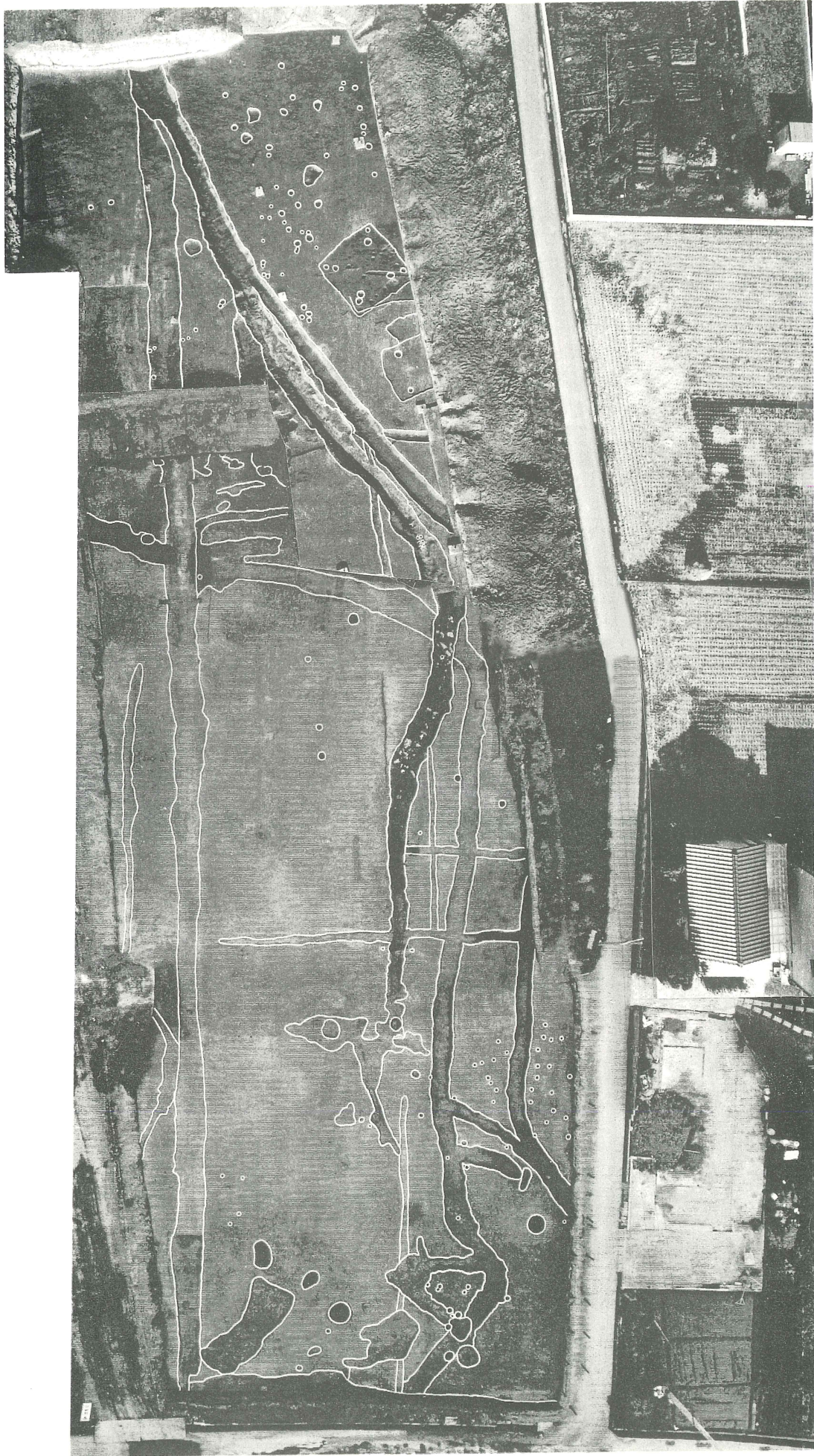


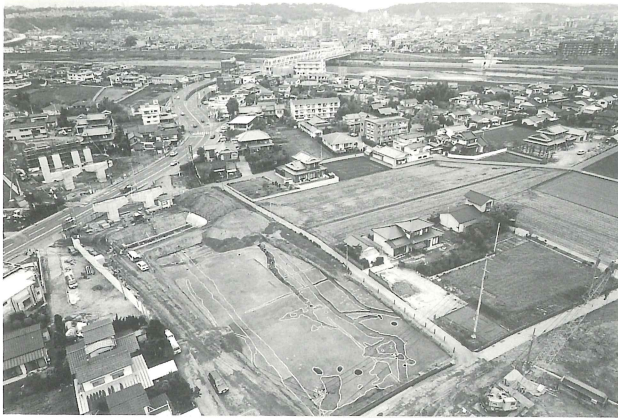


第94図 各地点のプラント・オパール密度から推定した植物量 (t / 10 a / cm)

写 真 图 版

図版 1 六反田地区





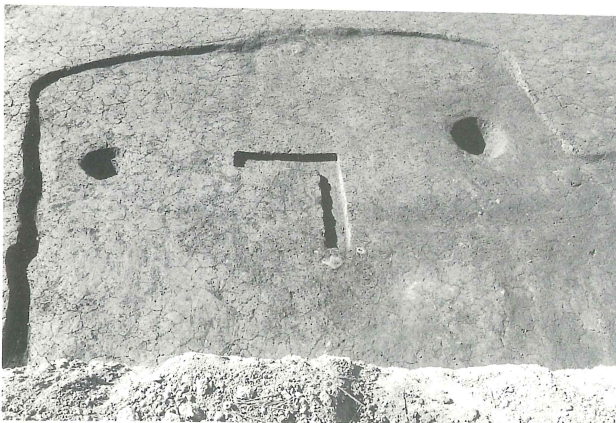
六反田地区

全景



六反田地区

1・2号竪穴



六反田地区

3号竪穴



六反田地区

礫群1



六反田地区

礫群2



六反田地区

礫群2 遺物出土状況



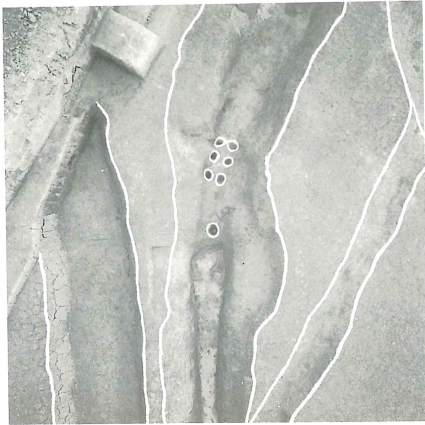
六反田地区

礫群3



六反田地区

礫群3 遺物出土状況



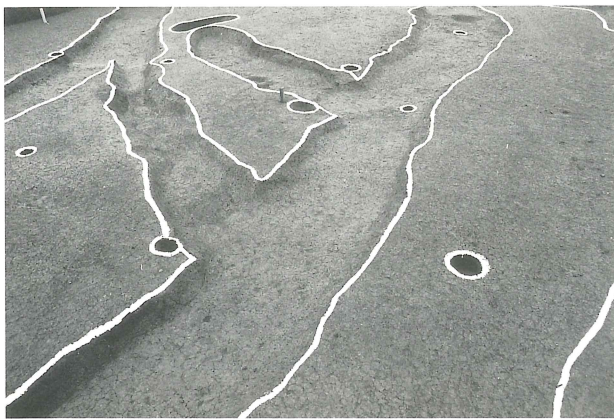
六反田地区

溝内ピット群



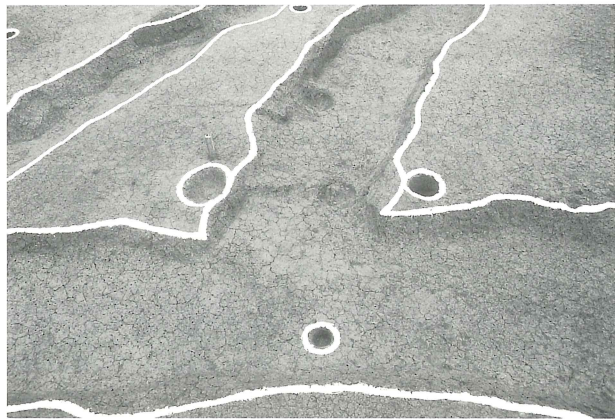
六反田地区

溝内ピット群遺物出土状況



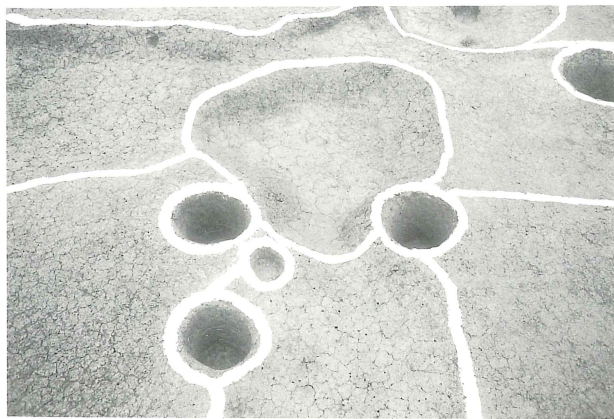
六反田地区

水門状ピット1



六反田地区

水門状ピット2



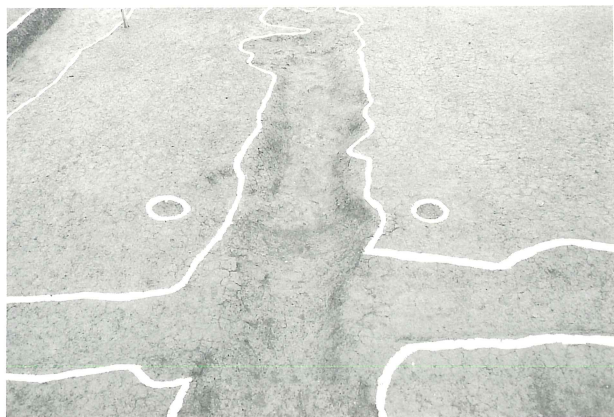
六反田地区

水門状ピット3



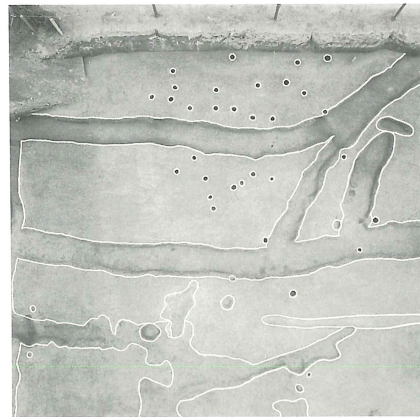
六反田地区

水門状ピット4



六反田地区

水門状ピット5



六反田地区

ピット集中部

図版14 山伏田地区・二反田地区



山伏田地区

溝1・2



二反田地区

基本土層



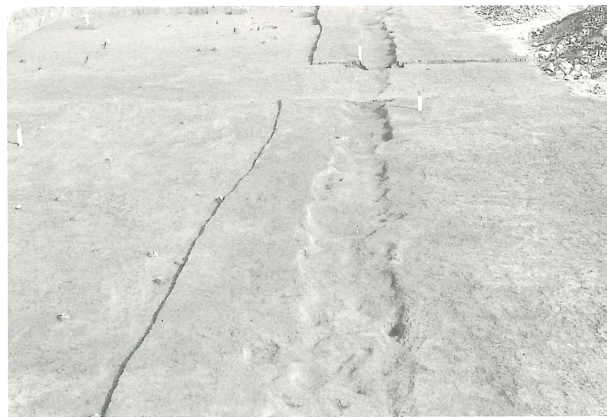
山伏田地区

溝3



二反田地区

E4グリット



山伏田地区

溝4



二反田地区

E4グリット遺物出土状況



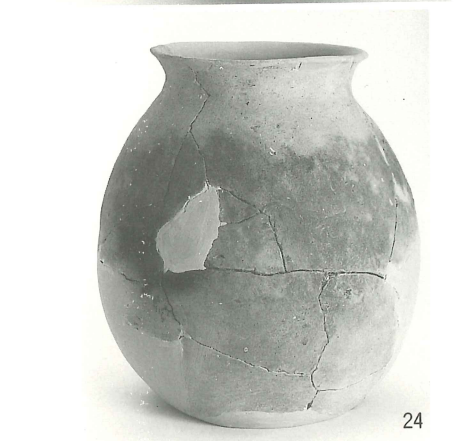
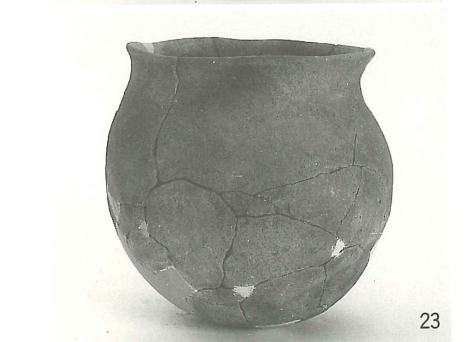
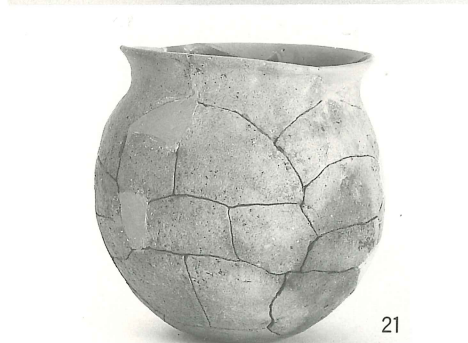
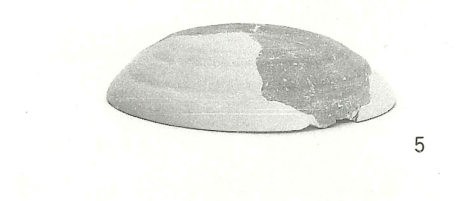
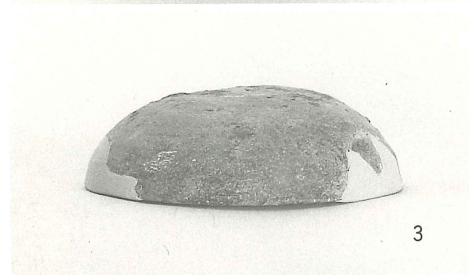
山伏田地区

不整形大型土坑

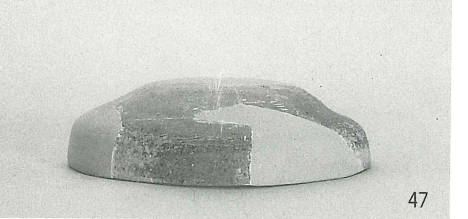
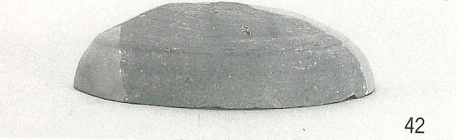
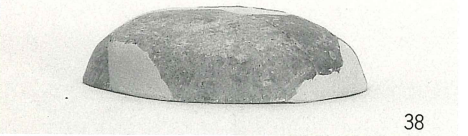
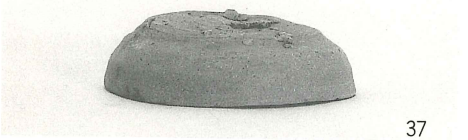
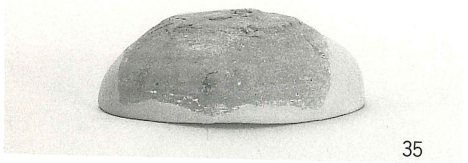
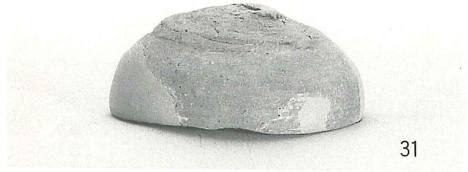
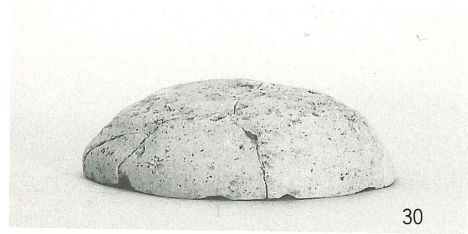
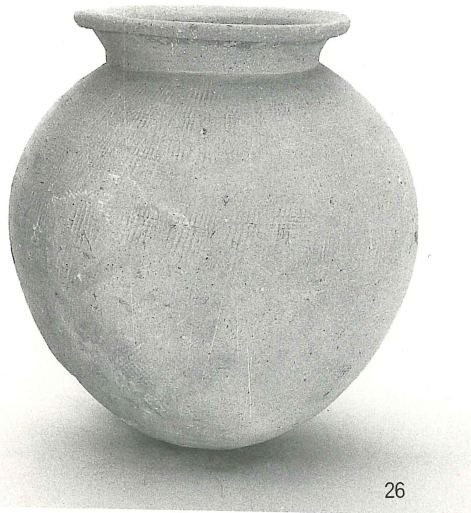
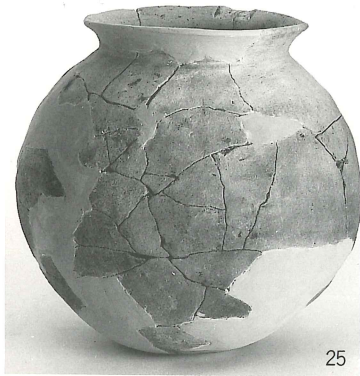


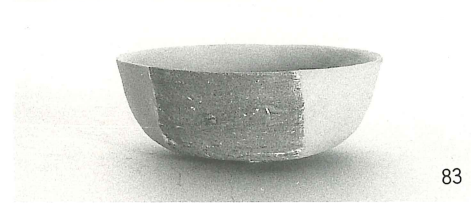
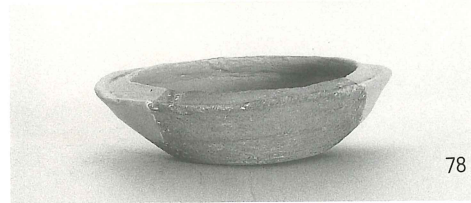
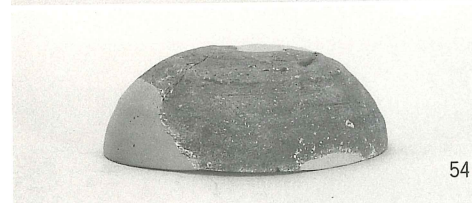
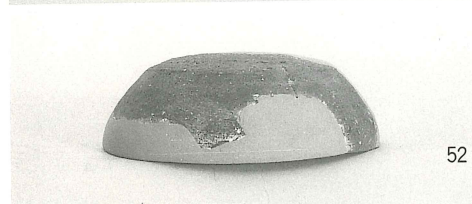
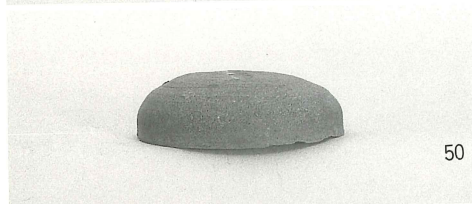
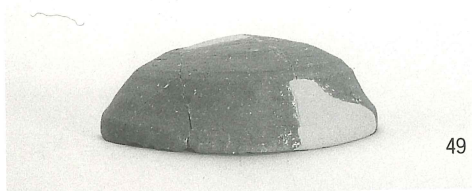
二反田地区

同上



図版—6 六反田地区出土遺物





図版18 六反田地区出土遺物



85



86



90



91



92



93



96



97



98



99



100



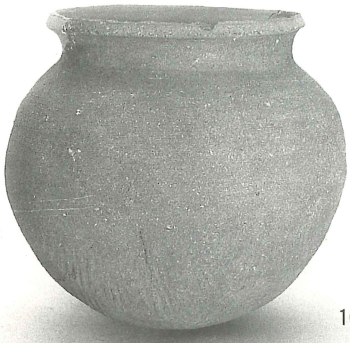
101



102



107



108



114



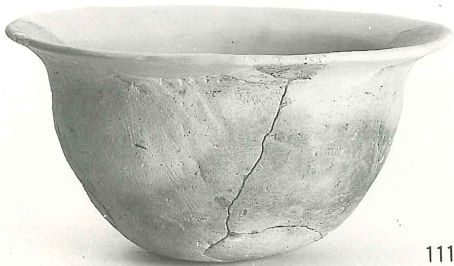
109



110



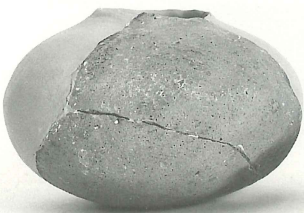
115



111



112



113

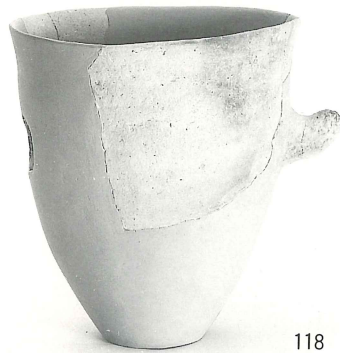


116

図版—10 六反田地区出土遺物



117



118



119



120



121



122



123



124



125



127



128



129



130



131



132



134



135



136



138



139



140



141



142



143

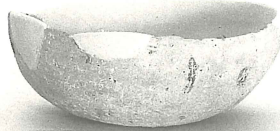
图版 12 六反田地区出土遺物



144



146



145



156



1



2



3



5



4



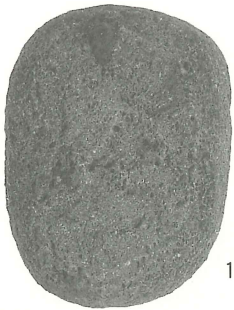
6



7



8



13



14



15



16



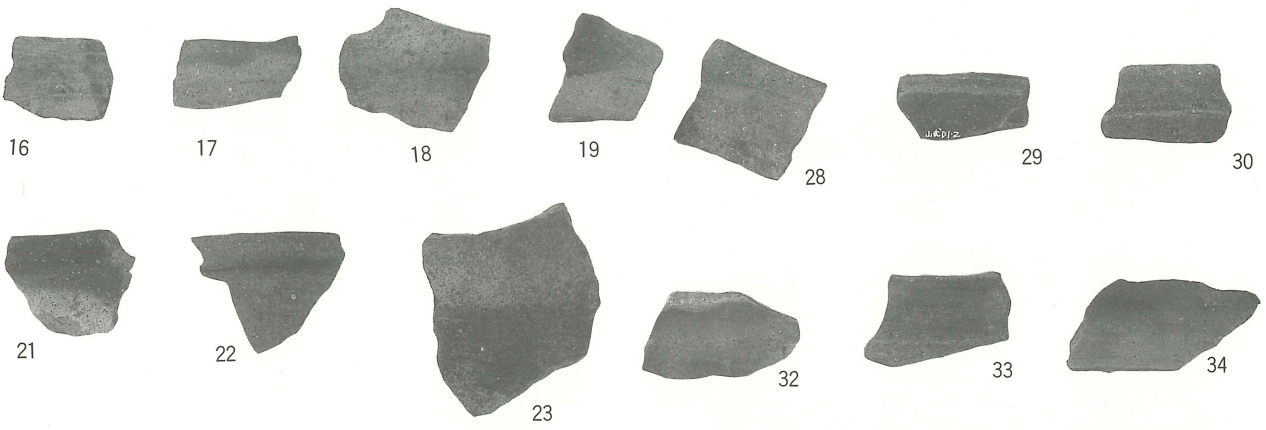
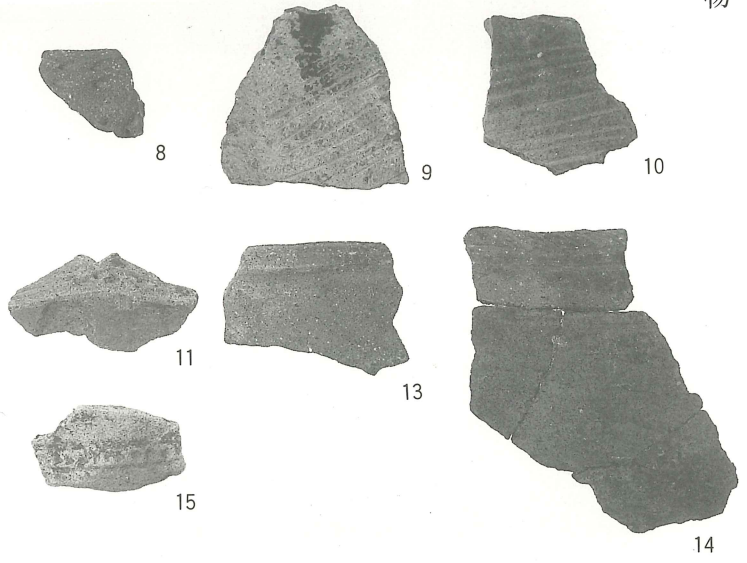
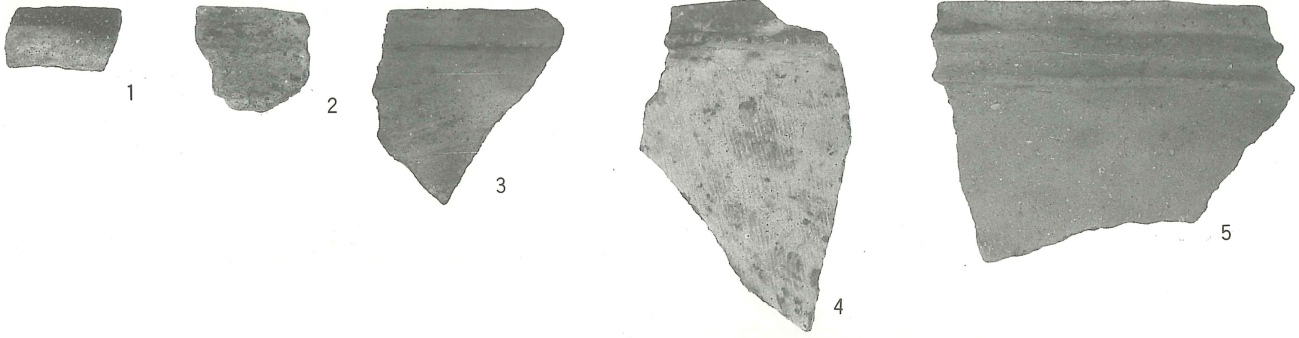
11



10



9



図版14 二反田地区出土遺物



1



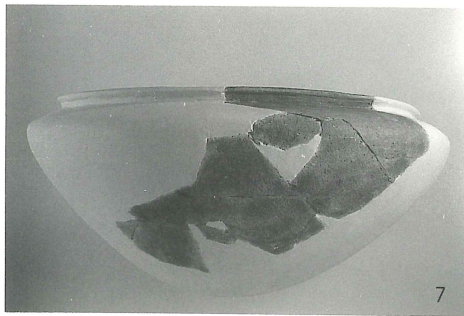
2



3



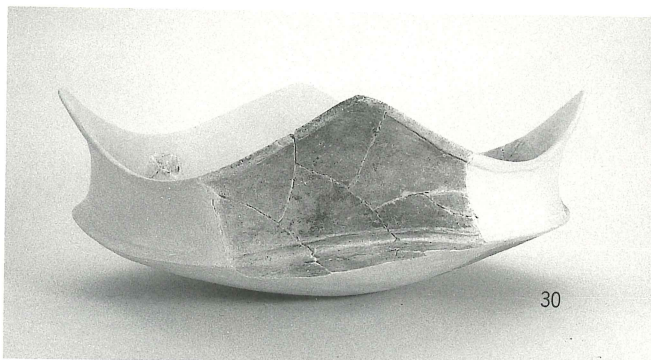
4



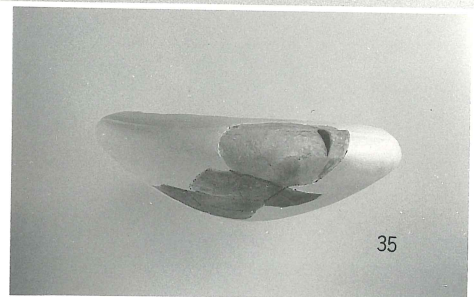
7



17



30



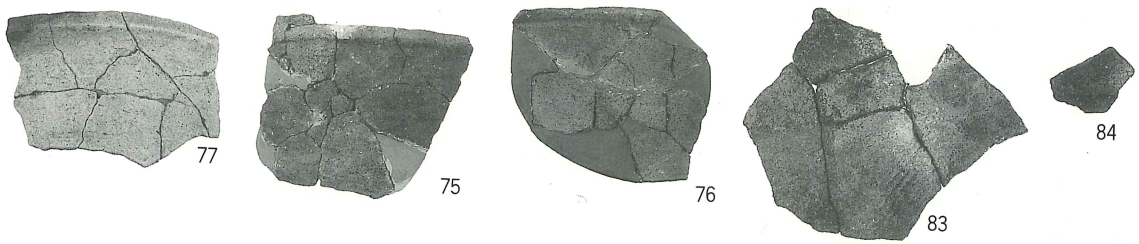
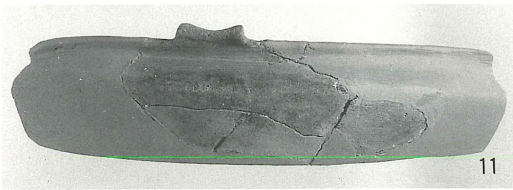
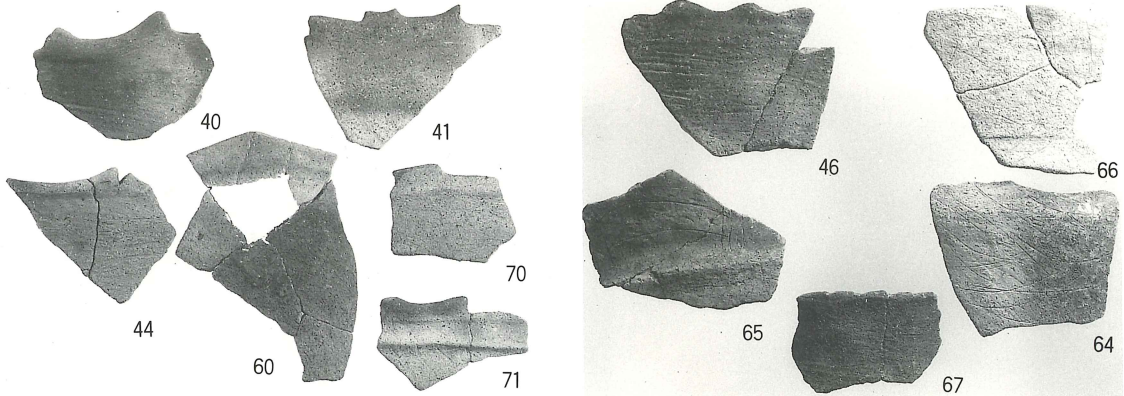
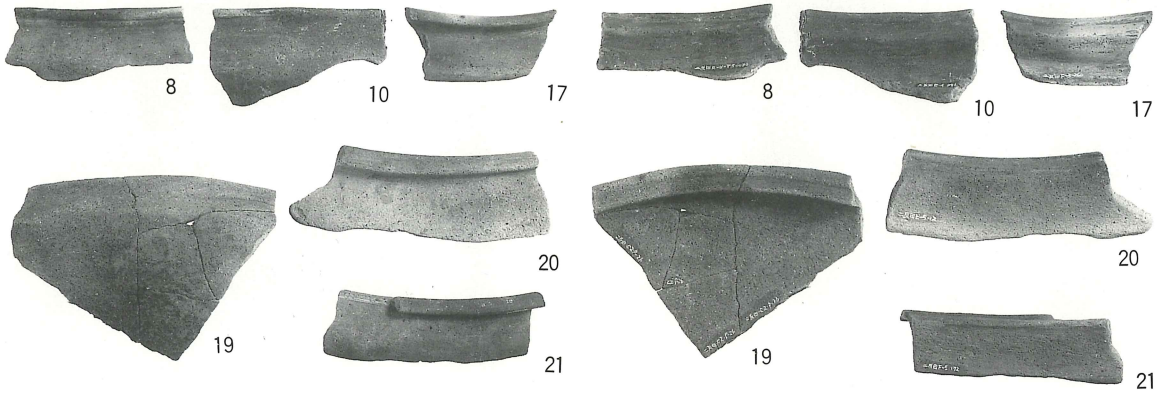
35

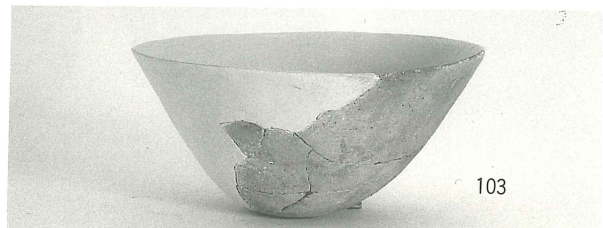
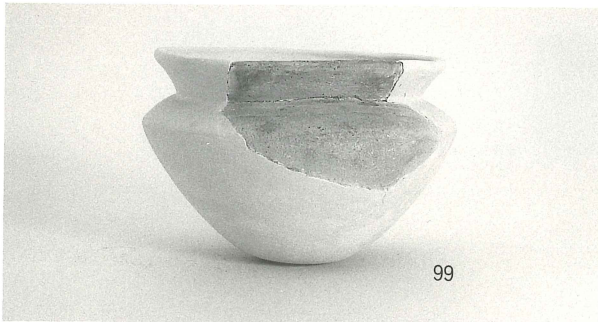
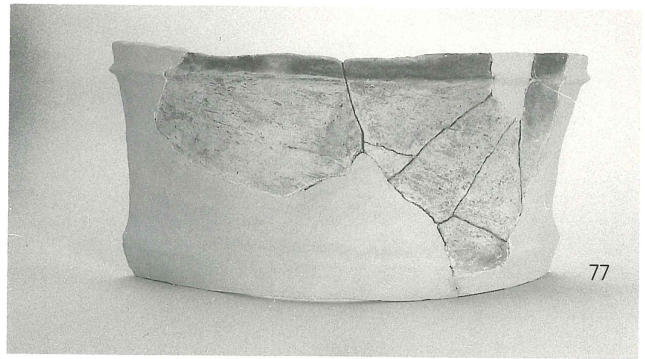
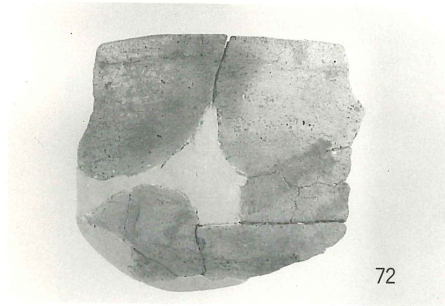
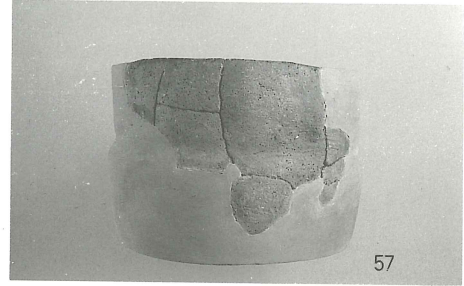
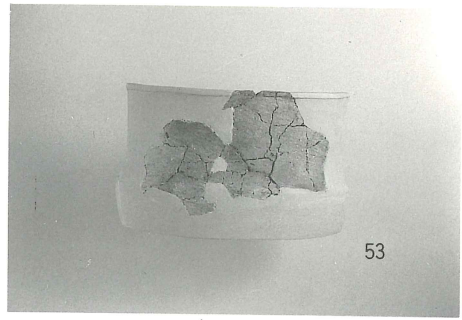
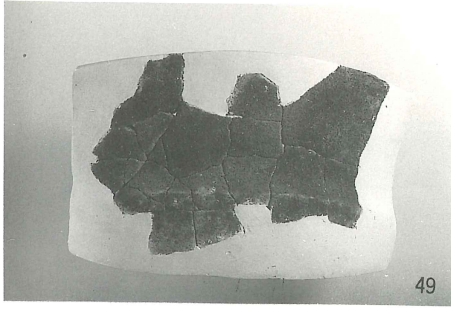


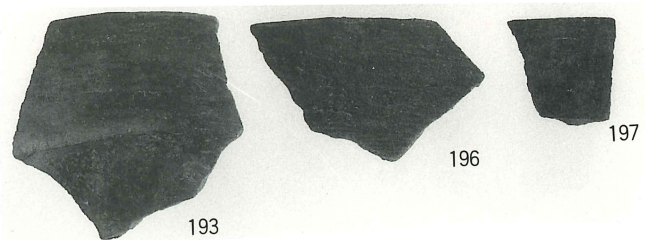
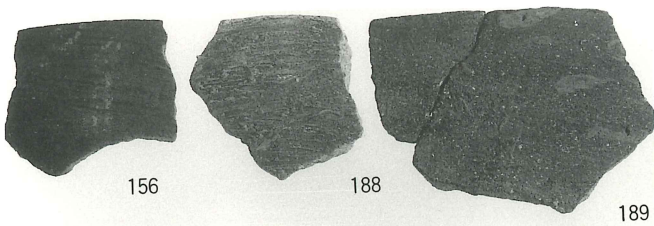
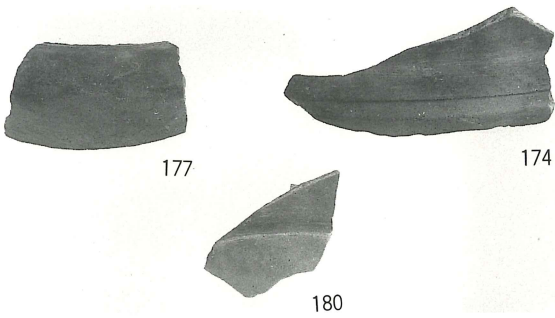
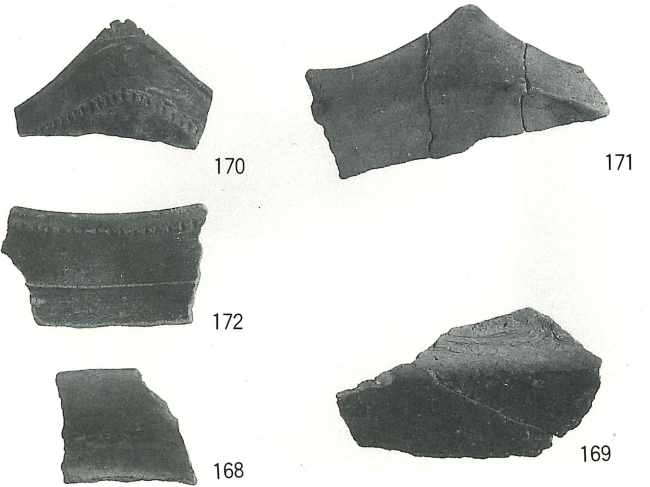
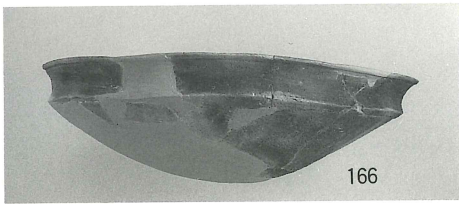
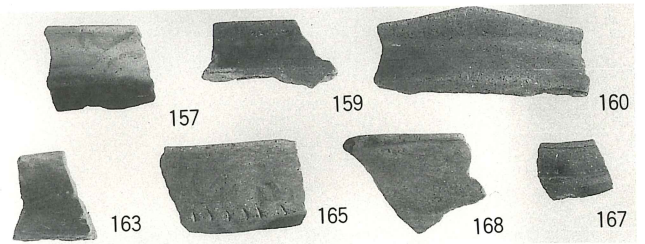
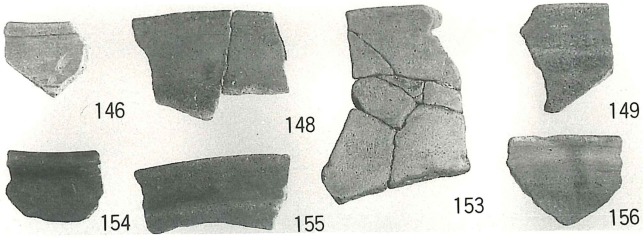
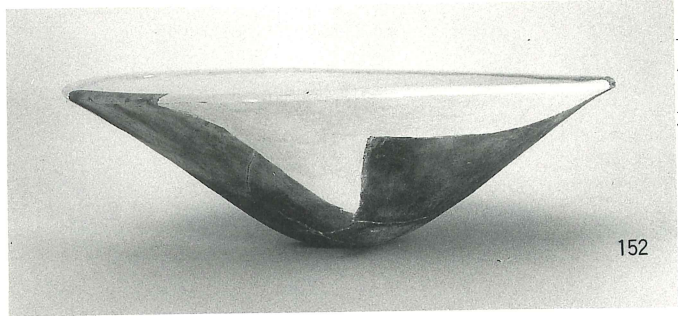
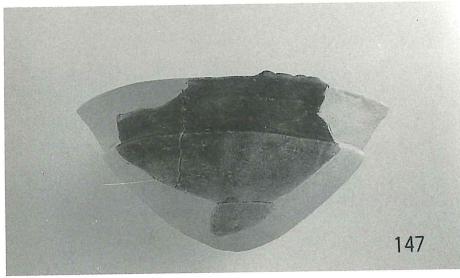
37



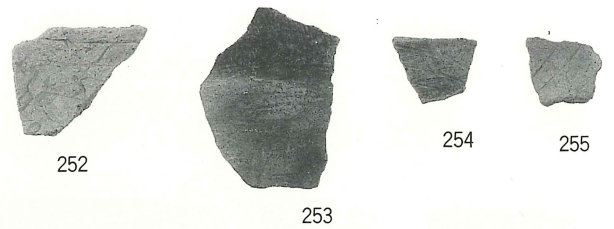
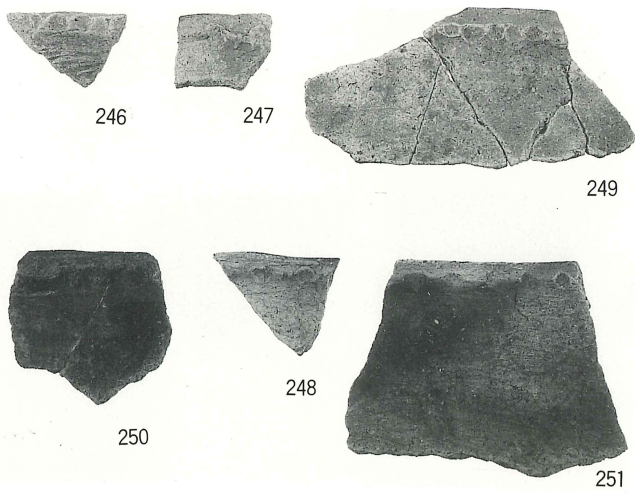
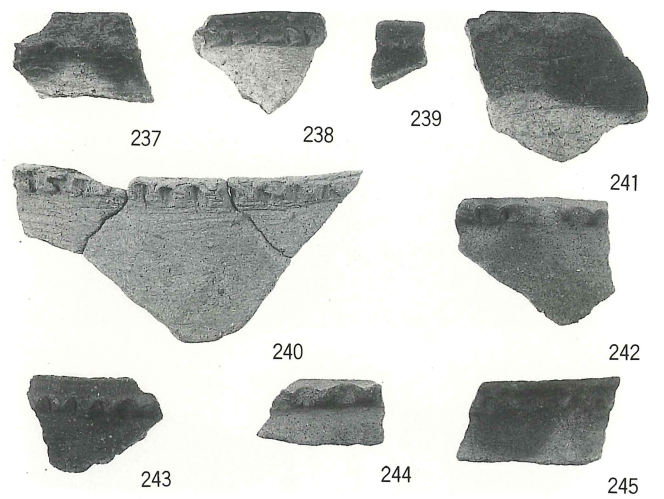
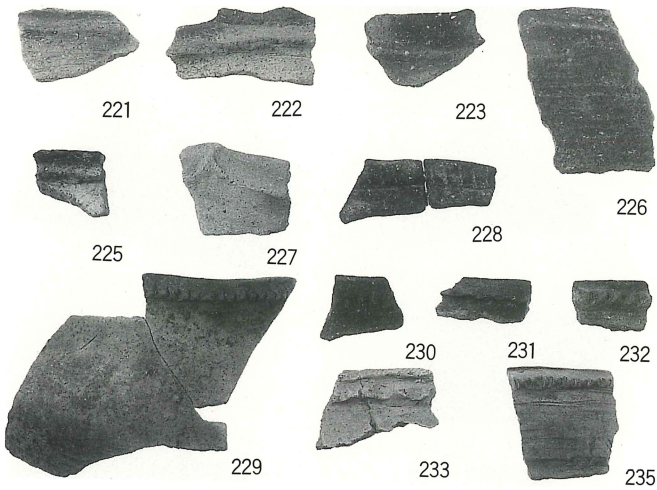
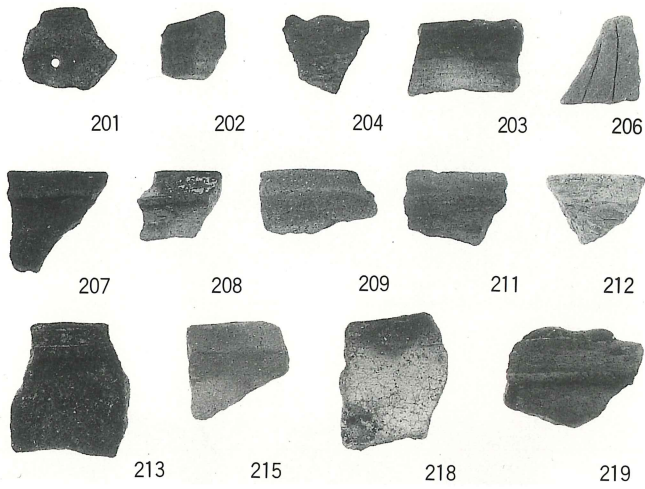
49

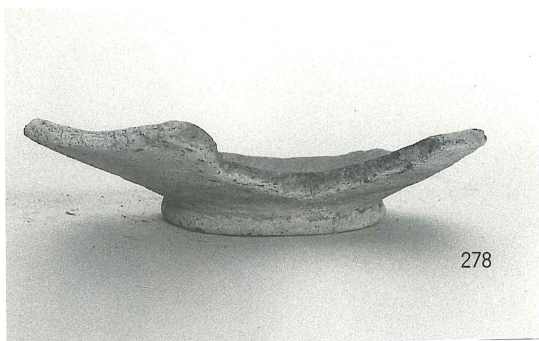






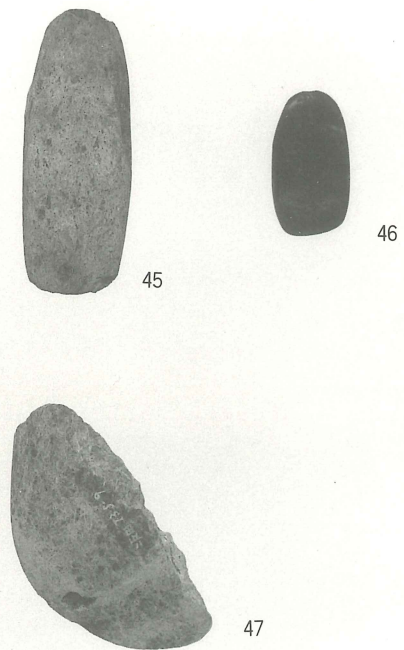
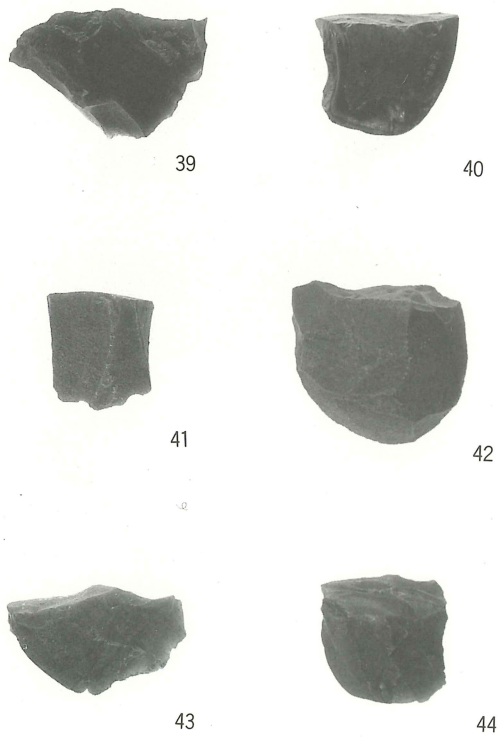
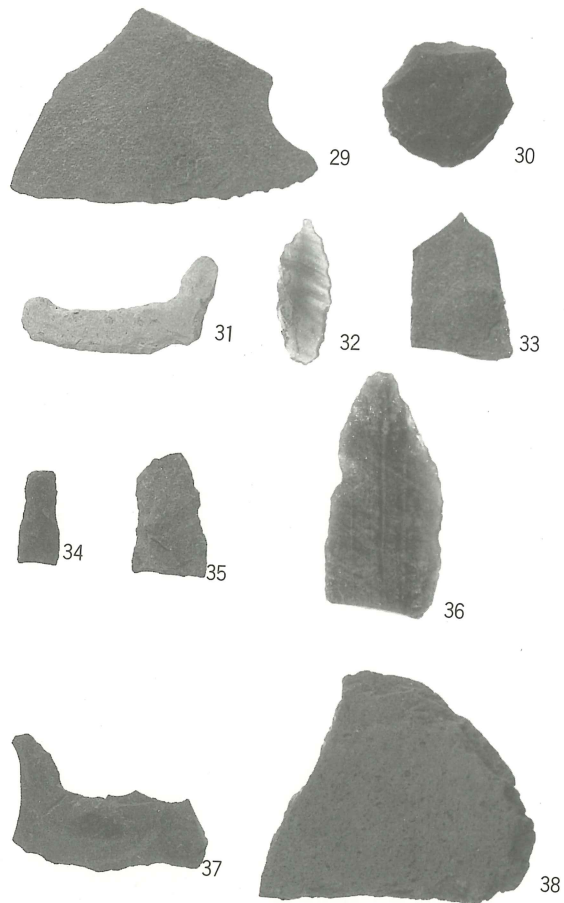
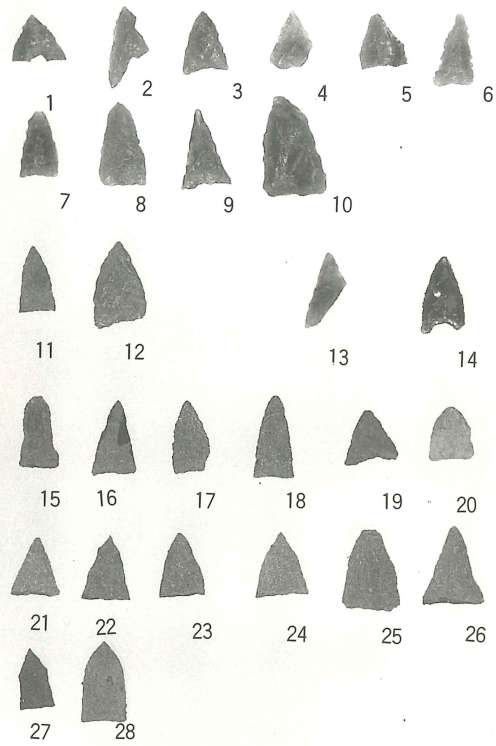
図版18
二反田地区出土遺物

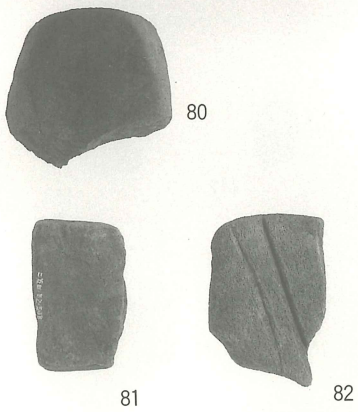
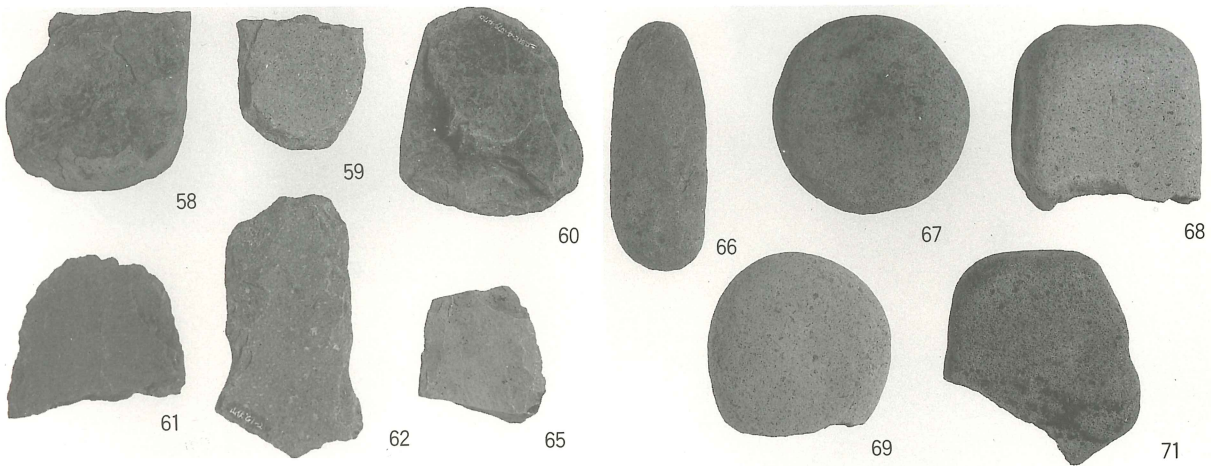
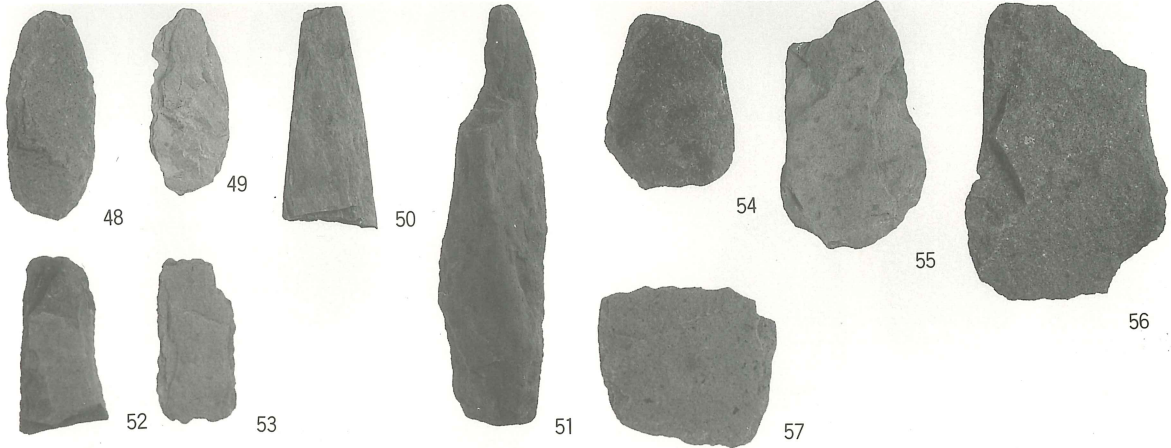


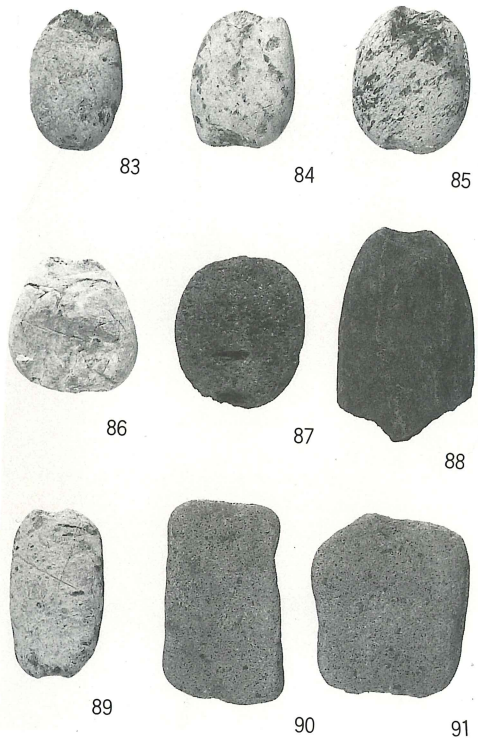


114~143 北半部

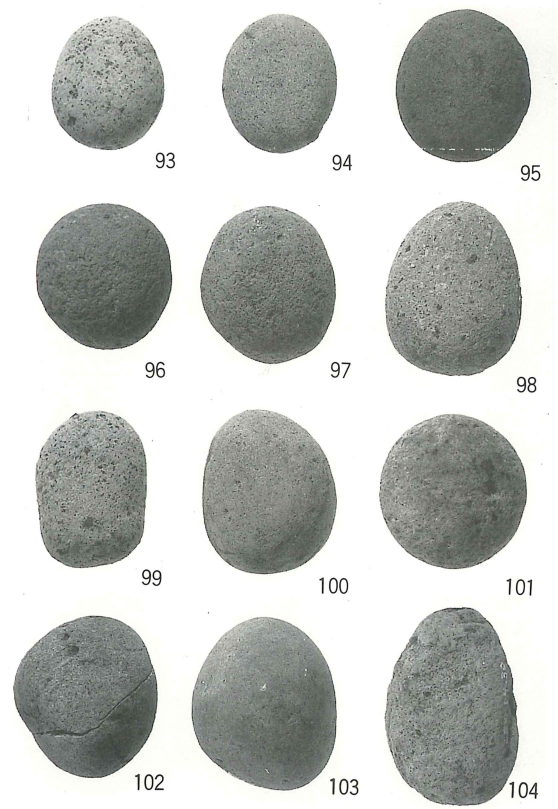
278~292 南半部



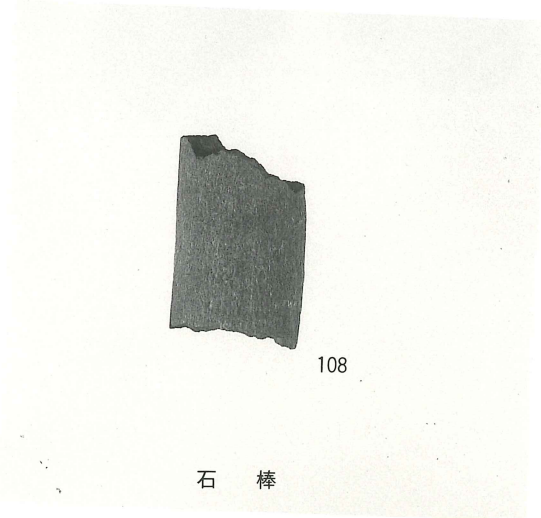




石 錘



石 彈



石 棒



管玉類

抄 録

フリガナ	タマザワチクジョウリアト化ケン
書名	玉沢地区条里跡遺跡群
副書名	
巻次	
シリーズ名	九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	(12)
編著者	江田 豊 佐々木 章
編集機関	大分県教育委員会
所在地	〒870-0021 大分県大分市府内町3-10-1
発行年月日	1999年3月31日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
タマザワチクジョウ 玉沢地区条里 アト化ケン 跡遺跡群	大分県大分市 シモケカ 大字下宗方 ウツタ 字六反田 ヤマノシタ 字山伏田 ニタ 字二反田	442011	322111	33° 11' 45"	131° 35' 15"	平成6年1月～ 平成7年7月	17500m ²	九州横断 自動車道 建設に伴 う事前発 掘調査

所収遺跡名	種別	主な時期	主な遺構	主な遺物	特記事項
玉沢地区条里跡 遺跡群	包含層	縄文晩期		晩期後半の土器 石器	大分平野における晩期後半 の土器形態の変遷
		弥生時代	溝	弥生土器	
	集落等	古墳時代	竪穴 溝	須恵器	
	条里	歴史時代	溝	土師器	

九州横断自動車道関係埋蔵
文化財発掘調査報告書(12)

玉沢地区条里跡遺跡群

平成11年3月31日

編集 大分県教育庁文化課
発行 大分県教育委員会
〒870-0021
大分市府内町3-10-1
TEL097-536-1111
印刷 極東印刷紙工(株)
